鹿児島県史料

旧記雑録拾遺

神社調一

解　題

本書は、『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　神社調二』として、東京大学史料編纂所所蔵『神社調』「府内及各郷上・中・下」・「薩摩国鹿児島部一～四」・「薩摩国之部一　吉田・郡山・伊集院」を刊行するものである。『神社調』は府内及各郷三冊・鹿児島部四冊・薩摩国之部十三冊・大隅国之部十三冊・日向国諸県郡之部七冊の計四十冊から成る。薩摩藩領内各地域の寺社について記載されていて、神社の場合は鎮座地や神社名・由緒・祭日・宝物（含文書）・祭神・末社の位置や名称等が記載され、寺院については、山号・宗派名・寺院名・開山者と開山の経緯・由緒・寺院に伝わる文書・末寺の位置等が記載されている。近世の寺社に関する内容がかなり詳細な部分まで書かれており、これまでも市町村の郷土史誌や史料集編纂の際に基礎史料として重要視されてきた経緯がある。地域の寺院が詳細に記載されている事から、廃仏毀釈以前における地域の寺院を復元することが一定程度可能な史料である。近年鹿児島県内の市町村で郷土史誌を刊行する場合、廃仏毀釈前の寺院の存在を押さえるために『神社調』の一部分が活用されている。しかし全体を見て活用したいという思いを感じる方々も以前から多かったと考えられる。『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　神社調』は、『神社調』全体を刊行するものである。

薩摩藩の神社や寺院を語るうえで、廃仏毀釈は避けて通ることができない。薩摩藩領内では、他地域に比べると激烈な廃仏毀釈が行われ、更に明治十年（一八七七）の西南戦争による兵火などのために近世までの貴重な寺院資料の多くが失われ、仏教を中心とした宗教史研究の大きな妨げとなっている現状が見られる。

薩摩藩において廃仏毀釈が徹底した理由は（一）江戸時代薩摩藩において僧侶自身も宗門改役人の改めを受け、その職能も他藩の僧侶より狭く、社会的地位もさほど高くなかったこと（二）薩摩藩には寺請制度が無く、寺院と

民衆との直接的関係が見出しにくいこと（三）廃寺により職を失った僧侶に食料を給与し、希望者は兵士・教員・巡査・官公吏に採用する等、その生活を保障したこと（四）鋳銭事業を契機とした梵鐘鋳つぶしが廃仏毀釈のハードルを低くした等がある。これ等の要因が絡み合い、上からの主導で徹底的に廃仏毀釈が行われたと考えられている。廃仏毀釈の結果薩摩藩領内の前近代の寺院を語る上で、常に資料的制約がつきまとう事になった（栗林文夫「鹿児島の廃仏毀釈について」（『黎明館企画特別展　祈りのかたち　～中世南九州の仏と神～』同実行委員会、二〇〇六年））。他県と比較するにつけても、鹿児島県における廃仏毀釈の徹底ぶりは驚くに値し、失われた文化財の多さに無念の思いを禁じ得ない。

江戸時代末までは神仏習合により、薩摩藩領内の神社には仏教的要素が存在し、また寺院には神社が附随していた。日本においては、八世紀以降神を仏教の立場から意義づけることがみられた。その後九世紀から十世紀にかけて神は仏の別の姿であるとする説があらわれて、神と仏とを一体化してとらえる考え方が強くなった。この結果神仏習合化が進み、神社には神官・僧侶等が混在した。神社には神宮寺（別当寺）が附随し、寺院には鎮守社が附随した。寺院も神社も神と仏両方の要素を有していた。神仏習合状態を強引に分離したことによって、仏教的色彩を帯びていた神社も、それまでの存在形態を否定され、仏教的色彩を引き離したいびつな形で存在する事になった。廃仏毀釈は寺院を抹殺したのみではなく、神社もそれまでの形態を変えた形で存在させる結果を齎した。

廃仏毀釈の嵐の中、本来寺院に伝存したごく一部の宝物を辛じて伝えている鹿児島県内のある寺院の御住職は、廃仏毀釈の原因を総括し再発防止策を講じなければ同じ事が起こる危険性を憂慮されていた。廃仏毀釈は取り返しのつかない文化の消失であり、二度と起きてはならないことと考える。江戸時代薩摩藩領に属していた地域では、地域に根差した寺院やその寺院に伝わった貴重で莫大な文化財が破壊され、現在も廃仏毀釈の爪痕は、はっきりと印されている。一方で、残された僅かな仏像と、『三国名勝図会』等の地誌類の援用により、鹿児島の仏像の全体

像の模索が試みられている（八尋和泉「中世の仏像―鹿児島県―」（前掲『黎明館企画特別展　祈りのかたち』）、有木芳隆「中世鹿児島の仏像」（『黎明館企画特別展　かごしまの仏たち　～守り伝える祈りの造形（かたち）～』同実行委員会、二〇一七年））。前近代の寺院・神社を記録している『神社調』全体の刊行は、旧薩摩藩領内の寺院・神社の存在形態を復元する上での貴重な史料の刊行であり、その文化的意義はこの上もなく大きい。

『神社調』は、鹿児島城下である府内と薩摩国・大隅国・日向国諸県郡内の各郷に鎮座する主な神社や寺院が記載されている「府内及各郷」、鹿児島城下を含めた薩摩国鹿児島郡域の寺社が記載されている「鹿児島部」、以下「薩摩国之部」、「大隅国之部」、「日向国諸県郡之部」で構成されている。『神社調』は、東京大学史料編纂所所蔵島津家文書の一部である。

「府内及各郷　上」には、鹿児島城下や鹿児島城内護摩所、薩摩国南部の各郷惣鎮守等を含めた神社が記載されている。「府内及各郷　中」は、「府内及各郷　上」日置郡市来郷惣鎮守である稲荷大明神の続き部分から始まり、薩摩国北部や大隅国の一部に鎮座する神社が記載されている。「府内及各郷　下」は、大隅国の残りと日向国諸県郡の主な神社が記載されている。また、大隅国之部および日向国諸県郡のうち都城郷以外の郷には祈願所や菩提所であった寺院の表記もある。

「鹿児島部一」では、真言宗当山派である雲海山宝泉坊般若院が注目される。般若院は、三宝院門跡院家中性院から推挙され着座門首に任命されて、弘化四年（一八四七）家老調所広郷から席次・寺格について仰せ渡されている（文書番号九～一三）。また同年七月に三通の聖護院宮令旨（文書番号三七～三九）が記載されている補陀洛山仏母寺普門院も関心をそそる寺院である。この普門院にも調所は申渡書を出している（文書番号四一）。

「鹿児島部二」では、時宗相模国藤沢山清浄光寺末寺である松峰山無量寿院浄光明寺が注目される。浄光明寺項

には、弘安七年（一二八四）閏四月三日付浄光明寺鐘銘が記載されている（文書番号一）。この鐘銘について、その直前に田原陶猗（直助）が廃寺になる前の鐘を見て点じていると註記があり、興味深い。田原については後述する。また浄光明寺には、文政三年（一八二〇）八月に出された浄光明寺覚書二通（文書番号三・四）と同年十一月に出された浄光明寺恵淳口上覚・寺社奉行請書が記録されている（文書番号二）。また、明治二十年（一八八七）に行われた一遍上人六百年忌は、田原の補入により鹿児島各地から参加者が訪れたものであったことがわかる。

「鹿児島部二」から「鹿児島部三」にかけて、大乗院末寺であり、諏方社別当寺でもある護国山大楽寺安養院関係文書が記載されている。安養院の坪付が記載されており、『旧記雑録』に未収録のものもある（鹿児島部三・文書番号一〇～二八）。

「鹿児島部四」では、天台宗武蔵国東叡山寛永寺円頓院直末である大雄山仏日寺南泉院と、弥勒院末である慈雲山安寧寺龍洞院が注目される。南泉院も龍洞院も記載されている文書数が比較的多い。しかし南泉院の場合も、龍洞院の場合も、文書のほとんどは、『旧記雑録』と同文である。ただし数は多くはないが、今回初めて紹介される史料も存在する。南泉院関係では年月日不詳松平薩摩守口上覚（文書番号一一）と二月二十七日付松平薩摩守書状（文書番号一四）、龍洞院関係では、享保十年（一七二五）十二月七日付寺社奉行覚書（文書番号二〇）、同十八年六月十二日付相良源太夫・島津権左衛門連署覚書（文書番号三〇）、同年九月十七日付肝付兼達外二名連署書状（文書番号二九）である。

また、「鹿児島部」に関する疑問点を付すと、島津家の菩提寺である福昌寺の記載（特に本寺）が少ないことに気付くが、今後の検討課題として挙げておきたい。

「薩摩国之部一」は、吉田・郡山・伊集院の一部の寺院や神社である。

郡山の花尾権現及び花尾山平等王院は、島津氏との関係が深く、源頼朝や丹後局の記述が多く見られる。『旧記

雑録』や、『五指量愛染明王由来記』『花尾社伝記』（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集八』鹿児島県、二〇〇九年）とともに活用されていくことを期待したい。

『神社調』編纂の際、引用または参考にしたと見られる史料のうち、『神社考』、『神社撰集』、『薩隅日神社秘録』についてここで取り上げたい。

『神社考』は、別名三国神社考や三州神社考と呼ばれ、薩摩・大隅・日向三国の神社が記録されていたと考えられる。鹿児島城下に鎮座している正一位諏方大明神の神主である本田親盈（ちかみつ）の著作である。『神社考』は、寛政七年（一七九五）に編纂された『麑藩名勝考』に引用されているので、それ以前に成立したと考えられる。枚聞神社文書に大隅国・日向国諸県郡部分のみ伝わっている。

『神社撰集』は、安永五年（一七七六）九月本田親盈が撰集したものである。「撰集」と名づけられているように薩摩・大隅・日向の主要神社だけに限定されている。また、神社により記述の量にはむらがある。しかし薩摩藩内の神社研究の重要文献として早くから様々な文献に引用されている。『神社撰集』の成立については、『止上神社明細書』冒頭に記載されているように「先年神社しらへ申渡各帳内をも被差出候、然共大略之儀ニ而不詳候、依之今度吟味申儀三国神社記をも致撰書筈候間、一社は伝記又者伝称等実不実無構、右之通相糺帳内を以可被申出候」とあり、『三国神社記』を編纂する目的で薩摩藩内の神社について再調査が実施され、主な神社について『神社撰集』が編纂されたと考えられる。『神社撰集』の内容として注目されるのは、薩摩藩内神社の正遷宮、太守の社参、宣旨、神体新造等の祭儀、霧島燃の祈念行法等に至るまで、神事の具体的な有様が忠実に記録されていることである。また祭田、祭米、社家屋敷、奉納物神社修甫等神社経済に関する記載や神社内部の神官社家の種類や名称等薩摩藩の神社制度に関する良質の史料であると考えられる。また神社の由来や特殊神事等についても貴重な史料であ

る（『枚聞神社文書三　神社撰集』国学院大学日本文化研究所、一九六一年、解説）。

『薩隅日神社秘録』は、文化十二年（一八一五）薩摩藩寺社奉行が編纂した薩摩藩内の神社明細帳という性格のものである。枚聞神社本と鹿児島県立図書館本とがあり、両方とも写本。書名は、枚聞神社本は『薩隅日神社由緒秘録』、鹿児島県立図書館本は、『薩隅日陵并神社由緒しらべ』となっている。この本の下巻の奥書に「右者此節御領国中陵并神社しらべ被仰渡云々」と記載されている。枚聞神社本も鹿児島県立図書館本も三巻であり、内容も大体同じである。寺社方取次市来民右衛門と花尾山神主井上右内等に諸郷を踏査させてその結果に基づき編纂した書物である。奥書に、「文化十二年亥六月　寺社奉行」と記載され、着色図を多く挿入したことが紹介されている。編纂された経緯については、薩摩藩領内部の陵と神社の由緒を調査するように藩主からの命令が出て、市来・井上その他寺社奉行所諸役人が薩摩藩領内部の諸郷に行き見分した。その際特別の場所や珍しく素晴らしい場所は絵図面に記載した。本書は、以前差し出してあった由緒帳や諏訪神主本田下総守が編纂した『神社考』・『神社撰集』・『御陵記』、諏訪大宮司方福ケ迫諏訪神主・花尾山神主等にも由緒しらべを命じ、提出された書類等で調べた。『神代記』に記録されている陵や『延喜式』に記載されている神社等を中心にし、両説あるものや疑わしいものは取らずに編纂された。薩摩藩領全域に及ぶ大規模且つ具体的な調査により書かれているので、実証的で貴重な史料である。また祭日や祭米等も丹念に記録し、淡々とした簡潔な文章で祭の由緒や模様に関する伝承も所々織り込んであるために民俗学関係者も関心を持つことが予想される（『枚聞神社文書二　薩隅日神社秘録』国学院大学日本文化研究所、一九五九年、解説）。

『神社調』と似た性格の書物として、『寺社調』がある。『寺社調』は全十八冊で、同様に東京大学史料編纂所に所蔵されている。薩摩藩領内の薩摩・大隅両国内の寺社の由緒・関係文書、住職名などが書き上げられ、『寺社調』

と『神社調』とはほぼ同じ記述がなされているが、鹿児島部以外の薩摩国部分は無く、大隅国部分は全部存在している。また日向国諸県郡部分は存在していない。『寺社調』は、最初から鹿児島城下及び薩摩国鹿児島郡域部分と大隅国部分しか編纂されなかったのか、それとも当初は薩摩藩領全体部分が編纂されていたが、鹿児島城下や鹿児島郡部分以外の薩摩国部分や日向国諸県郡部分は何らかの理由で失われたのか不明である。また『神社調』と『寺社調』とは基本的に同じような性格を持っていると考えられるが、両者の関係についても検討の余地がある。

『神社調』の編者は、新納久仰（ひさのり）であると言われている。天保十二年（一八四一）五月十六日寺社奉行に任命され、後に家老に任命された（『鹿児島県史料　新納久仰雑譜一』鹿児島県、一九八六年、解題）。

『神社調』には全体を通して新納久仰の註記が見られる。註記に関して、時期が判明するものの中で古いものは、大隅国之部一帖佐項に記載されている「天保二年卯正月、国分内村之温泉江差越候節、久仰親見して写置也」である。また大隅国之部六踊項では天保二年二月、薩摩国之部五水引八幡新田宮項と同四隈之城称名寺項には天保五年四月に湯治で赴いた際に写したと記述がある。さらに同十二伊作天徳寺項に、「天保六年未十月久仰伊作西福寺加世田日新寺江参詣の折、天徳寺江行て見シニ左之石塔有り、写し置」と記載もあり、『新納久仰雑譜一』を見ると、先祖是久の娘で島津忠良母である梅窓公の命日に合わせ伊作家ゆかりの寺院へ参詣しており、薩摩藩内の各温泉地や寺社に行く際に藩内の寺社資料を記録していたのではないかと考えられる。

新納久仰は、『旧記雑録』を編纂した伊地知季安・季通父子と関りがあった。久仰の先祖にあたる新納忠尊が、季安・季通の先祖である伊地知重政の後嗣となっていた縁があり、『新納久仰雑譜一』文政十年十一月十一日項に中絶していた交流を先代のとおり再開させるよう話をした旨の記述がある。久仰は、大口地頭であった新納忠元をはじめ自家の先祖に強い関心を示していて、自身の所蔵文書のみならず大口等の郷士の所蔵文書を借覧書写、表装

し返還する等古文書・古記録等の収集に余念がなかった。この大口関係史料収集には、新納久仰と親交のあった伊地知季安や幕末大口地頭代になった季安の子季通も深く関係している。季安は、新納忠元に関する『忠元譜参證』や『新納忠元勲功記』を執筆しているが、これらを編纂した理由は、久仰との親交にあったと考えられている（『伊佐市郷土史誌史料集　二』伊佐市教育委員会、二〇一六年、「神社調」解題）。『新納久仰雑譜』からも折に触れ久仰と季安は新納忠元についての書物や系図について吟味していることが読み取れる。季安は藩命により、文久二年（一八六二）十二月から翌三年二月まで藩領内の寺社の巡見や実地調査に出かけていて、その成果として伊集院・川内・出水のとくに藩主島津氏と関係の深い主要古社寺の由緒・来歴・現状等について編述した『寺社巡詣録』を編纂している。季安の文久二年の社寺調査方針は、『神社調』にも生かされたとみてよいのではないだろうか（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集五』鹿児島県、二〇〇四年、「寺社巡詣録」解題）。

『神社調』の中には、田原陶猗（直助）の記述がある。田原は、文化十年（一八一三）十月十一日貧しい薩摩藩士の家に生まれ、十七歳の時に藩に出仕し、長ずるに及び西洋の軍制や造船に関心を持った。安政元年（一八五四）我が国最初の洋式軍船昇平丸を建造した。以後多くの造船に従事し、のち一時宇和島藩に招かれて産業奨励に尽力した。明治二十九年（一八九六）に八十四歳で没した（日本歴史学会編『明治維新人名辞典』一九八一年、田原直助項）。大隅国之部五国分正八幡宮項には、「左に久仰と有之、新納駿河久仰君之事也、斉彬公の家老職たり、古史に通し伊地知季安先生・新納矢太右衛門先生を師と被致候而大道の一筋を被挙、実ニ雄才明略ある一人なり、公も此人を愛し被遊候事窃ニ承るや後の人も是如感すべしと記し置ぬ、七十八翁田原陶猗記し置也、」と記載されている。田原が七十八歳の時、新納久仰について、島津斉彬や伊地知季安との関係を含めて言及したこの部分から、田原の久仰に対する敬愛の気持ちが読み取れる。

『神社調』大隅国之部一帖佐願成寺項に、「明治廿三　田原陶猗点」と記載されている。前述『神社調』大隅国之部五における田原の註記を併せ考えると、明治六年に久仰が死去した後田原が手を入れていることが分かる。現存する『神社調』の完成時期は、田原の註のある明治二十三年（一八九〇）以降と考えられる。『神社調』は、廃仏毀釈を断行する上での予備調査の目的で作成されたと推測されている（前掲『黎明館企画特別展　祈りのかたち』）。そして、その編纂目的に関してはあらゆる可能性を視野に置き、今後再検討する必要があると考えられる。

『神社調』に関する疑問点として、『神社調』に記載されている文書の中で各寺社文書の原本にない文書が含まれている。この理由について考察する必要がある。例えば薩摩国之部四水引郷八幡新田宮項に天正二年（一五七四）十一月十七日付八幡新田宮権執印良慶・座主宗盛訴状が載せられている。同文書は、新田神社伝来文書の中には確認できない（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ十』鹿児島県、二〇〇五年、新田神社文書）。新田宮権執印家には本来家譜と十五巻に及ぶ古文書が伝わっていた。しかしそれらは、明治八年（一八七五）鹿児島県庁の命で県庁に移送していたが、同十年西南戦争が起き戦乱の中で灰燼に帰した（浜田亀峰『鹿児島県川内郷土史　上』鹿児島県川内市、一九五四年）。『神社調』の編纂者と考えられる新納久仰が亡くなったのは、明治六年である。八幡新田宮権執印家の場合は、権執印家に伝わる古文書が久仰により書写されて、その後の西南戦争で原文書が灰燼に帰したと考えると、原文書に無い文書が『神社調』に掲載されている理由は、一応説明できる。

同様の事例として、大隅国之部六に記載されている台明寺の文書について栗林文夫氏より御示唆を受けた。元禄十四年（一七〇一）薩摩藩記録所は、虫損の激しかった台明寺文書百四十七通を表装し、同十六年に預かっている。その後享保元年（一七一六）には、表装した台明寺文書を臨写して巻物七軸に成巻して台明寺に渡している。この後薩摩藩記録所が台明寺文書の原本を保管していた結果、明治二年（一八六九）に起きた廃仏毀釈の難を免れるこ

とができた。台明寺文書は、昭和三十二年（一九五七）島津家文書として一括して東京大学史料編纂所の所蔵となっている。寺院史料が僅少な鹿児島県下では、台明寺文書は質量ともに貴重かつ重要な史料となっている（『日本歴史地名大系47　鹿児島県の地名』平凡社、一九九八年、国分市台明寺跡項）。

『神社調』に記載されている台明寺文書の中に、現在原本にない文書が含まれている。この理由について、考察してみる。『神社調』の編者であると考えられている新納久仰が台明寺文書を書写した時には、原本は薩摩藩記録所に、写が台明寺に伝わっていたと考えられる。『神社調』に薩摩藩記録所に保管されていたもの以外の台明寺文書を新納久仰は書写したことになる。久仰は何故薩摩藩記録所に保管されていないものを書写することができたのであろうか。一つの可能性としては、薩摩藩記録所に提出された文書は主に虫損が激しかった文書であった。虫損のない比較的保存状態の良い文書の中には薩摩藩記録所に提出されず、台明寺に留められた文書も存在したはずである。これを久仰が書写したのではないだろうか。同様の事例は、八幡新田宮や台明寺以外にも存在する可能性がある。今後『神社調』を刊行していく中で、その中に記載されている文書について原文書と照合し、原文書に無い文書が記載されている場合は、その都度理由を考察する作業を積み重ねていくことで、次第に明らかになると考えられる。原文書に無い文書が『神社調』に記載されている理由についても今後解明していくべき重要な課題である。

薩摩藩領について、前述したように廃仏毀釈という未曽有の文化財破壊の結果、仏教を中心に多くの貴重な文化財が失われた。それを取り戻す事は不可能であるが、どの様な物であったか推測する事はできる。『神社調』には、各地域の現存していない寺院の宗派や本寺・寺宝等に関する情報が満載されているため、廃仏毀釈以前の寺院を歴史的に捉える上での参考史料となる。また前述の通り廃仏毀釈によりかき消された神社の仏教的要素についても『神社調』の記載から知る事ができる。また今まで翻刻されていない文書を数多く含んでおり、前年度まで刊行さ

『神社調一』　掲載文書点数

史　料　名	文書数 (収載)	〈未収〉	掲載文書数
府内及各郷上	0 (0)	〈0〉	0
府内及各郷中	5 (0)	〈5〉	5
府内及各郷下	8 (3)	〈5〉	8
鹿児島部一	52 (12)	〈40〉	52
鹿児島部二	41 (26)	〈15〉	41
鹿児島部三	57 (12)	〈45〉	57
鹿児島部四	32 (17)	〈15〉	32
薩摩国之部一	49 (10)	〈39〉	49

注1　収載とは「旧記雑録」収載文書を示し，未収とは「同」未収載文書を示す。
　2　掲載文書数とは『神社調一』に掲載した重複分を除く文書数を示す。

れた『地誌備考』や『旧記雑録』等、既刊の『鹿児島県史料』に未収録のものも多く存在する。『神社調』を刊行する事により、近世の鹿児島における寺社の実態把握及び収載された文書類と『旧記雑録』の掲載文書類との相互確認が容易となり、研究の進展に大きく寄与できるものと考えられる。このように『神社調』の刊行には極めて大きな意義がある。『神社調』の『鹿児島県史料』としての刊行を心から喜ぶとともに、『神社調』が今後活用されて、薩摩藩領内の地域文化が掘り起こされていく事を期待して拙筆を擱きたい。

（日隈正守）

例　言

一　本書は、東京大学史料編纂所所蔵「神社調　府内及各郷上・中・下」「神社調　鹿児島部一～四」「神社調　薩摩国之部一」を底本とし、『旧記雑録拾遺　神社調一』として刊行するものである。

一　文書・記録等は、原則として底本に従って掲載し、文書・棟札・金石文には通し番号を文首に付した。

一　掲載した文書を他の文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア　補充・挿入箇所は▽　△及びくで示した。

イ　底本が原文書または校訂史料と相違する部分は、原則としてその右側に典拠史料を記した。相違する部分が二字以上の場合等は、その範囲を明確にするため該当部分を〔　〕で囲んだ。また、漢字・かなの相違については、原則として読みが同じであれば、底本のままとした。

ウ　他に補充や校訂に使用した史料は、次の略記号で示した。

旧記雑録（東京大学史料編纂所所蔵）㊊

島津家文書（東京大学史料編纂所所蔵）◎

新編島津氏世録正統系図（東京大学史料編纂所所蔵）㊦

新編島津氏世録支流系図（東京大学史料編纂所所蔵）㊨

伊集院由緒記（『鹿児島県史料拾遺XV』鹿児島県史料拾遺刊行会発行）㊥

入来村史（入来村史編纂会発行）㊇

延喜式（『新訂増補国史大系26』吉川弘文館発行）㊫

高山大川神社仏閣名所旧跡等取志ら遍帳扣隅州大隅郡大根占（『大根占町誌』）㊧

薩隅日神社秘録（枚聞神社所蔵）㊙
薩藩名勝志（『鹿児島県史料集44』鹿児島県立図書館発行）㊎
三国名勝図会（青潮社発行）㊐
寺社調（東京大学史料編纂所所蔵）㊅
神社考（枚聞神社所蔵）㊇
神社誌（鹿児島県神職会編輯）㊈
神社撰集（枚聞神社所蔵）㊆
他家古城主由来全（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫）㊏
日本三代実録（『新訂増補国史大系４』吉川弘文館発行）㊂
花尾社伝記（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集八』）㊌
町田氏正統系譜（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ三』）㊍
穆佐悟性寺義天様御石塔一件考書巻下（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集八』）㊋
山田聖栄自記（『鹿児島県史料集Ⅶ』鹿児島県立図書館発行）㊊
要用集（『鹿児島県史料集28』鹿児島県立図書館発行）㊐

一　刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア　原注や文書中の異筆・補筆、また出典を示す箇所は、原則として「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。

イ　文書の年月日・差出所・宛所の位置等は、原則として底本の体裁に従ったが、ある程度の統一をした。

ウ　文中には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

エ　原注に移動指示がある場合は、原則として該当箇所に移動した。

オ　頭注や行間の書き込みは底本の体裁に合わせたが、長い場合は※印を該当箇所に記し、関連箇所の文末に適宜まとめた。

一　原本の摩滅虫損箇所は、字数を推して□または［　］を以て示した。

一　編者の付した注は、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　欠字・平出・台頭等は、原則として底本の体裁に従った。

一　原文中の送り仮名及び返り点は、原則として省略した。

一　変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、茂、者、与等はそのまま用いた。

一　漢字は原則として常用漢字を使用したが、底本の用字を活かすことが望ましい場合は、そのまま用いた。

一　一部の年号・官職・用語等については次のように表記を改めた。

　元録→元禄　太閤→太閤　愛岩→愛宕

一　本文中に、不明箇所や虫損、省略等の理由で空けられたと考えられる箇所について、□□、［　］、〻、〻〻、―、等があるものは、原則として底本の体裁に従った。

一　『鹿児島県史料　旧記雑録』との重複文書については文末に注を付した。なお、記事の場合には、原則として重複注は逐一付さなかった。

一　目次は、見出しとして「府内及各郷」については国郡名、「薩摩国之部」については郡郷名を掲載し、重複する箇所についてはまとめて頁数を記載した。

一　文書目録は見出しとして郡郷名及び寺社名を掲載した。

旧記雑録拾遺　神社調一　目次

解　題……1
例　言……13
目　次……17
府内及各郷上
薩摩国
鹿児島郡……一
日置郡……一二、三三、三五
阿多郡……一四
川辺郡……一八、三二
給黎郡……二三、三〇
頴娃郡……二三
指宿郡……二八
谷山郡……三一
出水郡……三四

府内及各郷中
日置郡……三七
薩摩郡……四〇、五〇
伊佐郡……四四
高城郡……四九、五〇
出水郡……五二、五六
甑島郡……五五
大隅国
始羅郡……五六
菱刈郡……六二
桑原郡……六四
府内及各郷下
桑原郡……七七
曽於郡……八二
大隅郡……九四
肝付郡……一〇〇
日向国
諸県郡……一一〇

鹿児島部一……一三五
鹿児島部二……一七五
鹿児島部三……二一七
鹿児島部四……二五七
薩摩国之部一……二八一
　鹿児島郡吉田郷……二八二
　日置郡郡山郷……二九七
　伊集院郷……三〇九
文書目録……三二五

神社調　府内及各郷　上

（表紙）

神社調　府内及各郷　上

上

薩摩国鹿児島郡鹿児島

正一位諏訪大明神　神主 本田出羽守　別当 安養院

祭神

本社信濃国諏訪郡

上社建御名方命　下社事代主命

一当社者島津家御先祖　忠久公信濃国潮田庄御地頭職御補任、承久三年五月鎌倉将軍頼経卿御代、同国大田庄御地頭職御任被成併世御領地、至五代　貞久公御伝領被成候テ、　貞久公御下国、信州本社諏訪大明神ヲ薩州山門院へ請下給、総社ニ御崇敬被成候、暦応之比、貞久公鹿児島之郡司矢上左衛門五郎高純御退治有、鹿児島郡ヲ第六代　陸奥守氏久公へ御譲有、山門院ヨリ鹿児島東福寺城脇へ御引移之時、山門ニ崇置ル、諏訪大明神ヲ当分之地へ御遷座、宗廟ト御崇、神領余多御寄附被成候、御遷座之年暦不詳候得共、凡延文元年之比ト申伝候、

　五月五日号五月祭　七月廿八日正祭

右御祭祀之儀、以前ニハ神領高ヲ以相調来候処、中古ヨリ神事奉行其外之役人ヲ被差分、　太守公ヨリ直祭故、唯今ハ神領等分テ不被附置候、

一当社神位者　綱貴公依御願、元禄九年正一位之神階御申調、同年十二月宣命奉納有之、

一右両社之御額者右大臣家熙公之御染筆、

一只今之御宮造ハ　吉貴公御再興、宝永八年御成就有之、

祇園天王　神主 本田出羽守

祭神　　別当 文殊院

正殿素盞嗚尊

稲田姫号

八王子三女五男

一勧請之年暦不詳　六月十五日正祭

一祭料五石八斗五升

本社山城国愛宕郡八坂郷祇園社

正一位稲荷大明神　　神主 本田出羽守

祭神　　別当 宝持院

瓊々杵尊

正殿倉稲魂神

伊弉冉尊

一元禄九年神階　幣五所下ル故今為五座、

一祭料六石

本社山城国紀伊(郡)国三峰神社

一御当家稲荷大明神御尊崇之御由意ハ、治承三年、御元祖　忠久公摂州於住吉御誕生之時大雨降、深夜之いふせき無限、于時狐火照夜奉守護、是則稲荷大明神之冥助也、御吉事ニハ必定狐声、

右断之趣如件、

承応四年未二月吉曜日

神道管領長上卜部朝臣兼起判

一当社建立之最初　前陸奥守藤原元久当司平若狭守諸諱名景俊、応永十五年戊子十月五日棟札有、

坂本村福ヶ迫

諏訪大明神　　祝 井上左膳

祭神　　社僧 普賢院

建御名方命

五月五日号五月祭　七月二十六日正祭

一祭料八斗五升

一伝称、往古　忠久公従相州鎌倉当国へ御下国之時、有子細江州伊吹山御滞在之間、同国坂本・水口・片本凶賊等之人歳暮・年首之御祝物種々献之、然御下国之時、江州坂本(ママ)有諏訪大明神ヲ坂本氏守下於此所奉勧請、江州御滞在之間、依為守護神也、于今坂本氏之子孫御祭礼之砌奉掛御贊有社参者也、昔雖有下社、　勝久公之時、被移隅州末吉云々、雖然当座前々上下奉祭者也、

東福ヶ城
多賀神社
祭神一座
伊弉諾尊
四月午日正祭
神主　本田出羽守
代宮司　鷲頭喜平太

一祭料一石

一当社者　義久公大龍寺屋形御在城天正年中御勧請、本社近江国犬上郡多賀社、

一帝城之丑寅之間ニ祭事有、故此神ヲ日少宮ト称、寿命ヲ守給神也、

萩原
天満天神宮
祭神三座
中将殿
菅丞相道真公天穂日命後胤
菅原是善之男也、
北御方吉祥女
八月二十五日正祭

一祭料五斗二升五合

一菅丞相者右大臣之大将ニテ、有依時平之讒筑紫江左遷、太宰権師(帥)五十八ニテ去、又云、筑紫ニテ崩(ママ)者延喜三年二月二十五日、五十七ト(ママ)云、其後延長元年三月ニ左遷之宣旨ヲ焼捨、本官正二位ヲ贈リ、天暦元年北野に(ママ)を建、一条院正暦四年五月ニ勅使宰府へ　太政大臣正一位ニ諡シ玉フト云フ、俗説多シ、

一本社筑前国太宰府・山州北野本宮

大磯
天神宮
祭神一座
菅丞相真(ママ)道
二月二十五日　八月二十五日正祭
神主　本田出羽守
社僧　龍洞院
社司　村山肥後

一神領高拾五石

一貞享三年　光久公御勧請、御神体綱座天神、　光久公御小刀田中孫右衛門奉刻者也、

一菅丞相左遷ニ赴玉フ時、筑前国轉(博)多海辺ニ憩玉ヒシニ、居奉ラン御座無故、船之綱ヲ曲敷テ其上ニ奉居御形ヲ綱場之天神ト奉号也、

一本社筑前国博多綱場天神

大磯
蛭児宮　　神主　本田出羽守

祭神三座

蛭児

事代主命

大穴遅命

一神領祭料無之

一伝称、大隅国駃騠(馭謨)郡屋久島之神社者此神ヲ崇祭、益救神社ト号、于時往古神体宇津穂船ニ乗、当地大磯ニ着給フヲ此所ニ崇、蛭子宮ト奉称、蛭子之訓議恵美須也、柴門和語集ニ見、此社ニテ、累年浦々魚猟繁栄之祈願ヲ成ス妙哉、毎年社前之浜辺ニ飛魚自飛揚、則供進シテ奏神楽、此事于今不絶、蓋此浜ニ揚飛魚ト屋久島之猟師此魚ヲ得レハ、必大磯ニ向テ祈願シ、飛魚ヲ捧、日ヲ追テ大磯之浜辺ニ此魚揚ト、是則神明之妙用タリ、且勧請之年暦不詳、

一本社摂州広田神社

大磯
白山権現　　神主　本田出羽守

祭神二座

伊弉冉尊

兼理姫(菊)

一神領祭料無之

一勧請之年暦不詳

一吉貴公御代当分之地へ被引移、御再興有之、

一本社加賀国石川郡白山姫神社

後迫
荒神社　　神主　本田出羽守

祭神三座

土祖神

澳津彦命

澳津姫命

此神俗竈神也

毎月二十九日祭

一祭料三石

一光久公御代、吉田兼起卿へ御願、神体御勧請、承応四年二月守下リ、鳥越三本杉之前荒神山ニ鎮座、貞享三年十二月此所ニ奉移、

一本社大和国笠山荒神社

御城内護摩所
稲荷大明神　　神主　本田出羽守

於高麗戦死之一狐崇、本社帖佐郷在御城内、毎年十月朔日早天、于今祭祀無退転、

一祭料一石五斗

一抑当社者　兵庫頭義弘公赴朝鮮国玉フ之時、白狐・赤狐之二狐先于　公乗御船渡彼国　公之陣営、慶長三年十月朔日、明兵二十万逼於　義弘公御父子所拠之泗川新塞之城埠、于時一狐出従東門入敵軍、於茲　両公指揮士卒大得勝利鏖明兵、一狐者死於敵軍中、御帰朝之後為建祠矣、

一勧請之年暦不詳

一中納言(家久)様御代、佐竹連光院へ被仰付奉崇云々、

護摩所鶴ヶ岡八幡宮御建立之棟札年間同所不動御安置有之候、厨子ニ年間等書記有之候哉、可申出旨被仰渡相糺候処、左之通御座候、

一護摩所之内へ御安置之棟札者相見得不申候、右八幡宮之儀御石体ニテ被遊御下枡形へ御安置有之候処、寛永十四年丑八月、　中納言様思召ヲ以テ護摩所之内へ仮殿ニテ被遊御安置、于今御本殿御造立無御座候、当分御仮殿ニテ御座候代格護被仰付置候、佐竹幸右衛門ヨリ申出候、

一同所不動御安置年間等相見得不申候、右不動之儀者弘法大師刻彫之尊像ニテ、伊集院荘厳寺へ御安置有之候処、　貴久公御代大乗院へ御安置御座候処、寛永年中護摩所へ御安置被遊旨、大乗院由緒之内へ相見得申候、右之通相見得候、已上、

安永八年亥六月御糺付、表御用人桂杢右衛門へ植村長蔵差出候事、

郡元
一条宮大明神　　別当　延命院
　　社司　佐藤外記

祭神九座

本社　猿田彦大神　衢神

東社　彦火々出見命

二龍神豊玉彦命　海神

日神

廻殿

姉姫豊玉姫　豊玉彦命第一ノ御子

天上宮　塩土老翁　事勝国勝長狭神

荒神宮　玉依姫　豊玉彦命第二御子
西宮　大己貴命
　天智天皇
　后
　九月九日祭
一祭料三斗五升
一当社者薩州之一宮枚聞神社ヲ奉勧請、初神号ヲ一之宮ト称来候得共、薩州之一之宮紛敷故、卜部兼連卿改之一条宮ト称号奉納有之候、
一勧請之年暦不詳

荒田
八幡宮　　社司 中馬和泉
　　別当 福蔵院
祭神三座
玉依姫
応神天皇
神功皇后
四所宮・武内・早風社本殿之内ニ崇、
九月(廿三)〔九〕日正祭
一祭料五斗二升五合
一勧請之年暦不詳、天正二年再興以来之棟札多々有之、
一東随神者塩屋村境、南随神者中村境、西随神者田上村境、北随神者武村境ニ鎮座、

西田村
山王大権現　　社司 中馬和泉
祭神二十一座　　社僧 西田寺
大己貴命　大国主命
大物主命　葦原醜男
八千矛神　大国玉命
顕国武(玉)神　上同体略名
十一月初申正祭
一神領高無之　祭料其所行
一本社近江国滋賀郡坂本日吉社者初叡山ニ勧請、(ママ)中山ニ勧請、後坂本ニ勧請也、故ニ上七社、中七社ヲ合セテ二十一座トス、尤秘説也、

新照院
久富貴大明神　　社司 西郷伊予
　祭神三座
　頼朝卿　丹後局

阿闍梨

九月九日正祭

一神領祭料無之　社司勤之

一本社者薩州日置郡郡山厚地村ニ有リ、花尾権現ト称、薩城之乾ニ去事四里、建保六年　右大将頼朝卿之木像ヲ正殿ニ被崇、　忠久公御母堂丹後御局ト永金阿闍梨之木像ヲ左右ニ安置候、厚地村ヲ一円ニ為祭田被附置、永金阿闍梨者丹後御局御在世之時尊敬之僧也、今此神ヲ爰ニ崇置事、厚地ハ道程遠故参詣ニ悪敷、　太守貴久公御代天文年中、城迫ニ別宮ヲ建無恙参社有之、

後迫
小城権現

祭神一座

太守貴久公之霊社、忠国公御事也、

一当社者弘治二年　貴久公御建立、

一御高祭料等之事不相知

右御社之儀者常ニ善聚院承候、故本田出羽守方へハ委不相知、

築地
神明宮

祭神七座

内宮

天照大神

左

手力男神

相殿右

万幡豊秋津姫　高皇産霊御女

外宮

豊受大神

左天津彦(彦脱カ)火瓊々杵尊

相殿神　天児屋根命

右前座太玉命忌部氏之祖

九月十六日祭

一祭料四斗二升五合

一当社者依　吉貴公御志願、宝永三年丙戌九月十(廿六)九日御勧請、本宮者江戸芝飯倉之神明也、飯倉之神宮者本殿外宮ニテ、左之脇ニ内宮之御殿有、当宮者両宮御内殿奉安置者也、

祝
井上宮内

社僧
抱真院

伊敷村
春日大明神
祭神四座
前ニ同
十一月廿八日正祭
一神領高祭料無之
一当社者　近衛信輔公当国へ被成御座候節御勧請、御染筆之三十六歌仙御奉納有之、
船手
船魂神社
祭神三座
伊弉諾尊
猿田彦大明神
伊弉冉尊
九月二日正祭
一神領高祭料無之
一当社者貞享五年辰二月十八日　光久公御勧請、
末社
磯愛宕山
一愛宕
上之馬場下格護般若院　久保田
一天子宮
一諏方大明神

祠官
前田勘左衛門
神主
本田出羽守

六日町有
一若宮
上町
一恵美須
東福ヶ城
一飯綱
東福ヶ城
一天子宮

吉野村

一七社
川添村
一諏方大明神
トコロ迫
一八幡宮

花棚村

一小鷹大明神

岡之原村

岡之原
一塚田大明神
春山
一池之上
一鎮守

下田村

一池之上弁才天
山崎
一山之神
池之上
一熊野三所権現
磯
一山之神

葛蒲谷
一鎮守
川添村
一山之神
中之別府
一鎮守大明神

一諏方大明神

熊之坂
一諏方大明神
同所
一諏方大明神

一霧島神社

護摩所
一若宮
後迫
一水天
大乗院門前
一山王

川添村
一鎮守
磯
一三船大明神
一鎮守大明神

大久保
一鎮守
三原
一諏方大明神

一小鷹大明神　一下之宮大明神　一愛宕
一松尾大明神

川上村

一天神　一池之上権現

華野村

一大高大明神　一諏方大明神　一鎮守

比志島村

一上之山王　一中之山王　一下之山王
一諏方大明神　一小鷹大明神　一山之神
一妙見　一祇園宮　一天神　一早馬大明神

皆房村

一諏方大明神　一鎮守
一市杵島神社　一山王

坂本村

一山王

草牟田村

一北山山王

上伊敷村

一鎮守　一八幡宮（梅ケ谷）　一鎮守
一熊野十二所権現　一諏方大明神　一山之神

下伊敷村

一年之宮　一天神宮　一鎮守社
一弁才天　一鎮守社　一八幡宮
一山之神

小野村

一稲荷大明神　一瀧本権現　一鎮守
一聖宮　一神明宮

園田清左衛門屋敷内ニ有之、

犬迫村

一八房大明神　一霧島神社
一諏方大明神　一山王
一八房大明神　一霧島

小山田村

一諏方大明神　一八幡宮
一若宮八幡宮　永吉一妙見
一現王　同所一鎮守大明神
一鎮守大明神　一山方八幡

一山之神
一早馬大明神
一山王

一宗方八幡
犬迫一鎮守大明神
同所一鎮守大明神

武村

一大田大明神　一諏方大明神
一諏方大明神

郡元村

一鵜戸権現　一岐神

荒田村

一籠勝手明神　一鎮守三社

塩屋村

一塩竈大明神

中村

一弁才天　一日吉山王　一上月八幡

右二十四ヶ名、永吉村相込、花野村相除、

原良村

一山王

西田村

一天神

田上村

一吉水大明神

鹿児島郡吉田郷

惣鎮守
薩埵王子権現　　祠官 中馬駿河（野）
祭神
薩埵王子　枚聞神末也
祭祀二月初申
一祭米三斗五升
一勧請年暦不詳
一当社者上古帝王之太子此国ニ御流給候ヲ、当所ニ王子権現ト為崇由申伝候、前々者神領高三十三石御寄附、其後モ二石四斗為被召附置由候得共、元和六年右高被召上候、
一当社宝殿　舞殿　宝殿上屋　一善神王両社上屋　一宝殿・両社取合廊下　一舞殿・拝殿合之間

正一位正八幡　　中馬伊予
祭神
玉依姫　応神天皇
神功皇后　〔仲哀〕（㊟仁徳）天皇
相殿祭神
吉田美作霊　美作者吉田城主（ママ）也、
金吾歳久公
祭祀二月八日　十一月八日
一祭米一石三斗
一勧請年暦不詳
一当社神位者永禄九年三月八日宗（源）宣（旨）命奉納也、依日新公御尊敬也、往古者吉田権現ト為申由、然処、吉田城主吉田若狭守舎弟美作守ト如何成子細ニヤ不和ニシテ、於本城村風呂入之折非道之事有之、美作守即時ニ多人数ヲ殺害シ、文和四年▽㊙三月△二十五日自害之由、其怒稠敷故、其後美作守ヲ権現ニ被崇、若宮八幡ト申候ヲ、　龍伯公御代、正一位正八幡ト為被成御崇由候、且又　日新公御代為神領、市来養母村之内一町五反御寄進、其後モ高十三石為被召附置由候得共、元和六年右高被召上、其以来御祭米六斗五升ツヽ両度御物ヨリ毎年被相渡候ヲ、　惟新様　金吾様御再興之棟札有之、
一御幡八流
右　光久公　綱久公　綱貴公
一御歌仙三十六枚

右　貴久公

一御鎧一領

右　貴久公御寄進、寛政四年子十二月、御用ニ付御兵具所へ差出置候、

右之通御寄進物有之候、

一当社宝殿・同上屋　一宝・舞両殿取合廊下

一舞殿　拝殿　一善神王両社

薩州

日置郡伊集院郷

諏方大明神　惣鎮守

社司 小田原左門

祭神

建御名方命

事代主命

祭祀七月二十八日

一祭米五斗二升余

一勧請年暦不詳

一当社者同所石谷村町田ヨリ此所へ遷座、年暦不詳、

一当社者信濃国諏方大明神之神主中島宮内少輔ト云者、信州諏方ヲ奉守薩摩へ下ル、于時伊集院之内町田原ト云所之松之下ニ暫休息シケルニ、　忠国公御鷹野ニ御出有、御鷹漏行御愁傷之所、宮内少輔御目掛ニ有家名御尋故、右之次第ヲ言上ス、　太守命有曰、御鷹相洩候間、帰復之事祈願可啓トノ　公命也、宮内少輔謹而畏神慮ヲ深希之処、無程御鷹御拳へ来、甚御喜悦有テ、当所御城之向へ社殿御造営、件之諏方明神ヲ御安置、神領等御寄附有、宮内少輔ヲ以テ代宮司ニ被定、紫染之狩衣信州ヨリ為持下由ニテ、是ヲ着用シテ神勤ニ随フト云、

一当社棟札之写

御諏方大明神御造営之事

当大檀那藤原忠治十六歳

当奉行鳥取伊勢守藤原政茂三十五歳、其外大工等名前有、

一当社宝殿　舞殿　拝殿并宝・拝取合廊下

一舞・拝両殿取合廊下并善神王両社鳥居

同所鎮守
熊野新宮三所権現　　祠官　永尾右京

祭神
事解男神　伊弉冉尊
速玉男神
祭祀六月十五日
一神領祭米無之
一当社者　御元祖忠久公鎌倉ヨリ御下国之時、紀州之海上ニテ難風ニ逢玉ヒテ熊野へ御祈願候得者、忽風波相静、無恙薩州伊集院之内日置浦へ御着岸、御舟帆卸候処ヲ帆之湊、御陸卸之所ヲ下リ口ト名付唱来候、左候テ、伊集院麓本城之東ニ被成御勧請候由ニテ、今其辺ヲ新宮ト唱来候、且又十文字御紋付御幡三流・神領高百石棟札従　忠久公御寄附被成置、本坊并脇坊六ヶ寺、社司屋敷御免地ニテ、本坊ヲ新宮坊ト相唱来候、脇坊六ヶ寺ハ壊ニ相成、本坊社司之儀者当分迄相勤来候、然者神領高百石者本坊代々支配ニテ、年中三度之祭祀致修(執)行来候処、伊集院郷士多人数高岡へ被召移候節、本坊是枝山城坊モ被召移、支配仕来候神領高高岡ニ被召直候由申伝候、

同郷石谷村
熊野三所権現　　祠官　山田左門

祭神前ニ同
祭祀九月九日
一神領高五石　祭神(ママ)七斗
一当社勧請之年暦不詳

同郷石谷村
歳久八幡社　　右同人

祭神
島津左衛門尉歳久霊社
祭祀七月十八日　九月十八日
一神領高三石　祭米五斗六升
一当社町田家先祖孝左衛門久東、延宝八年勧請、

同郷石谷村
福島大明神　　祠官　山田左門

祭神
酒解神　大若子神
小若子神　酒解子神
祭祀三月十三日
一祭米三斗

一当社者町田家先祖文明年中勧請、

阿多郡伊作郷
惣鎮守中原村
大汝八幡宮　　祠官　山之内右京

祭神
応神天皇　神功皇后
玉依姫　大己貴命
大歳神　少彦名命
祭祀十月二十五日　鏑流馬有

一神領高五十石

一勧請年暦不詳

一当社者伊作家御代々被遊御尊敬、猶又　日新公　貴久公　龍伯公　惟新公被遊御尊敬、御寄進物御箙・御征矢・御鞭・御具足、其外段々有之候、

一当社者伊作家忠長深信仰有之、其後島津相模守忠幸(運久)・同三郎左衛門忠良、永正二年丑極月十三日再興ト云々、

一四所宮　一武之内社　一悪王子宮ハ此所ニテ葦王神ト云、

一山田聖栄日記ニ、京四条ニ沙汰之守護神御座候、此時寄願下向之時〔壊中(山懐申)〕、伊作惣社八幡社ニ小社作〔説(山祝申)〕葦王神是也、其後者国々六ヶ敷無子細候、其比者伊作左京進(宗久)殿ト入来十二町ヲ持、彼在所ニ宗久居住ス、為子孫申置処也、本社悪王子京都四条辻ニ在、此社烏丸通五条下ル所ヨリ社儀ヲ支配ス、是又祇園之社也、泉涌寺之内来迎院知行社之事、新八幡勧請之遺意不詳、

末社
湯之浦
諏方大明神　　祠官　右同人

祭米三斗　祭祀七月二十八日

一宝殿　拝殿　一石上座
中野里村
石牟礼妙見　　祠官　右同人

一宝殿并上屋　宝・拝両殿取合廊下　一拝殿
大手之口
観音　　格護　海蔵院

右堂
右同郷
一若宮

右八幡社者、伊作家御代々御氏神ニテ被遊御崇敬、殊ニ　日新公御誓願有之、于今毎年十月二十五日鏑

流馬御座候、

一葦王神

右神社者　忠宗公御代、山田式部孫五郎久家京都四条ヨリ致勧請守下建立ト云、

一大汝八幡社寺社方合力銀御修甫所

一宝殿　舞殿　一宝殿・舞殿取合廊下

一舞殿・拝殿取合廊下　一御供所　東丁　西丁

一鳥居　一鐘楼

阿多郡田布施郷

金峰山蔵王権現　祠官 森仲次郎　別当 金蔵院

祭神

安閑天皇

祭祀正月元日　九月九日

祭料無之

一敏達十二年、百済国日羅聖者応命来朝遇聖徳太子、而現仏宝威霊弘法宝区益、爾後来于此地、暫験(秘駐)錫於金峰山修行暦年、屡感神霊奇瑞、而推古二年、於此構三社壇、奉勅勧請和州吉野蔵王権現ト云々、

一本社和州芳(ママ)野山蔵王権現ヲ推古二年勧請、　忠国公之孝孫越山(伊作善久)超公常々無御子孫事ヲ御歎被遊、田布施金峰山へ御子孫繁昌之御祈願、月々ニ丑之時之御参詣已及三年、御願成就之夜、山中ニテ白装束之神人来テ　越山公之前後ヲ遶リ、汝へ文武二道之男子ヲ可賜ト云テ化去、次夜梅窓(伊作善久室)様御夢ニ、金峰山ニ被遊御参詣三度拝礼之内、白(秘飯)来テ胎中ニ入ト見玉フ、夫ヨリ懐胎、誕生之男子今之　日新公也、

一当社宝殿　舞殿　一宝殿・拝殿取合廊下

一文殊堂并妙見宝殿　一申宮

一山王宮并新宮　一霧島宮

一岩剣宮　一本地阿弥陀堂

一鐘楼堂　一一二一三(ママ)鳥居

物鎮守尾下村之内麓

勝手大明神　社司 二之宮式部　別当金蔵院末寺 大明寺

祭神

愛鬘命

祭祀二月三日　十一月三日

一祭米三斗五升
一勧請年暦不詳
一当社者昔俗ニ火焼大明神ト云ヘリ、御家御代々御信心深、合戦御勝利之御祈願神慮之依奇特　日新公御再興、勝手大明神ト神号被相改、御自筆之御額御寄附有之、古来者御知行過分ニ相付、年中七度之御(脱祭)為有之由候、
一当社宝殿　拝殿　一宝殿・拝殿取合廊下
一善神王両社　一鳥居

尾下村之内麓
諏方大明神上下ト有之、　社司　二之宮式部

祭神前ニ同
祭祀七月二十六日
一祭米三斗五升
一当社者延徳二年戌十二月、島津相模守友久・島津三郎左衛門尉忠幸(運久)勧請、
一当社宝殿并宝殿上屋　一舞・拝両殿取合樋ノ間
一舞殿　拝殿并石鳥居

阿多郡阿多郷

諏方大明神　社司　窪田金次郎

祭神
建御名方神　八坂入媛命
祭祀七月十七日　同十八日
一祭米無之
一勧請之年暦不詳
一(脱当)堂社者　日新公御再興為被遊由申伝候、加世田城長落城無之故、従　日新公神舞之御立願有之、落城以後神舞成就被仰付、　日新公被遊御参詣、神舞相済(脱迄)上者御桟敷へ被遊御座候由、御祭二日共ニ　貴久公迄者被遊御参詣、其後地頭ヨリ御代参ノ由申伝候、尤前代者神領ヲモ為被召附候得共、〔(脱毀破)〕之節被召上候、

惣鎮守
日吉山王　江田参河

祭神
熊野三所権現
祭祀正月朔日　六月十五日　九月九日　十一月初申
一祭米三斗五升

一当社者永正八年十一月八日勧請ト有之、
一当社宝殿・同上屋　一宝殿・舞殿取合樋之間
一舞・拝両殿　一舞殿・拝殿取合樋之間
一御供所　一善神王両社

熊野権現
祭神
伊弉冉尊　速玉男
事解男
祭祀六月二十九日　九月二十九日

一祭米当郷村中ヨリ出
一勧請年暦不詳
一当社者　一瓢公忠幸公　忠良公日新公加世田へ御発向之節被遊御誓願、加世田(秘轍)暫御手ニ入、夫故別テ御崇敬、宮御再興之由申伝候、

愛甲書抜
伊佐野諏方大明神
祭神前ニ同熊野
祭祀七月十七日

一神領高三石
一当社永正十六年己卯六月二十八日　忠幸公　忠良公御勧請ト有之、右熊野権現社同事歟、

鎮守
高良八幡宮　祠官　原口肥前
号玉垂社
祭神
玉依姫　応神天皇
武内宿祢
祭祀八月十五日

一神領高祭米無之
一勧請年暦不詳
一御位貞観十一年三月二十二日(二従)正一位
一伝称、当社者古来中嶽山ニ御鎮座、　日新公加世田へ御進発、天文七年戌十二月二十九日、中嶽山八幡宮へ御参詣御誓願之旨有之、直ニ阿多之内華瀬村立本原ト云所ニ陣ヲ張ヒ、加世田尼ケ城へ被攻寄、無程御手ニ入、(秘故)右永禄二年未十一月二十九日、右中嶽山之下ニ社ヲ造立シ遷宮有之、棟札ニ大願主相州入道日新ト被記

置候、

一日新公御筆三十六歌于今有之、（仙脱カ）

同郷新山村
稲荷大明神

祭神

大山祇女　倉稲魂

土祖神

祭祀十一月三日

一祭米無之

一当社者永正九年壬申十二月五日　一瓢藤原朝臣忠幸并忠良卜御神体之後ニ被記置候、天文七年戌十二月二十九日、夜中ニ被取駆刻、大手口之通路狐火夥敷相見得候ニ付、加世田方大手口之用心稠敷、搦手油断有之候故、後ヨリ御掛被成暫時ニ被為攻落、是明神之依加護也、故御尊敬有之、前代者神領為被召付置由候得共、毀破之節被召上候、神領垂跡以来十一月三日祭祀相勤候、尤以前ニハ社頭零落之故、　光久公御代右由緒等申上候処、吉事ヲ申上候ニ付、先神楽可仕由ニテ、青銅二百疋被仰付候、其後寛文十一年十月九日御証文ヲ以テ御銀二十五枚被相下御再興有之、

諏方大明神

祭神本社ニ同

一当社勧請年暦不詳

一加世田長々不入御手故、　御両公ヨリ神舞之御誓願有之、落城以後御成就有之、　日新公御参詣、御尊崇相増候、

川辺郡加世田郷
宮原惣鎮守
鷹屋大明神

祭神

東宮火闌降命

本殿彦火々出見尊

西宮火明命

祭祀九月九日

社司
当家督
鮫島和泉
市正

一祭米五斗余

一宮原者本阿多之内也シト也、今加世田ニ属（ソク）ス云々、

一瓊々杵尊此辺ニ暫宮ヲ立被成御座候故宮原ト云歟、神代無戸室々旧跡也、（加世田ノ内、山田村ノ内、）彦火々出見尊・火闌降命・火明命御降誕之霊地也、今社頭ヨリ西之方ニ竹屋山有、則三人之臍之緒ヲ竹之篦ニテ截、其竹刀ヲ捨シ所繁茂ス、（絶頂無戸室ヨリ五六丁下ニ有、金竹トミヘタリ、）此地ヲ号シテ竹屋ト云、（今鷹屋ニ作ル、）倭名鈔曰、薩摩国阿多郡阿多郷此所ニ鷹屋郷有、神代所謂竹屋ト云、又曰、阿田郡今薩摩ニ有、此所ニ篦竹山有、其所ヲ竹屋ト云、

一当社勧請之年暦不詳候得共、応保元年以来御再興之棟札ニ数通有之、

一当社宝殿　舞殿　拝殿并善神王両社

一脇宮両社并鳥居

右同郷益山村鎮守
八幡宮
　祭神　　別当今和泉（ママ）真光寺（院）
　　江田源五右衛門

一玉依姫　応神天皇
　神功皇后　仲哀天皇
　祭祀九月二十五日

一祭米二斗余　所中

一当社者堀川院御宇康和二年、池田・藤宮之両士八幡ヲ奉守始テ罷下、益山村中村ト云所ヘ建立、其後度々御再興有之、当分之地ヘ文明十年社地引移、大永八年御再興、然処、永禄六年　日新公、寛永（文）六年　光久公御再興、安永八亥年　重豪公之思召ヲ以テ社頭御再興有之、

一当社宝殿并宝・拝両殿取合廊下

一右上屋并拝殿　一善神王両社

右同郷
諏方大明神
　祭神
　　建御名方命　事代主命
　祭祀七月二十四日

一祭米三斗六升余

一勧請年暦不詳

一当社者　日新公加世田御出陣之砌被為及御難儀、右諏方社内へ被遊御隠候節、敵勢社外ヲ取巻候処、社内ヨリ鳩一番飛出、故ニ奉追掛候軍勢トモ疑（惑）シ晴シ引退候由、依之阿多之地へ被遊御帰陣、夫ヨリ間モナク御勝

利有之、別テ被遊御崇敬候由、左候テ、天明元年　重豪公三位老君思召ヲ以テ社頭廻都テ御再興有之、

一当社宝殿　拝殿　一宝殿・拝殿取合廊下

一鳥居二宇并神垣廻リ

右同所片浦

野間権現

祭神　　社司　鮫島和泉

火闌降命　（西カ）東宮火々出見命　　愛染院格護

火明命　（東カ）西宮瓊々杵尊

鹿葦津姫

祭祀正月二十日

一祭米六石　　郷士社家片浦居住　宮原大助

一勧請年暦不詳

一神代巻所謂吾田長屋笠狭之崎トハ此所ヲ云ル歟、今野間之御崎ト称スル事媛瑪国ノ婦人流来テ此社会祭ヨリ野間権現ト号スルナルベシ、古来ヨリ神殿ノ美麗異于他、又当社之祭祀往古ヨリ于今至テ　太守公ヨリ御代参御番頭ヲ発遣シテ神事ヲ執行シ玉フ、

一当社東之宮　西之宮　右両宮上屋并拝殿

一鳥居并本地堂　一舞殿片浦有之

片浦

十二所権現　　社司　鮫島和泉

一当社宝殿・同上屋　一宝・拝両殿取合廊下

一拝殿　一鳥居

右同郷

熊野権現

祭神

伊弉冉尊　速玉男

事解男

祭祀九月十九日

一祭米無之

一当社者加世田五社之内ニテ　日新公被遊御尊敬候由、開基至徳二年乙丑九月十九日、権僧都法眼和州芳野ヨリ奉（捧守）松坂山へ安置之由、然処天文七年戊戌十二月二十九日　日新公加世田入之節、右権現堂前ヲ被遊御通、松坂坊慶（重カ）中法印御道筋御案内仕、川辺郡山田之内桃之木渡瀬ヨリ加世田川畑村之内舞敷野へ御通、夫ヨリ三日月野、武田村之内前田門へ御出被成候由、於御中途

慶中（重カ）へ御祈願被仰付候ニ付、松坂山へ走帰、右権現社ニテ護摩供ヲ執シ祈願仕候由、然者右依忠節七島ヲ永代檀方被下、今ニ怠転無之、右ニ付佳例之旧式ヲ守リ、毎年十二月晦日護摩供ヲ執シ、御武運長久、国家安全之御祈祷執行仕来候由申伝候、

川辺郡坊泊郷

九玉大明神　祠官　長井伊豆
祭神　当分　鳥原惣太郎
猿田彦太神
事勝国勝長狭神
祭祀十一月二十八日
一祭米一斗七升五合
一当社者　日新公御勧請、年月伝記等不詳、
一御太刀大小　一御鎧一領
右　龍伯公御寄進之由申伝候、
一棟札ニ、奉造建大檀那九州太守島津修理太夫藤原朝臣義久御息災安全、天正十三年乙酉五月二十七日ト書付有之、
一当社宝殿并廊下　一拝殿并鳥居

惣鎮守坊村岩尾崎　祇園社
祭神前ニ同　祭祀六月十五日
一祭料無之
一此所かち（らカ）の湊三ヶ津之内也、坊津八景有、
一勧請年暦不詳

惣鎮守　妙見神社　川辺郡鹿籠郷　社職　山崎三太夫
祭神　皇神
祭祀九月二十九日
一祭米六升　領主
一銭三貫文　同
一当社勧請年暦伝記不詳
一当社宝殿・同上屋　一宝殿・拝殿取合廊下
一拝殿　一鳥居

川辺郡山田郷

惣鎮守
王子大明神

祭神
天智帝之皇子

祭祀九月九日

一祭米三斗五升

一当社勧請之年暦伝記不詳

一鳥居脇ヘ王子陵ト申伝有之、

一琵琶一面

一右　日新公御自作御寄進ト申伝有之、

一当社宝殿　拝殿　一宝殿・拝殿取合廊下

社職
高良権太夫
当分
高野甚七

祭祀二月五日　九月九日

一神領高一石三斗九升余

一伝称、飯倉大明神者倉稲魂命、和銅年中奉崇天智天皇第二之姫、又天智天皇ヲ奉崇也、故今以テ為三座、開閊之別社也、

一中納言(家久)様両度御参詣、御筆之御額御寄進有之、

一近衛信輔公御参詣、福寿之花瓶一御寄進ト申伝有之、

一家久公　日新公　久世(島津)公

右御寄進段々有之、

一天智天皇二之御姫玉依姫陵ト申伝、飯倉社外本地堂之後ヘ有之、

一永正十三年(癸酉)　忠隆公、天文八年　忠良公、天正十九年(辛卯)　忠良公・貴久公御再興之棟札有之候、其後以来之棟札モ有之、

一飯倉社内両若宮者上古川辺家氏神之由申伝候、

川辺郡川辺郷

惣鎮守
飯倉三社大明神

祭神
東之宮天智天皇
中之宮天智帝之皇女
西之宮倉稲魂命

社司
高良長門

社司
若宮　聖宮

一当社宝殿　舞殿　一宝殿・舞殿取合廊下

一舞殿・拝殿取合樋之間　一鐘楼

一東宮　西宮

一善神王両社

右同郷

麓城内鎮守
諏方大明神

祭神前同　祭祀九月二十八日

一祭米七斗五升

一当社勧請年暦不詳

給黎郡知覧郷

麓下郡村惣鎮守
中宮大明神

祠官
赤崎参河

祭神

豊玉姫

祭祀九月九日

一祭米三斗五升

一当社勧請明徳之比卜云、且伝記等不詳、元亀元年午六月再興之棟札有之、

一当社宝殿　拝殿　舞殿　一宝・舞両殿取合廊下

一舞・拝両殿取合樋之間　一御供所

一善神王并鳥居

頴娃郡頴娃郷

一宮
枚聞神社

社司
紀右京

別当
瑞応院

延喜式神名帳

薩摩国頴娃郡一座

枚聞神社

社司三家
桜井甚右衛門

又号綿積神社

池田勘太夫

祭神

田中孝左衛門

本社猿田彦太神　一宮記

東宮彦火々出見尊

二龍宮豊玉彦命　綿積神社是也、

廻殿日神・月神　潮涸瓊・潮満瓊

姉姫宮豊玉姫

聖宮塩土老翁　荒神宮大己貴命

天上宮玉依姫　西宮天智天皇

后

祭祀九月九日　其外祭祀有之

一祭米十四石八斗余

一神領高二百六石

一勧請年暦不詳

一当社宝殿　勤所　拝殿　四足堂　懐殿宮
一西宮　二龍宮　荒神宮　天井宮　姉姫宮
一聖宮　東宮　本地堂　法納堂　鐘楼堂
一御馬屋　僧座　長丁御供所　御酒甕屋
一一・二之鳥居　御陵　神垣石　岩屋観音
一頴娃郡開聞山ハ大古龍宮界也、地神四代彦火々出見尊入海値豊玉者即此地也ト云ヘリ、然ニ人皇十二代景行天皇十年十月三日、一夜之間ニ涌出スト云フ、嶽之頂ニ石之小倉有、伊弉諾尊・大日霎貴・伊弉冉尊三神勧請也、此島山初金畳山ト云ヘリ、中古ニハ長主山ト云、和銅年中ニ開聞山ト改号スト云、
一一説ニ神代龍宮界トハ別国ニテ海童宮之事也、地神四代彦火々出見尊者大隅国正八幡宮ニ美津御舎ヲ建玉ヒ、兄火闌降命逆心ニヨリ塩土老翁奉敵、三年ヶ間海神豊玉彦之元ニ隠シ奉ル、豊玉彦ハ別国之帝王ニテ、日本之地ナラズ、今琉球国成ベシト云、龍宮、琉宮ト相通ス、此社ヲ和多津美ト号事、豊玉彦之生国海宮之表称成ベシ、
一神代巻日蔭草曰、彦火々出見尊橘之小戸ヨリ船ニ乗玉ヒ薩摩国山川之湊迄五十里計リ有、船ヨリ揚玉ヒ浜バタヲ二里計リ行玉フハ開聞山ト云海宮也、上之山ヲ鴨着島ト云、海童之神宮有リ、故ニ社檀ニ湯津杜ヲ植也、薩摩一宮モ海宮神社トテ出見尊・豊玉之一門九人ヲ祭レリ、豊玉彦ハ事代主成ベシトモイヘリ、
一神代藻塩草曰、豊玉姫本国ハ今之薩摩之内也シヤ、去妻之儀ニテサツマト名付ルトモイヘリ、
一此地ヲ鴨着島ト云フ、彦火々出見尊御歌ニ、
企都鄧利軻茂豆句志广尓和我謂称志（ヲキツトリカモツクシマニワカイネシ）（秘訣）
伊茂播和素珥誉能據鄧馭鄧母（イモハワスレシヨノコトコトモ）（秘遍）
万葉にも澳津島鴨ト云フ船ト詠リ、船ヲ鴨ニ寄て云辞なれハ無目堅間に船の着し島の義也、又山を長主山トモ云、
一孝徳天皇之御宇、当山之岩屋ニ於て神仙塩土老翁春三七日修行シ玉フ、時ニ鹿来て舐法水之日光忽現懐孕之粧、口ヨリ生妙相之姫、于時孝徳天皇六年庚戌二月十六日（秘八）也、仙人是を恠て育幽庵、与智通智達、御名を瑞照姫ト奉称也、是を上都ニ奏し、依宣旨二歳之御時入

京し玉ふ、鎌足大臣是ヲ鞠養し奉ル、漸御生長ニ及、十三歳之御時天智天皇之后ニ立玉ふ、御名ヲ太宮姫ト改号し奉る、于時天皇御寵愛異于他、傍ニ如無宮女、依之数人之宮女嫉妬之心深く、于時大友皇子宮女ニ組し為妨皇后企雪打之論、依之皇后事之害アラン事ヲ恐玉て、潜に内裏ヲ出御し玉ヒ、生国に帰ラン事を思召、安東・桜井等を供奉トシテ、白鳳元年二月、志賀都を御発輿にて伊勢国阿濃津ヨリ御船に召て御下向有、于時海中に於て二之甕浮出て御船之跡に随流来る、侍共此由を問奉るに皇后答曰、龍宮ヨリ我に贈り玉フト云、時に白鳳元年壬申六月朔日、薩摩国頴娃郡山川瀬(脱牟)之浜に御着船也、即開聞之麓に御仮殿を造営して御住居し玉フト云々、

一御酒甕屋　甕二

天津彦屋根命(脱児)

右之甕者皇后大宮姫命薩摩国頴娃郡御下向之砌、此南海に御漂船有し時、海中ヨリ浮出御船を慕ヒ、山川之内牟瀬之浜に随来山川ヨリ持参之時、一之甕者中途にて小破に及、今其所を甕破坂ト云ヘリ、然に正治元年大風吹社内破損、其時右甕一破損ス、依之桜井家紀州山家に行御甕調替、本之如奉安置也、古ヨリ御祭御神楽之神酒を造来て今絶事なし、故に是を千年酒ト申伝候、

一天智天皇元年壬申、大和国長津之宮に御座、同六年之春三月、都を近江国志賀郡大津に遷、同十年冬十二月三日、天皇一之宝剣ヲ帯白馬ニ駕テ、山城国山階ニ行幸有、更に無還御、永く山林ニ交り給ハ、御行衛ヲ不知、唯御沓之落留リタル所ニ陵ヲ立ケルト申伝候、天皇夫ヨリ大和国岡本之古宮に御座し、明年是ヨリ丹波国ニ行幸アリ、苅萱之関に黒木造之宮を仮に立て御座ス、天皇頻に后之事を思召、跡を慕ヒ玉ヒ、池田・有馬・長山其外二十四家供奉にて摂州難波津ヨリ御乗船有て薩摩国へ御下向、時に日州鵜戸権現前ヨリ風荒吹、志布志ト櫛間之間に御着船也、夫ヨリ頴娃郡開聞山之麓御仮殿ニ入御し玉、白鳳二年癸酉五月五日也、即鳥居ヶ原に洞院内裏を造営して此離宮に御座ス事已三三(行カ)十有年之春秋を経て、慶雲三年丙午三月八日、御年七十九にて崩御し玉ふ、当社之陵ニ葬ト云々、其翌々元

明帝之和銅元年戊申六月十八日、皇后御託宣に曰、仮に皇帝ニ契り后妃タリトイヘトモ、我ハ是国常立尊之垂跡日神之化身ト宣ヒ、即日ニ薨御し玉ふ、御年五十九歳、当社之陵ニ葬ト云々、

一一説

本社大殿宮
中尊国常立尊　大日霎貴
大宮姫命
右三体奉崇御一体
田心姫命　瑞津姫命
市杵島姫命　吾勝命
天穂日命　天津彦根命
活津彦根命　熊野大隅命

右相殿八神同殿ニ勧請之由意者皇后大宮姫命日神後現降誕ト云リ、此縁起ニ依テ相殿ニ奉勧請也、大殿宮正面之御神体者日神大日霎貴之神体也、尤国常立尊を以テ同体トス、即此神体同皇后大宮姫命ト称ス、天智天皇西之宮ニ座して本宮トセスト云々、

一天智天皇記曰、九月天皇寝病不豫、庚辰病疾弥(秘留)、十二月癸亥朔乙丑天皇崩于近江宮、癸酉殯于新宮ト云々、

一貞観二年▽(三)三月△庚午、薩摩国開聞神従四位上、同八年四月辛巳、薩摩国開聞神従四位上、元慶六年十月戊申、薩摩国開聞神正四位下、

一当社之神地神代巻龍宮段に符合ス、宮殿ヨリ三町計リ馬場末に玉之井ト云所ハ此辺之百姓村曰玉之井門、開聞社境内玉之井辺昔者木犀多く有タル由、今ニ其残有ルト云、

神代巻龍宮段ニ、湯津杜樹トアルハ今之木犀之事ト云ふ説アリ、

一玉之井旧跡十町村ニ有之、和多津美之門前ニ井アリ、豊玉姫水を汲玉ふハ此所也ト申伝候、

一御陵一ヶ所本殿之東社庭囲垣之中へ両(秘石)后有リ、此所を天智天皇并皇后大宮姫命之御陵ト云、

一岩屋之仙宮一宇　塩土翁石彫体

右之所、皇后大宮姫命之御誕生之場ト云、仙宮者観音右脇之下開聞社ヨリ山手之方八丁位、

一岩屋観音堂之後石崖先年崩落、其折地上ヨリ二三尺之所ニ三日月之如形自然に現出して今ニ有之、

一御馬所　仙田村之内ニ有之、此所天智天皇之御乗馬置玉ふ所也ト申伝候、

一神櫃一往古ヨリ伝来之由、不明之箱ト申伝、神符ニテ披候儀無之由候、

一永観二年開聞正一位御託曰、雖為時々祭祀礼餉等専不献玉帛贄不備神馬鏑流馬而已、我於籠宝殿祭日不開内殿、所以不受神事之備、仍示池田・有馬・桜井・安東・長山、此五家云々、因茲於社殿五家評議して九月九日定大祭会也云々、

一大祀五月五日、天照大神天之岩戸ニ籠玉祭也、五月五日ヨリ御戸を閉、笛太鼓等を不鳴、九月九日暁御戸開也、

一九月九日大祭会、天照大神天之岩戸を開玉フ祭也、往古にハ勅使并大宰使御下向にて御祭有来候処、中古ヨリ勅使代坊津一乗院、国主代頴娃地頭参詣にて御祭有之、且又従　忠久公御代々様被遊御崇敬来社ニテ、慶長十四年三月、琉球御退治為御立願　惟新様当社へ一七日被遊御参籠御願望為御成就、同十五年御宮造営有之、同九月九日大祭会にハ為被遊御直参由、左候て、鏑流馬之儀元和五年迄有来候処、其後致断絶候、

一近衛信輔公文禄年間左遷薩摩国坊津浦に留連し玉ひ望開聞嶽給て

薩摩かた頴娃の郡のうつほしま
これや筑紫のふしといふらん

ウツホ島名所部也、

物鎮守
諏方大明神　　社司　外都川和泉

祭神二座前ニ同

祭祀九月二十八日

一神領等無之

一当社勧請年暦不詳　伝記前ニ同

大野嶽権現　　社司　右同

祭九月十九日

一祭米一石

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下

指宿郡山川郷

惣鎮守麓
熊野権現　　社司 紀若狭

祭神

伊弉冉尊　速玉男

事解男

祭祀正月元日　九月九日

一祭米一斗七升余

一神領高一石余

一当社者大永年中建立、別当開山頼仁法印紀熊野ヨリ守下候由申伝候、　家久公琉球御征伐之砌山川迄被遊御出馬候上、右熊野権現へ御祈願之儀別当十九世頼真へ被仰出、琉球御退治之後慶長十六年戌十一月被遊御再興候、

一当社宝殿　拝殿　鳥居　一宝・拝両殿取合廊下

成川村鎮守
諏方大明神　　社司 有馬右京

祭神本社ニ同

祭祀七月二十八日

一神領米無之

一勧請年暦不詳

指宿郡指宿郷

惣鎮守
新宮九社大明神

祭神

国常立尊本社瑞速日大宮姫命

大日孁貴

相殿

活津彦根命　天津彦根命

天穂日命　天忍穂耳命

熊野〈㊙楠〉日命　田心姫命

瑞津姫命　市杵島命

東之宮彦火々出見尊　二龍宮和多都美宮(㊙尊)　懐殿宮照美子日月尊　聖ノ宮塩土翁　姉姫宮豊玉姫　天井宮玉依姫　荒仁宮大己貴命

一五十六代清和帝貞観十六年甲午十一月十日勧請、西之宮天命開別尊、

一四十二代文武帝慶雲三年丙午二月十日建、

随神経津主命　武甕槌命

神供所　天津児屋根命

一祭祀二月十日　九月九日　十一月十日　前日ヨリ翌日迄三日之祭

一祭米五斗二升余

一新宮九社之縁起者国常立尊及天照大神崇敬之霊場にて、人王三十七代孝徳天皇之御宇白雉元年庚戌、於長主山窟塩土翁命修行し玉刻、鹿来て舐法水、忽懐孕之粧アリ、二月十八日辰刻、大宮姫被遊御変化仙人奉育之、三十九代天智帝元年壬戌立后云々、江州志賀大津宮ニ十一年被遊御座、四十代天武帝白鳳元年壬申正月二十一日帝都退御にて、同六月朔日山川之内牛瀬(秘牟)之浜へ御着船有之、本山へ三十六年御滞在にて候、同四年乙亥五月朔日、天智帝当所多良浦へ被遊御着候、今多良大明神之社場にて候、直風穴に於て翫楽之御遊有之、其後崇風祭神祈年穀十月中之丑日、御道規法仕奏神祀候、于茲蘇山叟ト申者へ西方村山之社右叟之祠にて候大宮姫之御居場被遊御尋候、風穴に御滞輿歟、又者当分陵ト申伝之場所へ御滞輿之様申伝候、同五日、長主山へ御幸之砌当宮之上御休輿、松林有之、御腰掛之松ト称申候、千余年ヲ暦、明和年間落倒之由、於爰天皇献水茶、其地ヲ沫ヶ迫ト(秘号)ぐ玉ト申伝候、今申誤てカ津迫ト唱申候、其後祠を立、古今神事用水之場ニ候、夫ヨリ長主山へ御造営有之、御在世三十二年、文武帝慶雲三年丙午二月三日崩御、同十日、堀内・指宿両家之遠祖奉勅神霊遺器安置、天皇之廟ヲ建葛城宮ト称候歟、今西之宮ト号候、四十三代元明帝和銅元年戊申十一月三日大宮姫崩御、百六十八年之後、五十六代清和代貞観十六年甲午七月長主山就震火、御神託之訳ニ依て、同十一月十日開聞宮準八社奉勧請、開聞新宮九社大明神ト本迹縁起之神道起神祇相続継目之節西之宮へ奉拝、直ニ神祠冠服之宣命規格相定玉ヒ、今神道之官領無他、恒例的ニ相承仕来候、上古神領十一丁五反(秘余)命指宿十九丁村ニ有之、高にして三百四十五石余有之候処、先年毀破之節被召上御祭祀難調旨、地頭鎌田出雲ヨリ依願高三十石被下置候得共、是又其後都て被召上、当分御物ヨリ御祭米年々被相渡神事相調候、当時公務之御祭祀一ヶ年に四度司御代参有之、先規ヲ以テ地頭所へ神酒差出候、其外節会月次之御神事数度有之、神供・祝物等堀内家ヨリ調進仕候、旧記等元和六年庚申七月二日之洪水ニ致流失候、

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下
一拝殿・長丁取合樋之間　一長丁庁屋御供所
一鐘楼　善神王両社

指宿郡今和泉郷
惣鎮守 中宮大明神　　社職 有馬鉄右衛門
祭神
豊玉姫
祭祀九月九日
一祭米一斗
一当社宝殿・同上屋　一宝・舞両殿取合廊下
一拝殿・舞殿取合廊下　一鳥居并善神王両社

八幡宮　観音
祭祀二月初卯
一祭料一貫十二文
一八月十五日　祭料右同
一当社宝殿　拝殿　一樋之間并鳥居
一石小祠　善神王両社　一観音堂并不動堂

岩元 稲荷　不動
二月初卯（図午）　祭料右同
十一月三日　祭料八百五十一文
一当社者天徳四年五月二十一日指宿領主甲斐守公（秋脱カ）建立、藤原安近棟札有之、右社者鹿児島大磯御仮屋御庭内鎮座ニ候処、今和泉家御取立、大磯之内御給、指宿之内私領被相定、時宝暦三年酉六月、二社今和泉へ御遷座奉成者也、
一当社宝殿　鳥居　宝殿廻四方石井垣

給黎郡喜入郷
正一位三百余社大明神　　社司 浜島参河
祭神不詳
祭祀十一月三日
一勧請年暦不詳
一当社神位者享保二十一年丙辰、領主肝付典膳伴兼遠（達）依

願正一位宗源宣命奉納有之者也、

一天正六年再興棟札有之、

一当社宝殿・同上屋　一宝・舞両殿取合廊下

一舞殿　一鳥居

本麓
若宮大明神　　社司 浜島参河

祭神

肝付家先祖国兼霊社

一天文年中、隅州始羅郡溝辺郡(郷)へ肝付越前兼演勧請、其後元和年中、肝付弾正兼氏(武)神体此所へ移鎮社造遷宮有之者也、

麓下郡惣鎮守
中宮大明神　　祠官 赤崎参河

（前出中宮大明神ノ抄ナリ、本記事ハ省略ス）

谷山郡谷山郷

正一位伊佐智佐六所権現　　社官 春日駿河

祭神

伊弉冉尊　　社僧 羽島宝昌院

事解男

速玉男

熊野本宮合号六所権現

祭祀正月三日　九月九日　十一月二十日

一祭米五斗二升余

一勧請年暦不詳

一当社神位者正徳三年吉田家へ申願、正一位之神階宣命奉納有之者也、往古熊野ヨリ瀬戸山並竹之内両家にて熊野権現を奉守下、同心最所祁答院薗牟田へ降(遷座)有、

一天文八年己亥、相州・薩州御両家谷山於紫原及御一戦、三月十三日　貴久公御出馬、数日之御合戦無御勝利、依て当社へ深御誓願有之、同二十六日御和談有、玉林城へ御着、地頭大野駿河・伊集院山城、其外諸士於城内御目見御祝言之折柄、頴娃小四郎・喜入三郎御味方之一左右を言上す、其外川辺・市来・高城之地頭各随身申ニ付、以之外御喜悦、偏御願力奇特トノ御事にて

猶御信仰有リ、御寄附之品物左ニ記、

一御鎧一領
一御太刀一腰
一御籠二腰
一大般若経一部
右品々并神田十六丁祭用トシテ御寄附有、
一当社宝殿　舞殿　拝殿　一宝殿・拝殿取合廊下
一善神王両社并鳥居

下福元村
稲荷大明神　　社司　右同

祭神前ニ同
祭祀十一月三日

一伝称、抑谷山郡玉林ヶ城ヘハ往古寺山出羽籠城にて、太守貴久公此城を責給時、城下ヌメリ石ト云所ニ設床机、于時白狐来、　公甚御喜悦有リ、島津家之御佳例故、当城今日御手ニ入候ハヽ、稲荷大明神を御勧請可有之旨御祈願、已落城故当社ヲ造営し、神領三町御寄附有之者也、当時神領無之、

上福元村
諏方大明神　　社司　岩倉河内

祭神前ニ同
祭祀七月二十八日

一祭米三斗　地頭
一当社者古来谷山家勧請　年暦不詳

惣鎮守
熊野三所権現　　祠官　長浜頼母

祭祀正月元日

一当社勧請之年暦不詳、平判官康頼・丹波少将成経薩摩潟ニ流レ、此島に年を経し時奉祟ト云々、

旅の歌に
薩摩かた沖の小島にわれはありと
親にハつけよ八重のしほかせ

千載此歌ヲ読て（ママ）之卒塔婆に書付て古郷の方へ流し玉ひけるといへり、委ハ平家物語に有り、

一社頭修造之儀、島人助力ヲ以相調候、雖然島人不及手節者、彼島在番見賦ヲ以御船手へ相付、寺社奉行所へ

申出候節応修甫、合力銀被仰付候、

川辺郡黒島

黒島(尾)大明神　祠官　日高右京

勧請之年暦不詳

右同竹島

惣鎮守　聖大明神　権社司　安楽出雲(永)

祭神

熊野三所権現

祭祀九月九日

一勧請之年暦不詳

日置郡郡山郷

厚地村　花尾大権現　大宮司　井上駿河守

祭神

丹後御局　別当　平等王院　兼帯　大乗院

右大将頼朝公

永金阿闍梨

祭祀正月十三日　其外祭祀有之

一祭米四石五升

一当社者奉称花尾権現候処、寛政元酉年神祇道管領卜部良供(倶)ヨリ大権現之号被授候、鹿児島之乾四里之程厚地卜云所ニ御勧請有、別当寺ヲ号満家院厚地山平等王院、神廟者島津之御元祖豊後守忠久公君父之義ヲ以テ、建保六年右大将頼朝公之木像を御安置、花尾権現ト被崇、且　忠久公之御母堂丹後御局之木像ト、永金阿闍梨ト云て御局御在世之時尊敬被成僧之木像トヲ左右ニ〔(脇)〕〔(随て)〕厚地村一円祭田トシて御寄附有、然処十五代　太守貴久公御治世天文年間、大乗院御建立被成、花尾之御神廟執務兼帯被仰付、平等王院へ御寄進之采地厚地村同大乗院へ御寄附に候、御本地者中尊阿弥陀、左(脇)右薬師、右脇十一面観音にて御座候、且又将軍家御願成就、殊ニハ当国守護所ト　忠久公御願主ニテ、建保六年戊寅九月永金敬白ト銘有之、数多之霊鏡に仏体ヲ鋳付、御内陣に被掛置候、御局御自愛之御鏡同所に被納置候、御局、嘉禄三年十二月十二日御逝去、任御遺言於此所

奉火葬、御荼毘所并御石塔御座候テ、御霊骨奉納候、
永金之石塔有之、又比企判官能員石塔之由申伝候も有
之、二基共ニ遺骨納置申候、于今大乗院をして当社別
当職ヲ兼摂せしむ、節序之祭祀怠事なし、
一当社御物御修甫所　仁王門　寺社方花尾山神主居宅御
座之間・玄喚之間・玄喚并中門・長屋并小門　寺社方
検者附御修甫所
一御幡二流
一御戸帳三金襴
一御刀一柄
一御剣一振
右四行　吉貴公御寄進、其外　竹姫君様（継豊継室）　重豪公　御
前様・太守様・於須磨様（吉貴側室）・嶺松院様（継豊側室）御寄進物有之、

東俣村
一之宮大明神　右同郷
祭神
忠久公
丹後御局
惟宗広言
供奉随身五十二体脇座
祭祀二月三日　十一月三日
一祭米三石
一祭料青銅千三百疋
右両行天明五巳年被召附候、
一勧請年暦不詳
一抑一之宮大明神者島津之御元祖忠久公為御鎮座之霊場、
爾来雖暦年月之久、粢盛（秘血）食伝而不絶、神廟・舞殿無廃
壊者蓋以神徳之有光輝而有敬神之篤実也、曰若享保十
一年丙午夏、新有国命為御修甫所、十月十二始運斧、
到於十二月十八日畢、故　太守様御在国之節者必当社
へ御社参有之者也、
一御額一面
右　斉興公御寄進、其外　重豪公并嶺松院様御寄進物
有之、

出水郡野田郷

下名村
若宮大明神
祭神
忠久公
祭祀二月朔日　十一月十五日
一祭米無之　勧請之年暦不詳
一当社者御元祖　忠久公御入国薩州山門院野田へ暫被為
居候御屋地之跡へ尊像ヲ祭崇ス、若宮大明神ト奉称ト
云々、今ニ其所ヲ屋地村与申伝候、寛永十三年大願主
藤原光久公御再興之棟札有之、
一当社　重豪公思召ヲ以テ、寺社方検者附御修甫所ニ被
仰付候、
一当社ヨリ戌亥之方ニ当リ一丁余之所へ老杉有之、此所
忠久公御灰塚ト申伝候、

同郷
熊野三所権現　　祠官　木上右近
祭神枚聞神社
祭祀九月九日　十一月四日
一祭米三斗五升　勧請年暦不詳

日置郡市来郷
惣鎮守
稲荷大明神
祭神
瓊々杵尊　倉稲魂神
伊弉冉尊　同殿神狐二社
祭祀九月九日
一祭米五斗二升余
一承元(久)三年丹後御局御勧請
一当社者比企判官能員妹丹後局を　頼朝卿御寵愛おハし
まし、既妊身ニ成らせ給ふ、然に頼朝卿之御台二位殿
妬ミ深く、八文字民部太輔ニ給り、治承三年摂州住吉
ニ至り玉ふ時、御産気に強ク逼り、石上に座して　忠
久公御臨産し玉ふ、折しも大雨降、深夜前後を苦しむ、
于時狐火明照して昼のゴトク辺リヲ奉守護、是即住吉(現く末)
社稲荷大明神之冥助也、故に　忠久公当国へ御入部之
時、神霊を請下し玉ヒ、祠を此所に創建して、湯田村
之内八町八反、大里村之内五反、伊作田村之内五反、
隅州串良之内浮免一町被召付、大明寺を以て別当職ト
シ、十二坊舎を被建、其後

別当大日寺末寺
大明寺　　社官　有川右近　当分　有馬丹宮

（以下「神社調　府内及各郷　中」へ続く）

神社調　府内及各郷　中

（表紙）

神社調　府内及各郷　中

中

義弘公　忠恒公朝鮮国ニ御渡海、白狐赤狐之二狐　義弘公ニ先達て御座船ニ乗奉守護彼国に渡ル、慶長三年十月朔日之日出、白狐東門ヨリ出敵軍中に入、　両公大ニ得勝、御帰朝之後当社之内に神狐ヲ祭て相殿に座ス、

一御鎧一領

右頼朝卿御着初之御鎧ト申伝、御奉納有之候処、天明七年未十月御用ニ付差出候処、当分ハ御兵具方御在合之内引替御奉納有之、

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下

一善神王両社　一御供屋

一箱厨子二通　一獅子釣台二通

同所

一之宮大明神

祭神

天狭霧命　地狭霧命

祭祀九月七日

一祭米無之

一当社者　御先祖忠久公御下国之御祈願、建久七年辰二月御母堂丹後御局御勧請ト云、

左越　蒲牟田

厳島大明神　厳島大明神

右二行　忠久公御下国之御祈願、建久七年辰二月御母堂丹後御局御勧請、

一鶴岡八幡宮　鎌倉鶴岡八幡宮

一御霊大明神　一今熊権現
一宇都湯稲荷大明神　一日吉山王
一安楽権現　一包宮大明神
右七社者　丹後御局御下国之時、市来之内大里村鍋ヶ城へ建仁三亥年中御勧請、

日置郡日置郷
物鎮守　八幡宮　祠官　原口摂津
祭神前ニ同
祭祀九月十五日
一祭米六斗八升　領主
一当社者永禄年中勧請
一当社宝殿上座　一宝・拝両殿取合廊下
一拝殿　鳥居　御供所　一善神王両社

日置郡永吉郷
物鎮守　久留島大明神（熊多）　祠官　山崎肥後

祭神
天智天皇之皇女
祭祀二月三日　九月九日　十一月三日
一神領高七石三斗余　領主
一当社勧請年暦伝記不詳
一当社宝殿　舞殿　廊下　善神王両社　鳥居

日置郡吉利郷
物鎮守　御霊八社大明神　鶴田和泉
祭神
祭祀九月九日
一祭米三斗　領主
一伝称、当社者景政（鎌倉）之霊社ヲ崇卜云、雖然古来八社ヲ祭由、山城国御霊ヲ崇歟、勧請年暦不詳、
一当社宝殿　舞殿　石鳥居　一宝・舞両殿取合廊下
一宝殿上屋

吉利郷

勝手城
鬼丸大明神　祠官　右同人

祭神

祢寝家十六代右近将監重長之霊也、

祭祀三月十六日　十一月十六日

一祭米三斗　領主

一祢占（ママ）家隅州根占領地之砌、彼地ニ勧請ス、後吉利ヲ給之時霊社ヲ崇、故今佐多・根占ニモ此神勧請之年暦（ママ）不詳、

於城屋敷鎮守
平野大明神　祠官　鶴田和泉

祭神

一殿 第一日本武尊　源氏神
　　 第二仲哀天皇　平氏神

一殿 第三仁徳天皇　高階氏神
　　 第四天照大神　大口（江）氏神

県社天穂日命　中原・清原・菅原・秋篠氏神

祭祀四月初午　十一月初午

一祭料一斗一升

元禄十一年寅九月吉日祢寝丹波清雄勧請、所祭山城国平野大明神御同体也、抑当社者祢占（ママ）家之氏神代々崇敬異于他、故吉田兼連卿へ申願、平野二殿之勧幣ヲ守下、元禄十一年寅九月勧請ス、

建部大明神

祭神

大己貴命

祭祀二月初午　十一月初午

一祭米一斗一升

一当社者祢占（ママ）之元祖小松之孫子清重下向大隅国小根占ヲ領スルノ時、江州建部大明神ヲ勧請ス、小松子孫小根占ヲ去吉利ヲ領、故ニ此所ニ遷鎮、

日置郡串木野郷

上名村
猪之日（薩田）大明神　入枝采女

祭神

饒速日命　天香山命

祭祀九月九日

一祭米二斗　産子中

一当社勧請之年暦不詳

一当社宝殿　拝殿・同上屋　一宝・拝両殿取合廊下
冠嶽
東・中・西嶽熊野権現　　格護
頂峰院
高三十九石九斗三升四合三勺七才
一当社宝殿三　拝殿二　宝殿三屋　中嶽一
一西嶽宝殿取合廊下
下名島平
松尾大明神
祭神
大己貴命
本社勧請
大山吸(咋)命　市梓(杵)島姫命　諸神
月読尊　此神者松尾勧請之以前ヨリ鎮座歟、
祭祀九月二十九日
一祭米二斗　産子中
麓
諏方大明神
祭神前ニ同
祭祀七月二十八日
一祭米三斗五升
同一斗七升
一当社勧請之年暦不詳
羽島崎大明神　　梅北加賀
祭神
大己貴命　天活玉命
祭祀九月九日
一祭米一斗七升　産子中
一当社勧請年暦不詳
薩摩郡高江郷
惣鎮守
諏方大明神　　祠官
梅北数馬
祭神二座　本社ニ同
祭祀七月二十八日
一祭米一斗七升五合
一当社勧請年暦不詳

薩摩郡川内山田郷

惣鎮守
久木原権現

社職
野崎太兵衛

祭神不詳

祭祀九月二十九日

一祭米一斗七升

一当社勧請年暦不詳

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下

薩摩郡入来郷

大宮大明神

社職
是枝源太夫

祭神

大物主命

祭祀十一月三日　九月九日

一神領高一石三斗

祭米五斗二升五合

一当社勧請年暦不詳

入来之内日置
市来神社（重）

社職
溝口孫太夫

祭神

入来院又六郎重時霊

祭祀九月二十四日

一神領高四石五斗

一当社者入来院石見守平重頼之曽祖父又六郎重時之霊ヲ崇、重時者当家之正統十五世之孫也、慶長五年庚子九月二十三日於美濃国関ヶ原遂戦死、其霊示現奇妙之事アリ、因茲重頼祖父伯耆守前司重国相（久攸）於入来院副田村建立新社崇置、其霊称雖（久雅）号於日吉、然非神祇管領之神号未慊重国心、承応弟四郎（久第）（久即）明暦元年ナリ乙未春二月、鹿児島諏方神主正大（久六）位宇宿若狭守藤原久広有春（久奉）　太守命趣（久赴）京師之〔使宣（久便宜）〕、憑久広請神号於神道管領長上卜部朝臣兼起、許諾（久諾）号重来明神（久作）為鎮札以賜焉、且復請依卜部朝臣兼起写共額兼（久其）〔従ス諸（久起亦諸）〕書之、以重来神社件神器久広（久受）愛（久之）帯之来格而附与乎、重国於茲乎撰吉日良辰所以鎮座也、

薩摩郡樋脇郷

一之宮大明神

社職
溝口新太夫

祭神

大物主命　初大宮大明神与称、

祭祀二月二日　十一月三日

一神領高一石三斗

一祭米五斗二升五合

一当社勧請年暦不詳

薩摩郡東郷郷

諏方大明神　惣鎮守斧淵　社司　田中小右衛門

祭神

大物主命

祭祀七月二十八日

一祭米一斗五升

一当社勧請年暦不詳

一当社宝殿・同上座　一舞殿　拝殿　鳥居二

薩摩郡東郷郷

藤川村北野本所中ヨリ修甫、文政(化カ)年中　重豪公思召ヲ以テ寺社方検者附御修甫所ニ被仰付候、天社(神カ)社

祭祀八月二十五日

一祭米三斗三升

一勧請年暦不詳、当分木像之神体者所郷士高橋清五郎先祖京都北野ヨリ守下タル由申伝候、

一陵ト申伝候場所無之候得共、塚木ト申伝鳥居脇ヘ有之候松木三十年以前御物御取下方ヘ伐除有之候処、当代宮司八蔵先祖即日ヨリ頭之小鬢双方錐ニテモミ候様三十日計痛候、故法者中集致祈念候得者、返木植付候様御鬮卸候、故乍病中松苗ヲコヤシ来、六月炎天ニ植付候処致生育、当日ヨリ病気致快気候由、古老之者申伝候、当分鳥居脇ヘ盛長イタシ候松ニテ有之候、

一社脇二反余梅樹ニテ、右枝(稚)薪等ニ召仕候得者、腹痛其外諸病差起リ、段々不思儀之事トモ有之由ニテ、女童迄モ右枯枝迄モ取散不申候、

一梅之実熟し候節、氏子中者申請候得(秘ナシ)〔候〕共、近在他郷之者持帰儀者不相叶由、先年近郷之者梅実代宮司ヘ断持帰候節、中途ニテ病気差起リ、直ニ其身走帰返上イ

タシ候得者、即快気為仕由候、
一他行又者致渡海候者、自身ニ奉誓願梅之実致懐中候得者、無難ニ有之ト申伝、又者申請帰参之上返上仕来候、先年所郷士三原源六琉球道之島へ罷下候砌、金灯炉并梅之実申請荷物へ召入置候処ニ、坊泊沖ニテ及破船、乗組人数中之荷物散々ニ相成候得共、源六者勿論荷物迄モ無恙陸ニ卸候ニ付、右梅之実致返上置タル由候、

薩摩郡中郷郷
惣鎮守
諏方大明神
祭神
大物主命
祭祀九月(七)二十八日
一祭米一斗七升五合
一当社勧請年暦不詳
一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下
一御供所并籠所

薩摩郡平佐郷
祠官
野崎織部
稲荷大明神
祭神前ニ同
一神領高五石　領主
一当社宝殿・同上屋　一宝・舞両殿取合廊下
一舞殿并鳥居

社職
中山甚覚
兼善(喜)大明神
祭神
北郷常陸介相久霊社
祭祀八月晦日
一神領高五石　領主
一勧請年暦伝記、日州都之城正一位兼善(喜)大明神之社記ニ詳也、

白羽大明神　白和町中ヨリ修甫
祭神
火雷神
祭祀十一月三日

一祭米一斗　領主
一勧請年暦不詳
一三代実録、薩摩国貞観二年三月二十日庚午、従五位下
白羽火雷神、
一神代巻一書曰、所謂八雷は在首曰大雷、在胸曰火雷、

薩摩郡隈之城郷
諏方大明神　祠官　木山左門
祭神
火雷神（ママ）
祭祀七月二十八日
一祭米五斗二升五合
一勧請年暦不詳

宮里村
志那尾大明神
祭神不詳
祭祀二月三日
一祭料無之

一三代実録曰、薩摩国貞観二年三月二十日庚午、従五位下志那毛（二奈カ）神、勧請年暦不詳、

（伊佐カ）薩摩郡山崎郷
飯富大明神
祭神
倉稲魂命
祭祀十一月十日
一祭（料脱カ）三斗五升
一祭料九升　号花飯
一当社勧請年暦不詳

社職　鮫島助之進

牟田
日吉山王　祠官　押領司多宮
祭神
江州日吉同
祭祀正月元日　八月朔日　十一月初申

伊佐郡蘭牟田郷

一神領高十三石六斗二升　領主
一当社勧請年暦不詳
一当社宝殿　拝殿　鳥居

同所
諏方大明神
社職
税所甚太夫
祭神前ニ同
祭祀七月二十八日
一神領高十二石一斗七升　領主
一当社勧請年暦不詳

伊佐郡黒木郷
惣鎮守
市之大王
祠官
元山右近
祭神
祭祀十一月八日
一祭米二斗　領主
一当社勧請之年暦由意不詳、寛文寅炎上焼失、寛文三卯年島津豊前久武建立、

伊佐郡大村郷
惣鎮守
大后神（居カ）
祭神内宮三体
天照大神手力雄命
万幡豊秋津姫
祭祀正月八日　九月三日
一祭米三斗五升
一当社勧請年暦不詳
一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下
一鳥居

伊佐郡宮之城郷
松尾大明神
祠官正祖代
種子田掃部
祭神
天照大神　外ニ二体
祭祀十一月十五日
一当社勧請年暦不詳、領主二代島津図書忠長、慶長年中東郷ヨリ宮之城へ引移、以後家臣稲留掃部長元此社ヲ勧請ト云々、

伊佐郡佐志郷

阿字賀大明神　　祠官　丸目伊予

一祭料六斗

一勧請年暦不詳

一当社宝殿　舞殿　一宝・拝両殿取合廊下

一鳥居并善神王両社

伊佐郡鶴田郷

柏原村
古紫尾三社権現　　祠官　鶴田肥前

祭神　　別当　祇答院

事解男神

伊弉冉尊

速玉男神

祭祀二月朔日　九月九日　十一月朔日

一勧請年暦不詳

一三代実録曰、薩摩国貞観十年三月八日壬寅、正六位上紫美神従五位下、

一当社者古来始テ此所へ勧請シテ後紫尾山へ奉崇、故古紫尾権現与称ス、所中出米ヲ以祭祀有之、

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下

物鎮守
諏方大明神　　祠官　岩崎肥前

祭神前同

祭祀七月二十八日

一祭米一斗七升五合

一当社者応永三十三年丙午七月勧請

一当社宝殿両社・同上屋　拝殿

一善神王両社・同上屋

紫尾山三所権現

祭神前同

祭祀九月二十四日　十一月二十四日

一勧請年暦不詳

一当社伝記等不詳、紫尾山絶頂ニモ紫尾山権現ト称シテ石之祠有之、上宮・中宮・下宮ト三所ニ安置、当分柏原村之権現下宮之由、尤絶頂之権現并柏原村之権現此所へ一所ニ合崇有之、故ニ紫尾山三所権現ト申伝候由、

所中出米ヲ以テ祭祀有之、

稲荷大明神　祠官前同
祭神前同　相殿
妙見
祭神前同

一当社渋谷氏吉岡三郎重直、薩州祁答院柏原院依御朱印宝治二年下向、両社勧請ト云々、

伊佐郡羽月郷

熊野権現　祠官長谷川駿河
祭神前同
祭祀九月九日

一祭米三斗五升

一当社勧請年暦不詳　当社宝殿并拝殿

一舞殿　一宝・舞両殿取合廊下　一善神王両社　一舞・拝両殿取合樋之間　一宝殿上屋　鳥居

若宮八幡宮
祭神
明久之霊
祭祀九月二日（脱三）
祭米無之

一当社者大島出羽守有久之正嫡忠明西原八幡ト号、嫡島津次郎四郎明久之霊神也、享禄二年丑九月三日大島ニテ討死、生年十六才、初大口西原八幡同社之内雖崇敬、故有テ天正十三年乙酉三月二日　龍伯公此所ニ移鎮云々、新納武蔵守忠元棟札有之、

伊佐郡大口郷

宇佐（西原）八幡宮　社司二之宮右近　別当郡山寺
祭神
忠明之霊
祭祀十月十三日

一祭米五斗二升余

一当社者　太守陸奥守久豊公第四之御子大島有久之正嫡

忠明之霊ヲ崇、忠明者大口領主ニテ候処、求磨相良家大口ニ陣ヲ張手強ク相働及難儀、故鹿児島へ御加勢被申上候得共不及御手、忠明粉骨ヲ尽シ軍衆ヲ亡ス、其忠賞トシテ大口三百五十丁御賜、大口殿ト為申由、然処求磨菱刈家ニ逆意有之、享禄三年庚寅七月二十七日暁、菱刈大和守押寄於城内忠明戦死、子息明久生年十六才ニテ（享禄三年丑九月三日）羽月大島村ニテ対菱刈勢戦死、父子共忠勤、故天正七年霊社ヲ建立シ、西原八幡・若宮八幡ト同社ニ御崇候、然に天正十三乙酉年、依有奇瑞大口地頭新納武蔵守忠元へ有命、若宮八幡ヲ明久戦死之場大島村へ同三月二日（秘分）令移、同十六戊子年、西原八幡ヲ従　龍伯公増旧制御殿御造立有之候、忠明兵術名（秘楢）之勇将ニテ憤強戦死之後、火災奇異之事ノミ有之候得者右通御取持、（秘故）右静謐相成候由申伝、于今毎年十月十三日御祭有之、前々ヨリ御名代参有之候処、近年地頭代ヨリ御代参所中郷士御供相勤候、翌十四日、於神前馬場市ヲ成、町人数千人可令群集之由　太守貴久公御誓願之由ニテ今ニ懈怠無之候、先年者鏑流馬為有之由候得共、当分市町計ニテ候、

一忠明臣下ニ宮原十郎兵衛ト言者、明久大島村ニテ戦死之時、明久之首打取候者ヲ見掛追行、其敵ヲ討取、故同士之者二人ヲ以テ西原八幡善神王ニ取立ノ由申伝候、
一甲一頭・太刀一腰・鎗一本
　但永正八年未十一月日波平家吉作ト有、
　右社内へ奉納有之、御寄進等之訳不相知、
一当社宝殿・同上屋　舞殿　拝殿　御供所
一宝・舞両殿取合廊下　一舞・拝両殿取合樋之間
一善神王両社　一鳥居

宇佐八幡宮
祭神前同
祭祀九月十九日
一祭米五斗二升五合
一当社建久三年九月九日、豊前国宇佐八幡ヲ菱刈家勧請ト云々、
　但寺社方合力銀御修甫等之筋ニ相見得候、由緒帳ニハ、西之原八幡宮合力銀之筋ニ相見得候、

小苗代秘仏薬師

格護　永福寺
社司　二之宮右近

右薬師者伝教大師作、一国一仏ト称シ市山村之内に有之、　道忍(入経)公　龍伯公御寄進田地一町八反御花押之御文書、且又将軍尊氏(ママ)公ヨリ田地八町二反無公役御寄進貞和六年正月七日御花押之御文書有之、天正八年庚辰二月　龍伯公御代新御寄進田地五反八丁御大老五人名付之御目録有之候処、天正九年、右地面御取揚に相成候、明和六丑年、薬師堂都而及焼失候得共、仏体之儀者焼残リ、尊体コゲ候迄ニテ、形以前之如クニテ灰塵之内ニ有之、其尊体ヲ其儘致安置候、大師一国一仏之寄作に依て焼失セサリシト所中伝候、且又格護永福寺モ寛政八年辰四月寺家焼失ニテ、御文書等都テ致焼失候、

一薬師堂并二王門

惣鎮守　伊佐郡山野郷
熊野権現

社職　成尾伊予

祭神前同

祭祀九月九日

一当社勧請年暦不詳

一当社宝殿　舞殿　一宝殿・舞殿取合樋之間

一舞殿・拝殿取合樋之間　一御供所

諏方大明神

祭神建御名方命　八坂刀売命

祭祀七月二十六日

一祭米一斗七升余

一当社勧請年暦不詳

惣鎮守　高城郡高城郷
妙見大菩薩

祠官　有馬河内

祭神前同

祭祀九月二十九日

一祭米五斗二升五合

一当社勧請年暦不詳

一当社宝殿・同上屋　拝殿　一宝殿・拝殿取合廊下

高城三社権現

祭神

祭祀七月十日

一高三石　高城六右衛門家ヨリ寄附

内一石五斗祭米　一石五斗寺料

一当社者渋谷家城主之時慶長年中、渋谷備前守父子三人ヲ崇祭テ、三社権現ト称、

薩摩郡百次郷

惣鎮守

諏方上下大明神

祭神

一当社宝殿・同上屋　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下

高城郡水引郷

亀山

八幡新田宮

別当

観樹院

祭神

天照皇太神

瓊々杵尊

栲幡千々姫

祭祀九月十五日　其外祭祀有之

一神領高八百六十七石三斗余

一勧請年暦不詳

一神代巻曰、久之天津彦々火瓊々杵尊崩、因葬筑紫日向可愛之山陵ト云々、薩摩国高城郡水引郷八幡新田宮者皇孫瓊々杵尊之帝都也、亀山西北之山腰ニ可愛陵者今五代村之内也、新田之社頭ヨリ相隔事一里計、是則皇孫之御尊骸ヲ葬シ所也、此一山ヲ陵山ト号霊山也、又神亀山社頭之山内に中之陵有、其次ニ端之陵有リ、是皆同陵之御壓也、凡往古ニハ天子之陵所々に設置、何レヲ正ト不知様に御壓を崇、御尊骸葬所ヲ深く奉隠事実々故有之御事也、又此山ヲ亀山ト称事、神亀山ヨリ五代之陵山マテ一山之号也、神亀山を亀之頭トシ陵山ヲ亀之尾トス、古来ヨリノ祝号也、又当社に応仁(神)天皇以下武内宿祢等ヲ祭五所之別宮トス、五所八幡之内也、

天皇者中興之聖主日本文武之大祖、四所宮者住吉三神ニ神功皇后ヲ会祭、武内臣モ亦功業莫大成ヲ以神祠ヲ設テ是ヲ祭、故ニ此時ヨリ八幡之号アル歟、新田宮ト称スルハ古来之宮号成ベシ、諸神記曰、新田宮者雖日向国降不(脱宮)神宮薩摩国亀山鎮座ト云々、

一当社者皇家之御尊敬最異于他、昔者毎年六月〔　〕(脱名越)之大祭ニハ遠ク勅使ヲ発遣し神慮ヲ恭敬シ、万民ヲ役して祭祀ヲ執行し玉フト也、

一八幡宮印銅印也、

此印今ニ有、神前勤方有之家々被任職分之時、公文所にて執行貫(ママ)職補任書調、正月十一日卯之刻、執印職・権(脱執)印・座主兼政所・殿上検校其外四人、銘々致書判補任紙頂戴仕来候、

一薩摩倉印

此印当分無之、昔二十二ヶ所郡院ヨリ諸祭用途之物相納候節、証文に御印戴候由申伝候、

一建治元年九月十四日蒙古降伏御祈祷関東御教書、且又御造立等之綸旨、建暦三年十二月鎌倉殿ヨリ御剣并御高等(脱馬)御拝進之書附、其外院宣等数通有之、

一為異国降伏御祈祷被寄附料所三郡御祈之節、神風荒く吹起賊船悉破損、一時ニ凶徒沈海底也ト弘安六年八月日文書ニ有之、

一太閤秀吉公御動座之節モ、大切成御宮之由被聞召、宮内之儀者放火狼藉等禁制為有之由候、

一承安三年、正殿以下門廊等炎上、

一御陵三ヶ所

社伝

可愛陵瓊々杵尊御廟所

右社頭ヨリ西ニ当二十一丁五代

中之陵天照太神右同

右社頭ヨリ戌亥之方三丁二十間社山之内

端之陵天忍穂耳尊右同

右社頭ヨリ戌亥之方三丁十間社山之内

一御太刀一腰鳩丸無銘

右御拵鳩之彫物、御太刀正宗之由申伝候、

一右同長光銘有御戸丸

一御小サ刀一腰助宗

右三腰

禁中様御寄進、其外
忠国公・惟新公・秀吉公御制札、
光久公・綱貴公・吉貴公・重豪公・竹姫君様（継豊継室）・於須磨（吉貴側室）
様御銘々様御寄進物有之、
一当社宝殿　舞拝殿　八足四足堂会（廻）廊
一備所　公文所　四所宮　拝殿　彼岸所
一拝殿・彼岸所取合廊下　一番所
一番所・会（廻）廊下取合廊下　一武内宮并武内宮寺社廻廊取
合廊下　一可愛陵　一鐘楼
一二十四社　荒神社　高良宮　中王宮　早風宮
一善神王両社　端之陵宮　中之陵宮　陵之木之井垣
一上御供所　上下御供所取合廊下　下御供所　久留宮
一宿神宮　大己貴宮・同上屋　一・二・三之鳥居　弥勒
堂　仁王門　毘沙門堂　稲津阿弥陀堂　明王堂
一降来橋材木蔵　土蔵
右寺社方検者附御修甫所、

別当
国分寺
天満天神
神領高九石一斗

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下
泰平寺中
薬師
一薬師堂　客殿・本堂取合廊下
五代村惣鎮守
山王宮　社職　寺田平右衛門
祭神前同
祭祀十一月初申
一祭米一斗七升五合
一当社天文十五年丙午十一月勧請
一当社宝殿・同上屋　拝殿　鳥居　宝・拝両殿取合廊下

出水郡阿久根郷
開聞神社　祠官　鮫島駿河
祭神頴娃開聞神同
祭祀（廻）二三月三日　十一月三日
一祭米三斗五升
一当社勧請年暦不詳

出水郡出水郷

加志久利大明神

祭神

応神天皇

本社神功皇后　第一御殿天照太神　第二御殿姫明神

三女神也　第三御殿住吉三神　祭祀二月三日　八月

朔日　十一月三日

祠官　黒木佐渡

別当　幸善寺

一神領高六十石

一勧請年暦不詳、出水郡大宮加志久利大明神ト申者、筑紫小戸之橿原之潮路ヨリ化生シ玉ふて住吉明神ト現給之由申伝候、然ルヲ日本最初三十三ヶ国に定リ、一国に大社一社ツヽ御立之由候、後六十六ヶ国に相分之刻、薩摩之為大社出水・肥後之堺加志久利山へ奉崇、則彼山の名かたとり加志久利大明神ト奉申候由申伝候、尤第一之御殿ハ日神大神宮、第二御殿ハ姫明神ト奉申候、則宇佐明神田霧姫命也、第三底筒男・中筒男・表筒男也、第四神功皇后也、此三社ヲ二之御殿一社に奉崇之由申伝候、然処ニ古来彼山に野火入て本社・末社・御本地迄悉致焼失候、縁起等其砌捨リ為申由候、

一高麗御加増トシて出水郡御賜之刻、高三十石被召付候、左候而、　惟新公御初地入之刻者、加志久利并箱崎八幡宮へ御参詣被遊候、前代ヨリ之大宮司者池上次郎左衛門ト申者ニテ候得共、大宮司之儀ハ〔志が〳〵（徐々成）なる〕者をと被仰出候て、帖佐衆野村兵部正祝子・真幸衆黒木伝太夫・座主帖佐山田正田院快誉、此衆御意ニテ被召移候事、

一元和年中、寺社之知行被召上候時分モ、加志久利ハ一国之宗廟之由ニテ、本領六十石其儘にて被召置候、右之高ヲ以テ年中十二度之御祭祀有之、

一当社御再興之棟札数通有之、尤当分之御宮作者、享保六年　吉貴公御再興、

一此社之古鰐口に加志久利ト書ケリ、或曰、山之名加世久利ト云ハ、此山ヨリ海原ヲ見ニ加世ヲ繰よふに海水之見ルヲ以テ加世久利山ト云、加世布利トモイフ、

一御太刀二腰

一金幣　一振

一御幡　二流

右三行　吉貴公御寄進、其外　継豊公・浄岸院様（継豊継室・竹姫）・

重年公・於須磨(吉貴側室)様方御寄進物有之、

一当社籠所迄寺社方検者附御修甫所

箱崎八幡宮　　社司　黒木安房

祭神

神功皇后　応神天皇

武内宿祢

祭祀九月二十四日　九月二十五日

一祭米五斗二升余

一本社筑前国博多郡箱崎郷誉田天皇

一出水郡宗廟筥崎八幡宮ハ本社筑前国博多郡箱崎郷誉田之帝之祠也、地近博多、是順眼異国之意也、昔箱崎へ有白幡四流・赤幡四流、自空降下此地建社崇大神、故ニ号八幡、(脱当)堂社東脇埋(脱感)戒定慧之三字之箱栽松所以為標、末社平位殿・桜位殿・住吉現王也、

一当国へ御勧請之旨趣ハ、　忠久公為三州之太守、出於関東浮西海之日、於博多海上有逆風簸船之愁、諸国之商船悉帆破楫摧而不知其所之、于時　公自被念八幡宮懇祈也、故其感応不虚唯宮舟無恙着岸御当国、此御願御勧請為令護封疆安置此地、右之趣ニ付テ　忠久公依御願、出水郡山門院野田之内新御堂へ右社頭被遊御造立、神領等被召付、放生会之砌ハ三騎之鏑流馬有之、其後出水之内名古(護)浦へ御勧請ニテ、神領八町相附、鏑流馬等不相替有之候処、名護浦之儀ハ磯辺故大潮之時鏑流馬難儀ニ付同断、今和泉へ御社被召直如旧規御神事御座候処、御池へ鏑流馬駆入軽(怪)我有ニヨリ、当宮内ニ御宮被召直有来候、御神領亦ハ御祭等如以前有之候処、忠辰(島津)代ニ殿領ニ相成候時分、右神領被召上候、雖然高麗御出陣之節被遊御立願被得御勝利、出水郡為御加増御賜、早速神領三十石被召付、御神事之節鏑流馬等前代ニ不相替候、然に寺社之高被召上候砌、右神領不相残被召上、于今御物ヨリ無断絶御神事有之、

一浜殿東脇御池之中に松有之候処、　忠恒公高麗御出陣之砌、依御祈願八幡宮鳥居御建立ニ付、右松御伐ラセ被成候処、中ヨリ鉾出て今社内に奉納有之、

一当社御再興之棟札数通有之、当社宝殿　四足堂　舞殿　宝・拝両殿取合廊下　横下横丁両所・舞殿・四足堂取合廊下　善神王両社

名護浦八幡宮

祭神前ニ同　祭祀二月十二日　十一月十二日

一祭米二斗六升

一当社御神体之後ニ、天文八年己亥十一月十日、作者知識安昆、願主吉定ト有之、箱崎八幡宮ヲ古此所へ被召直候処、大潮之節鏑流馬難成故ヲ以テ、出水六月田村今和泉へ御宮被召直、其跡宮之由、今名護浦八幡ト相唱申候、往古ハ祭米二斗ツヽ毎年被相下、御祭有之候処被召揚、其後ヨリ名護浦中勧米にて御祭有之来候、然処天明七未年、重豪公依　思召御宮御建立、且又祭米二斗余被召付、于今毎年御祭祀有之候、

右同所
稲荷大明神

祭神　大山祇女　倉稲魂　土祖神

祭祀十一月二十八日

一祭米無之　勧請年暦不詳

一当社者出水五社之内ニテ、前代ハ神領等被召付被遊御崇敬候由、慶長十七年之高帳に茂神領十石ト相見得、其後都テ為被召上申候、然処肥後城主加藤主計頭清正之勢出水沖へ兵船余多乗来、蕨島迄焼払候刻、夜中ニ箭筈嶽ヨリ洗切リ磯辺へ幾万トモ不相知火相見得、夫故加藤勢引退タル由、偏に稲荷大(秘明)神之御方便ト申伝候、

里村　薩摩国甑島郡甑島
新田八幡宮　祠官　日笠山式部

祭神

瓊々杵尊

祭祀九月十九日

祭米一斗五升

一当社ハ嘉祥二年宮里氏先祖勧請、高城郡水引新田宮ニ同、

中甑島　祠官
六王大明神　右同人

祭神不詳

一当社造立天正五年丁丑十一月棟札有、

社司
講元大明神　日笠山助之進

弁才天

社司　右同人

下甑島
八幡新田宮

祠官　日笠山和泉

祭神

玉依姫　応神天皇

神功皇后

祭祀九月十九日

一祭米五斗七升五合

一当社ハ同国高城郡水引郷新田宮へ会祭所之別宮ヲ崇、往古勧請之年暦不詳、于時永正十年（ママ）辰仲春炎上、大永三年未十一月小川伊勢守建立棟札有、

諏方上下大明神

社司　原崎武左衛門

同　原崎九左衛門

天満天神社

同　日笠山和泉

敷塩大明神

出水郡長島

惣鎮守　諏方大明神

祠官　増田肥前

祭神

誉田天皇

祭祀七月二十八日

一祭料三斗五升

一当社勧請年暦不詳

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下

大隅国始羅郡重富郷

惣鎮守　岩剣大明神

社司　後藤右近

祭神

大己貴命

祭祀十一月初申　九月九日

一祭米一斗七升五合

一当社ハ渋谷家岩剣在城之砌、貴久公合戦御勝利之依御祈願、天文二十（弘三）年甲寅十月二日御勧請ト云々、

一当社宝殿　舞拝殿　向拝　宝・舞両殿取合廊下
一舞・拝両殿取合廊下　一善神王両社・同上屋　石鳥居

重富寺院
祈願所
円明院　南泉院末御免地
一高四十六石　一客殿玄喚　持仏堂　護摩堂　客殿・持仏堂取合廊下
菩提所
紹隆寺　浄光明寺末右同
一高七十石　一客殿玄喚　本堂・同向拝　本堂・客殿取合廊下

始羅郡帖佐郷
惣鎮守
新正八幡宮
祭神
応神天皇
神功皇后
玉依姫　大己貴命
大歳神　少彦名命

社司
篠原河内
格護
増長院

祭祀従十月二十四日同二十五日終
一祭(捌)米五斗二升五合
一当社ハ弘安年中奉勧請、男山八幡応神天皇也、本願主岩(跡清)水了清、昔大隅国為男山八(跡幡)神領之時、了清当国ニ有八幡勧請之旨趣、隅州始羅郡帖佐郷松原浦下着八幡御輿御入津、故即其入江ヲ名八幡ヶ江湖、自夫数十丁ヲ隔て川上御着船之所ヲ号船津村、又東三十丁村有大池、池中ニ霊山一夜ニ涌出ス、其辺ニ御輿ヲ居、八幡勧請之地ヲ定時、東之方に当て有峨々タル高山、嶺上之青松に八流之幡忽然トシテ顕、八本之松ニ掛候、了清即希有之思ヲ成シ、偏ニ八幡之奇瑞ト存、嶺上に奉勧請新正八幡、自爾累代万民奉仰者也、
一義弘公高麗御渡海御祈願有首尾好御帰朝、故御願成就ニ付、八流之御幡御寄進有之、
一義弘公関ヶ原御出陣之砌御祈願ニ付、慶長九年甲辰十二月、三十六歌仙御奉納有之、　忠恒公御筆之由、画者市来治右衛門尉家鎮筆也、于今神庫ニ納有之、
一宰相様六十六本之神舞被仰付、其外　光久公御寄進之御幡有之、

一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下
一御供所并鳥居　一善神王両社

帖佐郷

稲荷大明神　社頭上屋寺社方合力銀修甫所
祭米二石五斗

祭神　神狐

祭祀十一月二十八日

一当社者於朝鮮国戦死之神狐也、死骨壺ニ納此地ニ持渡、惟新公依高命高尾城ニ奉葬死骸、社檀(壇)造立シ、其霊ヲ崇テ稲荷大明神ト号ス、神領高一石五斗四升三合御寄附并祭料二石五斗被仰付置、毎年十一月二十八日祭祀令執行之処、元和年中右神領共被召上候、

一義弘公朝鮮御渡海之時、赤白之二狐先　公乗御船渡彼国(ママ)　公之陣営、慶長三年十月朔日、明兵二十万逼於義弘公・忠恒公所拠之泗川新塞之城堙、于時白狐出東門入敵中、於是　両公大指揮士卒遂御勝利、悉鑿明兵、然ルニ赤狐ハ戦死敵軍中、依而御帰朝之後御祠ト云々、

一鹿児島御城内護摩所之稲荷社者、　中納言(家久・忠恒)様御代御勧請、(脱則)別当社之分神也、二三(脱之)丸外御庭稲荷社者、宝暦十四年護摩所稲荷御勧請也、

右二之丸外御庭ト有之候得共被相糺候処、御本丸外御庭ヘ御勧請之稲荷社之由ニ而、其段高輪大老隠居重豪公ヘモ御届ニ相成候段、寺社方御帳内ニ有之、

1

棟札

奉造立稲荷宮護持信心大檀那
藤原義弘朝臣御武運長久故也、
慶長三年戊戌十二月二十八日
大願主大行事樺山美作入道長寿、小行事竹内備前守、
右棟札裏書
奉勧請稲荷大明神於朝鮮国御戦死、
藤原義弘朝臣敬白、

帖佐郷

住吉大明神

祭神

天照太神宮　宇佐明神

社職
園田彦右衛門

住吉明神　神功皇后
仲哀天皇
一祭米三斗五升
一当社和銅元年（ママ）辛戌（ママ）二月朔日、鈴木三郎政氏・同四郎政良勧請、

帖佐寺院
総禅寺　福昌寺末御免地菩提所
一高三十二石　一心岳様御石塔・上屋・同外廻石井垣
一客殿
祈願所
増長院　大乗院末右同　一客殿
一高二十七石
一心岳寺　福昌寺末右同　一高二十石
一客殿　茶堂　同取合廊下　待衣療（寮カ）
願成寺　浄土宗京都知恩院末不断光院末御免地
一高三十石　一客殿　阿弥陀堂　十王堂

始羅郡蒲生郷

正八幡宮
祭神
仲哀天皇　応神天皇
神功皇后
四所宮　武内社　早風社　天社（天神七代）　国社（地神五代）　祭祀
六月晦日
一祭米五斗二升余　一御進納銀二匁（毎年相渡）
一当社八人皇七十四代鳥羽院之御宇行賢執印之時、藤原姓（苾舜）舞清下大隅鹿屋ニ下向、若宮八幡宮安置、保安四年癸卯閏二月二十一日、蒲生院へ勧請、蒲生・吉田両院神領司ヨリ代々居住ト云々、

社司
瀬戸山加賀

北村惣鎮守
楠田大明神　祠官　谷川十太夫
一当社宝殿并上屋　拝殿　宝・拝両殿取合樋之間
一正八幡宮へ御額一面
右　惟新公御寄進、其外　龍伯公永禄元年御寄進物有之、

蒲生寺院

祈願所　千手院　大乗院末御免地
一客殿
菩提所　永興寺　能州総持寺末右同
一高七石　一客殿　一大門

始羅郡山田郷
黒島大明神　祠官　川俣右京
祭神五座　勧請神不詳
祭祀正月元日
一祭米五斗
一当社勧請年暦不詳

山田寺院
祈願所　正田院　大乗院末御免地
一高一石　一客殿
菩提所　陽春院　福昌寺末右同
一高一石余　一客殿

始羅郡加治木郷
宝現大明神　社司　竹下伊賀
祭祀十一月十八日
一当社者求磨相良之御息女求磨御前ト申、惟新公始之御前様ニテ候処、御離別ニテ隅州山田之内辺川村へ被成御坐候、御離別之後御憤深、種々御難行候て、終辺川村にて被成御死去、被対　上様色々快（ママ）異多有之候ニ付、惟新公飯野へ御在城之節、阿弥陀如来に御崇、保寿院ト申寺御造立ニテ、寺領等御寄附、右寺へ御安置、御崇敬可被成由御誓約にて、帖佐へ御在城之節者山田之内寺師村へ社頭御建立有之、宝現寺開山光規法印為御使京都へ被召登、吉田家へ被仰達、本地十一面観音、宝現大明神ト神号御申請被成候、
一当社宝殿上屋　宝・拝両殿取合廊下并拝殿
一米一俵ツヽ　山田下名村
帖佐寺師村
右二ヶ村、古来ヨリ十一月十八日御祭礼ニ付、為御祭米差上来候、

物鎮守
春日〔寺〕（考大明神）
祭神和州春日同
（考雨）西宮大明神・山王社・荒（考人）神大明神・春日同殿鎮座
祭祀九月十八日　同十九日　十一月中酉
一祭米五斗　領主　同一斗五升　所中
一当社勧請之遺意ハ、寛弘三年一乗（考条）院之御宇、小野之宮
関白之公達禁中ニテ女御之論ニ依テ国々へ配流、其中
ニ経平（藤原）卿加治木之郡司タリ、故ニ経平卿勧請、大和国
奈良ヨリ筒井左衛門尉御神体ヲ守下奉ト云々、筒井之
子孫（考宮）城氏于今柁城へ居住ス、
一当社宝殿　舞殿　拝殿　善神王両社　鳥居
一宝殿・拝殿取合廊下

格護
春日寺
社司
竹下伊賀

右同村
若宮大明神
祭神
祭祀九月二十八日　祭米無之　産子祭
一当社ハ尤本社ニ若宮之社有、即春日之荒魂也、今に勧
請之若宮大明神ハ不有荒魂、加治木氏之嫡子其霊ヲ崇、

社司
竹下伊賀

柁城寺院
祈願所　春日寺
一高三十三石　大乗院末御免地　一客殿
菩提所　長年寺
一高百石余　福昌寺末右同　一客殿

物鎮守
鷹大明神
祭神不詳
祭祀二月初酉　十一月中酉
一祭料四斗　産子中
一当社勧請年暦不詳

始羅郡溝辺郷

祠官
宗像織部

溝辺寺院
祈願所　大定院　大乗院末御免地
一高一石　一客殿
菩提所　心慶寺　福昌寺末御免地
一高一石　一客殿

始羅(菱刈)郡本城郷
物鎮守　祠官
諏方大明神　小倉土佐

祭神前同
祭祀七月二十八(孝七)日
祭料三斗五升

一当社勧請年暦不詳、天正十六年戊子棟札有、
一当社上之社・下之社・同上屋　一宝・舞両殿取合廊下
一舞殿　拝殿・舞・拝両殿取合廊下　御供所　善神王両
社・同上屋

下手村　祠官
須川原水天　右同人

祭神
罔象女命　祭祀十月二十八日

一神田三反
一惟新公御代御勧請ト云々、当社者　惟新公御代菱刈両
年相支候砌、　惟新公下手村へ被遊御出陣、右水天へ
被遊御誓願候得者、三日中ニ永禄十二年五月五日(辰六)大口落城仕候ニ
付宝殿御建立、舞殿者加治木弾正、(政年)拝殿者鎌田寛栖建
立、其上田一丁三反被召附、年々十二度モ祭祀有之候
得共、其後右上田地被召上候、本田加心大宮司ニ御定
被成、田地三反程為御祭料田京竿ニテ被召附置候、水
天免ト申、今ニ社人格護仕来、年ニ一度ツヽ祭有之
上様御祈祷仕候、慶長四年己(亥脱カ)閏三月、大島出羽守藤原
忠泰棟札有之、
一惟新公御出陣之砌、大口川満水、夜中忍ニ被遣候人右
川ニ行掛リ、〔(殺可)一ツ〕渡様無之、右水天へ寄誓仕候得者、
不思儀ニテ相渡リ、闇夜行先火灯ス者有之、大口之城
下へ罷越様子見届罷帰候由申伝候、
一同公御願御成就被遊、其上肥州御出陣之刻モ御誓願之
御書附并棟札等有之候得共、先年洪水之節諸由緒不残
致流失候、
一流之水天ト申ハ、先年洪水之刻、下手村之須川原水天
相流、本八房山へ暫掛リ、夫ヨリ茅原村ニ流留リ、此
所ニ一社ヲ建立、流之水天ト申伝候、須川原水天堂ヨ
リ道法二十丁計モ有之候、伝記以前神主内村加賀ト申
代、右水天へ十月二十七日夜ニ何方ヨリ来ルトモ不相
知馬参候ニ付、度々追出候得共出去不申、故須川原水

天ト書附、馬之髪ニ結付候得者即駆出シ為申由、此儀元文年間以前之事ト相見得候、右馬ハ鹿児島芳(吉)野牧神ヨリ病馬立願代参之馬にて為有之哉に申伝、今に吉野村ヨリ年々十月二十七日之夜、多人数須川原水天へ参詣仕、其夜々立ニ罷帰候、其外祭祀之節ハ遠方他方ヨリ参詣人夥敷有之候、

重富(留)天神　祭神前同　祭祀八月二十五日

一祭米　講中

一当社文禄五年丙申八月二十五日大島出羽守忠泰勧請之棟札有之、

本城寺院

祈願所　甘露寺　大乗院末御免地

一高一石　一客殿

菩提所　曹源寺　(飯野長善(慶))〔福昌〕寺末右同

一高一石　一客殿

菱刈郡湯之尾郷

物鎮守　御霊大明神　祠官　田上駿河

祭神

鎌倉権五郎景政之霊

祭祀九月九(廿)日

一祭米三斗五升

一当社勧請年暦伝記不詳、長享三年己酉菊月ト額裏書有之、

一当社宝殿并上屋　舞殿

一宝殿・拝殿取合樋之間　一横丁并御供所

一舞殿・横丁取合廊下　一善神王両社

湯之尾寺院

祈願所　蓮台院　大乗院末御免地

一高一石　一客殿

菩提所　高源寺　福昌寺末右同

一高一石　一客殿

菱刈郡馬越郷

物鎮守
諏方大明神

社職
長谷川庄左衛門

祭神信州本社同

祭祀七月二十六日

一祭米一斗七升

一当社勧請年暦不詳、天正五年丁巳(丑)十二月九日　義久公御再興之棟札有之、

一当社宝殿・同上屋　舞殿　一宝・舞両殿取合廊下　一拝殿　舞殿・拝殿取合廊下

一御供所　拝殿・御供所取合廊下　一善神王両社・同上屋

一鳥居

馬越寺院

祈願所　黒坂寺　大乗院末御免地

一高七石　一客殿

菩提所　長寿寺　国分正興寺末右同

一客殿

菱刈郡曽木郷

物鎮守
悪瀬大明神

祠官
長谷川若狭

祭神不詳

祭祀十一月十五日

一祭米一斗七升五合

一当社勧請年暦不詳　当社宝殿・同上屋　舞殿　一宝殿・舞殿取合廊下　一拝殿　御供所　一舞殿・拝殿取合廊下　一善神王両社・上屋

曽木寺院

祈願所　観音寺　大乗院末御免地

一高一石　一客殿

菩提所　広徳寺　大慈寺末右同

一客殿

桑原郡栗野郷

物鎮守
正若宮八幡

祠官
木瀬土佐

別当
蓮乗院

祭神

神功皇后　応神天皇
仁徳天皇
祭祀九月十五日

一祭米五斗二升五合
一神領高二石　修甫免
一当社ハ国分宮内正八幡宮第一之御子難波之王子御即仁徳天皇ト奉申候、彼皇子ヲ為奉崇宮ニテ、蒲生八幡宮・始良八幡宮・荒田八幡宮、此三神者栗野八幡宮之御兄弟ニテ有之旨申伝候、
一当社勧請年暦不詳、文明二年伴貴兼代ニ棟上、北郷(考原)家之崇敬ト相見得候、天正十三年　義久公、同十八年義弘(考公)、元和九年　家久公御再興之棟札有之、
一義弘公飯野御在城之節者、御通(考路)毎ニ御参詣、祠官木瀬氏居宅へ御止宿、御手鎗一本(左文字)、御紋付之御椀、其外品物賜之、今ニ持伝候由、神馬一疋定立、御厩ヨリ代馬被仰付、鞍道具御馬(考物)ヨリ被相渡候、
一銀子三貫目　祠官木瀬太郎三郎
右者　義弘公　久保公高麗へ御出陣ニ付、御武運長久延命首尾能御帰朝之御祈祷可致精成、且亦無官ニテハ祈祷モ不叶筈候ニ付、早速致上京、吉田家之伝ヲ受可相勤、為其右之通拝領被仰付候由申伝候、
一研ほし踊
右　義弘公　久保公高麗へ御渡海之節、　御首途御供人数為気勇、正若宮八幡於神庭右踊被仰付候由、依古例毎歳七月四日栗野郷士右踊相勤候、御首途之(秘節)、大雪降積けれは、

野も山もみなしらはたと成にけり
今宵の宿ハかち栗野郷

御発句

から立の其身ハやかて帰国かな

一当社宝殿　拝殿　同両所取合廊下　四足堂
一拝殿・四足堂取合樋之間　東西長庁　御供所
一善神王両社
一御祭付御花并柴間御肴御納戸へ差出来候、

栗野寺院

祈願所　蓮乗院　大乗院末御免地
一高一石　一客殿

菩提所　徳元寺　福昌寺末右同

一客殿

桑原郡横川郷

惣鎮守上之村

正一位安良大明神　社司　月野木備前

祭神

安良姫霊

祭祀九月二十九日

一祭米三斗五升

一当社ハ往古安良御前ト申女之霊ヲ崇、此女ハ内裏之女房ニテ、或時帝王御著用之紺染之直垂ヲ洗に出タル砌、川向へ白鷺数多参タルヲ見、彼片袖ヲ流シタル依科、死苦村之者へ被仰付門屋へ張付、起炭ヲ以テ火煎ニ被成候ニ、兼て十一面観音心信之故、観世音身替ニ立給、安良御前ハ横川へ落下、安良嶽ニテ自害之由、其時所中へ障リヲ成シケルニ依て、和銅元年奉崇候由申伝候、

当社嫌物左之通、

一白鷺所中へ参不申、万一参候節ハ古来ヨリ神楽差上候、

一所中へ起炭不仕候、

一門屋所中へ不相立候、

一所中紺屋并藍作不仕候、

右之通申伝候、

一当社始ハ嶽之絶頂ニ為有之由、然処神事之便悪敷、此所へ崇祭ト申伝、今ニ絶頂に宮床有之、今ハ右嶽之裾へ社壇有之、何比ヨリ当分之社壇へ相直リ候哉、伝記不詳、

一延宝五年巳九月吉田家自筆之額有之、神位者享保十九寅年、吉田家宗源宣命奉納有之、

一当社宝殿・同上屋　拝殿　宝・拝両殿取合樋之間

一長庁　向拝　御供所　善神王両社

横川寺院

祈願所　真乗院　大乗院末御免地

一高一石　一客殿

菩提所　仙寿寺　栗野徳元寺末右同

一客殿

桑原郡日当山郷

日吉山王　　社職　南条平七

祭神

江州日吉同

祭祀十一月初申

一祭米一斗五升

一当社者康治元年勧請、御殿造立願主　島津豊後守藤原忠朝、大工三位太夫藤原道国、小工藤原国家、奉行日置美作守藤原俊久、于時永正六年（十脱カ）己卯四月二日ト棟札に有、

西光寺鎮座
今霧島六所権現

祭神前記

祭祀十一月初酉

祭料神領無之

一当社勧請年暦不詳

一鎧四領内二領紛失、二領在于今、　龍伯様豊後入之節御寄進ト云々、

日当山寺院

祈願所　三光院　大乗院末御免地

一客殿

菩提所　東林寺　福昌寺末右同

一客殿

桑原郡踊郷

惣鎮守中津（帰）川村
妙見神社　　祠官　上原伊予

祭神

北斗星

祭祀二月中酉　六月二十九日　九月二十九日

一祭料一斗七升五合

一同一斗　六月二十九日祭米　島津内記

一当社勧請之年暦不詳、元亀二年以来之棟札有、

同所三体堂村鎮座
飯富大明神　　祠官　谷川土佐

祭神

倉稲魂命

祭祀二月中酉　十一月中酉
一祭料一斗五升

踊寺院
祈願所　真徳院（福）　大乗院末御免地
一高一石　一客殿
菩提所　東光寺　福昌寺末右同
一高一石　一客殿

桑原郡吉松郷
物鎮守
箱崎八幡宮　祠官　春日河内
祭神筑前国箱崎八幡同
祭祀十月二十五日
一祭料一斗七升　当社勧請年暦不詳
一当社宝殿　拝殿　一宝・拝両殿取合廊下
一拝殿・四足堂取合廊下　一四足堂　御供所　善神王両社

熊野権現
祭神
伊弉諾尊
伊弉冉尊
一本地弥陀薬師観音
一役行者一体・後鬼前鬼二体
一祭祀二月彼岸　三月三日　五月五日　六月十五日　八月十五日　十二月二十九日
一祭米一石五斗
一当社者　惟新様飯野御在城之節、別て御崇敬有之、度々為被遊御参詣由申伝候、内小野寺元祖愛甲小次郎儀、御元祖忠久公御下向之節致御供罷下、其後二十八代之祖相模坊代天正年中　惟新様飯野へ被遊御在城伊東御取合之節、御前へ被召出、為伊東調伏敵陣へ針ヲ埋、御合戦御勝利之御祈祷被仰付候処御勝利有之、為其忠賞小林之内瀬戸尾寺権現座主職被仰付、瀬戸権現へ御高二百石為被召付置由御座候得共、前代毀破之節被召上候由申伝候、右相模坊嫡子秀真坊儀、十一才之時ヨリ　惟新様御側へ被召仕、方々御奉公相勤、其後出水

社司　石川権太夫
格護　内小野寺

へ被召移足軽主取被仰付、御高百二十石余被下置、十三年程罷居候由、其節瀬戸尾権現并内小野寺香花之儀ハ相勤為申由、且亦三輪山法印前宮坊御当国へ罷下、惟新様御対面之節、右(秀)真坊早々帰山被仰付、毎年致入峰候様被仰進候ニ付、秀真坊ハ出水ヨリ直ニ内小野寺へ罷帰候由、秀真坊書記置候由也、

一天狗相伝三略書一巻

右ハ志布志飛滝権現へ天狗相住候由　惟新様被聞召上、為　御名代相模坊へ実否見届候様被仰付、天正十二年甲申十二月十五日彼地へ差越、一七日参籠致祈念候処、天狗右三略書相授、持帰備　上覧置候処、御前へ被召上御文書之内ニ被納置候、其後相模坊隆算代奉願被返下、当分寺内へ宝物トシテ笥蔵ス、相模坊先祖愛甲小次郎ヨリ当内小野(寺)迄三十七代、代々直子相続ト云々、

観音秘仏　般若寺格護

右保安年中涌出之由申伝候、

吉松寺院

祈願所　光照院　大乗院末御免地

一高一石　一客殿

菩提所　玉泉寺　飯野長善寺末右同

一客殿

般若寺　大乗院末右同

一客殿

桑原郡国分郷

宮内鎮守
正八幡宮　別当　弥勒院
正宮服部太夫　秋丸源右衛門

祭神

彦火々出見尊

地神第四帝也

祭祀　正月元日　二月始卯　四月十七日　六月二十九日　八月十五日
同月三日　三月十日　五月六日　七月七日　九月九日
十月十五日　十二月十八日
十一月三日

一神領高七百六十二石八斗九升二勺三才

内六十石油田、三十六石六斗五升二合九勺修甫田、

六百三十三石一斗四升五合二勺社家社僧給地、

一高二百石、宮内原新田正八幡宮へ御寄附之御判物、

享保六年丑二月弥勒院頂戴被仰付、外ニ御祭米二石五斗、

一延喜式神名帳大隅国桑原郡一座大鹿児島神社ト有之、一伝称、当社者神代火々出見尊之帝都也、鹿児島神社之名義火々出見尊無目籠ニ入海宮ニ至リ玉フ事、神代巻ニ見得タリ、無目籠一書ニ作無目堅間、今之竹籠也、目ヲ密ニ堅ク編テ作タル也、籠之訓鹿児也、籠ヲ作火々出見尊ヲ入奉タル所之辺ヲ鹿児島ト言ナラン、其籠ニ入玉フ出見尊之社成ヲ以テ鹿児島之神社ト云也、今現ニかこ山と云所宮内之近辺ニ有リ、旧記曰、鹿児島之麓ニ竹原と云所アリ、爰ニ岩神とて大キ岩アリ、八幡宮御誕生之所と云、

一卜部諸神記

祭神

仁徳天皇　社伝　仲哀天皇

応神天皇　神功皇后

一人皇三十代欽明天皇五年甲子、鹿児島之神社へ八流之幡ヲ降シ給て、此三神を奉崇、籠八幡之唱号従是始レリ、依之垂跡示現之最初なれハ、正八幡と号せり、

一石清水伝記曰、鹿児島神社者彦火々出見尊也、欽明天皇五年甲子、始て鹿児島之神社を正八幡と顕座也、宇佐八幡者同三十一年に御顕座、依之大隅を正八幡と奉申、宇佐とハ不同也、

一人王四十三代元明天皇和銅元年社頭造営有、上古建始(ママ)之三年簡不相知、

石体宮

神功皇后御正体石ヲ勧請

祭祀四月二十日

一祭米三斗五升

一建始之年暦不相知、当社者八幡宮ヨリ丑寅ニ当て四丁五十九間を隔て樹林之内ニ有、八幡之正石体とす、往古豊前国宇佐宮之神人来て芋茎ヲ以テ焼ク、石体忽破裂して中ニ四句之金文ヲ顕、出顕之金文曰、

昔於霊鷲山　説妙法花経

今在正宮中　示現大菩薩

右金文(ママ)として猶存在し給、然トモ深是を秘して拝スル事を得す、其焼し神人者忽神罰ヲ蒙レリといふ、

一毎年四月二十日御祭礼、三日前御衣相調、真薦ニテ四

所アミの薦二枚ニテ調、当日神前へ御衣相備、衆徒中勤行相務、神主折紙ヲ以テ面目を覆ヒ、手探リに御衣差上候、俗説ニ毎年御祭礼之度毎ニ御衣二枚ツヽ、差上候得共、古御衣二三枚ヨリ多ハ御着無之、往古ヨリ右通ニテ朽捨し御衣迚モ一切無之、古御衣ハ都て日向国鵜戸山へ参候由、古ヨリ申伝候、鵜戸山へ衣掛松と申松樹有之候由、御恵ニ預候者ハ稀ニハ奉拝者モ有之由、所中申伝候、

一御守石

義弘公高麗御渡海之節、御守石神田橋家ヨリ差上、首尾好御帰朝ニテ被遊御返納候、御守石御吉例ニ付、宝殿之内ニ備置、其以後御代々御上下之節、御申請被遊神田橋家ヨリ差上候、尤諸人之儀モ平産之守、旅行海上安全、疱瘡之御守として申請、返納之節者外ニ石一相添返納仕事之由也、

一八幡宮宝殿　拝殿　拝殿・四足取合廊下

一四足堂并東西長庁　四所宮　武内堂　早風宮

一検非使所　備所・西之庁取合廊下　勤行所　御供所

一下御供所　釜屋并酒部屋両社殿　善神王両社

一石体堂宝殿　石体堂拝殿　若宮守公神三ツ社

一弥勒大仏堂　正宮鐘楼　正宮内十体堂

一正宮九体堂　辻之堂　一・二・三鳥居

二之宮大明神内村　社職　畑井西太夫

祭神

蛭児　祭祀　正月元日　三月十日　十二月　二月初酉　十一月初酉　二十六日

一勧請年暦不相知、当社者　龍伯様甚御信仰有之、社頭御再興、慶長九年、内村之内高十石御寄附有之、雖然右高之儀者其後上地ニ相成、目録迄今ニ社司令格護候、

一当社者蛭児之神垂跡最初之地也、又社之左道下ニ老櫲(樟カ)掃樹有、枝葉繁茂し欝タリ、所謂奈気木森とハ此所にシテ大隅之名所也、社頭当分溝上ニ安置有之、

一蛭児三歳マデ足不足(脱立)、伊弉諾・伊弉冉二尊之御慈生(脱愛)を以、静閑之地へ遊玉へと天磐櫲(樟)掃船に乗セ、順風に放棄玉ヒシガ、終に此所ニ漂着シ玉フと云、且蛭児所乗之舟此地ニ漂着シテ自然に根ヲ生し大木と成、奈気木とハ父母脚立玉ハすを歎て放棄玉フに依て名付と、又掃樹(樟)之辺都て竹山也、青黄竹と名付、蛭児掃(樟)船之操也

しが、終に根ヲ生し竹林と成しと云、

一古今和歌集に撰讃岐か歌に、ねきことをさのミ聞けん杜(秘社)こそと詠るも、此社之事歟、文禄年間初秋之比、細川幽斎　台命ニ依て此国に来り玉て、当社ニ詣て杜に題せし発句、

　山風を奈気木の杜の落葉かな

右発句之短尺、且遊行三十五世之上人巡国之時、此社「杜カ」を見て

　春は花秋ハもみちのあかなくに
　　ちるや奈気木の杜といふらん

右詠歌之短尺、或時　中納言(家人)様一年此社ニ詣て、杜によそへて

　古をしのはさらめやいまとても
　　道を奈気木の杜の言の葉

右御詠之短尺等社内ニ雖籠置、雨掛にて悉朽損したる由也、

大己貴神社　　社司　谷口和泉

祭神　当社宝殿　拝殿　上同両殿取合廊下

大歳神　大己貴命　少彦名命

祭祀九月二十九日　十一月初丑日(秘但)　九月二十九日御祭ニハ神酒并花柄御本丸へ差上候、

一祭米三斗三升三合

一勧請之年暦不相知、延喜式神名帳大隅五座之内ニ大穴持神社小と有之、惣て大隅五座之内、往古者宮瀬に御鎮座也、今之社頭ヨリ八丁計汀之方に洲アリ、今に其所ヲ宮洲と云、上古之宮跡也、

大己貴之来由神代之巻ニ詳ニ見ヘタリ、

一之宮大明神

祭神

底筒男命　中筒男命

表筒男命　神功皇后

忠久公并御婦人

祭祀十一月初午

一祭米三斗五升

一一之宮者上古住吉大明神ト号ス、故ニ此所ヲ住吉崎と名付、勧請之年暦不相知、然ルニ中古社頭及破壊禿倉

ニ奉崇しを、御元祖忠久公薩摩へ御入部之時、於出水米之津風波之及御難儀玉ヒシ時、住吉明神・稲荷明神奇瑞之事有無程御着船、神慮妙ニ御尊敬有、建久年中忠久公当社へ御参詣、稲荷大明神ヲ住吉之社(脱ニ)崇敬し玉ヒ、其後　氏久公御代大隅国乱起ニ依リ、為守護永和元年　忠久公ヲ当社へ崇玉ヒ、大隅之守護神一之宮大明神と神号ヲ改称し玉ヒ、文禄四年未九月　龍伯様鹿児島ヨリ御移有テ、住吉崎ヲ富隈と改称有之社頭御再興、此時件之稲荷明神を別社ニ被崇、御崇敬相増と棟札ニ詳也、

浜之市富隈御城
稲荷大明神　　祠官　中馬河内

祭神
倉稲魂神　白狐　赤狐

右慶長二年　龍伯様宝殿御建立也、

一神狐社　号稲荷神社

白狐・赤狐之二座

右於高麗御戦場示現之神狐也、寛永(考十)三年　中納言様(脱勧)御観請之、一(二)(脱之宮)同殿ニ御崇敬、社頭御造立有之、一之宮相殿之内西之間(宮カ)御鎮座也、

一於高麗陣中白狐・赤狐依有奇瑞、従　惟新様　龍伯様へ捧給御書候、

今度於新塞陣場、白狐・赤狐之奇瑞不思儀之事感入候、依之富之隈之稲荷神へ御礼御申御尤之旨有御調進、　龍伯様名護屋自御陣国分山田利安へ御書ヲ以テ被仰下、利安畏て即時富之隈稲荷大明神へ行者ヲ以御礼祭被修之由也、此御書今ニ山田新助家ニ有、

一猫神社二座

右社者寛永十三年　中納言様御建立也、　久保公此猫ヲ常ニ御寵愛、高麗御渡海之時モ被召列、於彼地　久保公御逝去之砌、件之猫奉慕御跡飢死ス、　中納言様御帰朝之後御不例之事有、依示現猫神ト崇敬成玉ヒ、於高麗戦死之神狐ト相殿ニ御安置有之、

国分金剛寺開山覚遍ヨリ稲荷大明神於高麗御示現之事申出、左之通、

一兵庫頭義弘公・又市郎久保公高麗国御出陣之砌、文禄元年二月朔日、住吉崎一之谷(考宮)大明神・稲荷大明神へ首途之御参詣ニテ御利運被遊御祈願候処、神前ニ赤狐・

白狐現給、依て　義弘公御拝礼被遊、同七日栗野ヨリ
御打立被成、出水ヨリ御船ニ召、肥前名古屋(護)へ被遊御
着船、四月十一日名護屋御出船ニテ、五月三日高麗釜
山浦へ被遊御着船候、　久保公常ニ御寵愛之猫有之被
召列候処、文禄二年、於彼地　久保公被遊御逝去候処、
御跡ヲ慕奉リ飢死仕候、且又　又八郎忠恒公従京都直
ニ高麗国へ被遊御渡海候、慶長三年十月朔日高麗泗川
ニテ御合戦之刻、白狐一現て敵陣之内ニ走入奇瑞ヲ成、
依て　義弘公　忠恒公御手ヲ合心中ニ御祈願被遊、雖
然諸士雑人ニ至テハ不知、少焉又水之手ヨリ赤狐二出
敵陣之中ニ飛入、　両公・諸士ニ至迄其形勢ヲ見テ勇
進テ悦也、赤狐一ハ於御戦場死、偏ニ稲荷大明神之御
方便、故御利運被遊候、　両公御帰朝以後、富之隈一
之宮大明神・稲荷大明神御同社ニ被遊御座度由御示現
有之、同殿ニ被御勧請候、且又猫神モ相殿ニ御勧請有
之、稲荷御示現記如件、

2

住吉由来記

一住吉崎と唱事ハ、古神功皇后新羅国ヲ攻玉フテ御帰朝
有之、則此住吉崎表筒男・中筒男・底筒男三社(祝神)ヲ住吉
大明神ト崇玉フト云々、其後応神天皇之御宇ニ皇后ヲ
崇籠四社大明神とし玉ふ也、依之此所を住吉崎と号、
又八幡崎とも云、神代西海青木原ヨリ顕出セシ在所也、
中瀬宮造破壊ス、于時御当家六代之国主　氏久公御代、
大隅乱世ニテ為守護、永和元年、　御元祖忠久公・島
津稲荷・表筒男・中筒男・底筒男・神功皇后ヲ崇籠て、
大隅守護神一之宮大明神ト建立ニテ御勧請也、其後
太守義久公文禄四年御再興と云々、仍住吉崎羽山一之
宮大明神由来記如件、

3

一島津稲荷大明神御神体絵板裏書左之通、

奉勧請島津稲荷大明神御神体二座
右稲荷大明神尊敬之事者、鎌倉　右大将頼朝公他腹之
嫡男島津太夫判官忠久公、当社住吉并島津稲荷蒙示現
建立御勧請也、然則薩隅日之三社(秘庄)一統治悪事無出来、
殊大願主源朝臣忠久公御国家安全、御武運長久、御子
孫繁昌之御願申、仍如件、

4

一住吉大明神島津稲荷御示現記、島津判官忠久公薩摩・大隅・日向三ヶ国之守護ヲ賜て、建久七年、京都　近衛様御殿ヨリ直ニ被召御船、薩摩出水米之津之沖ニ御船参タル所ニ、老人小舟ニ乗て君之御船近漕寄ル、君御覧して、如何成老人此浦人ニて候哉と被仰ケレハ、老人答曰、我ハ大隅桑原郡姫城ヶ浦ニ鎮座しタル住吉明神也、船中之守護トシテ是迄来ト云て掻消様ニ失玉ふ、君御跡を合拝礼被遊ケル、則御着船被成ケル処ニ、浜ニ童子一人現来ル、君不思議之者也と被思召、如何成童子此里人ニテ有ケルカト問玉ヒケレハ、童子答曰、我ハ摂州住吉ニテ誕生シ玉ヒシ時、産屋ニ入火ヲ灯し子ブリカワラケタル稲荷之明神也、薩隅日之悪党多ケレハ、先加世田之院ニ住居被成候〔ト〕(秘ハヽ)次第々々御手ニ付べしト悟し玉ヒて、俄ニ白狐ト現レ虚空を差て飛去玉ヒケル、君ヲ始御供之諸士皆虚空を拝し玉ヒケル、

于時建久七年霜月二十八日

御名代
畠山四郎重忠
神事奉行
本田次郎親常

依之住吉大明神稲荷御示現之記如件、

折節畠山四郎重忠・本田次郎親常御供ニテ住吉御参詣被成ケル、其時住吉社殿破壊して禿倉之神社ト成玉フ也、君国中諸人一統に相治リ、悪事出来無之様ニト御祈願被成ケリ、君重忠に仰ケルハ、此里之者ヲ召寄由来ヲ可尋とのたまへハ、承候と里之者ヲ召寄由来記悉御尋有、謹テ言上ス、住吉大明神と奉申事者、(秘古ヽ)神功皇后此所ニ居ス時、此(秘前ヽ)成銚子島ヨリ表筒男・中筒男・底筒男之三神示現し玉ヒて、三韓ヲ攻玉へト進新羅国へ渡ラセ玉ヒテ、三韓ヲ攻勝利有之御帰朝成、則此住吉崎ニ右之三神ヲ御勧請也、皇后崩御之後応神帝之御宇ニ、皇后ヲ崇籠て四所大明神ト玉フ也、戦功第一之神ト言上シケレハ、君御喜悦有テ住吉大明神・稲荷大明神我為守神也、稲荷を住吉同殿ニ可崇籠と被仰ケレハ、即赤狐・白狐之二神同殿ニ御勧請也、両君御下向ト云々、島津稲荷之由来記如件、

于時慶長四年亥三月十八日

覚遍

右示現記、任　上意書之也、

一一之宮大明神御神体彫刻改造之旨趣并棟札左之通、

5

奉再彫(絵刻)富之隈一之宮大明神御神体二座▽(絵男)神△女神、夫隅州桑
原郡国分浜之市富之隈一之宮大明神者、氏久公永和
元年大隅国為守護神、御元祖忠久公御夫婦を一之宮
大明神与住吉羽山に御勧請被遊候処、御神体朽損及大
破、依之奈気木森楠之神木を以テ男神束体一座御長六
寸之座像、女神一座御長五寸五、二座共如旧像奉造刻旧像二座部之座像(絵体)
之御神体者箱ニ奉納置、二座之御神改造之本願者、予親祠官中馬河
内守平盛澄存念ヲ相次、以テ令彫刻者也、仰願奉為
前太守上総入道源吉貴公　太守大隅守源継豊公　薩摩
守源宗信公御息災延命、御武運長久、御貴体御安全、
御子孫御繁昌、国土安穏、五穀豊饒、風時順万民快楽、
村里浜浦除災安全、氏子之男女息災延命、子孫繁栄、
神明加護、一々心中所願皆令満足故也、仍彫刻改造之
旨趣如件、

浜村弁指役　古江周左衛門
住吉名庄屋役　藤原実行
淵脇権兵衛

祠官　藤原国次
中馬河内守
別当　平盛安
重蓮寺

（以下「神社調　府内及各郷　下」へ続ク）

神社調　鹿児島部　一

（表紙）

神社調　鹿児島部　一

山州宇治黄檗山末寺
禅宗黄檗派下木庵派
着座門首

千眼寺

万徳山

文化二年丑九月、依願大幻再興被仰付候、

一重豪公御寿像文化三寅四月七日御安置被遊候、

一金子三百両

右御隠居料之内より　重豪公御寄附、

一同五拾両

右為修甫料、右同断御寄附、

一寿国寺末寺ニ而候処、黄檗山直末文化二乙丑十一月被仰付候、

一千条山を万徳山と山号依願、文化二（三寅カ）丑二月被仰付候、

一文化六巳十一月、寺家　思召ヲ以御物御修甫所被仰付候、

一高三百石

右文化七午正月高百五拾石被召付置候処及不足、又々文政八酉十月百五拾石、合三百石被召付候、

一文化三寅三月、寺格　御目見被仰付置候処、文化四卯十一月、於虎之間寺社奉行申渡之寺格被仰付、又々文化十二亥八月、　重豪公思召を以門首被仰付候、

一仏殿　御物御修甫

右観音堂ニ而候処、文政十三寅年、開修甫ニ而仏殿御造立被仰付候、

一大信（重豪）院様御牌

右御在世中　思召を以被召建置候処、　御逝去後住持依願、天保四巳年御法名并年月御書入相成、御点眼御供養寺役ニ被仰付候、尤御年回之節者於福昌寺御物御法事御執行有之候付、千眼寺ニ而者寺役一日

御法事執行被仰付候、然処御十七回忌之節より二日
執行ニ依願被仰付候、
一大信院様御在世中、厚　御趣意被為在再興被仰付、殊
御影御安置茂有之候付、旁別段之以　思召、寺格着座
門首被仰付、席順一乗院頭ニ被仰付候旨、天保八酉年
被仰渡候、
一寺格着座門首被仰付候付、年頭并入院之御礼等之節進
上物、且下乗所其外都而一乗院同様被仰付候旨、天保
八酉年被仰渡候、
右要用集しらへ、

1
一大御隠居様兼而槩門江就御帰依　思召被為在、万々歳
之後者江戸白金瑞聖寺江可被為　入、及其期候者　御
遺髪塔之儀者、千眼寺江可被(旧相)召建との御内定候間、兼
而其旨申聞置候様被　仰付候条可奉承知候、尤到其節、
格・禄等之儀者追而可被及　御沙汰候、
右之通　御沙汰ニ候間、此旨申達置候、以上、
文化十年子(「陶云、文化十年者癸酉ノ歳也、」)　伊集院隼衛(兼当)
十月

千眼寺
（本文書ハ「旧記雑録追録七」一三〇九号文書ト同一文書ナルベシ）
一斉興公御寿像
但弘化二年巳九月六日御安置
右者千眼寺
大信院様御影　御相殿江被遊御安置候付、以来護国
殿与相唱候様被仰付候旨、弘化二年巳九月安房殿よ
り被仰渡候、
一御高弐百石　千眼寺
右者　三位(重豪)様御寿像等茂御安置ニ付而者、寺務旁難
渋付、追々寺領高三百石被召付、右を以取続居候処、
寺家廻等手広御再建、殊
太守(斉興)様御寿像等御安置ニ付而者、猶更年中之御祭料
等難渋之筈候付、右之通被相重、都合五百石被召付
候条、所務之儀者、是迄被召付置候御高仕向同様取
計候様被仰付候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡
候、

2

一大信(重豪)院様御寿像
一金剛(斉興)定院様御肖像

右者是迄千眼寺江被遊御安置候得共、思召之訳被為在、花尾護国権現社御神殿江被遊御安置候、左候而、御遷座之儀者、明後廿六日被仰付候旨被　仰出候条云々、

慶応二年丙寅十二月　　右衛門(桂久武)

（本文書ハ「旧記雑録追録八」五七一号文書ト同一文書ナルベシ）

千眼寺門中
豊国山　　西田寺

右弥勒院末寺ニ而候処、文化四年卯十一月思召を以改宗被仰付、千眼寺末寺ニ被仰付候、

右同
天寿山　　延命院

右大乗院末寺ニ而候処、文化四年卯十一月西田寺同断末寺被仰付候、左候而、同九年申四月　御目見地被仰付候、

千眼寺門中
了性寺

右破懐(ママ)寺ニ而候処、文化十三年子延命院同様　御目見地被仰付候、

3

了性寺来由

当寺鎮守天神宮ハ、往昔　近衛様当国江御下向之時、鹿児島名伊敷之内江御勧請候処ニ、其後当地へ被奉移之由申伝候、左候而、此御宮地竿迦之故、始(持常光)院と申候山伏御宮之側ニ罷居候而、香花等相勤候得共、天神宮修甫難成候付、西田町江罷移候故、二三ヶ年明地ニ而候付、文秀房良盛御宮地江罷居度之由、西田村之庄屋へ申入候処ニ、庄屋より御普請方江被申出候、文秀房よりも御普請奉行藤崎六郎右衛門・村田与左衛門へ申入候処ニ被申候者、天神宮江香花を捧申人無之候処ニ、文秀被罷移候儀仕合之由承候付、被致居住候処ニ、御宮地別而差廻り候故、漸々ニ其辺相開候而、天神宮并拝殿自分ニ再興仕候、左候而、寺院造立之儀者島津図書久通老江申上候而、客殿等造営仕候、成就之始ニ図書殿御出被成候時、漢南王之筆大掛字御持せ被下候、其後万治二年己亥六月始御支配所江申出候所ニ、同廿六日寺地御免許之由被仰渡、則寺屋敷帳被下候間、其写左ニ記之、

鹿児島西田村屋敷帳

一屋敷（八間十四間）三畦弐拾四歩　天神宮守

大豆壱斗三升三合

高ニシテ壱斗三升八合五勺四才

右寺屋敷此度御分国中引并之検地ニ付雖被相改候、前代より天神為宮地竿不入切明之由依被申出候、具ニ相達令免許畢、向後寺役・（旧寺）番掃除等無緩疎堅固可相勤者也、

御支配所印

万治二年己亥六月廿六日

平田藤右衛門印

相良主税印

喜入休（久則）右衛門印

右之通寺地蒙御免許候付、文秀房寺院致開基候而、五仏堂并五尊之木像建立仕候而、大乗院哲世真浄法印并門中衆申請候而、開眼供養被申候付、大乗院直末ニ被召成、（旧古）寺跡同前之御免地ニ被仰付候而後　中将光久公御参詣被遊候時被遊　御意候ハ、御城下之通道口ニハ成合候寺院と被　思召上候由、其後　綱久公　綱貴公吉貴公御参詣被遊候通、先師之書置ニ見得申候、　綱久公当寺天神へ御参詣之時御歌被遊候而、住持文秀房へ被下候由申伝候、其御歌、

千代やふる神のしめなわくりかへし

ふかきめくみの絶ぬ御代かな

右之御本書ハ当分不相見得候、何様相成候哉、

（本文書ハ「旧記雑録追録二」八四八号文書ト同一文書ナルベシ）

一本尊（寺古）五仏如来

但座像台座共ニ五尺余之箔仏五体、京都大仏師左近彫刻也、

右　開基文秀房良盛建立

一開基良盛

一中興盛辰

一高九拾弐石五斗九升八合九才

右者威光院隠居江雲庵盛辰自分之買地右員数有之候処、元禄十一年寅十月九日御借入高ニ被召成候を、宝永四年亥二月廿六日、盛辰より右高直ニ為当寺相続被致寄附置候処、先年御借入高御法度之砌、右高代銀拾三貫

八百八拾九匁七分壱り三〻(ママ)五、新銀ニシテ三貫四百七
拾弐匁四分弐り八毛、口銭ニシテ弐百七拾壱貫弐百八
拾壱文被返下候付、直ニ祠堂銀ニ相成候、
一銀子壱貫目
　右盛辰為祠堂物被付置候、
一当寺末寺地蔵院地蔵堂并小庵有之、本来当国之律僧澄
善房と申人、上方より罷下召置候、其後文秀房隠居仕、
死去已後其弟子宰相と申僧住職仕候得共、無縁所ニ而
追付廃寺ニ可罷成処、本近江僧之玄黙御当地江差越罷
在、末寺地蔵院黄檗寺ニ相改、右玄黙被差置、寺号(寺改)院
号之儀者玄黙存寄可有之候間、了性寺末寺帳消除、已
後紛敷無之様可記置旨、享保十三年申十月九日、寺社
奉行所より大乗院江被仰渡候由ニ見得候、
　右寛政五丑四月書出シ、

日吉山　　西田寺　　浄妙院

一当寺者飯野長善寺末妙泉庵廃寺号を以、延享二年丑八
月　吉貴公思召を以、中興開山弥勒院第一世憲英

5 憲英寄附高

一高弐拾六石八斗壱升壱合五勺六才
　志布志月野村之内
　末吉諏方方村之内
外ニ
　高四石九斗三升四合三勺七才
　　寺地成返高之故相除、
(旧高)右者雖為前住浄妙院憲英法印自分新仕明之地、依願
被寄附于其寺候条、到後年無違失可令取納者也、仍
而如件、

(島津)矢柄　　久富判
寛延元年十二月廿五日
(樺山)主計　　久初判
(島津)左衛門　　久甫判

西田寺

（本文書ハ「旧記雑録追録五」三六五号文書ト同一文書ナルベシ）

6

寺地目録

鹿児島　　西田村

寺地（十八間廿七間半）弐反弐畦（マヽ）拾五歩（マヽ）　西田寺

大豆三表壱斗五升九合

高ニシテ壱石弐斗五升九合三勺七才

右寺地諸給地高百姓居屋敷ニ而候処ニ、弥勒院隠居浄妙院より西田寺造立之願申上、飯野長善寺末寺当分廃寺之妙泉庵寺地致所望、返地差上度旨依願ニ御免ニ而、延享四年卯五月郡奉行浅江源五左衛門竿相究差出候帳面之通、為寺地被下候旨、同九月廿一日御家老衆任御引付令支配候間、向後（住持）寺法式勤行無緩疎可相勤者也、

延享四年丁卯十月廿三日　　小林中（政英）太兵衛印

川田与（国宣）右衛門印

（本文書ハ「旧記雑録追録五」一一一号文書ト同一文書ナルベシ）

7

隅州弥勒院隠居浄妙院儀、薩州鹿児島城下西田と申所ニ而、新に一寺致造立、八月九日入仏供養相済候由、其上　大隅守殿御実母位牌所ニ被御申付、寺領茂相応ニ寄附有之、依之寺院相応ニ相続仕、偏ニ御威光故、難有奉存候由、絵図差添、其元辺江申来候趣、委細遂言上候処ニ、浄妙院儀、宗旨致荷担、毎度寺院新建立仕候段奇特ニ　思召、御感不斜候、此段其元より御申達可被成候、以上、

十月廿五日　　信解院

龍王院権僧正　　覚王院

8

覚

一　西田寺

右者西田村山王社両度祭之節ハ、参銭社司中馬和泉受用、右之外年中参銭之儀者別当西田寺可致受用候、

一山王社鑰

右者此節別当寺相立候付而者、西田寺格護ニ申付候、尤社司入用之節者可致問合候、

右之通、至後年相心得候様ニ可申渡候、以上、

丑九月　　寺社奉行印

右寛政五丑四月書出シ、

千眼寺門中
蘭桂院

右蘭桂庵ニ而候処、文政十二戌(丑)年、依願蘭桂院与改号被仰付候、

右同
東岳院

右天保三辰年、依願寺地ニ御免被仰付候、

右要用集しらへ、

智福院

右妙谷寺末寺随翁院を改号改宗、寺格是迄之通ニ而、千眼寺末寺被仰付候旨、弘化四年未十一月笑左衛門殿より被仰渡候、

千眼寺

『水上』
一阿弥陀堂　格護

但南泉院格護ニ而候処、天保十亥年千眼寺格護被仰付候、左候而、寺社方修甫所ニ而候、

山州宇治黄檗山
万福寺末寺禅宗
黄檗派下南源派
着座門首
元持山　寿国寺

享保十四酉五月、　綱貴公御領国江黄檗派御取建之御志を被為続、　吉貴公雖為御隠居、為　御名代大乗院末寺了性寺末院廃寺地蔵院を御再興ニ而、宇治黄檗山万福寺大光普照国師隠元和尚を為勧請開山、二代南源、三代鉄梅、四代千指迄為勧請住、五代住持玄黙山号寺号元持山寿国寺与願申出、同八月御免寺格門首被仰付候処、文化十二亥八月　重豪公思召を以着座門首被仰付候、

一享保十四酉五月黄檗山十二世唐僧(愛杲堂)、、和尚代、直末ニ相成、

一本尊釈迦如来、享保十六亥三月従　継豊公御寄附、

一大玄(綱貴)院様御牌、享保十四酉十月住持より御安置仕候様被仰渡候、

一信証院殿寿国綱宗元持大禅尼御肖像・御牌、光厳堂ニ御安置、

宝暦六丙子正月晦日御卒去、御石塔有之、　綱貴公後御夫人、

一御祠堂銀拾五貫目

一信解院殿方広浄玄大禅尼御肖像・御牌、双耀堂ニ御安

置、

明和八年卯六月八日御卒去、御石塔有之、　綱貴公御女、予州松山城主松平飛騨守定英夫人、後離別、

一御仏餉料銀五枚、米三石宛、年々御物方より被相渡、

一顕徳院殿順誉和光慈観大居士

宝暦十三癸未三月十九日御卒去、信解院様御子、予州松山城主松平隠岐守定喬、御牌双耀堂ニ信解院様御存生之内御安置、

一祠堂料銭百貫文

一顕徳院様御法事料銀壱貫五百目

右弐行、信解院様より御寄附、

一蓮亭院殿香顔玉容大姉

斉宣公後御夫人、丹羽加賀守長貴女、文化十二乙亥六月廿三日御逝去、御廟所江戸瑞聖寺、御牌所寿国寺、

一真米三石

一銀三百弐拾弐匁五分　但古銀五枚分、

右弐行、蓮亭院様御仏餉料として文化十三子年被召付、年々物奉行所より相渡候、

一高四百八拾石

右要用集しらへ、

山州宇治黄檗山万福寺末寺禅宗黄檗派之内南源派門首九人御賄料

寿国寺

元持山

高四百石余

住職於敷舞台御家老申渡、

一開山隠元国師勧請

右大玄(綱貴)院様思召有之、従　信証院様総州(吉貴)様江被仰進、総州様御隠居以後　御名代ニ而、享保年間御取立被遊候段被仰渡候、

一信証院様御寿像

一信解院様御寿像

右弐行共、和田源太兵衛彫刻、

一古銀拾貫目

右新田高八拾九石被召付迄之間、七部利銀を以、御物方より年々被成下候、

一銀壱貫九百弐匁余

右之通、年々為御日牌料寺社方より被成下候、

一銀五枚

一米三石
　右信解院様為御仏餉料、物奉行所より年々被相渡候、
一銀壱貫目
　右顕徳院様為御仏餉料、寺社方より利足年々被相渡候、

先照山　寿国寺末　龍吟寺
　開山南源勧請、寛延年中建立、
一銀五貫目　祠堂銀
方広山　玉蔵院
　開山鉄梅勧請、同断建立、
　報恩院
開山玄黙勧請、明和七寅年建立、
　長寿院
開山太潟勧請、右同年建立、

大磯山　黄檗宗宇治万福寺末寿国寺触下　月船寺
高弐拾石余
　住職寺社方取次詰所於縁頬申渡、
　開山愚門
一大玄院様御代御取建、年間不詳、
一享保七年黄檗山直末寺ニ相成候、
一同十五年　御目見寺格被仰付候、
一高五拾石
　右買地御免許有之、
一大玄院様御牌、享保十八年御安置御免御座候、
一文銀壱貫七百三十八匁四分九り
　右寺社方へ差上置、寺家修甫且続料として、年々利足被成下候、

要用集
一元禄十二卯十二月造立、
一寺領高弐拾石
　右開山買地御免被仰付、右之通買入、表方御代官所江付高被仰付置候云々、

本長山　法花宗京都本能寺摂州尼ヶ崎本興寺末寺門首九人賄料　正建寺

高三拾石、所務年々御代官所より相渡候、住職者於
敷舞台御家老申渡、

一開山者蓮信院日尚大徳、元和二年辰正月七日死去、要用集同意
　但慶長年中開基、

曹源院様御祖母、種子島左近室、即華鮮御母堂也、
両足院殿妙覚大姉牌

曹源院様御母堂、伊勢大隅守室、種子島左近室とも、
即綱久公御母堂之御母堂也、
華鮮院殿妙尊大姉牌

右二基、明暦三年酉十一月当寺へ安置、為仏餉料
曹源院様思召を以、御買入高三拾石御寄附候処、
浮免高ニ而其後売替相成、帖佐船津村新屋敷高頭
弐拾九石弐斗余、当分御代官所御預りニ而候、

宝永五年戊子九月廿五日御逝去、

一心空院殿寥雲貞清尼大姉御牌
銀拾五枚

右従　吉貴公為御祠堂、享保二年酉十二月御寄附、
銀五枚

右従　信証院様為御月拝料、享保七年寅二月十五日
御寄附、左候而、御掛物ニ而候処、延享三年寅四月
廿五日、　信証院様・於栄様より当分之御牌御安置
為御祠堂銀、古銀三枚御寄附也、

銀五貫目
右従於須磨様為御祠堂銀、享保八年卯七月御寄附、『本行月桂院様御祠堂銀、二重立歟、猶糺へし』

東覚院殿心月光安大法尼と寛政元年酉二月御改号有之候、
一月桂院様御牌

右誰様より御安置之訳不知、但銀五貫目為御祠堂従
継豊公御寄附、島津玄蕃殿方へ借入相成、利銀年々
相渡候、

一曹源院様御牌

右何方様御安置之訳不知、

一東覚院殿ハ上杉弾正大弼綱憲御女、実ハ吉良上野介義
央女ニ而、　綱貴公二度目之御婦人ニ而候処、延宝八
申年被成御離別、宝永五年子九月廿五日御卒去、御離
別ニ而候得共、御嫡母之筋与被思召訳有之、享保二年
酉十二月、為御菩提料従　吉貴公祠堂銀被召付置候云

々、

正建寺世代

一開山蓮信院日尚
元和二丙辰正月七日死

一二世善住院日栄
寛永六己寅（巳）六月廿二日死

一三世恵生院日就
寛永十癸酉正月廿日死

一四世清浄院日証
正保三丙戌八月二日死

一五世宝昌院日種
承応元壬辰五月十五日死

一六世恵信院日達
寛文十二壬子十二月廿四日死

一七世恵光院日長「本のまゝト有」
明暦三丁酉五月廿二日死

一八世草淵院日泉
寛文四甲辰十一月廿四日死

一九世高蓮院日昇
延宝二甲寅四月廿六日死

一十世本是院日正
貞享四丁卯八月十五日死

一十一世啓運院日遵
延宝八庚申五月十日死

一十二世要伝院日這「本のまゝト有」
宝永元甲申八月廿三日死

一十三世高運院日意
享保十三戊申十二月九日死
右元禄三午五月十四日入院ニ而、宝永五子十月十八日隠居、

一十四世実相院日珠
正徳六丙申閏二月十五日死
右宝永七寅六月十日種子島浄光寺より入院、

一十五世本勝院日詠
享保十六辛亥正月六日死
右正徳二辰七月三日種子島浄光寺より入院、
但隠居之節、妙顕寺御取立付、妙顕寺住職被仰付

候、

一十六世此土院日時

享保八卯六月十三日入院、

元文元丙辰十二月五日隠居、

一十七世恵心院日励

元文元辰十二月五日国分遠寿寺より入院、

法花宗京都本能寺
摂州尼ヶ崎本興寺
末寺正建寺触下

妙顕寺

一乗山

厥初顕娃郡在山川郷号妙玄寺、久属寥落、寺名纔相伝、然　太守継豊公之御母堂依有御宿願、今幸緝寺名之有基跡、於鹿児(守島之)〔陽三〕地欲営於我宗乗之蘭君、是故命官令、享保八癸卯九月十四日、始用公翰之削墨、励土木之功、経営至三月之緩悉備云々、改玄以顕云々、

一正建寺本勝院事、住持被差免妙顕寺再興、直住職被仰付候儀、享保八年卯六月十三日被仰渡候事、

一銀五貫目

右御取建ニ付従　太守様為続料御寄附、享保八年卯九月、

一祠堂銀五貫目

右御取建付従於須磨様御寄附有之、同年七月、

一大山野壱反

右妙顕寺新地ニ而未墓地無之候間、坂元名之内松ヶ平北之方、願之通墓地ニ被成御免候、最前ハ壱反四畦与申出候得共、竿相究候処壱反有之候段、享保九年辰十二月被仰渡候事、

一御高百石

右者　月桂院様為御仏餉料被召付、代官方江致取納、年々所務相渡筈候間、後年住替之節、右之段可次渡旨、延享元年子七月八日寺社奉行山岡斎殿より被仰渡候事、

一住職者寺社奉行所証文寺ニ而候得共、向後於寺社奉行所寺社奉行申渡、入院御礼中紙進上ニ而　御目見被仰付候旨、延享四卯九月朔日被仰渡候事、

真言宗当山派
山伏薩(陽)袈裟頭
門首(愛隅日)

般若院

雲海山　　宝泉坊

文化二年丑七月、三宝院御門跡より御山内学侶席中

堂院永兼帯寺格昇進被仰付候、
右要用集しらへ、

一弘化三午四月、醍醐御殿より院家跡中性院永兼帯蒙御推(ママ)許候、

一着座門首
右者三宝院御門跡院家中性院兼帯蒙　御推挙、大乗院御門跡より三輪山大門坊住職正先達被仰付、殊ニ重キ御祈祷をも被仰付候処、抽丹誠或末派興隆寺務心掛宜段被　聞召、旁別段厚以　思召、寺格右之通被仰付、席順飯隈山蓮光院次被　仰付候旨、弘化四未正月笑左衛門殿より被仰渡候、
但南泉院・大乗院・蓮光院・一乗院其外迚も、僧正官成之者ハ順席可為先官旨茂被仰渡候、

一家格代々寄合并　般若院
右之通被仰付、家筋連名之次第、井上駿河守次被仰付候旨、弘化四未正月笑左衛門殿より被仰渡候、

一　般若院
右者寺格着座門首被仰付候付、入院之御礼等之節、進上物且下乗所、其外何篇蓮光院同様被仰付候旨、弘化四未正月笑左衛門殿より被仰渡候、

一嘉永元申十一月、醍醐御殿より三輪山先達兼帯被仰付置候得共、他山之掛合多分之事故、三輪山先達被召放候、

一同年同月醍醐御殿より中性院ニ而、正大先達職蒙　御推挙候、

一同二年酉二月般若院権僧正蒙　勅許候、

一同年同月万里小路中納言様御猶子被仰付候、

一御高三百石
右者深　思召之訳被為　在、寺格等昇進被仰付置、此節寺家御取建、御軍神勧請被仰付、追々重御祈祷茂可被仰付事候間、小禄ニ而者旁難行届筈候付、別段之以　思召、右之通御高被召付、直取納被仰付候条、御祈祷者勿論、平日勤行抽丹誠相勤、一派興隆之取計可致旨被仰付候旨、嘉永元申八月十五日笑左衛門殿より被仰渡候、

般若院

右者寺格着座門首被仰付候付、入院之御礼等之節、進上物且下乗所、其外何篇蓮光院同様被仰付候、『本文於京都海老原宗之丞取次を以被仰渡候事、』

右御格之通可申渡候、

未正月廿八日　（調所広郷）笑左衛門

10

着座門首　般若院

『本文京都ニ而笑左衛門殿より被仰渡候』

右者　三宝院御門跡院家席中性院兼帯蒙　御推挙、且　大乗院御門跡より三輪山大門坊住職正先達被仰付、殊重キ御祈祷をも被仰付候処、抽丹誠或末派興隆寺務心掛宜段被　聞召上、旁別段厚以　思召、寺格右之通被　仰付、席順飯隈山蓮光院次被　仰付候、

但南泉院・大乗院・蓮光院・一乗院其外迚も、僧正官成之者者順席可為先官候、

未正月廿八日　笑左衛門

11

家格代々寄合并　般若院

『本文同断』

右之通被　仰付、家筋連名之次第、井上駿河守次被仰付候、

未正月廿八日　笑左衛門

12

一一束一本

『本文於伏見被仰付候事、左候而、江戸少将様同断進上物仕、御礼被仰付候由也』

着座門首并寺格　般若院

蓮光院次被仰付候　一右同

御礼

中性院兼帯之御礼　一右同

右同人

三輪山大門坊住職之御礼　一右同

右同人

正先達職成之御礼

右同人

右之通御礼願被申出、依之明後四日、右之通進上物

御前江相備、銘々　御目見直ニ着座被　仰付候、
一御太刀　　寄合并被仰付候御礼
　　面高連長院
右同断　御目見被　仰付候、
右申渡可承向江も可申渡候、
　二月二日　　笑左衛門

13

『一代御小姓与
　　出水郷士
　　愛甲一楽院
右者般若院へ混(寺被)与付添修拾(ママ)道出精、且正先達職成等之儀深切ニ骨折、其上同派興隆之儀心掛、旁御用立奇特之至付、別段之御取訳(寺次)を以、右之通被　仰付候、
　右御格之通可申渡候、
　未正月廿八日　　笑左衛門

14

右於京都海老原宗之丞取次ニ而被仰付候事、』
般若院

右者従　大乗院様御方、旧臘十七日三輪山大門坊住職被仰付、同廿三日正先達職成被　仰付候段、別紙之通蒙　御許容候付、別紙名代江可被相渡旨、寺社奉行へ可申渡候、
弘化四未三月四日　　将曹(島津久徳)

15

三輪山
　　大門坊江
先達職大智院江被　仰出置候処、病身ニ而難相勤旨を以及辞職、無拠御聞届被成候、跡職之儀者、多楽院・吉祥院・中(ママ)院等江可被仰付候処、或者病身、或者若年等ニ有之候事故、其院ハ此頃交衆被致末席之事ニ候得共、格別之　思召を以、先達職其院へ被仰付候、仍而先前より被仰渡置候儀共従先職承り、規則通可被相守候、尤十八年限ニ候間、左様可被相心得候事、
　右被　仰渡、

16

　口上覚
般若院事、此節着座門首被仰付、席順飯隈山蓮光院次、

且下乗所、其外進上物等何篇蓮光院同様被仰付、家格代々寄合并被仰付、難有次第奉存候、依之左之通奉伺候、

一出世平僧無差別着座門首可被仰付哉、

一謁席・扣所何様可被仰付哉、

一何そ付登　城等之節、下乗所御門番足軽下座、且上り口何様可被仰付哉、

一年頭其外何そ付、御対面所又者於御書院御礼申上候節、御礼所着座席何様可被仰付哉、

一右同断ニ付登　城之節、　御城内長柄傘何様可被仰付哉、

一年頭進上物之儀、是迄中紙三束進上仕来候得共、以来何様可被仰付哉、

一御祝儀等之節、是迄寺社奉行於宅申上来候得共、以来登　城ニ而御祝儀可申上哉、

一歳暮之御祝儀、暑寒伺　御機嫌不申上候得共、以来外着座門首同様伺　御機嫌等可申上哉、

右之通奉伺候間、何分被仰渡被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、已上、

般若院々代

慶連院

寺社

御奉行所

右之通申出趣承届候、般若院儀、今般着座門首席順飯隈山蓮光院次、且下乗所、其外進上物等、何篇蓮光院同様被仰付、家格代々寄合并被仰付、伺申出趣左ニ申出候、

一出世平僧無差別着座門首可被仰付哉之旨申出候、蓮光院儀も出世僧無差別着座門首被仰付候付、般若院儀も同様被仰付方ニも可有御座哉、

一謁席・扣所之儀、蓮光院同様被仰付度候、

一何そニ付登　城等之節、蓮光院儀、下乗所御楼門橋涯御門番足軽半下座、上り口虎之間高欄ニ而候間、右同様被仰付度候、

一年頭其外何そニ付、御対面所又者於御書院御礼申上候節者、御礼所着座席蓮光院同様被仰付度候、

一右同断付登　城之節、　御城内長柄相用候儀、蓮光院

18

同様被仰付度候、
一年頭進上物之儀、中紙三束致進上来候得共、一束一本進上被仰付方ニも可有御座哉、
一御祝儀事等之節ハ、是迄寺社奉行於宅申上来候得共、外着座門首同様致登　城、御祝儀申上候様被仰付度候、
一歳暮之御祝儀、暑寒伺　御機嫌、是迄不申上候得共、是又同様致登　城申上候様被仰付度候、尤歳暮付南泉院儀者進上物無之、大乗院儀者目籠五ッ・御茶七袋・代銀五匁進上有之候付、何分御吟味次第被仰付度候、
右之通取しらへ申出候間、何分御吟味次第被仰渡度此段申出候、以上、

未四月十一日　　寺社奉行

般若院

右者着座門首被仰付、何篇飯隈山蓮光院同様被仰付候付、謁席其外之儀院代より得差図候付、左之通被仰付候、
一出世平僧之無差別着座門首被仰付候、
一松之間謁之儀、僧正席同様ニ而、杉之間江被相扣候様被仰付候、
一何そニ付登　城之節、下乗所御楼門橋涯御門不及開扉、御門番足軽半下座、虎之間高欄より被罷上候様被仰付候、
一年頭其外何そ付、　御対面所又ハ於御書院御礼之節、進上物御上段塗敷居上一畳目相備、同下一畳目頭ニ而御礼、御上段御客居之方塗敷居上一畳目中程江着座、於　御書院御礼等之節者、都而　御対面所ニ準候様被仰付候、
一雨天之節者、　御城内長柄傘被相用候様被仰付候、
一年頭進上物之儀、御札守・巻数一束一本進上被仰付候、
一何そニ付御祝儀事等之節者、以来致登　城被申上候様被仰付候、
一暑寒伺　御機嫌、歳暮御祝儀被申上候儀も外着座門首同様被仰付候、左候而、歳暮ニ付而者御茶五袋・代銀三匁進上ニ而、於杉之間御用人江相付、御祝儀被申上候様被仰付候、
右之通被仰付候条可被申渡旨寺社奉行へ申渡、可承向江も可申渡候、

未八月廿八日　（島津久浮）石見

19

一御高三百石

般若院

右者深　思召之訳被為　在、寺格等昇進被仰付置、此節寺家御取建、御軍神勧請被仰付、追々重御祈祷も可被仰付事候間、小禄ニ而者旁難行届筈候付、別段之以　思召、右之通御高被召付置、直取納被仰付候条、御祈祷者勿論、平日勤行抽丹誠相勤、一派興隆之取計可致旨被仰付候、此旨向々江云々、

八月十五日　（調所広郷）笑左衛門

20

一尊威御軍神

一白鳩大権現

一金毘羅大権現

右御社江御相殿

一愛宕勝軍地蔵

右本堂江相殿

右者異賊為降伏以　思召、右之通般若院江勧請被仰付候条、御祈祷ハ勿論、日々勤行無怠慢相勤候様可申渡旨云々、

嘉永元申八月　笑左衛門

21

私事、去月十四日権僧正蒙　勅許、同廿八日御礼参内被　仰出、万事無滞相済申候、

一去月廿二日、於大坂今般権僧正蒙　勅許候付、護持（寺僧）被仰付候条、抽丹精、　御惣方様ニ茂御長久之祈念可有之、左候而、奥并大奥江茂御用之節被差通、何そニ付御祝儀伺　御機嫌等、時宜次第ニハ御内証よりも申上候様被仰付候、且又右同日吉利仲殿御取次を以、今般護持僧被仰付候付、別段之□を以、奥御看経方江茂被□候間、月々両三度ツヽ罷出□看経方ハ勿論、御□江茂致見締候□紙を以、御内々御祈祷等被仰□節ハ寺役被仰付、御守札等奥江直ニ差上候様被仰付、重畳難有奉存候、

一去月二日、万里小路家猶子成被仰付、初参仕候処、都合能相済申候、

一是迄三輪山正大先達兼帯被仰付置候処、三宝院御門主

22

様深　思召を以、右兼帯被召放、更中性院ニ而正大先達御取立被仰付候旨、蒙　御推許（守拳）候付、右御礼奉願候処、此節御滞坂中去月廿一日、右御礼　無滞相済、難有奉存候、、、、

般若院

三月六日　　俊良判

内蔵様

御取次衆

雲海山　龍岳寺　宝泉坊　真言宗当山派三宝院御門跡御末下門首　般若院

御切米三拾石

当寺之儀、前々ハ宝泉坊と唱為申由、何比より般若院と申候哉不相知、中原家より当寺住職二代、承応四年乙未三月七日役行者堂御再興棟札ニ、入仏導師先達法印良舜院安慶、本願権大僧都法印般若院慶盛と相見得候、是より般若院と唱為申ニ而可有之哉、右両人共中原七之丞先祖ニ而候、

一当寺御建立之訳年間等不相知、是枝仲存院先祖二代惣職之由御座候得共、当寺住職之儀者不相知候、

龍伯公御代、中原家般若院慶隆与申者、日置郷之中原坊より鹿府之宝泉坊江被召移之由御座候、右ニも相記候通、役行者堂棟札ニ御再興与有之候得者、其以前より年久当寺相立有之候を御再興有之候哉、又者慥有之候を御再興有之候哉、何分ニも相知不申候、当寺古由緒相知不申候、子細者中原家住職之内、門中之入組有之、二三ヶ年不相片付内ハ、中原家当寺へ乍罷在、御祈祷方寺役之御用等者、拙僧曽祖父連長院俊心江懸而相勤候様被仰付候、左候而、中原家退院、直ニ俊心江後住被仰付候、依之中原家へ住職之内帳留等之儀相尋申候得共、帳留無之由承候旨申伝候、其上俊心代より以来諸書付も、先年当寺類焼ニ付致焼失候故、久敷儀ハ相知不申候、

一当寺之儀者三宝院宮様御直末寺ニ而候、毎年入峰之節御目見被仰付、於別御座御吸物・酒等被成下、余国御末寺より御会釈宜方ニ御座候、　宮様御入峰之節者、日本惣山伏跡押被仰付先例ニ御座候、先年御入峰之節、尾州清寿院惣押之願頻ニ有之候得共、願之通ニ者不被

仰付、清寿院者　宮様御跡押被仰付、般若院ニ者先例之通惣押被仰付候、於峰中座配も正先達差次般若院ニ而御座候、

一役行者一体（前鬼後鬼）作不相知

右者承応二年巳、和州三輪山大先達盛雅官宦定盛より　光久公（江）被致進上、当寺住職中原家慶盛代ニ御安置ニ而候、

一同　一体（前鬼後鬼）作不相知

右中原家より俊心（江）次渡之本尊ニ而候、

一理源大師一体　作不相知

右中原家より俊心（江）次渡之本尊ニ而候、

一不動明王一体　（金伽羅制多賀迦）

右作極而不相知候得共、伝教大師作ニ而候由申伝候、国分金剛寺へ安置有之候を、寛文九年連長院俊心へ拝領被仰付候、当時（守寺）御寄附ニ而者無之候得共、本尊同前安置仕置候、

一役行者一体（前鬼後鬼）　鳥居如見作

右自分所持本尊ニ而、同様安置仕候、

一毎年致入峰、御国家安全、御武運長久御祈祷護摩執行仕、御礼差上候、勿論右護摩之儀者格別成訳ニ而、無退転御執行有之、於峰中之次第も　禁中様　公方様次ニ　御当家護摩執行有之先格ニ而、御三家方御祈祷ニ而も　御当家相済候跡ニ有之旧式ニ御座候、　御当家護摩相済、正先達中般若院床へ為見舞有之事、是又先例御座候、

一於峰中宿を床と唱る事候、正先達銘々床有之、諸国之同行、右之床（江）罷在事ニ御座候故、正先達外床と申者無之候得共、三輪山より般若院床と申候而、一軒格別ニ作立有之候間、般若院手廻人数迄右床へ罷在、同行之儀者、三輪山本床へ皆々罷在事ニ御座候、右三輪山本床頭者、佐土原之安宮寺并般若院同行之内より官僧壱人床頭申付相勤先例御座候、都之城主取山伏毎年入峰ニ御座候、右主取より相勤来申候、自分床有之候者、般若院外余国ニ今壱ヶ寺有之候、右三輪山床之儀者、惟新公　忠恒公御合力ニ而造立有之候、其以後修甫料段々被差遣候、

一雲海山大文字之額一面

光久公御筆、元禄三年庚午五月十一日、塩官清左衛門

23

御使ニ而、連長院俊心代御寄附、

一行者堂一宇、風形作り、承応三年　光久公御再興、

一御米三拾石

　但拙僧祖父真連院俊賢代所寺難続、元禄十丑年住職御断申上候処、翌寅年続料として右之通被成下、至拙僧引続被成下置候、

一綱貴公宝永元年二月廿八日、当寺へ可被遊御光儀旨被仰出置候得共、其年之儀、御発駕前ニ而不被遊　御入、翌年可被遊　御光儀与被　仰出候得共、於江戸　御逝去故、無其儀候、

一吉貴公御二男忠五郎様御病気ニ而、宝永五年子八月十七日、佐多豊前久達を以、当寺住職真連院俊賢へ山伏弟子ニ仕候様ニと被仰出候、依之同月廿二日、俊賢より御袈裟并礼守等進上仕候、

般若院

宝暦十三未四月　　真連院

般若院格護堂社

一蛭子社

但摂州西之宮より御下シ御建立之由申伝候、貞享五年辰九月　綱貴公御再興被遊候、其以前者委細不相知候得共、中原家より般若院住職退院之節、寛文十一亥年二月廿七日、蛭子社鑰可次渡旨承候帳留相見得候得者、其以前より為有之と見得申候、

真米壱斗七升五合

　但九月十九日祭米として物奉行所より相渡候、

東福ヶ城

一飯綱社

龍伯公御建立ニ而、伊集院蔵人江被預置、い十院長右衛門・同長左衛門迄格護仕候処御断申上、貞享三(寅)子年二月寺社所より格護可致由　上意ニ而候間、可受取旨被仰渡候付、伊集院長左衛門江引合相請取候、

真米七斗四升五合

　但五月五日・九月九日祭米として物奉行所より相渡候、

後迫(狩)社

一愛宕

慶安五年辰九月　光久公　綱久公御再興被遊候、其節諸士百五拾余人造立之材木御犬之馬場より持運候由、棟札ニ名書等相見得申候、

高拾石

但太閤秀吉公より御使幽斎老を以、愛宕領之儀、諸神并雖被致勘落候、寄進有之候旨、山田越前入道理安・伊集院下野入道抱節より之書付写壱通并宝泉坊へ取納可有之由、奥書之書付写壱通有之候得共、本書者無之候、尤右高、当寺へハ取納不致候、当分何方へ取納有之候哉、不相知候、勝軍院境内之儀、当寺へ支配之内ニ而(寺借)彼地ニ出置候由、書付ニ相見得申候、其外由緒之儀、相知不申候、

鳥居(江)額赤かね愛宕(寺山)と真文字置上ヶ也、　光久公御筆ニ而、于時寛文五年正月吉日と有之、

一摩利支天(後迫)　石社

明暦三年丁酉十一月廿四日諸士より造立之由、書付相見得申候、

般若院

宝暦十三年未四月　　真連院

雲海山　　宝泉坊

真言宗当山派山伏
薩隅日袈裟頭門首
般若院

右住職交替之節者達　貴聞、於敷舞台御家老衆より被仰渡候、

一文化二年丑七月、　三宝院御門跡より、御山内学侶中堂院永兼帯寺格昇進被仰付候、

右要用集しらへ、

24

般若院支配下▽(寺)山伏△格護之堂社

一毘沙門堂(竪野)

右　忠久公御本尊ニ而、宝永七年寅四月　吉貴公御再興、

高三石

毘沙門仏餉料として被下置候、

御米壱石八斗

堂守家内続料として被成下候、

一千手観音(行屋)

右先年御再興之節、御合力銀七枚被成下候、其後修甫之節、青銅三百疋宛及三度被成下候、元禄九年(ママ)寅四月類焼ニ付、書付等焼失仕候、

修甫上町中より仕来候、
一正観音（中渡瀬）
自分修甫
一塩竈大明神（塩屋）
自分修甫
宮地弐畦三歩
一薬師堂（西田足軽馬場）
西田足軽中より修甫仕来候、
一薬師堂（原良村）
修甫村中より仕来候、
一弁天社（大門口）
安永四年未十二月十一日、　山下御屋敷より大門口へ御引移方被仰付候、
一〔阿弥陀堂〕（大門口）
（忽稲荷社）
安永五年申二月三日、　山下御方原良村御屋敷より大門口江御引移方被仰付候、
一秋葉社（大門口）
安永五年申五月十八日、　山下御屋敷より御引移方被仰付候、

一大黒堂（下町）
町中より修甫仕来候、
一住吉社（下）
天明六年午六月　中将様御厄年ニ付、南林寺境内ニ川上十郎左衛門寄附之筋ニ而、田尻宇平次江造立被仰付候、
般若院
宝暦十三年未四月廿三日
寛政五年丑五月朔日
右弐冊之書出シ、

25
25の1

寛保二年戌十一月申上候書付写
般若院格護之愛宕社頭之儀ニ付、被仰渡趣承知仕、左ニ相糺申候、
一愛宕社之儀、御建立之年月於当寺相糺候得共、先年之類火ニ古帳其外諸書付等焼失仕、相知不申候ニ付、中原仲左衛門先祖般若院住職之内より格護ニ而候付、彼方江相尋申候処ニ、当分仲左衛門并嫡子江戸詰仕不罷居候付、右仲左衛門弟中原良慶院より承候者、愛宕社

領高之儀ニ付、慶長九年・同廿年、山田越前入道理安・伊集院下野入道抱節書付壱通、新納加賀・田代刑部少輔・日置吉兵衛書付壱通写申候、其外証書も為有之筈候得共、先年洪水ニ数通之書付損失仕候由、良慶院より承申候、右書付之内、愛宕領其所之応田畠納宝泉坊へ相渡候様ニと有之候得者、専格護仕来候儀、別条無御座事と相見得申候、其前誰様御代より御建立之訳并愛宕格護之儀者不相知、右書付弐通為御見合差出申候、

一慶安五年中原家住職之内、愛宕山御再興之棟札御座候ニ付、是又写別紙差出申候、右を以相考申候得者、中原家以前、是枝仲存院先祖住職之内より社頭ハ為有之と相見得申候ニ付、仲存院方へ相糺申候処ニ、先祖二代弘治年間以前より天正年間迄之間、惣職相勤為申由候得共、愛宕社御建之儀者相知不申由承申候、

一拙僧祖父連長院江、寛文十一年亥二月般若院住職被仰付、至当時愛宕社へ毎月廿四日、早朝より神供相調神前江相備御祈願仕、其外社頭時々掃除仕候、尤祖父住職以前ハ社頭為有之と相見得申候、右を以神供相備申候哉、祖父連長院住職仕候節ハ社頭無御座候得共、前代より引次候故、以前ニ不相替自分調ニ神供相備申事ニ御座候、且又御修甫之儀も此方より申上事ニ御座候、

一右年間書留之内ニ、愛宕之儀寺方と先年入組御座候由候処、愛宕之儀者如前々般若院へ御付被成候由相見得申候、尤証書為被下と有之候得共、其節中原家より次渡者無御座候由相見得候、

一右年間之内ニ、愛宕宮守屋敷般若院へ借地ニ而真言宗罷居候由、使者川村伴左衛門証状并伴左衛門文・宝城院状為被遣と相見得申候得共紛失仕候哉、当時者書状無御座候、尤宮守屋敷与御座候得共、当時者愛宕宮守屋敷与申ハ無御座候、

一勝軍院之儀、愛宕社無之内より御座候哉、其以後相立候哉之旨被仰渡候得共、愛宕社之儀ニ付而ハ、曽而勝軍院より締申儀無御座候付、勝軍院建立之次第、当院へ一切相知不申候、

一愛宕社頭後ニ堀切有之候、堀切より鳥居迄之内者般若院格護ニ而、竹木迄般若院支配仕候通申伝候、何年間より竹木等支配不仕候哉、相知不申候、尤右後山中ニ境之堀切今以御座候、

25の2

右者般若院格護之愛宕社御建立之次第御用之由被仰渡、相糺申候処ニ、　誰様御代ニ御建立之儀相知不申候得共、従前々当時迄格護仕候、尤諸書付等先年之類焼ニ焼失仕候故、委細之儀相知不申候付、此旨申出候、以上、

般若院

戌十一月七日　　連長院

御記録奉行所

右寛保二戌十一月申上候書留之趣ニ而ハ、川村伴左衛門証状并宝城院状も紛失之由申出候得共、其後見出申候、且又善隆院より連長院へ宛書之書付弐通も其節見出不申上ニ而も可有之哉と相考申候間、此節差出申候、

昨日宝城院ニて被仰候通委細承候、前々真言坊主俊能坊より被為頼候ハ、屋敷無之候間、愛宕山之内一節借地被成候而被為移筈之間、其段般若院へ申談候而可預之由被仰候付、中島四郎右衛門拙者使□事済被為移候儀無別儀候、任御尋如此御座候、恐惶謹言、

川村伴左衛門

十月五日　　秀宣判

面高善隆院

25の3

用一書申入候、川村伴左衛門殿江御頼ニ付而、細々我等御使申候様子者、愛宕山之内へ先年真言宗俊能坊一節借地被成罷居度由被申候、川村伴左衛門殿へ、中島四郎右衛門殿へ被成候儀御尋ニ而候、其段伴左衛門殿へ申入候得者、▽寺証文△無相替借地ニ而候通、伴左衛門殿より御方へ証文状被遣候、就夫使申候通、我等証拠之状如斯候、恐惶謹言、

宝城院

亥十月七日　　重顕判

面高善隆院

御同宿中

25の4

寺社御奉行所より御用候間、誰そ罷出候得と御座候、依夫矢野次左衛門殿差出ニ而候得者、此如覚書写可被出由、次左衛門殿被承候、然処某罷越候間、仕合ニ

存候而、良光坊へ相談申候而、如覚書書写候而出申候、
左候得ハ、愛宕儀ハ寺方と先年入組御座候、其刻鎌田
太郎右衛門殿某を般若院より頼被成候間、鎌田左京殿
ニ而御家御書物指出申上候得ハ、愛宕之儀ハ如前々般
若院へ御付被成候、依夫左京殿へ申入候者、数年之口
事之儀候間、此節相済申候通り、証文可被下由申入候
得ハ、御老中へ御内意申被成、証文之状被下候間、御
家御書物同前ニ般若院へ相渡申候、今度右之覚書被下
候ニよりて、良光坊ニ而般若院へ様子申候得ハ、何そ
御書物等も無御座由返事ニ而候、右ニ付、鎌田太郎右
衛門殿へ永山覚左衛門殿頼申候而、前之儀ハ首尾申候
得ハ、返事ニ般若院より頼ニ而候間、吾等同前ニ使者
被成候得共久敷儀候間、失念被成候由、覚左衛門殿ニ
而返事御座候、又良光坊被申候ハ、般若院へ御書物御
座候、見申たる由被申候、良光坊より外ニも、山伏衆
之内二人此書物見申候、小箱之内ニ入候而御座候通被
申候、山伏御座候由、良光坊被申候得共、太郎右衛門
殿ハ大方ニ被仰候間、細々ハ次第ニ聞合可被成候、

亥八月廿二日　　善隆

連長坊殿

25の5

覚

一亥八月十四日ニ寺社御奉行所より連長院所へ承候ハ、
連長院事ハ入峰被申留守ニ而候間、誰そ親類中御用之
由候、矢野次左衛門殿罷出被承候様子ハ覚書ニ而、愛
宕山天子多賀御家より御崇敬被成候儀、又ハ棟札等可
差上由被承候、某事ハ別ニ用段(寺談)之儀候而、八月十五日
ニ鹿児島へ参上申仕合ニ存候而、良光坊使ニ而良俊坊
へ申候者、愛宕山へ御家より御書物等可差上由、寺社
御奉行所より被仰渡候間、連長院方へ御渡可給候由申
候、返事ニ承候ハ、何そ証文等無御座候由、返事ニ而
候、就夫寺社所取次衆川上七左衛門殿へ申候ハ、覚悟
被成候書物無御座由被仰候間、直ニ良俊坊へ可被(寺仰)□由
申入候、
一右(寺御)使良光坊被申候ハ、前々般若院宿元ニ而御家御書物
為見申由候、然処ニ御書物無之由被仰候間、無心元存
ニ而、上方之山伏御書物見為申人御座候間、尋申入候
得ハ、般若院所へ文箱程之小□(寺箱)ニ入御書物有之由候、

為存山伏御座候与申候、我等申候者、右被仰候様ニ御書物有之候、我等へ三拾ヶ年前ニ使被為頼、　公義被為申上候時分、御家之証文之書物ニ而、愛宕山宮般若院江相付候儀、無其隠之由候、

一愛宕山へ真言宗俊能坊借地、三拾ヶ年前ニ被成候儀者、愛宕山宮守として下之坂より上ニ山伏被罷居候、其時分談義所之住持与中悪敷候而、山伏被罷居候屋敷借地ニ而候、其使中島四郎右衛門殿・川村伴左衛門殿ニ而候、其以後坂より下江寺相立候刻、般若院と寺と入組ニ罷成候故、般若院より我等鎌田太郎右衛門殿被為頼、鎌田左京殿へ相付、御家之御証文余多差出様子申上候、御証文有之上ハ、寺方へ相付間敷由候而、愛宕山宮般若院へ相付申候、左京殿江鎌田太郎右衛門殿某より申入候ハ、右入組ニ付、宮般若院へ覚悟被申候通、証文可被下候由申入候得ハ、太郎右衛門殿某江当書之証文状被下候間、御家書物右証文状相添相渡申候、

一今度寺社奉行所より愛宕山由来之儀御尋ニ而候、良光坊使ニ而、良俊坊へ様子申入候共、御書物等無之由就返事ニ、永山〔寛左〕〔今ノ右〕衛門殿ニ而鎌田太郎右衛門殿へ様子申入候ハ、前入組之刻、般若院某太郎右衛門殿被為頼、鎌田左京殿へ相付様子申上候而事済申候、御失念有間敷由申入候得者、返事ニ承候ハ、まきれさる前使ハ被成候、如何様共不覚候由、覚左衛門殿ニ而承候、太郎右衛門殿と良俊坊ハ縁者ニ而候間、大方ニ被仰候と存候、

一愛宕御証文我々使申候段々大□坊へ申候得ハ、良俊坊へ細々内意為被仰由候、良俊坊被仰候ハ、御家御証文有之、覚悟被成候而有之由、大仙坊被仰候、然時者殊之外相違成儀ニて候、

一此節、其方般若院坊地へ移ニ付、寺方より如先年之口事ニ可被申儀も可有之候、久敷儀候得ハ、其方右之入組被為知間敷候間、宝城院使ニ而前屋敷被為借候、使川村伴左衛門殿へ申入候、無替儀証文状預り候中島殿ハ被相果候故、壱人之証文状ニ而候、就夫宝城院使被成首尾ニ而候間、証文状可預由申候而、両通共ニ証文状此節取置申候、以来口事共候ハヽ、其心得を以可有沙汰候、以上、

寛文十一年辛亥九月五日　　善隆院印

26　口切ル

高拾石

先年　太閤様為御使幽斎(旧在)□国之刻、愛宕領之事、諸神并雖被致勘(旧落候)□、此節乍少分令新寄進者也、

慶長九年六月十一日　　山田越前入道
　　理安(有信)判
　　伊集院下野入道
　　抱節(久治)判

（本文書ハ「旧記雑録後編三」一九三八号文書ト同一文書ナルベシ）

27　切計

高拾石　　鹿児島上伊敷之内

右知行、愛宕領へ被相付候者納成被給、其所之応田畠、宝泉坊へ可被相渡者也、

慶長廿年
　三月廿二日　　新納加賀印
　　田代刑部少輔印
　　日置吉兵衛印

一右善隆院より連長院宛書ニ而遣候書付之内ニ般若院と有之候ハ、中原家より住職仕居候良舜院事ニ而可有之哉、良俊坊と有之候も同人之事ニ而、般若院退院以後故、右之通書付為申ニ而も可有之候哉、

一善隆院ハ面高家より般若院住職被仰付候、連長院訳ニ而、其比伊集院へ居住仕居候、

一右連長院へ般若院住職被仰付候訳ハ、中原良舜院現住之内、門中と入組有之、是非不相決中、寛文七未年連長院事仮ニ般若院住職被仰付置、寛文十一年亥二月廿二日般若院へ本住職被仰付候、

一右住職被仰付候節、先住良舜院方へ、寺ニ付諸書付等有之候ハヽ、被(寺取)次渡度旨申達候へ共、書付無之由ニ而次渡無御座候由申伝候、

右者愛宕山之儀ニ付此節御糺之故、此段申上候、以上、

般若院
子十一月十日　　真連院印

曽木甚右衛門殿
㊧参

（本文書ハ「旧記雑録後編四」一二三〇号文書ト同一文書ナルベシ）

28

奉再興愛宕宮大権現精舎一宇、　右造営意趣者、大檀
那藤原朝臣光久公并綱久公御息災延命……、末略ス、
慶安五年 壬辰 九月大吉日遷宮畢、
本願権大僧都法印般若院
遷宮導師法印重清
奉行衆　島津図書頭殿(久通)
島津筑前守殿(久賴)
北郷佐渡守殿(久加)
伊勢兵部少輔殿(貞昭)
新納右衛門佐殿(久詮)
町田勘解由次官殿(久則)
鎌田源左衛門尉殿(政有)
普請奉行
五代喜左衛門尉殿
田尻次右衛門尉殿

大工　長田㊧助(旧納)右衛門殿
絵師　寺田惣右衛門殿
右同　枝次清右衛門殿
彫物師　図師源右衛門殿
かさり屋　中川唯右衛門殿
塗師歟虫付不知　善長坊
石切　与八左衛門
小工　染川喜兵衛殿

御犬之従馬場材木運衆次第不同
桂久次郎殿
堀弥八郎殿
東郷大蔵兵衛殿
平田新十郎殿
黒葛原勝八殿
稲津甚允殿
新原佐之介殿
川俣長右衛門殿
▽㊧東郷長四郎殿△
川崎隼人殿
猿渡新助殿
鎌田源六殿
矢野重介殿
川野甚左衛門殿
大山平七殿
内田次右衛門殿
貴島藤内殿
是枝小平太殿
野間勘兵衛殿

山元利右衛門殿
東郷吉左衛門殿
木藤宇左衛門殿
野間藤左衛門殿
本田甚十郎殿
喜入十郎（旧ナシ）〔太〕殿
新納二兵衛殿
否笠市右衛門殿
西之原長介殿
児玉新兵衛殿
西之原伝右衛門殿
横山千介殿
松田蔵（旧龍）右衛門殿
松田勘十郎殿
宮之原助右衛門殿
川崎亀千代殿
渋谷四之助（旧郎）殿
黒葛原三左衛門殿
肥後弥右衛門殿

黒田志摩之允殿
敷根茂兵衛殿
武茂右衛門殿
町田加右衛門殿
喜入勝兵衛殿
伊藤為左衛門殿
岩切太兵衛殿
吉村蔵（旧龍）介殿
伊藤熊介殿
児玉万菊殿
愛甲次左衛門殿
丸尾喜右衛門殿
松田加左衛門殿
山田加右衛門殿
田之上宰相殿
別府久左衛門殿
右田清吉殿
肥後長次郎殿
川越市左衛門殿

別木源太郎殿
川野久兵衛殿
川村帯刀長殿
宮之原権左衛門殿
佐竹源左衛門殿
宮里佐五右衛門殿
山田久左衛門殿
竹迫弥兵衛殿
高崎千介殿
頴娃新右衛門殿
宮原助右衛門殿
貴島内記殿
津留猪右衛門殿
伊東勝右衛門殿
高野治左衛門殿
辺見九介殿
毛利為右衛門殿
本田治介殿
山口弥平兵衛殿

伊東佐平次殿
川上六郎次郎殿
塚田長左衛門殿
田之上藤兵衛殿
酒匂長介殿
鎌田弥右衛門殿
折田六左衛門殿
伊集院（旧源）孫十郎殿
平田次郎右衛門殿
杉山甚介殿
大田又右衛門殿
佐竹源八郎殿
鎌田孝右衛門殿
永江勘左衛門殿
相良千兵衛殿
貴島甚右衛門殿
竹之内三右衛門殿
伊東長松殿
関雅楽介殿

弁官壱岐介殿　浦川長三郎殿
中江長十郎殿　谷川大学介殿
長田藤右衛門殿　津曲清兵衛殿
宮里弥太右衛門殿　薗牟田宮内左衛門殿
川上新左衛門殿　田中孝右衛門殿
伊尻長次郎殿　川上長次郎殿
有田(旧上)勝右衛門殿　村田(旧綱左)〔調右〕衛門殿
西之原利右衛門　本田益千代殿
肝付早右衛門殿　伊東弥右衛門殿
伊地知伝右衛門殿　皿良右馬介殿
税所助九郎殿　税所兵吉殿
津曲太右衛門殿　木脇六郎殿
川村与一左衛門殿　鎌田弥八殿

以下虫付ニ而不知、

（本文書ハ「旧記雑録追録二」四四四号文書ト同一文書ナルベシ）

勝軍院愛宕領

高拾九石九斗八升九合五勺八才

右壱行、承応二年勝軍院四代真尊代ニ諸士中より勧(進カ)を以、木上築右衛門と申者、持高買取致寄附候処、神領高不相成、高主ハ右築右衛門名前ニ而、年々勝軍院へ致取納来候処、築右衛門子孫木上新右衛門代訳合有之、名跡不被召立、其節勝軍院願出趣有之候処、諸士中より寄附高之儀候間、表方御代官所付取納被仰付、返米年々可被受取旨、宝永(四カ)亥十二月黒葛原源左衛門取次を以被仰渡候由、

善光院延享元年子六月

威光院明和五年子七月

29

一正徳年間故主吉貴因帰依、開祖満寿院事、磯屋敷別荘之内弐反九畦十八歩居屋敷附与(寺)ニ(被)致、其中ニ本尊飯縄大権現・得大駒(勢)至尊・如意輪観世音、此三尊建立有之、是迄一百余年相続仕来申候、

一愚僧当屋敷并堂(ママ)仁王被建候節切開ニ相成、鳥越と被号候、其前ハ仲之木場と唱申候、

一先年亡伊予坊・拙同時飯隈山改革掛被申付置候、尤当分相勤罷在申候、

一拙僧家之儀、伊作大隅守久長主嫡男下野守親忠三男西
近江守親久元祖ニ而、其子孫ニ而御座候、代々馬廻格
式之家ニ而御座候、
一峰数当丁未秋迄三峰修行仕申候、
右者由緒申出候様被仰渡趣承知仕候付、成行申上候、
以上、

西満寿院

未八月　　尭盤

31

以切紙得御意候、然者御国方満寿院由緒柄御尋候上、
年寄中出会、飯綱権現別当職御令旨御書出被下候条、
其御(守趣)役向江宜御通達可被下候、為其如斯御座候、以上、
九月三日

木田豊後介
玉木要人
(守光)
、室内記

〆

被補鹿児島飯綱権現別当職訖、弥守国主由緒専祈念、
世々不可(守有)違失之旨、依　三山検校宮御気色、執達如件、

法印祐文判
弘化四年九月三日　　法印源乙同
法眼源良同

鹿児島

32

満寿院尭盤

飯綱権現・如意輪観音・駒(勢)至菩薩之三尊、正徳年間従
国主吉貴朝臣満寿院盛盤江依附属之由緒有之、今般以
格別之御沙汰別当職御推(守補)被成下筋、賜令旨訖、向後
弥可守御宗法仰一派興隆者也、

弘化四年　　岩坊判
九月三日　　(守維)維務同
民部卿同

鹿児島

33

満寿院尭盤

此節例入峰為御祈祷飯隈山代僧被仰付、上京仕候処、
本山表より本尊由緒并私家之御(守尋)願等有之、荒増申上候

処ニ、書付を以申出候様承候付、別紙之通申出候、然処、去ル四日従御本寺御殿御用有之罷出候処、飯綱大権現別当職被仰付、難有奉存候、別紙相添、此段御届申上候、以上、

弘化四未九月七日　　西満寿院

京都

御手形所

34

口上覚

一千地蔵堂之儀、何比より安置為有之事候哉、委相知不申、町立不申以前ハ田之中之地蔵と申伝候由、

一寛永より以前者、先年町内へ御糺ニ付、別紙之通申出候、写相添差上申候、私方由緒同様御座候付、差上不申候、

一先年再興之節堀方仕候処ニ、御社之下より壺之口かけ又ハ香炉・花立・腰高灯明皿・茶湯茶碗等白砂之内江有之候得共、本之通埋め置申候、

一此節御社及破損候ニ付近所中申談、再興仕候折為堀申候処、本之所より少シ前之方三尺余堀候処、壺之かけ又ハ人之骨と相見得候を少し堀出申候ニ付取上ヶ、都而壺ニ入付諷経等仕、本之所へ埋め置申候、

一池之王神、何比より御社と相唱申候哉、相知不申候、

一往古より屋敷中之儀、乞食等ニハ一切分呉候儀ハ、御社之御嫌と之由申伝、于今其通仕来申候、

右之通申伝ニ御座候、以上、

酉八月　　加藤宝満院

35

上町千地蔵堂後江池之王権現与唱候塚石有之、此節由緒及糺方候処、祭神不相知候得共、今形祭置麁抹無之様地蔵堂守取始末可致旨、寺社奉行より被申渡置候様可申渡事、

右之通、文化十一戌正月十五日御達覚書を以被仰渡候也、

御内意覚

私支配仕候地蔵堂之儀者、亡祖父代宝暦七丑年新造立仕候由ニ而、地蔵堂由緒御糺ニ付、文化十年酉十月廿二日亡父代御記録所へ差出候書付之留ニ、寛永之比、

地蔵堂地面ハ彦右衛門ト申者之屋敷ニ而、口六間、入十二間御座候処、右之屋敷より正保年中相分り候様申上置候、尤町内より申上候処、口三間半、入六間半、末壱間拾四歩六合弐勺五才ニ而、正保年中ニ畦歩相究候筋被申上候様ニ承居候、然処私方之先々住ニ而も候哉、智元坊と申者、宝永八卯年二月五日般若院へ申出候書付之留ニハ、畦歩ハ町内より申上候、同様ニて末何間と申事ハ無御座候、万治二年亥八月十八日、地蔵堂地面畦歩相究候筋ニ相見得候――中略、右彦右衛門屋敷ハ、当分西村喜兵衛名前ニ御座候――同、且又池之王権現御社之儀申伝ニハ、寛永之比彦右衛門と申者之屋敷口六間、入拾弐間之内江有之、(寺豊臣家臣)何某居住ニ而、谷山より御遺骨持来り埋置候筋ニ候得共、人之死骨を屋敷内へ埋置可申様も無御座、如何様右之辺其比迄ハ未屋敷立不申地面ニ而も候而、其所ニ埋置為申事共ニてハ有之間敷哉――同、且又当分地蔵堂へ金灯炉壱対御座候、右者庚申へ寄進之品ニ而、万治四年丑三月五日と御座候、左候得ハ、御社辺へ往古庚申堂ニても御座候得共ニハ有之間敷哉、拾年計以前ニ家作仕候節、庚申之石像堀出申候故、社内へ安置仕置申候、――、

地蔵堂守
加藤真浄院

文政十三寅九月
飯隈山
用聞衆中

此節地蔵町西村喜兵衛屋敷、彼地之内別紙絵図面間数通、千地蔵堂屋敷并池之王権現社地江差出度、地蔵町三役共并右喜兵衛より申出候趣有之、当座役々・町奉行所役々・上町年寄・年行司出会致見分候処、相違無之候間、永年無混乱可令格護者也、

天保二年卯二月三日　寺社奉行所印

旧伝集
一秀頼公薩州ニ御忍、谷山ニ被成御座候由ニ而、其跡谷山木之下門と申伝于今有之候、墓者行屋観音堂とも千地蔵共申事候、

一木下大膳太夫ハ、石田三成讒言ニ而、薩摩坊津流罪ニ

て候へとも、従秀吉公討可差上由ニ付、加世田辻之堂ニ而切腹ニ而候、其時介錯人へ羽織を抜被呉候となり、其頭肥前名護屋へ被差上候処、才領之使者不案内ニて▽寺頭ニ△塩を不致候、夏之事ニて腐候付、御使之人此方より切腹被仰付候由、

一光久公有馬御湯治被遊御越候時、色紙六左衛門殿御供ニ而候、然処ニ老人参候而、六左衛門殿へ尋被申候ハ、私ニ者故有ものニ而候、秀頼公ハ薩摩へ御下り被成御座候よし承居候、何比御死去被成候哉と無拠懇望ニ被相尋候、六左衛門殿返答ニ、秀頼公ハ於大坂御生害と及承候と被申候、右之老人ハ如何成御方、何国へ被成御座候哉と申候へ者、只故有者と計申候由、

補陀洛山　仏母寺　普門院

右者別段厚　思召之御訳被為　在、代々山伏家筋被仰付、以来院号昇進等之節者、右之通代々名乗候様被仰付候旨、弘化二笑左衛門殿より被仰渡候、

一御切米弐拾俵　普門院

右者此度厚　思召を以、飯隈山後見職、且又代々山伏家筋被仰付候付、別段之御取訳を以、右之通永々被下候旨、笑左衛門殿より被仰渡候、

一屋敷一ヶ所

右永々被成下候旨、笑左衛門殿より被仰渡候、

一弘化二年、普門院徳母江先達職伊予坊旧号被預之先達列被仰出、御令旨被下候、

一弘化四年、普門院篤昌江本山より伊予坊永世御預御免許相成候、

鹿児島

故伊予坊徳母資

笑春院篤昌

右徳母修学出精、入峰修行無怠慢、加行伝法懇願為一派、本儀主誠先達職伊予坊旧号被預之先達列被　仰出御令旨被下置、追々法儀精勤可励奉公、志願不相遂令遷化、残念之至　思召候処、今般従　国主表格式相当之寺跡被附与之条注進、全就先達職名実相立、以格別之　御沙汰、伊予坊永世御預被　仰出、弥可抽　公武

御祈祷、両峰修行、国主武運長久之懇祈之旨　三山検校宮厳命候也、

弘化四年
七月

法眼源良判
法印源乙判
法印祐文判

38 一木蘭色衣着用之事、被免許之旨、依　三山検校宮御気色、執達如件、

弘化四年
七月二十二日

法印祐文判
法印源乙判
法印源良判

鹿児島
伊予坊篤昌

39 一紫平絹(紗指)貫着用之事、被免許之旨、依　聖護院宮御気色、執達如件、

弘化四年
七月廿二日

岩坊判
雑務判
民部卿判

鹿児島
伊予坊篤昌

40 一私儀、今般　上様御威光を以、供奉首尾能相勤、且勅会御法事付、宮様別段厚思召之訳被為在、大僧都拝任御執奏二月廿八日蒙　勅許、其上供奉都合能相勤、旁別而御満足被思召上候、為　御褒美参仕修学者被仰付、飛和色総結袈裟着用蒙御免許、重畳難有仕合奉存候云々、

四月三日

普門院
篤昌判

内蔵様
御取次衆

41 一密法灌頂
投華
大日如来

伊予坊
普門院

右者故普門院修学出精等付、本山より先達職伊予坊

42

被預置之処遷化付、当普門院へ伊予坊永世御預、且紫平絹差貫、又者木蘭色衣着用御免許相成候付、別紙御免許状并密法灌頂投華名代江可被相渡旨、寺社奉行へ可申渡候、

未八月廿七日　　笑左衛門

口上覚

私事此節従　聖護院宮様伊予坊永世御預被仰付、難有仕合奉存候、御序之節御礼申上度奉願候、進上物之儀者御見合を以被仰付被下度奉願候云々、

未七月廿一日　　普門院

43

右申出趣承届候、先例見合候処、般若院儀、三宝院御門跡御山内学侶席中堂院永兼帯被仰付候節御礼願出、文化三年寅三月廿三日、一束一本進上ニ而御礼被仰付候、此節普門院於京都、従　聖護院宮様伊予坊永世御預被仰付候、御礼願出候付而ハ右例ニ被準、一束一本進上ニ而御礼被仰付方ニも可有之哉云々、

未十二月廿七日　　寺社奉行

西海山　　向岳寺　　慶連院

阿闍梨法印大先達　　千秀院

右者此節別段厚　思召之御訳被為在、代々山伏家筋被仰付、右之通山号等被成下候、左候而、慶連院与被致改名、以来院号昇進等之節者、右之通代々名乗候様被仰付候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡候、

一大門口
稲荷社
秋葉社
弁天社

慶連院

右別当被仰付候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡候、

一御切米拾石
一大門口弁天社守屋敷百五拾坪

畦ニして五畦

慶連院

右永々被成下候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡候、

慶連院

一右弘化二年、本山より御直末別触格被仰付候、

一普門山　如意(寺輪)寺　存龍院
阿闍梨法印
大先達
円清院

右者別段厚　思召之御訳被為　在、代々山伏家筋被仰付、右之通山号等被成下候、左候而、存龍院与致改名、以来院号昇進等之節者、右之通代々名乗候様被仰付候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡候、

一屋敷七百八拾弐坪
高麗町橋口
畦ニして弐反六畦弐歩
存龍院

右永々被成下候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡候、

一　存龍院

右弘化二年、本山より御直末別触格被仰付候、

大悲山　聖無動寺　東之坊
阿闍梨法印
大先達
東之坊

右者此節厚　思召之御訳被為　在、山号等右之通被成下候旨、弘化二年笑左衛門殿より被仰渡候、

一　東之坊

右弘化三年四月、本山より御直末別触格被仰付候、

神応山　金胎寺　大乗院末寺
神明宮別当
七人御賄料
抱真院

『神明宮　神主　井上右京』

神領高三拾石

寺高百五拾五石余
「百拾五石とも」
住職於虎之間申渡、

一神明宮、宝永三年戊(歳九)四月　吉貴公御建立、本地大日如来、

一抱真院、同年十一月御建立、開基盛長、同四年亥十月別当職被仰付候、安養院境内ニ有之候三本寺当分之寺地ニ御引移、抱真院与改号、

44

一御刀一腰　主水首正清
長二尺六寸七部

一御鑓二重金

一御白鞘

一御袋▽(旧)今織房付緒△

45

右今度　太守宗信公被為寄進于薩府築地神明宮、被相
副御直書畢、全可令宝納者也、仍如件、
寛延元年九月七日　　島津久柄（旧矢）
久富判
樺山主計
久初判
島津左衛門
久甫判
別当
抱真院

（本文書ハ「旧記雑録追録五」三〇一号文書ト同一文書ナルベシ）

御袖判
高三拾石
右神明宮令建立、今度為社領所寄附之也、全可領知
之状如件、
宝永六年己丑十一月拾四日
神明別当
抱真院

46

薩州川辺小野村之内
薩州田布施池辺村之内
隅州帖佐船津村之内
高三拾石
右神明宮御建立、為社領今度　少将吉貴公被寄附之
御寄進状所被成下也、全令所務無怠慢宜被抽御祈祷
者也、仍執達如件、
（肝付）主殿
兼柄判
（種子島）蔵人
久時判
宝永六年己丑
十一月十四日
（島津）帯刀
仲休判
（新納）市正
久珍判
（島津）将監
久当判
（島津）中務

（本文書ハ「旧記雑録追録二」二八八〇号文書ト同一文書ナルベシ）

久輝判

神明別当

抱真院

（本文書ハ「旧記雑録追録二」二八八一号文書ト同一文書ナルベシ）

寺社方帳留目安　備前国長船住横山忠之進祐定
一御刀　一腰　於神前作之　長弐尺弐寸三部

右文化五辰七月廿三日、従　斉宣公御引替被遊御奉
納之書付、

47

長絹

右長絹者　常憲院綱吉公被為召候御能御道具之内
竹姫君様江被進置候、然処　御守殿御庭内へ、従
中将継豊公御看経所御造立〔被〕(旧ナシ)成被進候、享保十五
庚戌四月廿四日、導師貴院江被仰付入仏供養勤行終
而可製袈裟旨御意之趣、大年寄岡田殿より　御守殿
方御用人山沢十太夫(盛香)江被伝之、於御看経所十太夫御
取次を以拝領之、寔冥加之至、永可為寺宝者也、仍
如件、

享保十五年　　島津中務

戌五月廿八日　　久貫判

抱真院盛巌法印

（本文書ハ「旧記雑録追録四」一一八号文書ト同一文書ナルベシ）

一文化二年丑八月十六日天児一箱・犬張子一対
斉宣公御誕生之節御用相成候処、此節神明宮江被納置
候付、西覚兵衛より添書壱通有之、

神社調　鹿児島部　二

（表紙）

神社調　鹿児島部　二

松峰山　無量寿院　浄光明寺

時衆宗相州藤沢山清浄光寺末寺着座門主

開山宣阿説誠　文治年中創建

高四百四石六斗六升弐合四勺九才

一忠久公　嘉禄三年丁亥六月十八日御逝去、御法名得仏道阿弥陀仏、御牌・御影者享保八年卯六月　吉貴公御安置、

一忠時公　文永九年壬申四月十日御逝去、御法名道仏仁阿弥陀仏、

一久経公　弘安七甲申閏四月廿一日御逝去、御法名道忍義阿弥陀仏、

一忠宗公　正中二年乙丑十一月十二日御逝去、御法名道義仲阿弥陀仏、

一貞久公　貞治二七月三日御逝去、御法名道鑑道阿弥陀仏、

右御五代之御牌寺ニ而候、御廟所ハ本立寺、

一貞嶽院殿元光明一房

忠久公御夫人、畠山次郎重忠第六女、十一月朔日、

一得台院殿忍西生一房

忠時公御夫人、伊達判官入道念性妹、正月廿三日、

一浄温院殿妙智神一房

久経公御夫人、相馬小次郎左衛門胤綱第三女、八月廿二日、

一理玄院殿恵照見一房

忠宗公御夫人、三地(浅池)杢介入道道智女、四月十日、

一梅林(浅桁)院殿法麗聞一房

貞久公御夫人、大友因幡守親時入道道徳女、七月九

日、

右五代之御夫人御法名并御逝去年月不知、御牌無之候処、享保十一午十一月、浄光明寺住持寂翁依願御法名致追号、御同牌御安置、同十二未八月、又々寂翁より御忌日不相知、御忌日之御回忌分而難仕、神勅之御圖宗門之式を以御月日相究、銘々腰書之通被申出、弥御圖之通御月日を御位牌ニ記置、自今御回向仕候様、同月十八日被仰渡候、

一吉貴公　延享四丁卯十月十日御逝去、御法名浄国院殿鑑阿天清道熙大居士、御牌御廟所有之、御仏餉高百五拾石被召付置候得共為引替、天保九戊十二月銀百五拾枚被召付、右利銀壱貫目年々御渡方有之、

一玉泉院殿澄玄心光大童女

御牌御廟所、享保十一丙午五月三日御夭亡、　吉貴公御女、

一瑞仙院殿松嶽貞高大姉

御牌御廟所、享保十二丁未三月廿日御逝去、　継豊公(愛)御前御夫人、松平長門守吉元女、御仏餉米三石、銀五枚、

一御銀拾枚三拾七匁三分九り壱も

右者御仏餉米三石被召付置候得共此節御引替、右之通御銀被召付、為利足御銀三拾九匁弐分六り壱もツ、年々可被相渡旨、天保十三寅九月被仰渡候、

一月桂院殿心一献珠大姉

御牌御廟所、延享元甲子七月三日御逝去、　継豊公御実母、御仏餉高弐拾五石、

一御銀弐拾五枚

右者御仏餉高弐拾五石被召付置候得共此節引替、右之通御銀被召付、為利足御銀九拾目三分ツ、可被相渡旨、天保十三寅九月被仰渡、

一慈光院殿仏心恵証大姉

御牌所浄光明寺、御廟所江戸大円寺、享保(愛和)元年辛酉十月晦日御卒去、　重豪公御妾、

大樹家斉公御簾中茂姫様御母堂、市田喜内貞行女、

御仏餉米三石、銀五枚、

一浄光明寺者　御五代之御牌所ニ而、弘安七年ニ当り、忠時公十三年之忌景　久経公御建立被成候、御廟所ハ本立寺ニ而候、

一遊行五十世快存上人、享保十七子十一月御領内巡行之節、浄光明寺二十世寿門江寺格永足下転(叡位)任、日本国中於時衆宗門三四ヶ寺之内之由、

右要用集しらへ、

享保七年(十脱カ)子閏五月廿五日、浄光明寺住替以後物入打続、其上近年出家抔も相重、右ニ付御銀拾八貫目被下、且又磯御方御銀三拾弐貫目寺社方へ被出置、寺社奉行差引被仰付候一件、御勝手方より鎌田太郎右衛門取次を以被仰渡候書付有之、

時衆宗相州藤沢山
清浄光寺末寺永
足下地着座門主
拾七人御賄料
薩隅日并肥後触頭

浄光明寺

松峰山　無量寿院

高四百四石余

住職被仰付候節者、於敷舞台御家老申渡、入院之御礼一束一本、

玉泉院様御廟所者、寺社方検者付御修甫所、

開山宣阿上人説誠和尚者比企判官藤四郎能員之二男、而御元祖忠久公御母堂丹後局之舎弟也云々住于相州鎌倉浄光明寺、　忠久公領薩隅日而御下国之時、従鎌倉与宣阿倶移寺像於来建一寺、即号浄光明寺、以宣阿為開山令住持、此宗祖一遍上人以前之時衆也、此時後鳥羽院御宇文治二丙午年也、建保元癸酉年五月三日遷化、後宇多院御宇建治二丙子年九月十五日、宗祖一遍上人参籠大隅正八幡宮時、八幡開金扉現尊容示神詠歌曰〻〻〻、従夫上人修行来薩州、　御三代久経公知国家時也、帰上人之道徳殊勝、遂使当寺三世了性為一遍門派焉、弘安七年四月十日、抵　久経公厳考大隅守　忠時公之十三回忌、以追考(孝)之志大再建当寺、増旧製矣、遊行回国三時淹留、此六時礼讃勤行、賦算化益之古道場也、従開山宣阿至現住寿門二十世、鑑司十一世、住鑑司都三十一世也、

一洪鐘一口　『陶猗云、廃寺無之内観于此鐘文字、鋳出大字也、』

右御二代　忠時公十三回忌為御菩提、　久経公御寄附、『田陶猗点』

1

鐘銘

島津荘内薩摩方麑島郡造立梵宇名浄光明寺、厳考前隅

州禅定幽儀道仏第十三(廿年)〔回忌〕之間、為祈成等正覚増進仏道之妙果造此鐘、同抽慇懃之誠成陶(廿四)治之功、和霜之声遥期鷲峰之暁、経夜之響遠伝鹿苑之嵐、願以今功徳、上至仏界下及那落、先祖過去幽霊皆預余薫、一切法界衆生普得利益、仍為後代聊所記置也矣、

弘安七年歳甲申閏四月己巳三日

大願主前下野守藤原朝臣久経

法名道忍

鋳師太宰府住人丹治恒頼

『此鋳造ノ鋳タル加治木普門院ニモ有之、』

（本文書ハ「旧記雑録前編二」八五一号文書ト同一文書ナルベシ）

一忠久公御像一軀

享保八年六月　吉貴公御安置、

一瑞仙院殿松嶽貞高大姉

右　継豊公御夫人、松平長門守吉元女也、享保十二乙(丁)未三月廿日御卒去、御霊屋有之、

一御銀五拾枚

外ニ品々略す、

右瑞仙院様御銀并御道具之内、享保十二年未十二月廿八日御寄附、

一銀五枚

一米三斛

右為御仏餉料御物より相渡、

一玉泉院殿澄玄心光大童女

右　吉貴公御女、於弘御方也、享保十一丙午五月三日御卒去、御霊屋あり、

一古銀拾七枚

右御祠堂料、　吉貴公御寄附、

一慈恩院殿堅貞良祐大姉

右　吉貴公御妾、相良大蔵息女ニ而、於弘御方御実母也、享保十七壬子二月廿八日御卒去、

一古銀三貫目

右為祠堂料、　吉貴公より御寄附、

一享保二酉四月浄光明寺依類焼、同八年卯　吉貴公　継豊公新規ニ御再興、現住寂翁代、

右之通寛保二戌六月寿門より申出有之、

『廿三代称愚上人、永正十五戊寅五月十九日於浄光明寺遷化、四十九才、葬茲』
一園中有松樹、遊行二十三代上人之墓印也、『〻在園中西方』
『一宣阿上人石塔在寺中西方、建保元癸酉五月三日於当山寂、葬茲』
一山中有之墓所

三原左衛門殿室石塔
　但鎌田藤四郎四代之祖鎌田治部姉
新納（寺遠江）（達心）老祖母石塔
伊集院刑部殿石塔

寺外

一当寺下門前屋敷数　六ツ
一後迫門前屋敷数　壱ツ
一新照院門前屋敷数　三ツ
一萩原門前屋敷数　六ツ
都合屋敷数拾六ヶ所

当寺塔頭

開基円宿但阿　松声庵
同但弥相阿　東海院
同直連文阿　慶春庵
同師漢珠阿　江月院（寺蘭）
同連声円阿　龍巣軒
同徳重長阿　瑞松軒
同善重眼阿　芳林庵
同連相量阿　釣月庵
同量但覚阿　海蔵庵
同雲龍僧阿　妙性軒

廃跡

同湛海（寺弥）珠阿　北水軒
同了心覚阿　湯春庵
同重但師阿　宝蓮庵
同文峰賢阿　桂昌庵

右宝永八年卯二月書出シ、

本堂

一本尊阿弥陀長三尺一寸　安阿弥之作
一脇立観音　勢至倶二人（寺尺）　右同作
一一遍上人影　作不知
一地蔵堂地蔵　座像　長一尺二寸八分　百済国日羅上人作
一閻魔王　座像　作不知

当寺住職世代

一開山宣阿説誠

建久七年より建保元酉五月三日遷化

一二代底阿徹心

建保元年より建長元酉十月十六日遷化

一三代覚阿了性

建長元年より弘安十亥五月十八日(寺四)遷化

一鑑主称阿念西

弘安十年より嘉元三巳七月九日遷化

一四代其阿随雲

嘉元三年より延元二丑九月廿日遷化

一五代弥阿天真

延元二年より延文三戊二月二日遷化

一六代覚阿本源

延文三年より永徳三亥八月六日遷化

一鑑主(ママ)阿法眼

永徳三年より応永七年辰九月廿日遷化

一同　与阿渓山

応永七年より応永十七寅十二月十六日遷化

一同　但阿唯心

応永十七年より永享六年寅十一月廿八日遷化

一七代其阿随風

永享六年より文安元年子正月廿二日遷化

一八代其阿智水

文安元年より寛正四年未六月四日遷化

一九代其阿心寂

寛正四年より文明十五年卯十一月廿四日遷化

一鑑主也阿霞山

文明十五年より明応三年寅三月廿七日遷化

一同　師阿雲月

明応三年より同(寺八)三年未六月廿九日遷化

一十代其阿入真

明応八年より大永元巳五月十八日遷化

一鑑主唯阿性寂

大永元より同七年亥五月十七日遷化

一同　号阿嶽雲

大永七より享禄三年寅四月廿三日遷化

一同　相阿円極

享禄三より天文十丑五月十八日遷化

一同　厳阿重法

天文十より弘治元卯九月九日遷化

一同　相阿円足

弘治元より永禄三申二月十日遷化

一十一代其阿西嶽

永禄三より天正十六子七月廿三日遷化

天正十二年八月廿三日、於日州都於郡光照寺遊行、新命三十二代普光上人相続之時、使之役相勤被任足下也、

一十二代其阿岩松

天正十六より慶長十五年戌三月五日遷化

一十三代其阿雪渓

慶長十五より寛永十酉四月二日遷化

一十四代其阿文峰

寛永十より承応二巳二月七日遷化

一十五代其阿智的

承応二より寛文六午十二月廿八日遷化

一十六代其阿廓然

寛文六より元禄十一寅八月四日遷化

一十七代〻〻了道

元禄十二八月廿七日、従上州岩松青蓮寺入院、正徳二年壬辰隠居、享保三年戌十月十八日遷化、

一十八代〻〻万啓

正徳二壬辰四月四日、従伊作西福寺入院、享保三戌十月十三日隠居、寛保三亥九月廿五日遷化、

一十九代〻〻寂翁

享保三戌閏十月十七日、従遊行四拾九世一法上人会下一入院、享保十三申九月九日隠居、元文二巳十月朔日遷化、

一廿代〻〻上人寿門

「海老原宗之丞殿先祖某君の弟にて僧と成り、至極智識候て、此時享保十三申九月十五日、会中従海蔵院入院、延享元年子十二月十五日隠居、ニおひて中興の仏威を振起せしと、宗之丞殿より承る也、」

一廿一代法阿廓心

延享元年子十二月十六日、従江戸品川善福寺入院、

一前仏殿上梁文略ス、

元和四戊午閏三月二十六日

一同厨子仏檀文右同、

寛永二乙丑 五月二十八日

一仏殿上梁文右同、

寛文七丁未 三月十五日

元禄十五年午四月書出(寺寺)
一境内竪五百五拾四間 横弐百六拾間　高領高之内

内畠九反四畦二十壱歩

田十壱歩

寺外
一後迫屋敷竪四十五間 横十三間　御免地
右同
一新照院右同竪百四拾八間 横七拾三間　御免地

内畠四反壱畦二十五歩(寺寺)高領高之内

一明治廿年丁亥十月九日、於浄光明寺一遍上人六百年忌ニ而執行有之、参るへき旨住僧児玉維新殿入来ニ而申され、平田甚五郎殿・岩山三四郎殿同道にて拾二時前より仏詣、鹿屋より鉦打房拾余名参り、昔し肝付時代より神舞致し、実ニ古雅なる者、終りにて刀舞有之、弥珍敷舞にて驚入、山川より鉦打房可参之処、風吹渡海致さす、鳴物ハ大太鼓のみ也、　田原陶猗補入

倩以夫報恩謝徳(寺者)を賢王之玄訓也、先王ノ琢処、後王ノ為鏡、五常猶義を為本、追孝追善ハ「全カ」金人の遺教也、百行義を先とし、仏教儒道異なりといへとも、報謝の趣是以一同也、抑当宗元祖一遍上人は四国伊予国河野七郎通広之子也、建長年中に発心して、「天カ」「宗カ」先台家を学し、其後専修一行之門に入、一切衆生のために本願の名号を勧んと誓願を起して、宇佐八幡江祈誓せられけるか、神託に任て熊野へ参籠、此願意祈られけれは、正く霊託を蒙りてより以来、唯今(寺)及卅五代祖師の不背遺神賦此算、然間趣九州事、寛永七庚午年拾月日州江令渡海、其刻日向・大隅・薩摩三ヶ国の　太守藤原朝臣松平中納言家久公御分国修行之旨申入之処、無別条之段被仰之間尤令修行之処、三ヶ国之末寺及退転之処、此度悉堂客殿再興、加之嶮難の道路を拵(寺渓)橋をあらため、人馬の往還任意之条、時節の感応を得たり、それ法弧行如ならす、人の開演を待て興盛し、人ひとりさとらす、法の軌持によつて開導す、人法之爾として古今不改根機、々順すれは水月自感す、今亦末世なりといへとも、機法相応の時に至る事難有侍る、六時経云、一国一人

得往生、其国衆生皆往生云々、一人の御慈悲心を普其国中の人民を仏道に入給ふ事、此文不違候也、神仏の二道車の両輪のことし、我心の外にあるへからす、不軽神明帰敬三宝すれは、仏神加護内心に密約して不限自身永々子孫繁栄豈有疑、此趣遊行代々の伝書に可残置ために書註者也、

于時寛永八年卯月下旬遊行卅五世他阿朱印

※ 2の1

口上覚

谷村平六

右者先年御連歌被仰付候処、当分迄無懈怠相勤、連歌稽古致出精、往々御用立申者ニ御座候間、一往御番別勤被仰付被下度奉存候、以前ニ石川庄右衛門・亡上井勘兵衛弐人御連歌衆之内より、前文之御取分を以御番別勤被仰付置候間、月次稽古式日朔日・七日・十二日・十九日、右之通御番別勤被仰付被下候ハヽ、御蔭を以猶又出精致皆伝、御連歌等之節、格別御用立申筈御座候、且御番別勤之儀、御連衆中励ニも相成可申候、左様共被仰付不被下候得者、連々連歌稽古志之者相少ク連歌衰微之方ニ罷成、御連歌等之節、御差支ニも可相成奉存候、当寺連歌差引被仰付置候付、右之趣申上候間、此旨御申可被下候、以上、

『文政三年辰』　浄光明寺

十一月十六日　恵淳

寺社御奉行所

※（行間）

『可為申出之通、左候而、御番差支候節ハ可相勤候、

十二月十六日　安房』

2の2

右被申出趣承届候、先例見合候処、去ル文化五年辰十月、石川庄右衛門・上井勘兵衛御連歌稽古致出精、専御用相立候付、致皆伝候迄一往御番勤、右式日江廻合之節々別勤被仰付度申出候処、申出之通被仰付、左候而、御番差支候節者可相勤旨、登殿より被仰渡候、此節之儀も右同様之趣御座候間、御連歌式日江御番廻合候節々一往別勤被仰付度候、左候ハヽ猶又致出精、往々御用立可申儀与致吟味此段申出候、以上、

辰十一月　　寺社奉行

3

覚

元文年間当寺前住寿門代、御当地并諸郷ニ而説法執行仕、右力勢を以常念仏建立仕度奉願趣有之、願之通御免被仰付置候、

一古銀拾弐貫目
　右延享二年　浄国院(吉貫)様奉始、　御両殿様・御女中方御長久御延命、国家為御安全、島津周防殿より為常念仏料本行之員数御寄附有之、寺社方御支配ニ而利銀年々被成下、念仏僧六人江渡方左之通、

一真米壱斗五升ツ、
一銭百文ツ、但小仕用
　右弐行壱ヶ月分

一銭壱貫百文ツ、　衣代壱人分
一同壱貫百文ツ、　冬仕着代右同断
一同六百六拾四文ツ、　夏仕着代右同断
　右三行年中渡分

一鐘木　月々入用次第相渡候、

一銀四貫百八拾目
　右寛政二年戌　慈徳院(宗信)様為菩提、於千万(重豪側室)様より常念仏僧弐人重被召付、右利銀年々寺社御方より被成下候ニ付、渡方前条同断、

一銀四貫百八拾目
　右同断ニ付寛政十午年、於登世(重豪側室)様より常念仏僧弐人右同断、

　右者常念仏之次第委曲可申上旨被仰渡趣承知仕相糺申候処、当分人数都合拾人ニ而渡方等右之通御座候間、此段丈室承届申上候、以上、

『文政三年』
辰八月廿五日　　浄光明寺
　　納所
　　寺社御奉行所

4

覚

元文年中当寺前住寿門代、依願常念仏御免被仰付置候処、延享二年　浄国院様奉始、　御両殿様・御女中方御長久御延命、国家為御安全、島津周防殿より古銀拾弐貫目御寄附有之候、其後寛政年中　慈徳院様為御菩

提、　於千万様　於登世様

右両方様より重常念仏被召付、都合人数拾人ニ而、時替を以昼夜無怠慢相勤(令申)る事御座候、任御糺此段丈室承届申上候、以上、

『文政三年』　浄光明寺

辰八月　納所

寺社

御奉行所

浄光明寺開山宣阿説誠和尚(伝称、俗姓三浦氏丹後局令弟也、)住鎌倉、一遍上人以前道時衆也、　御元祖忠久公崇敬之厚故、受薩隅日封下国之日、宣阿亦倶共来由、建一寺号浄光明寺令居之云々、略ス、

忠久御母丹後御局三浦介息女也、比企藤四郎姉ナリ、三浦ハ義朝御最期時自害、依之藤四郎ハ頼朝公御近習也、

右在平山次郎右衛門八ノ帙

浄光明寺格護

萩原
天神社

右何年間誰様御建立之訳等不知、

一神領高銀等御寄附無之

一祭米五斗弐升五合

右毎年御物より相渡候、

会所　浄光明寺格護

(右同所梅林寺と唱候、)

草創不知、中興開山浄光明寺十三代雪渓和尚、

地蔵堂(山之口)　一宇

右享保九年辰六月より当寺格護ニ被仰付置候、

右寛保二戌六月、浄光明寺寿門書出候、

浄光明寺并末寺御寄進品等しらへ

一撞鐘　壱口

右御三代　久経公御寄附、

一御太刀　濃州草島住重長　長弐尺五寸八部

御拵有之、

一御腰物　無銘　長弐尺弐寸六部

御拵有之、

一御脇差　広正無銘代金三枚札有　長壱尺弐寸壱部半

御拵有之、

一対御鑓　長六寸五部
　御拵有之、

一御手鑓　正永　長弐寸五部
　御拵有之、

一御長刀　寿命　長壱尺六寸八部
　御拵有之、
　右六行　浄国院(吉貴)様御持せ御道具、

一御守刀　一腰
　御拵書壱通相添、

一御長刀　一振り
　右弐行玉泉院(吉貴女)様御持道具、
　右之外御筆之物等ハ数多有之候得共略す、

一打盤　壱ツ
　右加世田浄福寺へ　寛庭(貴久母)様より御寄附、

一中央卓　一脚
　但青貝
　右　大中(貴久)様より同断、

一唐金鑵子　壱ツ
　右　日新様より同断、

一阿弥陀如来　壱体
一脇立観音　勢生(守全)　二体
　右　日新様より伊作西福寺へ同断、

一御守刀　長七尺五部　壱本

一御文庫　壱ツ
　内御硯石并御化粧皿入、
　右　梅窓(忠良母)様御道具、伊作西福寺へ御寄附、

一阿弥陀如来　壱体
　但長三尺壱寸安阿弥作、
　右　龍伯様より国分常念寺へ御寄附、

一座像釈迦如来　壱体
　但鋳仏長四寸弐部
　右　伯囿(貴久)様市来御出陣首尾能被遊御帰城候節、伊集院龍泉寺へ御寄附之由申伝候、
　右之外略ス、

右当寺并末寺中御寄附品相しらへ申出候、以上、

浄光明寺

亥七月　　納所印

5

浄光明寺会中
海蔵院
江月院
護信院

右三ヶ寺寿門代依願、享保十七年子正月御目見寺被仰付候、

清水山　五道院　浄光明寺末寺 七人御賄料　本立寺

御切米七石

住職申渡虎之間、入院御礼中紙三束、

開山不知、中興開山覚阿智海和尚、是又年月不知、

一忠久公　忠時公　久経公　忠宗公　貞久公

右御石塔あり、

廟堂上梁文

清水山五道院本立寺者、創建自　忠久公至五世　貞久公之霊廟、而所以常修般三昧（寺昧）躰増長、、、、抑文治二年丙午　太祖領三州、而従相州鎌倉郡与宣阿上人倶来時、初此地営構浄光明寺、後于松峰右跡唯奉安置五代之祖塔矣、然元和年中七月十四日、　黄門侍郎家久公詣右廟悲荒廃、命国老伊勢氏貞昌牆廟庭焉、寛永十三年丙子九月廿一日、召松峰住持文峰於公所、使児玉氏利正告興建五代之廟堂兼精舎、十四年十二月落成矣、自爾已来漸歴星霜簷牙零落柱根腐敗、且矮屋而狭隘、故元禄三歴庚午訴之官家、聞達　太守左少将綱貴公焉、明年二月初四日、令国老肝付氏久兼・祢寝氏清雄、、、、五年五月八日、廟堂并中門・大門悉皆新成焉、、、、

元禄五年壬申歳五月、、、、

一開山不知　中興覚阿智海

浄光明寺ハ雖被創建、清水分内狭故被移今之松峰山伝称、然則本立寺開山可宣阿上人歟、雖然伝称故難決之、「陶焉点」
元禄十五年四月書出
一上略、始依府君五代之法名之道字而号五道院、後邦君光久公使野村氏元綱賜本立寺号、是所謂本立而道生之謂乎、中興開山者号覚阿智海和尚姓伊瀬知、寛永十九年壬午年十二月十三日遷化、自爾以来六世也、

一本尊阿弥陀　観音　勢至

但弥陀ハ恵心之作、

一境内除地 竪五十三間 横十五間

萩原山

開基不詳　中興浄光明寺十三代雪渓

浄光明寺末

梅林寺

一当寺者天神擁護之地也、灰(仄)聞浄光明寺十一代住持其阿肝付合戦之時蒙　厳命、使彼止戦成和、依此勲功萩原之内高百石賜之為以社領、雖然棄破勘落時成無何地、其後以　家久公之命創建一僧房令為連歌之会所、歳月久隔牆壁頽落柱根腐敗、因茲寛文三癸卯年当府中蒙勧化之免許、再興一宇荒廃者也、至于今笠著連歌十百韻月々興行之、謹奉祈国家昇平武運長久者也、

一天神　木像　作不知

一吉祥天　右同　作不知

一中将殿　右同

一御家臣　右同

右宝永八年卯二月書出シ、

一境内 竪四拾三間四尺　横拾壱間五尺

一神前池 竪拾弐間四尺　横拾壱間五尺

右弐行元禄十五午四月書出、

雲龍山

開山不知　中興其阿西嶽

浄光明寺末

花野村

福泉寺

浄光明寺十一世

元禄十五午四月書出、

一境内 竪弐拾弐間　横十四間

但浄光明寺高之内、

法水山

開山不知　中興廓然

浄光明寺末

比志島村

長伝寺

浄光明寺十六世

元禄十五午四月書出、

一境内 竪十六間　横十五間

廃跡

浄光明寺末

比志島村

東覚院

宝池山

小山田村

安養寺

『釈トモ』

慶安二丙寅年草創也、開山其阿龍泉寺二世

『其トモ』

中興覚阿浄福寺二世

『檀那河田某、法名慶阿弥陀仏、』

一本尊阿弥陀　運慶作

『一境内　竪三十間　横拾九間
右元禄十五午四月書出シ、』

瑞雲山　　臨済宗五山派京都東福寺末寺着座門首
開山文之　慶長七年創建　　大龍寺
一大中様(貴久)　龍伯様被成御座候地ニ而寺地ニ相成、　両公之上之字を取大龍寺与被号、　両公之御牌御安置、
一日本国中一派十刹之寺ニ而、　将軍家公文頂戴、
一御切米三拾石
右要用集しらへ、

瑞雲山　　臨済宗五派京都東福寺末寺着座門首拾七人賄料
御切米三拾石　　大龍寺
住職被仰付候節者、於敷舞台御家老申渡、　将軍家公文頂戴之寺格、

6
寛政五年丑四月申出候由緒書

一当寺開祖文之儀、国分正興寺在住之節より　中納言様(家久)
御師範申上、其外段々右勤之訳を以、慶長七年　中納言様思召ニ而、御城跡当寺御建立、　大中様　龍伯様之御法名御文字を以て、大龍寺与被号候、
文之遷化元和六申九月晦日、
一寺領現米八拾石被仰付置候、
一慶長八年文之出世被仰付候、
一東照宮台帖三通頂戴仕、于今国分正興寺格護仕候、
一右之通御建立有之、本寺東福寺へ末寺御願被仰越、東福寺龍吟庵より江戸僧禄(録)所金地院江被申越候処ニ新地御建立、殊ニ文之名高僧之故、金地院直末懇望申来候、然共法脈之因縁を以龍吟庵末寺、以来出世地寺格ニ相究及返答、其筋ニ相済候由、右之趣本寺へ文庫年間近キ事ニ而分明ニ相知居候、
一二代学之玄碩『正保四亥二月六日、六十九遷化』
右文之弟子ニ而後住被仰付、為出世被致上京候処、京都ニ而病死、
一寺領現米八拾石被下置候、
一三代一渓守栄『万治元戊八月十四日、五十才遷化』

一寺領現米五拾石
一地方ニ而高百石
　右之通被下置候、
右一渓、万治元年戊八月相果、夫より延宝六年迄廿余年無住、其内廃寺ニ罷成候儀、拾ヶ年余ニ而有之候、
一御牌并御寄進物、其外文之所持之書物類、御物ニ差上置候由、文之ニ付由緒有之家来・下人等ハ国分正興寺へ被召付置候由、
一四代日東祖木『延宝七年未二月入院、同十二月四日遷化』
右　寛陽院（元久）様御再興之　思召有之、日東儀者高山昌林寺住持ニ而候を被召出、住職被仰付候得共、寺家出来無之故、上町遊官仮屋江被召置候処ニ、三拾日未満ニ而相果申候故、寺領相究不申候、
一現米弐拾石被下置、財部正寿寺宗関江監司被仰付候、
一五代不門慈宣『貞享二巳九月廿四日入院　元禄七戌七月十九日遷化』
　右不門儀者　寛陽院様思召を以、本寺東福寺へ被仰遣候而、御招請之出家ニ而御座候、
一貞享二年九月廿四日下着入院、寺家無之故、寺社奉行島津守右衛門殿・惣奉行島津大学殿ニ而、客殿・書院其外普請方出来候由、
一寺領現米百石
　内弐拾石者元禄三年十一月十八日上京下着後御加増被仰付候、
一大門一宇
　右元禄二年六月、馬場并ニ有之候を八間内ニ引入、御再興有之候、
一元禄七年春之比、不門病気有之、病中為見計大島慶左衛門・篠原新左衛門・頴川伝右衛門被召付、且其比橘隆庵老も御国へ被下候付、御物より御頼之上見廻有之候段書付相見得候、
一白銀三拾枚
　右不門病気付、為養生料拝領被仰付候、
一同年七月十九日不門死去仕候処、没後之儀段々難有御尋有之、他借銀有之段も被聞召上、一銀弐貫三百目拝領被仰付候、御厚恩を以借銀（寺済）斎し方仕候、
一五代鑑司南源玄印
　右僧弟子ニ而、後住被仰付被下候様遺言之趣有之、達　貴聞候処、重而御見合を以可被仰付候間、鑑司

相勤候様被仰付候、

一現米真赤三拾石

右為堪忍料御仏餉込ニ被下置候、元禄七年戌九月より宝永三年戌三月迄、三拾三ヶ年（ママ）相勤候、

一六代宗玉荊山

一御米三拾石

右国分正興寺より兼帯被仰付、宝永三年戌三月より寛保三酉（亥）十二月迄、三拾七ヶ年兼住相勤候、

一七代関宗玄寮

右寛保二年戌十月十一日、広済寺より大龍寺を兼帯被仰付候へ共、同月　浄国院（吉貴）様思召を以為被仰出由ニ而、本寺向ハ如何有之候而も、御国ニ而寺格軽き寺より重キ寺を兼住ニハ不被仰付候間、大龍寺現住広済寺兼住ニ被仰付候、

一現米三拾石

右元禄七年より鑑司堪忍料之通ニ而御座候、

右之通申出候、

大龍寺鑑司

丑五月

善福寺

寺社奉行所

玄斗

浄土宗鎮西派京都智恩院末寺着座門首

不断光院

養泉山　無量寺

開山清誉上人　永禄五壬戌開基

忠良公　貴久公　義久公御相談之上御建立、

一実窓芳真大姉

慶長十二丁未二月朔日御逝去、　久保公　家久公御母堂、伊集院妙円寺塔頭芳真軒ニ御廟有之候、

一本尊阿弥陀如来ハ芳真大姉之為御影仏、　家久公御意を以、仏師康厳ニ彫刻被仰付御安置、仏体之内ニ御証書有之由候、

延宝六年戊午九月十四日薨去、

一将軍家宣公御実父甲府宰相従三位左馬頭綱重公

右御霊屋　吉貴公御建ニ而、正徳二辰九月十四日御牌御安置、且亦文化十四年丑　重豪公　思召を以、御再建被仰付候、

一高弐百石

右者　清揚院（徳川綱重）様御位牌御再建被仰付候処、当分御寄

附高弐拾石三斗弐升八合壱勺弐才被召付置、此節御
取揚高之内百七拾九石六斗壱升壱合八勺相重、都合
弐百石被召付候旨、文化十四丑年被仰渡候、

一住職交代之節者以前者達　貴聞、於敷舞台御家老衆よ
り被仰渡候寺格之処、文化十四丑年寺家御再建、寺格
着座門首、　清揚院様御別当職関東十八檀林格許容有
之、住持之儀増上寺人撰之上被申付、尤御国元出生堪
能之僧有之節者、彼御山中評儀之上住職可被仰付、且
向後御国元一派之寺院弟子関東修学ハ増上寺江掛錫候
様有之度、右之訳者寺社奉行中江茂増上寺被申達置候、
其通御許容被遊候旨　重豪公より御使者被為在御返答
候旨、文化十四丑九月被仰渡候、

一銭千八百弐拾六貫文

右御再興ニ付、三町中より寄附依願、御物御借入、
年々利銀御渡方有之候、

一不断光院寺中江　重豪公御寿像、不断光院増上寺御山
内源寿院失脚ニ而御安置申上度依願、御許容之上御物
御計を以、文政九戌年御造立有之候、且御神殿を奉崇
護国権現与度、天保四巳八月願之趣有之候処、願之通
被仰付候、

一護国権現　　不断光院

右者　大信院様御存命中御寿像御安置、御神殿与奉
唱候処、御逝去後、江戸高輪御屋敷内福寿亭へ御神
殿被相建、護国権現与被遊御崇候旨被仰渡候付、不
断光院儀も右御同様奉崇候様被仰渡度旨、天保四巳
八月奉願候処、願之通被仰付候、
右要用集しらへ、

浄土宗鎮西派京都
智恩院末寺着座門首
九人御賄料

養泉山　無量寺　　不断光院

高弐百石　『亮洲随筆ニ、永禄五年壬戌創建トアリ、』

本堂

本尊阿弥陀京都七条大仏師康厳作　一体

右実窓芳真様御影仏　黄門様御建立、　同公御書物
御本尊之体内ニ有之、慶長十三戊申四月九日ニ御納
ニ相成候、同年国老三原諸右衛門尉奉之命仏師、二
月十三日刻初、同六月廿八日尊像并御牌成就し、一
七日不断念仏開眼供養有之、細工奉行森喜右衛門、

当寺四代純誉代也、

一実窓芳真様御牌同人作一本

黄門様右同年月ニ御建立、

一家久公御筆横物　一幅

実窓様御一周忌之節、御追(寺憚)御句并短冊一枚有之、

奉和尊韻漢和之衆六人、短尺六枚有り、慶長十三年

二月朔日純誉代也、

一本堂

右者　日新公　伯囿公　義久公御代開山清誉上人下

国、永禄五壬戌年当寺御建立、其後寛永元甲子八月

朔日今之本堂御造立有之候由、

一鎮守春日大明神

右者文禄五年丙申六月廿一日　近衛様御建立、三十

六人之歌御筆被懸神前候、于今あり、

寛保二年丁戌六月、不断光院成誉より書出候、

本山智恩院末
浄土宗

養泉山　無量寺　不断光院

一寺御建立并開山清誉上人来由、且又寺領之事、右清誉

上人進藤筑後守殿弟ニ而、則桜之御所不断光院之住持

也、然ニ　近衛殿下龍山(寺前久)公当国江御下向之節、為御使

天文之末弘治之始当国へ被罷下候儀再三也、其節　日

新公　伯囿公　義久公御相談ニ而、喜入摂津守を以被

仰出候趣ハ、当国へ浄土宗未流布候間、願者上人可有

止住此地、可然者一宇御建立寺領等相応ニ可有御寄附

旨蒙　仰、其旨　龍山公江被申上候処、殿下ニも御喜

悦ニ被　思召上候、依之永禄之始当所冷水ニ先仮ニ結

草庵、其後当院延慶寺捨廃之寺地ニ永禄五年壬戌御建

立也、本住華洛之不断光院之号を移而当院亦号不断光

院、寺領之事帖佐餅田波留之内六町六反、鹿児島福沢

諏方免弐町、都合八町六反被遊御寄附候、然処ニ天下

一同寺社領毀破勘落ニ付、当院二世聖誉代ニ右之知行

被召上候、古名寄帳于今格護仕候、当時ハ纔高弐拾石

余ニ而候、右清誉上人ハ歌道ニ相達、御歌之判をも被

仰付、依御取持拝領物数多有之候と相見得候得共、今

ハ其品物無御座候、

一喜入摂津守殿へ上人より被差下候書翰(寺物)、

追而申候、拙者下国者来春者必と存条、弥御取成

とも憑存候、道場へも御次ニ者御雑談可給候、

就平野丹後殿上洛、従　上様　御台様江之御霊服并沈香等慥ニ進上申候、則御返事御座候、将又申候間、法鏡寺殿正興寺事、以増々御算用候ハん由候つれ共、種々申調相果申候、近比御届之儀祝着候、依御所より茂重而御礼可被仰由候、急候而期後音候、恐惶謹言、

九月四日　　清誉判

喜入摂津守殿

御宿所

一鎮守春日大明神勧請之事　近衛信輔公当国坊津へ御配流之内、当所堀之内於仮御所為御帰洛御祈祷、春日大明神被遊御勧請候ニ付一七日御参籠候処ニ、其満日御帰洛御書致到来、御願成就之由、御喜悦不斜候、然者此宮俗家ニ被相立置候儀、如何ニ被思召上候哉、当院鎮守ニ可崇置旨御意有之、文禄五丙申六月廿一日坊津一乗院快守(忠思)法印勧請ニ而、寺内ニ致遷宮候(ママ)被召付置候、其上三十六歌仙絵師等薩へ被仰付、彩色迄も被加御下知候処ニ、御滴(謫カ)居中彩色不相済候付、文禄五年七月十日御当地御発駕御帰洛候時、志布志迄等薩被召列、於彼地致成就、則三十六首を御直筆ニ被相記御寄進、于今格護仕候、右仕合故　信輔公御自筆之御書迄も被下置、皆以当院之宝物也、且亦右神領之儀、慶長十九年之御支配迄ハ、吉田本名之内四石五斗被附置候得共、其後御領国三部一上り地之節、皆共ニ被召上候、四世之純誉代、然共、十一月之祭ハ旧式之通、于今無懈怠相勤候、但右神領古名寄帳于今格護仕候、

8

一近衛信輔公御書、且梅仙軒江近衛植(植)家公御書、是又格護仕候、

線香令祝着候、猶宗岩可申越者也、

閏三月廿五日　　杉「信輔公也」

不断光院

9

於薩摩国渡唐船諸役之事、不相紛様ニとの事承候、無案内之人共中村与三左衛門尉事、不混自余之御被官人之由候、殊子□ハ宗門被官之事候半、無疎意様ニと不

断光院進藤左衛門太夫可申下旨堅申付候、謹言、

八月二日　　在御判（植）「植家公也」

梅仙軒
まいる

一先年被召上置候寺領高、運誉願を以指宿十九町村木下屋敷高五拾石七斗余被付下候、其後元和三年ニ為御加増、帖佐餅田波留之内高四拾三石被召付候、然処ニ四代純誉住職中右高鎮守領迄一所ニ被召上候、尤古名寄帳于今所持仕置候、右運誉代ニ当院山号窺本山被名養泉山候旨、旧記ニ相見得候事、

四世純誉住職中

一慶長年中　家久公当院へ　御光儀再三也、或時被　仰出候者、浄土奥旨可被遊御伝受之旨蒙　仰候、右ニ付而者、昼夜六度垢離御取御修行有之筈ニ候処ニ、ヌルメヲ被遊御掛、純誉御名代ニ垢離取二七日之行業御成就畢而浄土三国伝来口授心伝之血脈被遊御相伝候、血脈御法名奉号大誉大居士と候、其後　御光儀之節、蒔絵之（蒔）御香箱　珠数一連純誉拝領為仕由、書付ニ相見得候得共、右拝領之品物今ハ無御座候、

一慶長十二丁未二月朔日　家久公御母堂御逝去、御法名奉号実窓芳真大姉候、同十三二月朔日御一周忌之節家久公当院江被遊　御光儀　御意候者、伊集院芳真軒ハ程遠被　思召、当院へ被遊　御仏詣候由、尤芳真軒へ　御代参紹益老ニ而候、其節芳真様御追善之御句并御歌被遊御直筆純誉拝領仕候、右被遊御追善候由　御意承、御供之衆も六人奉和尊韻候、漢和皆心于今格護仕候、且又　御意候者、伊集院芳真軒ハ遠方ニ而、節々難被遊　御仏詣候間、　芳真様御影仏阿弥陀如来并御位牌被遊御建立、当院へ御安置之由被　仰出、其趣三原諸右衛門殿御承ニ而、細工奉行森喜右衛門へ被仰付、同二月十三日より京都大仏師康厳法印刻初、同四月九日御影仏御身体ニ　家久公御直判之御証書被籠置候、純誉も阿弥陀経并御本尊興起籠置候、同六月廿二日御入仏、従　公義開眼供養、供物等段々被仰付、一七日別時念仏中日ニ相当、　家久公奥様御一所ニ被遊御仏詣候付、御膳進上仕候、其時　奥様より御打敷為被遊御寄進由候得共、今者無御座候、同月廿六日ニ御願成就、自夫後二月朔日、御在国之節者被遊　御仏詣

候由、旧記ニ有之候、右仕合候故、到于今二月朔日御
正忌日ニハ、寺内僧侶聚会仕、御法事相勤申候、
一右御本尊御身体ニ為被相籠置御証書等左之通、

10

無量寿仏全軀一体、使七条大仏師康厳彫刻焉、以因
不断光院之現住浄蓮社純誉上人奉寄附之、仍為現世
安穏後世善処也、
慶長十三年四月九日
家久公御判

（本文書ハ「旧記雑録後編四」四五〇号文書ト同一文書ナルベシ）

11

実窓芳真大姉当一周忌、(旧別)恨又新拭却涙、(旧痕)作句書之
▽(旧)以呈和尚、而述追悼云△、
葉尽孤村見夜灯
慶長十三年二月朔日　「家久公」御判
不断光院

（本文書ハ「旧記雑録後編四」四五二号文書ト同一文書ナルベシ）

12

ありかたき弥陀のおしへ(旧を)のつとめ行
法のまとひは道しありけり　家久
外ニ家久公
あたなりと色(旧名)にたつ花の盛さへ
見はてぬ夢の世こそつらけれ
しほりつる袖のなミたは小車の
めくりあひぬるけふのかなしさ　紹益
夢とのミすきし日数のけふに来て
春に二たひ袖ぬらすかな　忠重
日移月往歳日層　追憶涙痕拭尚増
旧恨新然無処移　終霄独醒向残灯　貞昌
いつのまに送りきぬらんふち衣
また二月のけふの悲しさ　景親
あたにミし花は散ぬるこその春
又もや咲とおもふはかなさ　一和
奉和　実窓芳真大姉一周忌之追悼之尊句臣呈尊霊一
前云爾、
生死去来有孰応　唯看傀儡弄于棚
別然和涙朦々月　了々心空挑一灯　安意
一義久公　義弘公　芳真様へ御追善之御歌、御筆ニ而者

無之候得共左ニ記ス、且四人之歌も相記候、

龍伯公

かの実窓芳真大姉こゝ地れいならす病床にふし、日数をふるほとにいれうを求め、有験の僧を尋ね、いのりかちしさま〳〵なりしかと、つねならさるならひのかれかたく、世をはやうせしを悲ミ、人々歌たてまつるにもよほされ、一首をつらね霊前に手向るものならし、

御仏の跡したひてやさかりなる
はなも散行二月の空

惟新公

南　なかそらにすみのほりゆく月影の
名残かすめる袖の雨かな
無　むかしとてとをくハあらぬ跡なから
ありしにかハる春のかなしさ
阿　あたし野の名におふ草の枯生さへ
もえいつるときにあひぬるものを
弥　みちしるへするやミなミの岸ならし
すゝしくさそふ船のをひ風
陀　たきのをと松のあらしも声そへて
身にしミまさる法の場かな
仏　ふかき夜に鏡（鐘カ）のひゝきのさえ〳〵て
うきよの夢とさめはてにけり

大炊助久正

南　なかき日にしつこゝろなくちる花は
おのつからなる時やしるらん
無　むかしにもかわらぬ影や二月の
なかはの月の雲かくれしは
阿　あさ茅ハらかすめる露の玉ゆらの
きミまつさたになき世かなしも
弥　三つの道すゝしき法にひかれてや
おもなの家をいつる小車
陀　たちのほるけふり身にしむ鳥へ山
いつくのたれかよそに見てまし
仏　ふる寺のゆふへいかにとゝひよれは
さえたるかねの声ハかりして

追膳（印善）

わかれつる仏をしたふきさらきの
なけきのほとのおとりやハすれ　宗可

あちきなやもろこしならは夢よりも
焼香に見えぬなき玉のかけ　　元巣
なき跡をあわれかたみの夕けふり
しはしは残せ春のやま風　　遊浦

（本文書ハ「旧記雑録後編四」四二三号文書トホボ同文ナルベシ）

13

一寛永二十一年、六代宅誉代本山へ当院寺号相願候処左之通、

薩摩国養泉山不断光院寺号之儀、依懇望則名無量寺、近比珍重之至、不可有尽期者也、仍如件、

本山智恩院

寛永廿一年十二月十六日　　円誉在判

不断光院

当院宝物

近衛様御筆（文字天神之絵御讃有、左ニ記、）

天下梅華主扶桑文字祖
梅あらはいやしきしつかふせ屋まて
我たちよらん悪魔しりそけ

慶長十四年乙酉　　杉

一宝永八年卯正月、元祖円光東漸大師五百年法事ニ付上京之処、進藤刑部太夫執持ニ而、　摂政様　左大将様両御所江御目見仕候、其節摂政様御懐無上法院様為御菩提御忌日ニ被遊書写候心経、薩州不断光院ハ由緒有之寺之事ニ而可被遊御寄附旨御意候而、刑部太夫御取次ニ而御筆之御経頂戴仕候、証書左之通、

14

般若心経一巻

摂政太政大臣家熙御筆

右奉為無上法院毎忌日可被書写也、今度薩州不断光院在洛候序、被寄附屹、仍為後証及此矣、

宝永八年正月廿八日　　長光判（之カ）

御僧（寺俗）名左馬頭綱重公、延宝六年戊午九月十四日、

一清揚院殿贈正一位大相国

右御牌正徳二年辰　吉貴公御建立也、

15

一享保六年丑、当院春日社江従　近衛三御所様白銀壱枚ツヽ、都合三枚被為遊御奉納候由ニ而、願王院僧正方江御伝達ニ而被差下候由内々被仰聞候、春日社之事太閤へ申上候処ニ、御感心之御事御座候、今度貴院御下向ニ付、銀子壱枚御奉納被成候、可然様ニ御執計可被下候、以上、

正月廿七日　　進藤大蔵大輔

願王院僧正様

16

薩州春日社被加修覆之由達　御聞、白銀壱枚宛従前摂政殿・右大臣殿御奉納被成候間、不断光院へ御伝達可被成候、以上、

正月廿七日　　中川石見守
　　今小路治部大輔（寺大）
　　進藤刑部大輔

願王院僧正

侍者御中

一当院所帯方続兼候付、段々御訴申上候処ニ、享保十三年申十二月為続料銀子三貫目被下置、寺社奉行所御支配ニ而年々利銀被成下候、

一寺高弐拾石三斗弐升八合壱勺弐才

但誰様より何之比御寄附共不相知候、

一続料銀三貫目

清揚院様　御牌前年中渡方

一文銀三百四拾七匁三分壱り六も

一真米五石七斗五升弐合弐勺四才

一種子油四拾五盃

右之通年々相渡申候、

不断光院

（マ　マ）
寛保二丁戌六月　　盛誉

17

奉造建　清揚院殿贈正一位大相国公牌堂薩州養泉山

正徳二年歳次壬辰九月日

大大願主薩隅日三州太守兼琉球国主左近衛権中将行従四位上源吉貴朝臣

遷座供養道師不断光院十一世信蓮社楽誉上人詮阿大和尚位観炯

奉行　島津帯刀藤原仲休
　　種子島弾正平久基
監営　向井市之丞惟宗友貞
判営　大山平右衛門源行好
棟梁　野崎喜左衛門藤原兼重

（本文書ハ「旧記雑録追録三」八五の一号文書トホボ同文ナルベシ）

一米五石七斗五升余
　右清揚院様御仏餉料
一銀九拾六匁壱分余
　右同、御霊膳方年中入目料
奉勧請春日大明神
　文禄五年丙申六月二十一日
　　勧請導師一乗院快忠法印
右之通鹿児島仏閣帳ニあり、

不断光院

18

右寺格着座門首被仰付、席順福昌寺次、
右之通　大御隠（重豪）居様思召を以被仰付候条、此旨寺社奉行へ申渡、可承向へも可申渡候、
「文化十四丑」九月　安房　寺社奉行江

不断光院之儀
清揚院様御霊屋御造営被成置候処、此節御再建ニ付無御差支候ハヽ、当宗門之法例を以、増上寺より人撰之上住職被申付度、尤御国元出生堪能之僧有之節者、評議之上可被申付、且向後一派之寺院弟子関東修学ハ増上寺へ掛錫候様有之度、左候而、右訳ハ一派之寺院江被申渡置候様可被致、寺社御奉行中江被申達候旨之趣とも、別紙之通方丈より被申出、其通御許容被遊候旨、従　大御隠居様御使者を以被為在御返答候段申来候、此旨不断光院へ申渡、別紙書付可被渡置候、
　右可申渡候、
九月　安房

薩州
不断光院

右院

清揚院様御霊屋御造営被成置候処、御荘厳向も御手薄、御崇敬ニも相拘、栄翁(重豪)様ニ茂御不本意之旨先達而被仰渡候趣、方丈ニも御尤ニ被存候、不断光院儀者於御当山茂御宗門、殊清瑞(揚)院様御霊屋被為在候御儀、兼々被相含儀茂有之候得共、時節不宜候哉、自然延々被罷過候、然処　栄翁様御再建之御目論見、方丈始一宗檀林ハ勿論、御当山之衆徒何れ茂厚御随喜申上候、右ニ付、御宿坊源寿院看坊円成江御再建取扱掛御相談之上被申付、同人御国元へ差越、御霊屋并御供所向其外共再建、御修覆出来之上致帰山具ニ申達、方丈ニおひても御同慶ニ被存候、就而ハ右院住職之儀　清瑞(揚)院様御霊屋御守護職と申、且此度結構御再建、御崇敬向相整候上者、御国家御繁栄御祈祷、旁已来相応之僧住職為致度方丈被存候、於御国許御差支相成不申候ハヽ、当御宗門之法例を以御当山人選之上、住職可被申候、以来御国元出生堪能之僧有之節ハ、評議之上住職可被申付候、向後御国元当御宗門一派之寺院弟子、関東修学者御当山掛錫候様有之度被存候、弥無御差支候ハヽ、一派之寺院へ者此方より申渡候様可被致候、此旨寺社奉行中へも被申達置候間、今一段不断光院寺禄格式共相立候様御賢意被成下、宜御沙汰御座候様、御執成御頼被申上度候、以上、

六月

追加、於　公辺諸宗御取扱之儀者、天台・浄土・真言等与次第ニ御座候へ者、右之御振合ニ可被仰付哉ニ奉存候得共、禅宗之儀者於御国表ハ格別之御訳柄御座候趣被承及候、就而者天台・禅宗・浄土与申次第、御取扱被下候様、是又添而御頼可申入旨方丈被申付候、以上、

一高百七拾九石六斗七升壱合八勺八才

不断光院

右者　清揚院様御位牌被建置、先達而御再建被仰付候処、当分御寄附高弐拾石三斗弐升八合壱勺弐才被召付置候旨、此節高之内より右之通相重、都合弐百石被召付候条、此旨寺社奉行へ申渡、御勝手方江茂可相達候、

九月

安房

称名院

右文政四年巳　御目見地寺格被仰付候、

不断光院塔中
宝樹院
知月院

右両寺天保三辰年　御目見地ニ被仰付候、

右要用集しらへ、

一延宝六年戊午九月十四日薨去

将軍家宣公御実父甲府宰相従三位左馬頭綱重公

右御霊屋　吉貴公御建立ニ而、正徳二年辰九月十四日御牌御安置、且又文化十四丑　大信院様思召を以御再建被仰付候云々、

不断光院塔頭
称名院
永春庵
宝樹庵
智月院

右四ヶ寺者、四代浄蓮社純誉上人住職中慶長年間、家久公度々不断光院江　御光儀之節、浄土宗奥旨御伝授被遊候而、大誉大居士と御法号をも奉り候、右等之節不断光院計ニ而塔頭をも造立可仕旨　上意有之、建立仕候由申伝候、

不断光院塔頭
孝源院

右六世宅誉代慶安二年己丑七月、比志島前紀伊守国貞内室一宇建立之依願望造立、故に不改法名号孝源院候、

右同末寺冷水
専称庵

右六代宅誉上人不断光院住職中明暦元未七月、隠居地之願申出、寺高ニ坂元名之内寺冷水ニ御繰易被仰付、寛文三卯八月隠居所ニ建立、

右鹿府仏閣帳ニあり、

不断光院世代

一開山浄蓮社清誉上人芳公

山州京都産、本山智恩院弟子、同所不断光院住職、然天文末弘治始下向当国、永禄五年壬戌就当院御創建住職、天正十壬午隠居、同十九辛卯十二月十三日死、

一二世三蓮社聖誉　善心

京都産、清誉致随身下向当国、天正十年依　公命当

寺入院、文禄五庚(丙)申閏七月十八日死、

一三代徳蓮社運誉上人是頓

肥前島原産、同国高来郡正行寺聖主弟子、天正十二甲申年同国島原法然寺住職、同十三年肥後合志郡光明寺住職、同十五丁亥首夏之比日州飯野参向、同十九年栗野建立一宇号願成寺、文禄四乙未年隅州帖佐再転就願成寺御建立住職、慶長元丙申十一月十八蒙貴命当寺入院願成寺兼帯歟、同十二丁未継筑後善導寺廿二世之席住居四年、同十五庚戌臘月晦日帰向隅州加治木、同十六年同邑再就本誓寺御建立住職十六年、寛永三丙寅正月十五日死、

一四世浄蓮社純誉　本心

肥前産、運誉弟子、慶長十二年当院入寺、寛永六年隠居、同十九壬午二月十四日死、

一五世深蓮舎真誉　能哲

豊後産、運誉弟子、寛永六己巳当寺入院、同十八年隠居、同廿一甲申十一月十六日死、

一六世生蓮舎宅誉　舜泰

鹿府産、純誉弟子、寛永十八年当寺入院、寛文三癸卯八月冷水専称庵江隠居、同六戊(丙)午八月廿五日死、

一七世照蓮社寂誉　無伝

鹿府産、真誉弟子、寛文三癸(歳)年十月当院入寺、延宝六戊午十月専称庵へ隠居、貞享三丙寅五月廿二日死、

一八世弁蓮社成誉　文量

鹿府産、宅誉弟子、延宝六年十一月朔日当寺入院、元禄辛未七月専称庵へ隠居、同七年甲戌七月十四日死、

一九世隠蓮社顕誉　冏鑑

鹿府産、寂誉弟子、元禄四年五月蒙命、七月十六日当寺入院、同十五壬午二月廿三日専称庵へ隠居、宝永五己(ママ)丑四月廿四日死、

一十世相蓮社承誉　了春

鹿府産、寂誉弟子、元禄十五壬午四月蒙命、同七月廿九日当寺入院、宝永六己丑四月廿七日死、

一十一世信蓮舎楽誉　観烟

右加治木之産、本誓寺棟誉弟子、宝永六癸(歳)年七月当寺入院、享保二年丁酉十一月廿一日死去、

一十二世澄蓮舎誠誉　泰冏

隅州柏原之産、内之浦玄忠寺(寺喚)嗹誉弟子、享保三年十二月廿八日当寺入院、同八年十二月廿八日専念寺内ニ隠居、同九年八月十九日死、

一十三世本蓮舎誓誉　良察

鹿府産、顕誉弟子、享保八癸卯十二月廿八日当寺入院、同十九(寺年)甲八月廿九日死、

一十四世等蓮社成誉　泰堂

加治木産、本誓寺棟誉弟子、享保十九年十一月廿五日入院、

能学寺由来之覚書

一今之武彦兵衛先祖武五郎右衛門入道寿閑居士宅地之内寺地ニ被出、武氏之牌所ニ志南林寺僧南的蔵司住持ニ約諾、寛永十六年卯南的僧より山を開草庵を作調、多年住持職被勤、武氏之位牌安置有之、寺号松隠軒と被付置也、

但南的僧于今荒田村誓光寺住持職被勤、委曲存知ニ而候事、

一承応二巳年、当所諸士不限貴賤以奉加松隠軒造立之、京都天寧寺住持(寺善)差立和尚より東郷肥前入道重位兵術就相伝、和尚并重位(吉カ)之両牌安置有之、寺号能学寺と被改之、重位之法名能学俊芸庵主と有之候故、能学寺与被付候、住持南的僧被勤候事、

一能学寺為仏餉料、前之肥前重方私領之内、高廿石之納米毎年寄進有之、武氏・東郷氏両檀那無別儀候事、

一能学寺就破(寺壊)懐、延宝六年午、御当地諸士不論貴賤并諸外城人数、示現流ニ志之人、以奉加出銀四貫弐百三拾目余有之、此内弐貫七百四拾目余寺家再興并万入目ニ払、残銀壱貫四百八拾目余有之、此以残銀往々為寺続買地可有之相談也、附東郷家より被付置知行弐拾石ハ、今の肥前就身上逼迫、仏餉料被続儀難成決定候、雖然右奉加残銀有之、向後能学寺可為相続事、

一右寺家再興之時節、寺地御免許之御断武彦兵衛より住持正純長老へ被申入、此旨福昌寺へ被申上、方丈より公儀江御披露御座候処、願之筋ニ永々寺地落着候旨被仰出、御竿入壱石八畦四歩ニ相極安堵候事、

一当時之住持慈念蔵(年カ)司福昌寺より延宝九酉年二月入院有之、于今住職被相勤候事、

右（寺職）之儀、南的蔵司于今堅固存知ニ而候、両度之寺家作事之儀者、其折節記録ニ有之、此節見合書認也、

貞享三年丙寅閏二月九日　　堀四郎左衛門入道宗勲

能学寺

経囲山　　宝成就寺　　真言宗小野方京都醍醐三宝院・嵯峨大覚寺両末寺大覚寺院家尊寿院兼帯着座門首　大乗院

高八百七拾五石三斗四升五合四勺九才

開山俊盛法印

一貴久公天文年中御創建、御祈願所御定候、

一伊集院宝荘厳寺之儀、応永廿五年　久豊公御代宝荘厳寺御創建、尊像・書籍等御安置、小野嫡流始祖と御定、薩隅日三州之法務支配被仰付候、　忠治公御代宗門年々繁栄、毎年十月十四日門徒集会、般若理趣之真文読誦仕来候処、　貴久公御代、遠方御祈願之御志趣　思召難叶、天文年中本尊并書籍・法流迄被召移、大乗院与被号、国家之御祈願所と御定、当分之門前地ニ御建立有之、第三世久誉代只今之地ニ被引移置、宝永年中本堂・（寺護）諸摩堂・鐘楼・仁王門等都而御建立有之候、

一右院永々僧正地被仰付、寺格不断光院次被仰付置候得共、嵯峨御所より無御拠趣有之、勅願所被仰出候付、思召を以寺格南泉院次ニ被仰付候、南泉院同格被仰付候旨、文政八年酉九月被仰渡置候、

但南泉院・大乗院・一乗院三ヶ寺共、僧正之節者順席可為先官旨被仰渡置候、

一御影殿　斉興公御法体御像

思召を以文政十亥年御安置、

一銭弐百六貫六百弐拾文

右御供物料として年々御納戸蔵より御渡方有之候、

一勅願所ニ而候、

一松齢様御肖像　御一体

右従　義弘公、泉州境居住田野辺道与江　御直ニ拝領被仰付置候処、摂州住吉辺ニ而草庵致建立、号松齢院と御安置申上置候処、其后道与子孫京都相国寺之内林光院へ又々御安置申上置候段　斉興公被　聞召上、此度右御肖像・御画像江御引替被遊御取返候、尤　松齢様御寺伊集院妙円寺之御事候得共、別段厚思召之訳被為在、御手許御取計ニ而此節　御帰国之

上、大乗院御内仏殿へ被遊御安置旨、於敷舞台大乗院僧正江被仰渡候、

天保十二年十一月九日

大乗院住持世代系図

一開山俊盛
右元文年中ニ伊集院庄(荘)厳寺(等天)より入院、永禄九年丙寅三月十一日卒去、

一二代頼岳
十二月廿日入寂、

一三代久誉
天正十一年十月十二日卒去、川上因幡守子息、奥之院墓所石壁記之、

一四代盛久
安養院より入院、天文十丑(ママ)年六月六日死去、

一五代盛秀僧正
慶長拾九年五月廿八日死、

一六代頼真僧正
安養院より入院、寛永五年戊辰六月十八日死、

一七代盛宥
安養院より入院、坊中威光院へ隠居、寛永七年九月廿八日死、

一八代頼長
曽於郡花林寺より入院、寛永十一年戌閏七月二日死、

一九代快性
安養院より入院、寛永十四年丁丑七月廿四日死、

一十代祐尊
寛永十七年庚辰五月八日死、

一十一代盛住
安養院より入院、明暦元年九月七日死、

一十二代覚山
一乗院より入院、谷山自性院へ隠居、延宝二年甲寅正月十七日死、

一十三代政真僧正
安養院より入院、寛文二年壬寅三月廿四日死、

一十四代真浄
安養院より入院、寛文四年甲辰正月八日死、

一十五代快意

一乗院より入院、寛文十一年辛亥二月十一日死、

一十六代照盈

田布施金蔵院より寛文十年戊入院、住職十六年、坊中西寿院へ隠居、元禄十五年壬午正月廿九日死、

一十七代覚恵

一乗院より貞享二年丑冬入院、住職十五年、元禄十二卯三月十六日潮音院へ隠居、正徳三年癸巳三月廿四日死、

一十八代覚雲

安養院より元禄十二年卯三月入院、住職七年、宝永二年二月文殊院へ隠居、正徳元年辛卯八月十二日死、

一十九代騰雲

一乗院より宝永二年酉二月入院、住職五年、宝永六年丑十月松本寺へ隠居、同七年寅四月廿七日死、

一二十代快存僧正

一乗院より宝永六年丑十月入院、正徳元年卯住職御断上京、享保十九年（ママ）甲辰八月廿九日死、

一廿一代盛寿

抱真院より正徳元年卯二月入院、同二年辰十月廿八日隠居、享保十三年申十二月十七日死、

一廿二代亮雄

安養院より正徳二年辰十月廿七日入院、同五年未十二月十一日死、

一廿三代大住

安養院より正徳五年未十二月入院、享保二年酉十二月廿六日隠居、同三年戌二月九日死、

一廿四代〔王超〕（寺玉雍）

安養院より享保二年酉十二月廿六日入院、同十年巳十一月四日死、

同巳十一月より午七月迄、院代盛厳相勤候、

一廿五代尭周

一乗院より享保十一年午七月廿六日入院、元禄（文）二年巳五月八日智恵光院江隠居、寛延三年庚午十二月十五日死、

一廿六代盛厳

抱真院より元文二年巳五月八日入院、延保（享）二年丑四月廿三日善行院へ隠居、宝暦（寺二）二年癸酉六月九日死、

一廿七代覚門

安養院より延享二年丑四月廿三日入院、寛延二年巳十月廿五日千手院へ隠居、同三年午十月廿九日死、

一廿八代覚応

安養院より寛延二年巳十月廿五日入院、宝暦二年巳(申)十月七日死、

一廿九代実畔

安養院より宝暦三年酉二月十一日入院、同四年戌十月十七日死、

一三十代(寺覚伝)

曽於郡花林寺より宝暦四年戌十二月三日入院、同八年寅十一月十五日死、

一三十一代尭然

宝持院より宝暦十年辰正月十五日入院、明和七年未(寅)三月十八日死、

一三十二代恵峰

京都より罷下、明和七年寅十月朔日入院、安永九年子正月十一日智恵光院へ隠居、天明七年未十月十日死、

一三十三代覚弁

安養院より安永九年子正月十一日入院、天明七年未八月廿五日福蔵院へ隠居、同年九月十九日死、

一三十四代盈仙

安養院より天明七年未八月廿五日入院、寛政七年卯十月廿五日西寿院へ隠居、同八年七月七日死、

一三十五代義岳

安養院より寛政七年卯十月廿一日入院、同十二年申十二月朔日智恵光院へ隠居、文化二年丑十二月二日死、

一三十六代

曽於郡花林寺より寛政十二年申十二月朔日入院、享和三年亥六月三日松本寺へ隠居、文化四年卯正月十日死、

一三十七代覚宥

安養院より享和三年亥六月三日入院、文化二年丑末吉千眼寺へ隠居、

一三十八代寿芳

安養院より文化二年丑閏八月十五日入院、同八年未八月二日死、

一三十九代権僧正覚昌
一乗院より文化九年申四月六日入院、文政八年乙酉正月廿七日死、
一四十代正僧正実応
右智山留学二十ヶ年余、集儀職ニ而、京北野清和院へ住職被仰付権僧正任官、然処蒙　国命、文政八年乙酉八月廿二日於京都当院住職被仰付、同十月十日夜正官転任、同十二日当院儀永々勅願所并僧正地蒙勅許、前代稀有之規模、同年酉十一月四日京都出立、同十二月朔日入院、
一四十一代（寺号満）
天保十四年卯十一月十三日曽於郡花林寺より入院、弘化三年丙午於京都僧正任官、

護国山　大楽寺　真言宗門首　安養院
高百九拾九石九斗九升七合四勺九才
一初東福寺号　開山并開基年月不詳
一中興開山鑁阿　貞和年間改号大楽寺安養院
一氏久公御代信州諏訪大明神を鹿児島ニ御勧請、宗社与被成御崇候時、此寺御修造ニ而別当職ニ被補候、
一大乗院末寺ニ而候処、古来より之御寺諏方社別当職をも相勤候訳を以、文政八酉十一月門首寺順山内寺次ニ被仰付候、左候而、住職交替之節ハ以来外門首同様達貴聞、於敷舞台御家老申渡、
右要用集しらへ、

護国山　大楽寺　大乗院末寺諏方社別当七人御賄料　安養院
高百九拾九石余
住職虎之間申渡
一上古ハ東福寺惣持院と為申由、
一寺高上代者七百石有之候由、然共先師長寿院盛淳代相減、当分寺高右之通御座候、
一開山鑁阿上人
右上人事越前国一乗之人ニ而、正五位下畠山弾正少弼季位（随）康永三年甲申被請候由、記録見得候、
一開基者御六代　氏久公東福寺城江　御居住之時、御家為守護神薩州出水郡山門院之諏方大明神を当所へ御引移、宗廟与御崇之砌、別当寺為御祈願所御建立、鑁阿

上人を以開祖与被成候旨見得候、年間者不分明候、諏
方大明神当国江御請下之事、　貞久公御当家為守護神
信州之本社より出水郡山門院へ御勧請之由、左候而、
貞久公鹿児島之郡司矢上氏を御退治被成、鹿児島を
氏久公江御譲有之、当地江御引移被成候節、右山門院
へ御勧請与申事ニ御座候、
一御文書拾九通
　但貞久公より　義弘公迄之御書
一諏方鳥井額　近衛家熙公御筆
　右綱貴公御寄進
一阿弥陀如来　但摸鋳像
　右　忠久公従信州当国へ御下向前、善光寺阿弥陀如
来　忠久公御夢中ニ影現有之御告ニ、君遠国江御越
之筈也、我を同道可有之由、両空(寂慶)依御夢想如来を摸
鋳被成、当国江御守被遊候由、
一山王社　当分領分西原村
　右　忠久公江州坂元之山王権現御請下と見得申候、
年間不分明候、
右之通寛政五年丑四月廿三日安養院義岳申出候
事、

20

一御太刀　一腰
　粟田口近江守忠綱作
　吉貴公御寄進之訳左之通、
　　献上
正一位諏方大明神
御太刀　一腰(近江守忠綱)
右於江府西之丸御安産依宿願成就、奉奇(ママ)進者也、仍
状如件、
宝永四丁亥
　七月廿六日　　少将吉貴御判

（本文書ハ「旧記雑録追録二」二四五九号文書ト同一文書ナルベシ）

一刀　一腰(相模守藤原兼安長弐尺五寸位)
　奉寄進島津新八郎久馮
　寛文十弐年六月吉日

21

（花押）「スレテシレス」

宛給　むれ所園一所事
　尺迦太郎所
右園者為荒園之間、明年者社役之公事料ニ用途三百文
百姓之中ニ可出之、桑代ハ何方可(旧被)予令耕作、桑出来候
時者可有桑実検、所当同可(旧被)予宛、用途者可任先例、仍
下知之状如件、
　嘉元三年閏十二月廿九日
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一一〇一号文書ト同一文書ナルベシ）

22
禁制
　鹿児島東福寺事、山臥三川房時差四至境、条々令禁
断処、近年有違犯事云々、
一草木採用事
一放入牛馬事
一殺生禁断事
右御内被官之輩内、於(旧恩)息足者可被分召所領三分一、無
足之仁者百日止出仕可令停止麑島経廻、至下部者捺火
印可流遣(旧硫)流黄島、於郡内甲乙人等者可為三貫文過怠也
者、守此旨、堅可令禁制之状如件、
　文保三年二月五日　　（花押）「忠宗公御判也」
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二五〇号文書ト同一文書ナルベシ）

23
麑島東福寺々中山野草木採用及殺生禁断、大犯人等以
下条々事、去応長元年・文保三年故殿御下知訖、任彼
(旧状)杖不可有違犯之儀、若不拘制法之輩者可被処(旧重)置科之状
如件、
　元亨三年十二月十一日　　（貞久）（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一三八四号文書ト同一文書ナルベシ）

24
　（花押）
大隅国向島西方奉河原道勝安置(旧香)普福寺薬師如来之敷地
并仏聖灯油田等事、任伊賀法橋快秀置文之旨、所奉寄
進当寺也、早天長地久、殊可申本宗領家之御祈祷也、
且雖為何預所弁済使此寄進分、向後永不可有違乱妨之
(旧由)候、依領家仰、下知如件、
　建武元年五月(旧十ノ)七日　　法眼隆(旧然)祐奉
（本文書ハ「旧記雑録前編二」一六九四号文書ト同一文書ナルベシ）

25

（花押）

向島西方可存知事

或号講免園、或称道領、依籠置惣領百姓等御公事闕如之条、以外次第也、所詮於向後者随于其分限置之、於相残之族者、於惣領百姓可令全御公事、若背制符籠置者、云講免園、云道領、可被収公也、次人夫太(ママ)用(旧大)之時者、彼両所悉可進之、若募権威無沙汰之時者、可及殊沙汰也、其旨可(旧存)有知之状如件、

観応二年六月十九日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三五八号文書ト同一文書ナルベシ）

26

（花押）

向島西方河原越前(旧守)為間事、雖為御内御衆(旧方)人、同心成阿弥陀仏当島ニ引入悪党等之間、雖可被誅罰、以別儀可安堵之由、所被仰下也、於向後者全御年貢、為御私(旧方)人之上者、可致奉公之忠之状如件、

観応二年六月廿五日　　貞家奉

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三六〇号文書ト同一文書ナルベシ）

27

奉寄進

諏方上下

右以寄郡内田地四丁・園四ヶ所所奉寄也、天下泰平我門繁昌、殊為遂弓箭素懐、所願如件、

正平十一年十二月十八日　　左衛門尉氏久（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二六二六号文書ト同一文書ナルベシ）

28

立願　麑島諏方大明神

右遂本意者、郡内田地壱(旧所)丁、小笠懸百番、神馬一疋、可令進宮之状如件、

正平十三年卯月四日　　氏久（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二九号文書ト同一文書ナルベシ）

29

麑島郡伊敷村内国引田壱町伊地知彦七跡事、今度合戦遂先途之間、任願書之旨、所奉寄進也、守先例、令領知之、可被致朝暮祈祷之状如件、

正平十三年四月廿八日

諏方座主兵部律師御房

氏久（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三三号文書ト同一文書ナルベシ）

30

日向国求二(仁)郷永吉東方比志田内地頭屋敷二ヶ所（平九郎園・海入道園）
并法橋園一ヶ所・江六園一ヶ所事、先日任祈願之旨、
麑島　諏方大明神所奉寄進也、任先例、知行不可有相
違之状如件、

正平十四年八月卅日　　修理亮氏久（花押）

諏方座主兵部律師御房

（本文書ハ「旧記雑録前編二」六三号文書ト同一文書ナルベシ）

31

寄進

諏方大明神　麑島

右求二郷益丸名内田地四町（坪付有別紙、）所奉寄進也、可被致祈
祷精誠之状如件、

延文六年八月廿四日　　修理亮氏久（花押）

座主兵部律師御房

（本文書ハ「旧記雑録前編二」八五号文書ト同一文書ナルベシ）

32

条々

一しうてんならひにしへきをこほす事
一すわの御はやしの木竹をきる事
一すわの御まへの道をとをる事
一御うちのしへきのうちに馬牛をはなす事
この条々人によらす、不日ニさいくわニをこなうへし、
此条男にをいてハすなハちちうすへし、女にをきてハ
はつけすへく候、正八幡すわの大ミやうしんもせうら
んあるへく候、いつハりあるましく候、

応安三年正月十一日　　（氏久）（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇〇号文書ト同一文書ナルベシ）

33

譲与、日向国救仁郷益丸名内水田四町并園四ヶ所者、
為当所諏訪座主分、同居所(望)具明印自然之後者、依而最
初弟子毘沙門堂坊主譲与事実也、尤専公方之御祈祷、
各無懈怠可被致勤行、御祭礼之事、任先例、致其沙汰

可被知行也、就中於彼所、立愚僧之先祖届承時陀羅、
其一通可有結縁者歟、仍為後日、譲状如件、
嘉慶三己巳年正月十七日
権少僧都明印（花押）「不明」
（本文書ハ「旧記雑録前編二」四七二号文書ト同一文書ナルベシ）

34
立願
諏方上下
右立願之旨趣者、渋谷発向砌也、遂弓箭素懐加対治者、
在国之跡、田代弐丁可寄奉也、仍寄進状如件、
応永弐年八月廿八日　藤原元久（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」五五一号文書ト同一文書ナルベシ）

35
薩摩国給黎院内水田一町、奉寄進状如件、
応永十九年六月廿六日
久豊（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」八七九号文書ト同一文書ナルベシ）

36
御立願事
右意趣者、如本意成心（旧候）時者、日向・大隅・薩摩三ヶ国
拾町并於当年中者打円次第、所領依大小、可奉寄進之
状如件、
応永廿年正月　日
島津修理亮久豊（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」九〇四号文書ト同一文書ナルベシ）

37
立願
山王御宝前
右旨趣者、三箇国大方為大綱之上、此刻殊折角也、然
間、人者依　神之徳副〔運理〕（旧理運）、異于他信心者哉、仍今
度於令守弥武運給者、雖為無差之訴（旧計）、以立錐之地、可
奉寄附状如件、
応永廿年十一月八日　修理亮久豊（花押）
（本文書ハ「旧記雑録前編二」九一五号文書ト同一文書ナルベシ）

38
奉寄進　諏訪大明神
麑島郡上伊敷流田之内門田三段
此内一段嶺大楽寺稲荷
同二段諏方田二気之彼岸

御祈祷大般若経於于御拝殿、可有転読状如件、

永享十一年六月吉日　　持久（花押）

諏方座主律師慶任房

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二一七号文書ト同一文書ナルベシ）

39

奉寄進

諏方上下大明神御灯油料田事

薩摩国別府村河俣名内

高倉門八段余坪付別紙在之、

右田園雖狭少、敬志広博也、寄附之旨趣所以者、何為上皇鳳永扇下黎民豊楽、殊当敵退散、武運長久、寿齢亀鶴、家門繁栄、国土康泰、如意吉祥故也者、迄于驢年不可有変易之状如件、

▽㊥長禄四年卯月十六日△

藤原立久（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一三八五文書ト同一文書ナルベシ）

40

日州求仁郷大崎之内横瀬名窪之門、田数合而壱町六㊥十段丁部、此内仏神領堀町五段㊥十丁并壱箇所、清水屋敷畠地壱石蒔、以上、

右諏訪御神領雖数十年中絶候、為義久造営田、天正五丁丑歳被寄附畢、然間、為義弘茂無別儀令寄進之者也、仍証文如件、

天正十七年己丑

九月十八日　　義弘（花押）

（以下「神社調　鹿児島部　三」へ続ク）

神社調　鹿児島部　三

（表紙）

神社調　鹿児島部　三

乙酉年
一番　中村　郡本　田毛
丙戌年
二番　河上　下伊敷　谷山之中村
丁亥年
三番　坂本　谷山之福本
戊子年
四番　田上　永吉　谷山之和田
己丑年
五番　花棚　西田　谷山之五ヶ別府　東之別府　谷山之山田
庚寅年
六番　沢牟田　西之別府　原良　塚原　毛野　小野
辛卯年
七番　上伊敷　犬迫
以上七廻、右具在前、
同五月之御祭之次第
自同年始之、
乙酉年
一番　山田図書助　原良之平之門

1

当座主長寿院

（本文書ハ「旧記雑録後編二」六一三号文書ト同一文書ナルベシ）

右一巻御文書と題有之、

麑島諏方御佐山之
御祭之次第

▽㊐寛正六年自乙酉始之、△

丙戌年
二番　大徳寺田上　小牧　永吉
丁亥年
三番　梶原源次郎東別府
戊子年
四番　大寺千徳丸沢牟田
己丑年
五番　有馬皆房之村
以上五回、具在前、
礼『(旧買)■』之作法別紙注之、云神慮、云天役、不可有怠慢者也、

本田治部少輔
宗親（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一四二四号文書ト同一文書ナルベシ）

2
西原門分
一田の成物一貫　此内百六十八文除三百二十六文田の成物一貫百六十八文
一桑代　百文
一(旧園)の成物百三十文
一秋さつし(旧ゆ)う三百文
一けんちうまい一斗四升(旧ゑ)しちせんのます
一むきの(旧ね)ぬんく五斗のへハ七斗
応永十八年ノ卯拾月七日

宗純（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」八三六号文書ト同一文書ナルベシ）

3
諏訪御精之日記
中之分
一料足三十貫文
一はな米三十三斛
三斗三升三合
一御すい三十三斛
三斗三升
一御へいの紙三十
三束三てう
一しろ布三十三たん
一そめ布三十三たん
一神馬三十三疋

一太刀三十三ふり
一くわ三十三具

4

諏方大明神御神事之入目

一五斛　元日之御祭礼之分
一八斗　三月三日　五月五日　七月七日　九月九日　此四月神楽分
一四斗　二季之彼岸神楽分
一壱石弐斗年中拾弐月神楽分
一五斛　御明油之分
都合拾弐斛四斗

社役之人数

一座主　拾斛扶持分　壱石二斗飯米
一香花之五人衆　壱人仁一石宛之扶持　壱人之飯米一石二斗宛
一鐘突　壱石之扶持　一石二斗飯米
一掃除之者五人　一人仁壱石宛之扶持　一人仁壱石弐斗宛飯米
一代官　五斛之扶持　壱石弐斗飯米
一右之人数調之者三人　一人仁壱石宛之扶持　一人仁一石二斗宛ノ飯米
都合四拾八斛弐斗

寺役之分

一参斗六升　年中御本尊仏供之分
一五斛　御明油之分
一壱石弐斗　年中先師供之分
都合六斛五斗六升
惣都合六拾七斛壱斗三升

文禄弐年癸巳八月二日　諏方別当　盛淳（花押）　『陶猗云、此花押阿多長寿院之花押也、』

以上

（本文書ハ「旧記雑録後編二」一一五六号文書ト同一文書ナルベシ）

5

先程以一人如申入候、拙子為立願、御諏方㊟へ知行五石我等一代間寄進仕候、右知行鹿籠之内ニ御座候間、以目録進上申候、御請取可被成候、若後日此知行以公儀相替候共、別所㊟ニ返地分別可申候、為其以一書申入候、恐惶謹言、

喜入摂津守
忠政〇

慶長廿年
卯月十九日

鹿児島諏方座主
惣持院（まいる）御同宿中

忠政（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編四」一二三八号文書ト同一文書ナルベシ）

6

尚々巨細者先日御理候間、不能一二候、以上、

少将様御上洛ニ付、御留守中者為御祈念、毎月御諏訪大明神へ神楽可有御上由御立願候、就其（旧今）二月より十二月迄三ヶ月分、米五斗二升五合持せ申、就中明日七日吉日之由候間、於神前御祈念可被遊候、此等之旨伊勢平左衛門殿（旧江）「より」書状を以可被仰候へとも、富隈へ参上候之間如此候、恐惶謹言、

有川与左衛門
十月六日　貞政（花押）
伊地知主馬首
重行（花押）

かこしま
御諏訪座主御坊
御同宿中

（本文書ハ「旧記雑録後編三」一七一五号文書・「同附録一」二二六号文書ト同一文書ナルベシ）

7

未之年男十六歳
願文

御諏方大明神
馬一疋　生替
同
指刀一ツ祈進

右御祈念被成候て奉頼候、以上、

元和八年八月九日　有川助兵衛尉
御座主様
参

（本文書ハ「旧記雑録後編四」一七四〇号文書ト同一文書ナルベシ）

8

口上覚

綱久様御受厄ニ付（旧而）西原山王江　御年数銭（旧珠）当年より三ヶ年可被差上御誓願候条、今月より当年極月迄十壱ヶ月分、御年数銭（旧珠）御方迄為持候条、吉日を以拝進被成、御

祈祷可被成候、以上、
三月十八日　　堀四郎左衛門
安養院

（本文書ハ「旧記雑録附録一」二二四号文書ト同一文書ナルベシ）

9

到与力方御札致拝見候、然者　綱久様就御厄年、諏訪へ寄進仕候刀差下申候処、早速被納置御神前ニ旨被仰越、忝存候、恐惶謹言、
島津新八郎
十月十六日　　久馮（花押）
安養院
御報

（本文書ハ「旧記雑録附録一」二二五号文書ト同一文書ナルベシ）

10

右一巻祭次第書并寄進状類と題あり、

諏訪寄進坪付

水田一町　和田後家
嘉慶三年十月　日

11

給黎院　正長二年九月廿九日

坂本田二反　　橋口一反
「シンレス」
葺是門名
蓑田　一反　　岩下六反
宮前　一反　　小山下一反

12

諏訪先御寄進

谷山院和田之内
一水田一町　　櫨丸
文安六年二月廿一日

13

坪付

もち田名之内
五反きしま主税先知行　北ノ崎
以上
文明十九年二月

14

鹿児島
御諏訪御領

河辺郡宮下名

堀之内門

坪付

二反　かり川

此内一反河成一反おり井

三反　上かハら田

年々符河成

一反　屋敷田

卅　奥之田

六反　南田

一反廿　平木

此内卅あかり

三反　八反田

三反　竹田

此内一反あかり

卅　神五郎作

屋敷分

二反　今田

以上一町八反

中宮下之門

坪付

此内一反あかり

三反　千代ます

此内一反河成

一反　ほりハり

河なり

一反　わさ田

おりゐ

三反　はゝ木之丸

二反　二反田

卅　同所

地蔵免

四反　八段田

此内廿あかり

一反　かちや田

屋敷田

一反卅中ハた板

以上一町四反卅

15

坪付

鹿児島

諏訪大明神御寄進分

大隅国加治木郷之内

一　浮免

たんと名　牧神四郎先

四反　ちやうけ田

同名　はま田先

一反　天神むた

以上五反

明応五年

三月二日

坪付

薩摩国河辺郡

中宮門之内

三反　はゝノ木の丸

二反　千代ます

四反　八反田

一反　堀わり

以上一町

御諏訪領

文亀元年

十二月十六日

16

坪付

曽於郡宮永名　谷口先

八反　かハら田

同所山の地名　みな口　石坂兵部方先

一反　にしかと三反之内

谷山　ちかま方先

一反　九反田之内

以上一町

永正九年十一月七日

（伊地知）重貞

（桑波田）景元

（伊地知）重周

（鳥取）政茂

17

坪付

大隅国吉田院

宮之浦名

内農野々門　前田　三反

小里のわき　一反

小中原ノ下　二反此内一反年々不

松もと　二反

已上八反

うき免　二反

小柳

惣已上一町

永正十四年

三月十一日　（本田）兼親

（伊地知）重貞

（桑波田）景元

（伊地知）重周

兼親

18

御諏訪　江

諏訪御領

山のち名

三反南郷先　桑原田

長谷ノ口ニアリ

已上

永正十八年三月吉日　景元

（末広）忠台

（肝付）兼演

重周

兼親

19

御諏訪

坪付

薩摩国伊集院

日置名之内

一　ひりやうそのゝ門

一町　くハ木

三反　ほとけ木

五反　きしまち

一反　大む田
一反　ならの脇
二反　ついかさね
一反　あなの町
三反　ふんこの古川
已上二町六反
浮免　「不明」河北大膳進先
四反　かち来
都合田数
三町
大永二年
十二月廿三日
兼親
兼演
景元
重周

20

坪付
薩摩国伊集院日置名之内
一美領園門
以上二町六反
浮免　河北大膳先
四反　かち木
都合田数
三町
大永二年十二月廿三日
兼親
兼演
景元
重周

21

諏訪大明神
御寄進
一美領園門
以上二町二反廿
大永七年正月廿四日

22

坪付

帖佐之内
長瀬名之内
二反　　宮の原

大永七年
二月吉日

村田越前守　　経董
池袋越後守　　宗政
土岐伊豆守（守持）　　政綱
梶原備前守　　景豊
肝付三郎五郎　　兼演
平田美濃守（守職）　　宗

安養院

23

諏訪　新寄進
修理田坪付

麑島郡之内
浮免
中村名　　伊地知又八先
一段　　くてん

弘治四年正月吉日

（川上）忠克
（伊集院）忠倉
（三原）重秋

24

麑島
諏訪大明神御領
薩摩国隈城之郡
草原名
壱町　　かこと町
以上

永禄十三庚午弐月吉日

平田安房介宗茂
鮫島遁世双月
三原遠江守重秋

25

麑島

御諏訪領

坪付

薩州牛山院之内

浮免

大田名

八段　河しま

已上

天正三年乙亥　新納武蔵守

二月吉日　忠元

安養院

（本文書ハ「旧記雑録後編一」七七七号文書ト同一文書ナルベシ）

26

麑島

諏訪大明神

御寄進

坪付

日州求仁郷大崎内

横瀬名

一　窪之門

壱段卌　高柳

廿稲荷免　同所

卌　同所

卌　堀わり

壱段十年神領　ミや田

卌　こたの木

十　溝田

十部　かつらまハり

壱段卅　蔵の園

卅井料　同所

弐段　前田

廿　脇田

四段　前田

壱段地蔵免　堂地

廿　たくミ園

已上壱町六段十部

此内仏神領堀町

五反十

右之御神領雖数十年中絶候、当御代于時義久御屋形別
而為御造営田御寄進之所也、仍証文如件、

一一ヶ所　清水屋敷
　畠地壱石蒔
天正五年丁丑二月吉日

伊集院右衛門太夫
　忠棟
村田越前守
　経定
平田左馬助
　光宗
河上上野入道
　意釣
喜入摂津守
　季久

安養院

27

一作
坪付

飯縄領
隅州栗野之内
一恒次名広田之門
　都合参町六段
　此内六反仏神領堀町
天正七年己卯参月吉日

経定
光宗
覚兼（上井）
忠棟

28

坪付
隅州吉田之内
　浮免
佐多之裏　本慶田之門之内
壱段　れうけ
　已上本松（平）之返地
天正八年三月吉日

覚兼

光宗
（本田）親貞
経定
忠棟

麑島

諏方御領

29

写　河上彦左衛門殿手前ニ本有之也、

御諏訪大明神ニ付条書

一御諏訪於神前、毎度祭礼并神楽、別而入念可有宮仕事、
　付内侍弟子定可申（刻）割者、座主・神事奉行へ申理候而
　可相究事、
一如前々内侍屋敷へ罷居候而、御諏方へ奉公堅可相勤事、
一御祭礼儀、常之神楽之時、神前拝進之物、如前々大夫・
内侍以談合半分充可有受用事、
右条々相背仁於有之者、座主坊・神事奉行申理候而、
則御老中へ申上可有其沙汰者也、
元和元年六月朔日　　神事奉行　河上彦左衛門判
諏方座主判

30

一正保二年諏方大夫寄進物取籠依為申、安養院より被申
出候者、先例ニ相替候儀者如何候間、如先法被仰付可
給候由被申候間、与中之侍衆頼存、先曖申候へ共大夫
合点依不申、双方口事ニ罷成、御公儀ニ致披露候、御
家老衆より御使新納刑部太輔殿・猿渡大炊助殿ニて被
仰聞せ候ハ、社法之出合之儀候間、愚僧沙汰可申由被
仰聞候間、他宗衆へ頼存、双方申分被為聞候、何も大
夫申分非分ニ被聞届候、其通御公儀へ申上候、　殿様
江戸へ被成御座候間、江戸へ被仰上候、其後被遊御下
向達　御上聞、右之御使衆を以被仰出候趣、寄進物前
々書物次第可相納との　御上意候、勿論前々御書物安
養院へ而已依有之、安養院理運ニ罷成候事、
一御幣之儀も如前々、御戸之内ニ可相納候由、同前ニ被
仰出候事、
右為後証、双方之書物相添渡置者也、
　已上
慶安元年六月廿三日　　大乗院判
　　安養院

31

書物

御諏訪へ御寄進之物、不依何色従往古座主へ相納候事
無其(ママ)候、然処ニ此比大夫手前ニ寄進物被取籠候事、
先例相替候、御家御代々御寄進物之御書物多々有之儀
候、其外諸伝御寄進之書物等も其分ニ而候、従古来神
前之諸様為被定儀候処、当大夫代より被相替候間、前
之様ニ被仰渡可給候、愚僧当寺へ申儀ハ一節之事ニ御
座候、社法之儀者永々之事(ママ)処ニ、先例相替候得ハ当
番ハ無念ニ罷成儀候間、自今以後之儀、如先例被仰定
候而可被下候、以上、

酉七月五日　　安養院
　　盛真判
大乗院

32

覚

東郷若狭守殿
川上彦左衛門殿
肥後長左衛門殿
二階堂阿波守殿
高崎惣右衛門殿
五代仲兵衛殿
新蓮坊
町田弥兵衛殿
村田藤左衛門殿
中神石見守殿
長谷場兵右衛門殿
村尾源左衛門殿
東郷肥前守殿
堀弥右衛門殿
大山伊与守殿
財部淡路守殿
相郎良善助殿(一本ノまゝ)
新納二右衛門殿

九月三日

右之人数諏方之座主太夫方と口事ニ付、護摩所ニて曖
之衆也、

33

諏方ニ付先法定之事

一みたれ参銭ハ太夫手前ニ取候、縄貫ハ不依多少座主へ
納候事、
一御神楽之時、瓶子一方ツヽ、座主へ参候事、
一法銭三分一ハ座主へ参候、三分二ハ太夫手前ニ取候、
一御祭之時、幡座主より出候付、内侍立候而御祭過候而
又内侍首尾仕座主へ相納候事、
九月五日

右一巻、正保年中座主太夫口事判談書付と題あり、

34

覚

安養院私領田之浦山前ニ御茶屋立ニ付而被召上候得共、
于今御茶屋無之ニ付、安養院へ此節被給候間、右山可
被引渡候、以上、
山奉行印
黒葛原周右衛門
奈良原清左衛門
酉九月朔日
田之浦
山見廻衆中

35

書物
一永福寺事
一潮音院事
右之両寺、此節門中相談を以大乗院直末ニ罷成候、寺
地ハ両寺共ニ安養院領内現高内借地ニ而候条、相応之
年貢可被相納候、以来両寺共ニ寺地御用之(刻)割者、何方
へ成とも寺相引可被申候、為後証如斯候、以上、
寛文十年
善聚院印
勝軍院印
門中
九月廿四日
安養院

36

右之表門中衆相談之通慥ニ承届候、於向後別儀有之間
敷候、以上、
寛文十歳
大乗院印
九月廿四日
安養院

覚

田浦山之事、従前々被致格護候処、寺山之竹木猥ニ截取儀御禁止之旨、先年一統ニ被仰渡候、雖然彼山之事被寄附于東福寺今安養院也之由、往元亨三年　貞久公之御証文差出、此節其断依被申出之遂披露候処ニ、向後右山之竹木入用之割(刻)者山奉行所へ申断、以手形可被截取之、勿論不可（ママ）之由被仰渡候条、可被得其意候、以上、

延宝二年十月廿八日

寺社奉行所

安養院

37

一畠山弾正少弼季随正五位下、康永三稔六月一日越前ヲ出、同年八月廿三日薩摩国山門院ニ下着、

一御当家五代上総守貞久主之御時也、

一安養院開山モ越前国一乗ト云所之人ト云々、

右任御尋書付進之候、以上、

五月廿八日

伊地知六郎兵衛

右一巻年中▽寺行事△等（ママ）文と題有り、

38

熊野山本宮物忌量次第

一二親百日　服ハ迎月　但山伏ハ七ヶ月

一兄弟七十五日

一夫妻子ハ五十日　無子中ハ卅三日

一養父母ハ恩アレハ如二親之

一師匠付継弟子七十五日

一ヲチヲハ父方卅日　母方廿日

一イトコ父方卅日　母方廿日

一又イトコ父方二七日　母方七日

一祖父祖母父方卅日　母方廿日

一メイヲイ孫廿日

一持形卅三日

一野（ママ）三日

一（ママ）一七日

一不浄火合一七日

一忌中一七日

一アラハタ卅三日

一猪一七日

一ナマ鹿・ナマ蒜卅三日

一ホシ鹿・ホシヒル百日
一鳥類三日
一(守諸四足)　一七日
一灸治三日
一月水十一日但旦那七日ニ法幣スヘシ
一産ハ百日ヲヒシテ後女ハ不参　生月ニ入テハ男ハ不参
一ウミ流ハ月ニ十日　二月ニ廿日コレヲカソウヘシ
一産シテ後チノヲトテ七日　男ハ不参
一ウヲ六時
一ニラ七日
一ヒトモシ三日
一増祖父母一七日
　応永卅三年七月　日
『由来記ノ内』
一当山者御当家五代貞久公勧請、信州諏方為鎮護、初遷宮出水郡山門院、当七代氏久公治世奉移当処中略是以創建当院補座主職、即使(守鏡)阿和尚為開基、祖和尚是越前国一乗人也、康永三年甲申、畠山弾正少弼季随来到当国之日為祈願師請之也、中略於是乎為供仏施僧充行廿町余庄園、以「善行院」延命院・文殊院・「西寿院」如来堂・「薬師院」万寿院・威光院為坊中相共勤行矣、天文年中随大乗院五坊共被移院中云々、
『安養院蔵』
一大般若六百巻奥書、応永十七庚寅正月十一日、化縁比丘長祐願主沙弥龍徳奉寄進諏方宝前、慶長五年庚子八月廿一日、成正院頼真為仏法興隆云々、薩州祁答院大村(守郷)可天神宮奉施入云々、

39

　鹿児島郡諏方大明神祭礼
　法様之事
陸奥守貴久御代頭殿・居頭と云事始也、此根元者日本国之祭心也、頭殿者勅使、居頭者上使也、七月一月之間、頭屋之儀式者勅使会尺之儀也、号頭殿事者公卿蔵人頭殿勅使之心也、号居頭者上使諸衆之上居心也、頭殿之寄頭也、然者祭之日天下之為祈祷頭殿御幣、次為国之祈念居頭御幣、次三箇国為祈念貴久之御幣如是心也、末代迄此旨存知、島津家扱者能々可致奔走者也、為子孫矣書付置所也、

▽㊥本田信濃守△

永享拾年戊午 伍月七日　　氏親在判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二一二号文書ト同一文書ナルベシ）

『安養院古帳之内』

一琢磨禎石而造小塔、以其上彫刻□三尊地蔵、願主菩薩尊像六軀奉安置于路頭者、唯願往還衆生一礼一拝之輩無一不成仏也、特願主久能□成菩提覚果而速到西方浄土者也、永正十四年丁丑九月日平氏周防守沙弥久能誌之、

『右ハ清水馬場六地蔵之銘歟、』

40

日州都於郡黒貫寺者、人皇六十一代朱雀院御宇天慶九年、隆元僧都之開基也、其後人皇九十四代花園院御宇賜震筆之額、号日陽山、為天下安全之勅願寺、号代々僧正跡也、且又人皇百一代後小松院御宇至徳年中征夷将軍義満公（尊氏之嫡孫号鹿園院殿）九州成敗之日、賜寺領三町六段（今三百石是也）之御黒印、為鎮護国家之道場、同将軍義量公・同義教公代々公方賜御黒印、従是已前従紀州根来寺蒙勅許於天下建立新義四箇大寺、以黒貫寺為九州之講肆、依之天正年中迄、九国之学徒数百輩四時不断論談日々盛也、且又従往古已来、為醍醐寺報恩院之末寺、法流代々相続也、其後天正年中伊東没落之日京勢寺院雖乱入、賜　大閤秀吉公之御印故寺領全不闕、雖然無住之故中書公押領被成、雖有御検地、則住持相定日為代々御朱印地故御帰被成候、其後住持実翁法印依　東照大権現之台命令入寺知積院、此時分前右馬頭元久内々佐土原安堵被成度旨雖有之、其旨言上之奏者無之、依之家老伊集院新右衛門於以実翁ヲ頼被成、達　大権現之上聞候乎、則佐土原御安堵ニ而候、然処実翁為悪僧被服鴆毒逝去、依之黒貫寺無住故　大権現之御朱印不頂戴、統右馬頭殿預置被成、御当地伊地知氏僧実須上人入院有之候ヨリ已来愚僧迄ハ六七世、皆従当国入寺仕候処、頃日佐土原家老近臣等大形他家者計ニ而候故、自今以後当国之僧於不令住持、寺之儀ヲ自由ニ可致支配様子相見得候、箇様ニ而者　万吉殿御為不罷成候、然処於愚僧隠居身トシテ無用成申様候半、され共当院儀ハ従天慶九年今日迄及八百年古跡也、殊更為勅願寺、或代々公方家被成下　御朱印、或醍醐山之末寺与申、

或本朝為新義之四箇大寺、為九国之学問処、此等由緒
厳重成ニ付愚僧尽勢力、中古令破却院家以自力如形興
隆仕、其上ニ而登醍醐寺続法流密法、供養之道具・本
尊并五十余巻之経書求之、新造立経蔵令奉納、賜　仁
和寺宮御令旨於兼帯院跡色衣ヲ申受、其上依智積院僧
正之命六十年来令断絶、処々新儀之法談ヲ於令中興候、
箇様ニ抽精誠候処ニ、已来住持無撰候得者又々可及破
滅事必然候、且又佐土原之儀者御家御分サレト申、万
事ニ付御大切ニ被思召上候、然者彼御家長久之御祈願
所之儀候得者、向後住持之替移之節者被蒙中将公御賢
慮、如先例御当地僧入院仕候様ニ被仰上可給儀偏ニ頼
存候、已上、

佐土原黒貫寺隠居
雲海

天和三年亥
八月廿五日

安養院
几右

安養院世代

一開山鑁阿上人　三日入叔(寂)
康永三甲申越前国より畠山弾正少弼[正]五位下請来、
当国之日常院為開基之祖也、石塔当院寺領之内坂元
村江有之候、

一二代長慶　忌三日
一三代慶尊　忌九日
一四代慶仁　忌五日
一五代慶範　忌十二日
一六代快範　忌十二日
一七代快延　忌十六日
一八代隆誉　忌九日
一九代快誉　忌三日
一十代快察　忌十六日
一十一代盛久
入院不知、当院より大乗院へ移転、慶長六辛丑六月
六日寂、
一十二代頼真僧正
入院年月不知、大乗院へ移転、寛永五戊辰六月十八
日寂、

一十三代盛有
国分金剛寺より入院、年月不知、大乗院へ移転、寛永七庚午九月廿八日寂、
一十四代秀応
入院年月不知、寛永十七庚辰十月十八日寂、
一十五代快性
入院年月不知、大乗院へ移転、正保二乙酉七月廿四日寂、
一十六代覚因
寛永十一戊年坊津一乗院被仰付、同十二年当院兼帯被仰付、潮音院開基隠居、慶安元年十月廿三日死、
一十七代盛住
大乗院へ移転、明暦元乙未九月七日寂、
一十八代政因
宝持院より入院、年月ハ不知、八日寂、年月不知、
一十九代盛真　忌廿五日
一廿代秀瑜　忌十七日
一廿一代政真僧正
入院年月不知、大乗院へ移転、寛文二寅三月廿四日寂、
一廿二代真浄
万治三年庚子、依光久公命従洛東供奉来ル、尋賜護国山大楽寺安養院与有之、且又大乗院へ移転、寛文四甲辰正月四日寂、
一廿三代快義
瑞応院より入院、年月不知、坊津一乗院へ転任、天和三癸亥十月廿三日寂、
一廿四代快泉　忌日晦日
一廿五代盛長
海蔵院より入院、元禄五壬申十一月二日寂、
一廿六代(守頼喜)
善行院へ隠居、元禄十丁丑正月十七日寂、
一廿七代覚雲
文殊院より入院、且又大乗院へ元禄十二卯三月移転、正徳元年辛卯八月十二日寂、
一廿八代騰雲
大興寺より入院、一乗院へ移転、宝永七庚寅四月廿七日寂、

一廿九代盛寿
宝持院より入院、元禄十五年壬午閏八月十二日前ニ入院、住職四年、宝永二年酉卯月十三日三本寺へ隠居、享保十三戊申十二月十七日寂、

一三十代義秀
宝永二年酉七月四日宝持院より入院、同五丑(子)年一乗院へ移転、享保三戊戌(寺閏)十月三日寂、

一卅一代亮雄
宝永五丑(子)十月廿七日庄厳(荘)寺より入院、正徳二辰十月廿七日大乗院へ移転、同五未十二月十一日寂、

一卅二代大住
正徳二辰十一月宝持院より入院、同五未大乗院へ移転、享保三戊戌二月九日寂、

一卅三代玉超
瑞応院より入院、年間不知、享保元(二カ)酉年大乗院へ移転、同十乙酉(巳)十一月四日寂、

一卅四代宥敞
享保二丁酉十二月廿七日善聚院より入院、享保七寅年出水幸善寺造立并住職被仰付、同十九甲寅正月十三日寂、

一卅五代(寺真称)
享保七寅八月九日花林寺より入院、住職十四ヶ年、善行院へ退院、享保廿年乙卯四月廿六日寂、

一卅六代覚英
享保廿乙卯七月五日大興寺より入院、居住八ヶ月、一乗院へ同廿一辰二月転任、忌十七日、

一卅七代覚盈
享保廿一辰二月十三日満足寺より入院、元文四己未十月十一日出水幸善寺へ住職、

一卅八代尭盈
元文四己未十月十一日宝持院より住職、

西原村
山王宮　四敷三間茅ふき　堀立柱
正月初申之日　霜月初申之日祭
右山王社者忠久公御下国之時、江州坂本之山王権現を御勧請にて、即三門乙名之内より守り上来候而、西原村ニ御宮居御建営被奉安置候、此坂本之山王を奉祝候ニ付、近辺之名を坂元名と申之由候、往古より御宮造

営并御祭茂公儀より為有之由候、其内御宮御修補者、
寛文三年癸卯迄ハ御修補被仰付候、其旨棟札ニ見得候、
其後御修造御祭も公義より無之候ニ付、修甫并年中両
度之祭り当寺より自分ニ相勤候、只今も宮之修甫仕候
時ハ、山王山之杉木等無代物ニ申受候而修治仕候、

大乗院末寺
稲荷社別当
神護山　観音寺　宝持院

天正年中御建立　開山快信　高五拾石

一稲荷社年中祭米六石、毎年相渡候、

一稲荷本地

十一面観音　千手観音
如意輪観音　不動明王
毘沙門天王

稲荷社縁起之内
「上略」
自爾以来、治承三年己亥忠久公於摂州住吉御誕生時、
夜雨頻風烈、一狐火燃夜通衛護、御成人之後三ヶ国御
安堵、建久七年丙辰当国島津庄島戸有御下着、岩吉郷
四方構大堀為御在城、件之狐稲荷大明神ニ御崇、累世
島津之御氏神定給、命婦殿狐之社于今存、又薩隅日三
州太守藤原朝臣武久邦君之母氏某甲、文明十年戊戌十
二月十一日薩陽城市来院稲荷五社大明神再興、是偏国
家長久賀門繁栄御願也、遷宮導師権律師快信与自爾御
当家代々御尊崇日ニ月ニ新、天文七年戊戌十二月晦日
夜日新公加世田御征伐之時、阿多川加世田境数十狐火
燃先陣烈行、諸兵随彼自後加世田城中打入、屏垣林中
如日中得自在即落城、文禄・慶長間、義弘公・又八郎
公高麗御渡海之時、稲荷大明神有御首途之時、赤白之
二狐社前居ス、義弘公御慇懃之由御意有之、供奉面々
今度朝鮮渡海之奇瑞御安堵之由有之各喜悦之開眉、依
之朝鮮国御陣大明大勢廿万余後籠火薬入御陣即時欲為
焼尽、寄来赤白二狐水牛走出大軍入後籠之火薬放火故
大軍乱、于時義弘公被御馬向、打取勢三万七千余云々、
是偏神明為加護世人伝之、依此御在城地無云未此稲荷
神勧請、薩州鹿府後迫稲荷尾稲荷大明神宮依炎上、天
文七年戊戌二月再興、導師如意山住権少僧都頼盛・座
主宝持院快信、又天正年中義久公大興寺住俊雅遮梨曰、
貴寺西境与我(寺號)建大乗院、雅即諾不日落成、又以東辺
営稲荷大明神社壇并創建宝持院即易之以後迫地云々、

寺高百五十石当行、霜月三日之祭奠并五節句之祭祀、
或朝昏香油之料、元和年中及寺社勘落時減百石、唯五
十石残者也、是故不足補祭奠香油等、自寛永八年以降
施入倉米六石被備祭祀之用、承応元年当寺頼源発大願、
使大仏師刻稲荷本地之像五軀并営構本地堂一宇、尋買
得高五石入納御蔵永代載修理帳、又明暦二年丁光久公
四十二・綱久公廿五・虎寿(綱貴)公七歳厄、公再興客殿一宇、
又宝永四丙戌(ママ)年、依吉貴公命稲荷社壇三方石壁数尺於
築石垣上廻、勝厳麗昔日云々、下略ス、

宝持院世代

一開山快信
天正年中ニ住職
入院隠居等之年月不知、

一二代快円

一三代頼実
天正十二五月廿四日寂、

一四代玄意

一五代政意

一六代政周
当寺より安養院へ住職、年月等不知、

一七代頼源
承応年中国分金剛寺より入院、寛文四年甲辰九月二
日当寺ニ而寂、

一八代頼典
寛文四辰九月末吉光明寺より入院、当寺より花林寺
へ移転、年月不知、

一九代性海
延宝六午年高城東龍寺より入院、住職十四年、当寺
より一乗院へ住職、年月不知、

一十代盛寿
元禄四未十二月善聚院より入院、元禄十五午閏八月
安養院江住職、

一十一代義秀
元禄十五午年善聚院より入院、宝永二酉七月安養院
へ住職、

一十二代桂山
延寿院より入院、年月不知、宝永七寅十月廿七日死、

一十三代大住
宝永七寅十一月普賢院より入院、正徳二辰八月安養院へ住職、
一十四代為山
正徳二辰八月庄(荘)厳寺より入院、享保二酉年隠居、同年　十五日寂、
一十五代亮寿
享保二酉年護国院より入院、同三戌十月大興寺へ住職、
一十六代覚遠
享保三戌十一月庄(荘)厳寺より入院、同四亥十一月大興寺へ住職、
一十七代覚音
享保四亥十一月松樹院より入院、同十一午七月大興寺へ住職、
一十八代霊巌
享保十一午年曼荼羅寺より入院、同十六亥十一月寂、
一十九代尭盈
享保十六亥十二月加治木宝現寺より入院、元文四年未十月安養院へ住職、
一廿代隆山
元文四未十月廿一日財部仏性院より入院、
愛宕山　宝幢寺　大乗院末 愛宕別当　勝軍院
一神領高拾五石
右寛永年中開山頼済代当所諸士中より寄附、其節寺高ニ被召成候、
一同弐拾石
右承応二年、当寺四世真尊代ニ当所諸士中より寄附、其比神領ニ相直候儀難成訳ニ付段々訴申出、宝永四年ニ御代官所差引ニ被仰渡、年々納米御代官所より相渡候、
一当寺寛永八年家久公御代建立、開山頼済、尤愛宕山初発建立ハ、貴久公依御信仰御建立也、
一山号古代ハ花尾山ニ而候処、先年厚地花尾山御建立之節、当山号愛宕山与被改候、寺号・宗旨ハ古代より不相替候、
一当寺堂内ニ愛宕勝軍地蔵安置有之、

一元和四年七月勧化御免ニ而再興、
一寛永六年御免ニ而勧化いたし候、勧化帳壱冊于今格護、
一正保四年・同五年勧化帳二冊有之、
一御国中勧化御免之儀、川上左近将監・喜入摂津守・（マヽ）下野守御連判十一月十八日之御状壱通有之、

神照山　瑞福寺　大乗院末寺 福ヶ迫諏方社別当　普賢院

開山盛瑜　慶長十一年建立

一神領高三拾石

右者光久公御寄附高五拾石有之内、三拾石ハ右之通神領ニ而、弐拾石者寺家為修甫被差分置候処、（寺井上右京）江被成下候付、寺高無之様相成候事、

一諏方社本地

愛染明王　千手観音
文殊菩薩　地蔵菩薩
普賢菩薩

一諏方大明神者本来京都坂元ニ有之候処、忠久公御入国之時、当所坂本吉右衛門先祖蒙命負下之、当所ニ奉勧請、其後御代々御崇敬被遊、延宝六年戊午六月本地堂本尊御再興、寺号・山号迄被仰付候、
一五重塔高サ弐丈九尺
吉貴公御建立、

楞伽山　法輪寺　大乗寺（院）末寺　潮音院

開基寛永十五年戊寅
開山一乗院覚因

41

一寺領高五拾石

右宝永六年丑八月大乗院隠居覚恵代ニ、寺領高右員数自分才覚地御免被仰付求置候、

寺社奉行江

潮音院

右江戸護摩所詰被仰付、来子六月代合ニ而、寅六月迄三ヶ年詰被仰付候間、例之通可被申渡候、向後代合六月之筈候間、可被得其意候、

右申渡首尾係江茂如例可申渡候、以上、

享保十六年　亥六月

大蔵

大岳山　垂護寺　大乗寺(院)末　小城権現別当　善聚院

開山盛伝

神領高五拾石

当寺者往年大乗院十二坊御建立之節、当寺茂其随一ニ而、先初者寺地計御免ニ而候、然処明応年中忠昌公依御願小城権現御建立、神領方三拾三石余御寄附候、依之社職を安養院ニ為被仰付由、其後惟新公小城権現別而御崇敬有之、神領百(寺四)拾三石余被召成、毎々御参詣等も有之候処、安養院成正院頼(ママ)より被申上候者、路次遠境ニ付有事之節(寺寸)司職難勤候間、当社近辺ニ別当寺御建立社務も被仰付度候、於其儀者盛伝法印へ住職可申付旨御訴詔(寺記)申上、願之通被仰付、盛伝開基ニ而別当寺ニ罷成候、其後元和年中勘略(寺落)之節、神領高百拾石余被召上候付、盛伝再三奉願高五拾石被召付候、左候而、御宮之儀者公義御修甫ニ而候、然共寺内本地堂無之、客殿之内ニ少構看経所朝暮勤行為有之由候、依之看鑁法印住職之節、本地堂新規ニ被致造立、并本地之尊体、弥陀・薬師・観音、新仏ニ奉安置候、

42

奉新造立

小城殿一宇之事

右旨趣者、薩隅日三州之節度使藤原忠昌累年之所労未得快気、於爰偏非奉憑先祖之擁護者争(旧頓)頻得平噯乎、由是忠昌抽信心之丹(旧悃)令新造一宇之社壇、以真勝(忠国)院殿大岳(旧誉)公居士奉崇小城殿ニ神処也、為彼灯明田奉寄進、坪付在別紙、於所願成就者、此灯明田之事、永代不可退転、蓋彼宮之事者、安養院連続之院主可被執務者也、仍為後証寄進状如件、

明応六年十月廿七日　忠昌御判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七五九号文書ト同一文書ナルベシ）

43

新寄進

小城権現領　坪付

隅州帖佐之内

益田門之内　一段　市ノ坪

弘治四年二月吉日　忠重(旧克)　重故(旧秋)

忠念（旧倉）

右地之事、雖為料所之内、依無闕所之先令寄進、何様
重而他所可被繰替也、

（本文書ハ「旧記雑録後編 二」一〇一号文書ト同一文書ナルベシ）

44

一小城権現進物仕くりの儀、今度打立前者取紛ニ而誰そ「罷立刻者御暇乞不申残多存候、」
へも不申候間、当年之儀者先中島右近江申渡候条、左
様御談合可被下候、

一納方之儀者、勿論塚田善（寺喜）右衛門被存候事、

一御諏方江為御祈祷鵝目三百疋拝進申候、定従宿元進上
可申候間、御祈念奉頼候、何も近日罷下目出度可得御
意候、恐惶謹言、

伊勢兵部少輔
貞昌判

五月十二日

成正院参御同宿中

右寛政五年丑四月書出シ、

一高五拾石

右高御寄進、初ハ小城権現江忠昌公御願書之内ニ、灯
明領御寄進坪付相見得候得共、当分格護無御座候、右
御願書年間明応六年より及六十余年弘治四年御寄進、
其後慶長十二年御寄進、且又元和年中御買入高相込り、
高頭百四拾三石弐斗弐升六合五勺、惟新様より御寄進
御座候処ニ、元和五年御勘落之時分、三十三石御残シ
被下置、其余ハ被召上候付、其後段々依願本行之通被
仰付候、

一御俗名又三郎・修理介・陸奥守・忠国、御牌名真勝院
殿太岳誉公居士、御位牌壱本御安置御座候、
但何年間誰様御安置之訳不相知候、

吉野村
一七社　左春日　住吉　萑宮（寺雀）
　　　　右軍子　山神　山王　天神

別当
善聚院格護

社司七社村之百姓
与四右衛門

一祭り米三斗五升先
右物奉行所江差出を以毎年申受候、

一御建立之由緒不知、乍然正保年中従御物修理之書留者

御座候得共、只今氏子中より修甫仕候、
右寛保二戌四月書出シ、

慶長十九年御日々記
一九月廿日庚午晴、小城権現之座主職善乗院(聚)へ被仰付候、為御礼被罷出候、鳥目百疋進上候、談議所より案内者として使僧被参候事、

大乗院末
護国院

寛文九年建立　開山全有

当院来由記

釈全有遮黎也者、初住串木野冠嶽山頂峰院十有余霜、因病隠居于門前、寛文二年夏国君光久公使大乗院真浄和尚召之、相共謁城中、公曰、我護摩堂傍有地、雖狭隘師居于此為我祈願矣、雖辞不聴不日院成矣、公曰、宜号護国院、真浄遣書告智積院僧正運敞和尚、和尚即書護国院之扁題、其跋曰、寛文壬寅国君羽林源光久朝臣為国家鎮護新建一院、自立斯号釈運敞書掛之而住于此六七年、修法勤行日課無怠矣、繇茲蒙非常之寵毎歳随公之江府、一日公呼志和屋左京曰、先是全有所与我之金銅弥陀尊、命洛陽大仏師荘飾尽美麗、今也則復与而為彼本尊汝謀焉、左京奉命与時任慶右衛門・平寿命院・是枝右京共来告君命之趣、各書判形為其証矣、後漸力竭病腫、至寛文八年請退休林下、公不許曰、師若厭城中之繁華我宜謀之新建僧院、今天下禁戒相攸於大乗院之境内移護国院可也乎(其趣具在家老諏訪李右衛門当番日用記之内　在番高崎宗右衛門殿)、大乗院快意亦随君命掄先師頼真僧正隠居之旧地五畝(大)(寺二十)五歩、寛文九年院成矣、於此抛余長買得田園充供仏施僧費而返公所賜米穀、新建堂宇換旧堂、十二年使奏者高崎宗右衛門殿与名山(寺古)石刹斉載永代修補之帳、自以為君恩嶽瀆粉身何報、今我病厚、雖無由出謁朝勤暮行以欲奉酬万乙而已、
維時寛文第十二玄冬穀旦応需記之前大乗院覚山

当院上梁文

夫以当院者寛文二年夏、三州邦君従四位下少将源光久公為鎮護国家、捨城隅数畝地所草創也、故自題榜称護国院、令沙門全有主之全銜命(寺重)熏修勤練数稔、以故毎年

邦君述職日使全侍供奉班而往還東武者数多矣、其後全年老質衰不堪取長途、屡乞骸骨不許、迺至于寛文八年固辞以病、又不可次命曰、汝以城内為繁喧須相勝処移寺、是乃雖非全素志随命撰攸於大乗院之境内者五畝半也、寛文九年造建成矣、十有二年、訴官靖使此院載後葉修治之簿官、以君命不可苟焉、則許諾矣、宓惟全布衣身而深沐渥寵不知所以謝焉、仰冀邦君宝寿比南山介福如東海、(寺薫)子蘭孫森々郁々、国泰民安、至祷至祝、

梵宇一間、無厄無災而已　寛文十二壬子初冬吉辰現住全有欽記、

一全有少々之貯を以仏供仏餉又ハ為飯料用買地、高四拾弐石八斗四升六合弐勺五才有之候処、元禄十二年之比、御物御買入高ニ相成、高代銀宝銀五貫六百目被成下、右元銀之利分を以寺飯料等相続来申候、

能満山　　所願院　　柿本寺

当寺者家久公御建立ニ而、開山典雄ニ而候、典雄姓不詳候、尤当寺御建立之年間不知所伝称、典雄ハ初加世田之惣廟日吉山王之別当職仏眼院柿本寺之住僧ニ而候処、家久公別而被遊御帰依、兼而御家長久国泰民安之御祈祷被仰付置、後ニ御当地窪田諏方山之内ニ建一宇を典雄被召移、於彼所高命之御祈祷為被相勤由候、雖然其後家久公之依貴命、鶴丸城之西南ニ一院之堂宇を被建、課典雄常ニ国家安鎮之御祈祷被仰付度旨被仰出、此寺を被遊御造立、典雄為開基、始祖加世田柿本寺之号を以当院ニ被引移候、自夫先何れ之時代、誰人之建立不分明候得共、寺地ニ従基虚空蔵菩薩之尊像安置之古堂有之、然共仏像及破損信仰ニ雖無由候、古跡之相残所を以被遊幸　家久公之依貴命、日新公之御持(寺高)尊虚空蔵菩薩(日秀上人一刀三礼作)尊像を以故之古像ニ引易、今之堂ニ被遊御安置候、然者虚空蔵菩薩之因発願之文、為被号能満山所願院と由申伝候、柿本寺之旧跡於于今加世田日吉宮之別当廃壊之地同所今和(ママ)泉寺之末寺ニ而候由、本山大乗院帳面ニ相見得申候、且又従家久公当寺御建立ニ付御定目之御判物段々被下置、当寺五代之住持快照住職之内迄者当寺什物之随一ニ而相続仕来候処、右僧死去之時分然々之弟子等無之、悉以為致散財由申事

ニ御座候、尤御建立之時分、為御祈祷料寺領も百石余永代御寄附可被遊之旨被仰出候得共、典雄辞退被申上候、則其儀者外ニ何そ願之趣も有之哉と被仰下候付、典雄被申上候ハ、於当地真言之寺院雖数軒有之与、遠離民家諸士之非便所願者従新橋下一ヶ寺之祈願所ニ被仰付度之旨被申、右願之筋被仰付、其趣之御文書等も為被下置由申事御座候得共、是又快照死後ニ致紛失候、乍然家久公御文書之儀ニ候故、如何様御記録方ニ其写ニ而も相残可有之哉と乍憚奉察候、典雄右通御帰依之僧故、黄門(家久)公折々当寺江御光儀為被遊儀者于今申伝候、其後相続　寛陽(光久)公　泰清(綱久)公　大玄(綱貴)公御光駕為被遊御事ニ候、別ニ由来記等も無之候得共、伝称旁存在之旨趣如斯御座候、依之開基より以来于今御目見被仰付云々、

一本尊虚空蔵菩薩木像　一軀

但座像、日秀上人一刀三礼作、

一不動尊木像　一軀

但立像古仏、作不知、

右不動ハ典雄加世田より持来、於諏方山ニ御祈祷之本尊ニ而候由申伝候、

一閻魔王木像　拾二体

但座像古仏、作不知、

右家久公当寺御建立之節、同前閻魔王堂迄御建立被遊、御安置候由申伝候得共、右堂致破壊、当分者虚空蔵堂之内ニ安置有之候、

一六地蔵石塔　一基

右慶長年中　家久公御建立之由申伝候得共、文字不知、

45

一寺屋敷帳

寺地弐拾間十四間　九畦十歩　柿本寺

大豆三斗弐升

切明

下屋敷六間十三間　弐畦十八歩　右門前休左衛門

大豆壱斗壱升七合

下屋敷四間十九間　弐畦十六歩　右同作助

大豆壱斗壱升四合

合大豆壱俵弐斗壱合

高五斗七升三合九勺六才

今度御分国中引并之検地付寺社之屋敷迄雖被相改候、

此屋敷之儀者自分之以差出図田帳為可書載段畦相究、如先規令免許畢、向後勤行寺役掃除等不易古今無緩疎候、堅固可被相勤者也、

御支配所印
万治六年（ママ）己亥　平田藤右衛門（宗則）印
七月九日　相良主税印
喜入休左衛門（右カ）印

一水天社

右者此節新上橋涯江御建立候ニ付、本田出羽守支配柿本寺江別当寺被仰付候旨、弘化二年乙巳十二月笑左衛門殿より被仰渡、

大乗院末
善行院

開山盛厳　開基政真僧正中興
高四拾九石余但御代官所付取納

当院昔者諏方六坊之内ニ而、彼馬場筋ニ有之候処、大乗院拾弐坊御取立之時分、今之地ニ被召移候、然共無住故其比郡元村一之宮之別当延命院之住僧大乗院一夏九旬之初并月并之法会等、従彼方被罷出候節、当寺を申受宿坊ニ被罷居候事数ヶ年ニて、諸人自然与延命院と唱成申候由、始之寺号不相知候、其以後安養院之帳面ニも延命院と有之候、本より屋敷計御免地ニ而、無縁所故飯料も無之、終ニ住僧相続難致、漸々及破壊候、左候而、大乗院十三世善行院僧正政真之隠居所大乗院之中ニ有之候を、後住十四代真浄下知を以当寺ニ曳移寺家造立、政真之弟子玄可房居住為致、高も三拾石寄附、其後院号を善行院と唱成今以其通也、其後右高三拾石も沽却ニ而候間、安養院廿六代之住持頼喜法印隠居いたし、高五拾石寄附有之、然共右高五拾石御物御借入相成候、其後貧地ニ而可及破寺之故奉願、延享元年御免被仰付、為続料高五拾石買入、御代官所付取納被仰付候、

善光寺　西寿院

高拾石
開山日秀上人　中興照盈

一当院三号之事

善光寺　西寿院　如来堂

46

縁起

夫当寺昔日秀上人為　日新公之室寛庭芳宥大姉模写信州善光寺如来、手刻彫之以奉安置焉、尋創建精舎安位牌而供養之久矣、自住于此数歳、因茲曰善光寺、号西寿院事具見　日新記矣、本在安養院近辺盛秀僧正主大乗院之日改而移于此、爾来為大乗院門徒堂舎之修理、皆共大檀家所計而非私営構之、上人在日読誦法花妙典一万三千部祈当家繁栄、其供養之塔今尚在旧房之地、明暦四年公賜白銀三十五枚更造堂宇、又掌春日大明神座主職而、香花勤行祭尊（ママ）之儀式相続不断、神田本知行五十斛、勘落之後須五分之一補万事者也、

寛文七年丁未十月上旬当住盛須

47

旧坊有之供養石浮図銘写

正面　日本大小諸神　藤原朝臣義久
奉読誦大乗妙典一万三千部成就処
哀愍納受守護武運在天子孫繁昌

左　奉修供養　国家安全
奉書写法花妙文一字一石成就所
三世諸仏　諸人快楽

右〇〇（シレス）花れ本誓矣藤原朝臣貴公（本のまゝ）
奉納大乗妙典一国六十六部成就所
如護文朝敵退散如意

後　一切有情万人諸衆　本願上野住侶日秀上人
奉造立供養三世諸仏三摩耶形八万四千本
不随悪趣決定往生永禄十二年十一月吉日敬白

一本尊阿弥陀如来　一軀

但善光寺如来写之木像、日秀上人刻彫

一両脇立（正観音勢至）　作右同　二軀

一本田善光夫婦之木像　二軀

48

古御目録

一屋敷壱段三畦六分　壱石三斗弐升　大納言

一下畠二反八畦　二石二斗四升　大炊助

合三石五斗六升

惣合拾石七斗七升

先知行之事、以天下御下知雖被成勘落候、自今以後為御祈念、右之地為加増被相付者也、

慶長五年　鎌田出雲守

十二月十三日　　政近判

比志島紀伊守
国貞判

平田太郎左衛門
増宗判

図書頭
忠長

49

如来堂

右御加増古目録之儀者、奥計相残有之候、何れ之時代切申候而紛失候哉、不相知候、

明暦四天戊戌二月吉良日
奉再興春日大明神宝殿

夫当社者、本地雖住釈迦・薬師・地蔵・文殊・観音、三摩地依利生方便本誓而〻〻、爰去歳春曇不意火殃而一時焦土矣、雖然神体無恙従炎烟之中出焉〻〻、遷宮導師大乗院覚山、

50

奉再興春日大明神宝殿

夫春日大明神者所崇神五座、第一武雷命・第二斉主命・第三天津児屋根命・第四姫大神・第五若宮即釈迦・薬師・地蔵・観音・文殊之垂迹也、神護景雲元年、自常陸鹿島駕鹿以榊為鞭入大和三笠山以降無不応現都鄙而守邦人、特当社者我先君為鎮護国家建宮於此地、以為五社之其一也、毎年元晨太守公身自参詣諸士供奉、座主奉幣由来向矣、享禄中平等王院主執務之彼院絶後、蒙君命西寿院兼社職、依之毎日修本地供以祈国祚延長矣、至今臘月廿七日、捧巻数於城中賜受祝儀也、今茲元禄第五壬申秋九月十有九日、人舎有(守舜)〔三舛〕馬之変災罹神殿、然座▽寺主僧△等奉移神体并本地仏像於西寿院幸免灰塵也、即依太守羽林綱貴公厳威転地撰材営興不日成矣、惟時元禄第五壬申季冬廿八日、

経囲山覚慧謹誌

51

遷宮導師覚慧当座主西寿院照盈

奉再興春日大明神宝殿

〻〻〻茲歳国主重豪尊君当于御厄年之大忌発決定信心造替之企、依厳命営興不累日成矣〻〻〻〻

天明七丁未年正月吉日護国山盈仙謹誌

一高拾石　春日領　鹿児島荒田村浮免
一白銀三拾五枚
右明暦四年、阿弥陀堂為建立拝領仕候、再興成就申候、
一銀子拾枚
右万治三年子三月、(寺客)拝殿為建立拝領仕候、御使新納縫之助、先師盛順住職之内也、

開基之僧不知
中興開山盛有法印
高四拾弐石

威光院

右中興盛有買地ニ而、家村治兵衛方へ附高御免被仰付置候処、明和五年子七月、依願御代官所附御免被仰付候、尤名寄帳御勘定所へ差出候様被仰渡候付、明和九年辰六月差出申候、

夫当院以摩利支天為本尊創建、精舎奉安置焉、朝暮祈御武運長久已歳尚矣、本号長福院在安養院近辺為諏方之六坊内、盛秀僧正主大乗院之日移于此地、為大乗院門下院家也、寛永七年春、大乗院第七代住盛有法(寺印)師再修堂舎営構寺宇、改而号威光院、爾来三ヶ年一度於于城中勤一月護摩所長日数年也、

寛文七丁未十月十一日　威光院盛長

一当院本尊之儀者摩利支天ニ而候、右本尊之儀者昔時堂も別処ニ有之、氏久公御治世大隅国悪逆退治之節、此本尊へ御祈願あり、為被遊御開運由申伝候、就夫諸士衆日々(寺参詣)〔不絶〕有之、崇敬之衆人前方ハ摩利支天講有之、右之以講銀修甫等有之候由申伝候、左候而、寛永七年之春、大乗院第七世盛有法印志有之寺地計有之候処、隠居所再興罷成、夫より寺号も改本尊(寺冥名用)　威光菩薩即号威光院候、香花仏餉料として高四拾弐石寄附被申候、右高者伊地知吉右衛門より永代盛有買取申候高ニ而候、先年御支配之時分ニ、当寺住持盛長訴訟申上、万治二年亥六月御免、い東仁右衛門を以威光院高ニ罷成、名付家村清兵衛高ニ被召付置被下候、

千手院

開山大乗院先師覚門

一当院ハ内之丸観音堂之別当職、其上昔者氏瀬宮之社務を茂相勤候由、応永年中久世於当寺自殺被成候、以後当寺を久世寺と改候而崇敬被成候付、永禄六年十二月十六日、貴久公・義久公千手像并堂舎御再建之由候、寺領をも四拾弐斛御寄附被遊、其田を観音田と名付候而、内之丸并比志島村ニ為有之由候処ニ、何之時代歟被没収無禄地罷成候而、只屋敷計御免地ニ而候、本之寺地者観音堂之辺佐竹氏之屋敷ニ有之候処、慶長年中大乗院拾弐坊御建立之時、当地へ被召移候得共、於于今彼観音堂別当職ハ従当寺相勤候、雖然観音堂創建之旨趣并当寺開基之祖者、棟札等ニ記録無之故ニ不相知候得共、観音并堂舎再建之時之住持ハ頼喜法印と申候、

千手院来由記

当寺者在内丸、修千手観音香花年尚矣、古堂遺墟在山腹、欄前有遏伽水号御手洗、冬夏不涸、後改堂宇構今地焉、応永二十四年丁酉正月十三日、於当寺久世為久豊公遭害、戒名惟馨久徳大禅定門、于時殉死者幾干、石塔有矣、廻向彼尊霊者於今不絶、其後改久世寺、自爾来邦君崇重之、永禄六年癸亥十二月十六日、貴久公・義久公両君再建千手像並堂舎、院主沙門頼喜、延経囲山開基俊盛為落慶導師、其揆略記仏座下銘而現在矣、寺領四十弐斛灯燭料也、号観音田在内之丸並比志島村也、兼職氏瀬社務毎年両祭、寺僧勉旃転読仁王般若経、属社殿有林園心応慶安大姉在世之日、信敬之被大士之巨益誕太守焉、自爾来毎月十八日、課住持僧令読誦観世音経、使僧持札守捧殿中者也、毎歳私領倉米出十二俵捨施之湯地左近所計之処也、慶長間盛秀僧正主大乗院之時移遷当寺地、然而観音勤行到今綿綿無断絶当寺所掌者也、

寛文八年戊申五月朔日　　千手院現住亮然

持仏堂

一本尊千手観音　　光厳作

内之丸

一観音堂竪三間横弐間

一千手観音宮殿厨子有　　作者不知

右堂往古者佐竹氏之屋敷之山中ニ有之候処、今之堂地へ被移候、古堂之遺跡于今山腹ニ有之候由、

一石塔壱基

千手堂之側ニ有、久世之石塔也、

右茂本者山中ニ有之候を観音堂被移候節、今之所ニ相移候由、久世者応永廿四年正月十三日、於当寺為久豊公被害候由、

『浦の波と云旧記の内』一鹿児島内之丸観音は島津久世の御墓所と云々、彼堂の下にて御落馬御死去候となり、三十壱歳也、坊津江来ル唐人王栄と云者久世の御事を聞、奉行自然の事なれとも御名乗悪し、久世と書てハ久しき事三十一と書也と申ける、久世は師久公御孫守久御子也、故有て彼所にて御切腹、御落馬の説は非なり、

祇園社別当
文殊院

開山覚誉

高三拾石

一開基之祖不分明、中興開山覚誉、明暦中ニ従光久公白銀弐拾枚被成下、余者覚誉才覚を以造立、

一高三拾石

右者覚誉才覚を以致買地、祇園別当之故永代神領として附高之願申出、平野休左衛門付高ニ御免有之、

一池之王弁才天

右当寺より格護いたし来候、

右三行寛保二年戌四月書出シ、

一大乗院十八世覚雲師匠覚誉之再興ニ候、

一祇園之本地　薬師　阿弥陀　観音

一高三拾石　　皆房横頭門

内弐拾五石ハ祇園別当故、下町中勧化仕候而以衆力被買調候、五石ハ覚誉自銀ニ而買取候、

一高弐拾石

覚誉為菩提自分ニ買調附置候、

此高本物返之故、本尊主宮之原筑兵衛より被受返候付、

覚雲銀子四百八拾目相添候而、銀百三拾目直成ニ買足置候、

但上之〔(寺弐拾)〕石合而三拾五石之名寄帳一冊之内ニ而候、

一高拾五石

内拾石ハ覚雲法弟覚全為菩提寄附、五石者覚雲附置候、

右弐行之高ハ当分御借入相成、毎年利足申受候、

一池之王弁才天

初者戸柱橋之辺池之中江築島有之、其中ニ宮居有之候付、池之王と唱候、其後東福寺城坂之下り口ニ有之候処、宝永三年丙戌十二月廿一日祇園社後江御移被成候、琉球波之(上カ)山弁才天ニ而候、昔当国より琉球国征伐之時分、大将船之前ニ海中ニ影現被成候而、案内御教被成候付、其時御当国ニ勧請ニ而御崇敬可被成之由御約束ニ而候故、昔者殊之外御崇敬為有之由申伝候、夫より当分之地へ勧請有之候、

右六行寛政五年丑四月書出シ、

54 棟札

一夫当院者祇園天王之社僧而安置本地薬師・弥陀・観音之尊像、、、、

明暦二年丙申閏四月上旬

55 棟札

一当社池之王宮者琉球国波上山護国寺之弁才天女也、彼国御当家九代之太守忠国公以来雖属于当国来、慶長年中不従国命之故、十八代之太守家久公征伐於彼国之時、樺山氏久高為太将、平田氏増宗為副将、軍兵三千余人、艨艟一百余艘、同十四年三月欲赴彼国、先平治大島且渡徳島、屠殺数百人島中自伏畢、爾而臨于那覇之時、大将久高於海上見一物浮、倩見異人麗相也、問云、此是何者乎、答云、我是琉球国波上之弁才天也、汝欲伐彼国乎、彼亦、大備於軍師堅守衛国城、雖然我且擁護於汝等也、於茲大将敬礼而言、若実如是者乗之至于我国、然則我奏国君可加敬崇、言了以於片板一枚投于海中也、天女即乗其板向北方浮行如飛、衆人僉生〔(寺奇)立ツ〕異之想、依之軍勢得力而到于彼那覇之津、則津口要張鉄鎖遮於軍艦、雖然潮不常忽洶涌而懐山襄陵、偏是天女之奇瑞必矣、故棹船於陸地直攻入都門焉、国人雖防

戦強兵競撃、遂囲王城首里攻之故、卒琉王尚寧及三司官平伏而乞降也、依之大将擒尚寧、同年五月帰陣之後、以天女之事実奏邦君、尋彼片板果而着戸柱之辺矣、今当橋之西也、彼所本是河浜沼而依于潮之満干有池之深浅、其中築於小島為宮地而安置於天女也、安于池中故呼言池之王宮也、其後移于浜崎城之北麓也、然而宝永第三年丙戌臘月之日、薩隅日之三州兼領琉球国之太守従四位下羽林次将源吉貴公増加信敬、今般相攸於浜崎城之南聳金閣於海岸、架華表於巌頭、其壮麗儼然倍勝于昔時也、伏願者、依于此創建之良功天威増輝以介景福於東海、　邦君無為以斉宝寿於南山武名鷹揚英物瓜瓞而已矣、至祝至祷、

　当座主文殊院十代住覚殿謹誌焉

宝永第三歳次

　丙戌十二月二十一日

医王山　　多楽寺　　大乗院末　宝珠院

慶長年中御建立　開山重海

高五拾石　『寛永八年家久様高目録被成下候ゝゝ、寛保二戌四月書出シ、』

一薬師作者不知秘仏一軀

　脇士日光・月光・十二神但木像

　日光・月光ハ新仏　十二神古仏

　作者不知

薬師者古京都大津坂元有之、然忠久公御入国之時、当所坂元庄屋長田迫右衛門先祖負下、後当寺中安置之ゝゝ、寛文七丁未九月宝珠院慈海拝上、

56

一当寺旧跡者今護摩所地是也ゝゝ、家久公為国家ゝゝ使宝珠院先師重海修其行願、重海覚命以来ゝゝ、当行知行百石、既而亦出余長買得知行二百石、即合公私両田其高三百石領納之多歳也、于時慶長十八年卯月始、病痛甚急将終命、則先所受之公田辞、奉於是再為公物、亦以仏像・道具・家財并買(寺地)ゝ二百石仮加公田而言、願愚僧養育弟子両三、雖然策志於学業事東遊、爰以今遺言無人也、若此弟子等韞戒珠而得帰国、仏像・道具・財物・知行附与之丁寧言上畢、如眠而喝円寂也、時君臣上下都挙哀傷、其厚恩之極不可勝計也矣、既而後以寛永八年弟子照海帰矣、于時達上聞則命有召、於是照海

即入奉拝公顔忝蒙逆旅安否而後退也、即日国君命老臣曰、重海律師仏具私田等当行此弟子照海也、又命曰、昔日宝珠院成当護摩所其返地捧相応地云々、老臣受命議以買地二百石之内当行四分之一、其言曰、当時未住寺院、唯為続命賜買地四分之一高五十石也、亦述宝珠院返地之旨、君命之照海捧得当地以建之、然畢言上其旨、于時家久公并女妹等狂芳駕慇懃餞新寺之建立以開喜悦之眉、亦於是日仏像・仏道具・家財等出賜之、其日記別有之、雖然於買地百五十石者至于今令存在御荷内所、其旨趣知行目録顕然而則奥書曰、

右者宝珠院桑存房数年御奉公被申候、其節弟子衆依無之、自身之買地弐百石被仕候を、御荷内所江上置候而相果候、然者宝珠院為跡職秀存房へ高五拾石為被給之由奥書有之候間、勤行無懈怠可被相勤者也、

御支配所判

万治二年己亥　　平田藤右衛門（宗則）

六月十八日　　喜入休右衛門（久則）

寛文七年丁未九月宝珠院慈海拝上

57

奉建立薬師堂一宇

〻〻〻大檀主光久公并綱貴公・吉貴公〻〻〻

導師前大乗院法印照盈

元禄五壬申六月初六

宝珠院六世現住盈伝

一高五拾石

右高之儀者、当寺開山重海自分之買地弐百石仕置候を、御荷内所江願上候而相果、其後其四分一被返下候ニ付而、当時所務仕候高如是御座候、

右都而寛政五年丑四月書出シ、

神社調　鹿児島部　四

（表紙）

神社調　鹿児島部　四

終

荒田八幡社別当
福蔵院

中興開山大乗院先師覚弁
一八幡社建立并当院建立開基不相知、当院大乗院坊中ニ
相成ハ寛永年中と見得候、
一寺高三拾石為有之由候得共、元禄十一年寅十月十七日
御借入高相成差上候由書留有之、
一正宮司坊　権宮司坊
右二ヶ寺破壊ニ而寺地荒田八幡社両脇ニ有之、御免地

1

ニ而当寺より支配仕来申候、
一明和元年申十二月、覚弁法孫由緒地ニ御免被仰付、其
後覚弁大乗院住職被仰付、加再興閉眼終焉之地ニ而候
間、中興開祖覚弁、

荒田八幡宮者本地釈迦・弥陀・観音三身也、賜座主職
於当寺不知何世、所以寺社開基不詳也、雖然棟札存在
字泯而不分明、雖然太守貴久公之治世天文年中加再興
焉、其後大願主忠全公亦也、其后家久公寛永年中建立、
此従爾来至今修理無断、其旨在棟札、
寛文七年九月下旬　　座主福蔵院頼光

2

右寛政五丑四月書出シ、

医王山　　薬師院
但往古ハ万寿院ニ而候処、改号被仰付候次第左之通、

坊中
万寿院

右者去年御誕生之姫君様　万寿姫君様と奉称候ニ付、

万寿院事薬師院と改号被仰付度旨申出趣有之、申出之通薬師院と改号被仰付候条、可被申渡候旨可申渡候、

宝暦十二午
十二月　　寺社奉行

一開山頼源
一当寺往古ハ安養院六坊之内ニ而候処、貴久公大乗院御建立之砌、慶長年中ニ只今之地ニ被召移、十二坊之内ニ罷成候、
一高三拾五斛弐斗八升九合七勺
但頼源法印江郷田薬師之司職被仰付、御堂之修理被致候、其後第二代之先師盛意法印当院寺家再興ニ而候、且又於此辺郷田薬師信仰之諸人薬師講有之、右講銀当寺江寄附ニ而候、依之本行之高永代致買地、三原佐左(ママ)衛門佐殿付高ニ而頼置、右郷田薬師香花料として当寺ニ被付置候、然処第四代先師頼盛法印住職之砌、三原佐衛門佐殿御勘気ニ付、持高同前ニ被召上候、右高之儀者施人衆力之(寺志)念願ヲ以寄附有之段、光久公当院江御光儀之砌具ニ被聞召上、其後三ヶ年目ニ御返被下、新納右衛門殿へ付高ニ被仰付候、依之御高恩不浅　御祈祷相勤候、

3

名寄帳奥書

右知行郷田薬師為香花料万寿院前住被買調、三原佐衛門佐殿高ニ数年被付置候処、左衛門佐殿御勘気之時分本高同前被召上候、然処高所帳面ニ付高之書分慥ニ依有之、可被返下旨御侘被申出ニ付吟味被仰付候得者、寺社家より買地不被仕(寺御)旧法度ニ候得共、前々より高帳ニ被記置付高之儀ニ候間、返被遣候而可然之由、御吟味衆被申ニ付返被給候、向後寺社家之買地付高之例ニ成間敷候、彼返地之儀新納右衛門佐殿江付高之懇望万寿院より此度申出候間、此等之通高帳ニ細々書記置可致配当之由、御家老衆任御引付令支配候、御使者高崎惣右衛門殿也、

御支配所印

正保四年十二月廿四日

平田監物印
鎌田大炊助印

4

右知行郷田薬師為香花料万寿院永代ニ被買取、高崎宗右衛門御使を以御家老衆任御引付、新納右衛門殿高ニ被付置候、如先規相改令支配者也、

御支配所印

万治二年己亥六月八日

藤田藤右衛門印（寺平）

相良主税印

喜入休右衛門（久則）

右寛政五年丑四月書出シ、

高拾五石代

一銭百四拾七（寺貫）　六百五拾四文

右者三拾五石余之高ニ而ハ寺家之修覆難続候ニ付、第六代先師頼喜高拾五石寺家為興隆、元禄年中ニ寄付被仕置候処ニ、右高先年御借入ニ被仰付、只今ハ代銀ニ而御座候、其証文格護仕候、

市来五兵衛印

右寛保二年戌四月書出シ、

大乗院末

東嶺山　慈眼院　永福寺

開基覚因

建立寛永十四年丁丑

高六拾斛頴川并深見両家より寄附

寺地御免天文五申十二月

永福寺者以唐船勧化之助勢所草創寺也、原其権輿黄夏氏一官自崎陽赴麗府之日、中流而猛風頻起雷電交作洪濤巨浪、猶如推山倒嶽無所逃必没、即合掌而救済祈観世音菩薩・天妃・聖神待加護之処、須臾有紅光舟中遍、已而雲霽風収万里一碧、張帆動艫千里星、疾着娘嫣御崎万姓得安身、是倘非天妃聖神点加佐相、争能獲安済如是乎、帰告信士高一覧・陳友官等曰、為報霊応可建観世音菩薩・天妃・聖神之堂宇並為香花於寺家、雖然情至宝不至、于時高一覧者依擢崎陽大訳士化舟舶之上、凡題者七十有七名助銀若干、初事於寛永庚午成同辛未也、欲建堂宇寺求地、府地（寺城）南林山口有天妃古宮、其宮創立久欲建此地、狭隘而逼近尸墓兼亦市纏、而本非安

神之処、一覧・友官等相議以為必別求福地、則久遠計也、乃相地田之浦咸喜目、此山厥位面陽海洋曠(岩)宕常閑寂人跡稀、此処可以安尊像勝地、於是迺謁諏方安養院住持覚因和尚懇求此山、和尚慈愍不吝其土観然許諾、衆姓皆喜乃帰而卜吉辰分借寺地、鳩工聚材朝夕展力不数月告成、于時寛永十四丁丑歳也、屈請覚因和尚為開山鼻祖爾、則起事在黄一官蒙奇応成事在一覧・友官等之力而、後再勧施主三十有八名喜助銀若干、慶安己丗歳也、、、、

右寛政五癸丗四月書出シ、

平安山　上宮院　大乗院末　松本寺

開山実意

但当地ニ元和年中之比建立、寛永十八年辛巳十月廿八日寂、

此寺開基者公家松本氏建立焉、往日在隅州始羅郡平安山之麓、所以号平安山松本寺也、中

惟新公使浄土宗之僧住持此、即改寺号願成寺以為菩提院矣、▽(寺)本尊者春日御作弥陀也、今△尚在彼本、依之移松本寺於当地属大乗院坊中者也、

右寛政五丗四月書出シ、

高三拾弐石八斗五升七合八才

新城山　大明寺　延寿院

開山盛憲　年代不知

飯野諏方大明神者、義弘公在飯野・加久藤之城時、崇敬如在鑽仰不浅、当家久公高世、慶長五年庚子之春三月十日、甫テ賜座主職於当寺襲之以神田五十石、同七年壬寅之秋、家久公為上京已発鹿児島野尻亭、於茲右延寿院住持盛憲進席賜恩恵、其後被移寺于鹿児府至今寺務無怠也、

一飯野諏方社拝殿、寛永二年乙丑三月家久公御再興也、

一之宮座主屋敷之事　一之宮大明神座主　延命院

屋敷七畦拾五歩

右前代より竿不入、

郡本村一条之宮、、、、昔以神田高十町当行春秋両度祭

奠用、于時以延命院住僧長寿院任座主職、其後至寺社勘落之時悉被召上、依之無縁補恒例之祭奠、故下倉米三斗五升備正月三日・九月九日両箇之祭礼料、寛永三年、就無延命院住僧、大乗院住持盛有令延寿院主務座職、従爾以来至今無懈怠也、

寛政五年丑四月書出シ、

一高五拾斛

右大戸諏方大明神為御祭料、兵庫頭様より御寄附、

右寛保二戌四月書出シ、

光明寺

寺地御免、山号・院号不知、

一当寺開基之砌、岩崎口ニ弐百余年有之、其内本尊堂宇破損之節立久公御再興、其後慶長年中依　家久公命当地ニ相移候由、明暦焼失之時茂御物より御修繕被仰付候由、

敬白、奉再興薩州鹿児島県坂元村光明寺、本尊正観世音、大旦那藤原朝臣立久并願主慈興、作者主苗住持阿闍梨快肇、各々所求現当二世悉地成就速証正(守覚)『、』故也、

時応仁二年戊子二月彼岸中施主慈興敬白、

右書付本尊腹ニ在之、

奉再興観世音宝殿、明暦第四歳首夏初八日、夫当寺者開基以降在岩崎口経於弐百余歳、丁慶長年中依太守中納言家久公命移坂本名水口、既及卅余年、明暦初罹不意失火仏閣忽成灰塵、雖然尊容威厳而出烟中、奇哉妙哉、可仰可信、茲年春太守光久公合恭敬掌再興建焉、厳美麗倍前者也、是偏奉為国家安泰・武運長保・子孫繁栄・万民豊楽、二世大願決定円満也、万歳々々、旨趣如件、

光久尊君再興文

昔日立久公従応仁之年間加於再興以往歳霜漸移、尊像朽壊聖容傾斜、加旃罹承応甲午火災仏宇(守脱)　座竭灰燼焉、丁斯辰四脂(ママ)随落全身離散矣、於是々歳太守光久尊君命於仏工一甫而刻補欠少脩膠分離焉、縷々記上棟文故不書、

明暦四天六月十八

一天和二年亥（ママ）、御当地へ琉球国之祈願所無之候ニ付、当寺琉球之祈願所ニ被仰付度旨琉球より奉願候付、同年八月願之通御免許被仰付、其節琉僧頼昌初而住職いたし、拝殿以下惣様造立有之、其以来代々琉僧住職仕来候、

一米九斛

右毎年琉館より為続料相渡候事、

右寛政五丑四月書出シ、

龍渓山　神照寺　一乗院末　智恵光院

但山号・寺号明和三年戊五月依願被仰付候、

開山　性海上人

中興　尭周上人

高七拾石

右尭周自分買地ニ而候処、依願御勝手方請込ニ而、御代官方付取納被仰付、年々所務米申受候、

一御目見長日寺、明和三戌年四月被仰付候、

一寺地　享保十二年丁未七月、御免地被仰付候、

6

智恵光院開基再興記

蓋夫執国史閲之、文禄三年之夏、近衛左府信輔公（後信尹公称三藐院）也遠出帝都左遷薩南坊津郷、為仏神感応帰洛安全、創建智恵光院於伊志岐邑（在府城西）、安（ママ）于▽寺春日大明神・天満大自在天神之△霊而西海金剛峯寺一乗院為属寺統（統カ）、邇来星霜百四十有余歳、寺宇尽廃、享保元年之秋、相攸於府城之艮位撻々鼓冬（今改鼓河也）欲営造一宇也、其地経囲山右玉龍山、裏有巨石、天祐宗津禅師（玉竜山十一世）手自彫刻阿弥陀如来・勢至菩薩之霊像、有称助六松之一樹、享保三年春本堂・客殿・大門・尉屋（厨カ）落成、仏師善慶之門弟使鳥居孝重彫刻多聞・持国之二軀安置于大門矣、享保二十一年（元文元年也）之冬、客殿・厨屋重興之新造、勧請孝師性海上人為開基之初祖、準于吾弟二世之兼住焉、于茲客殿再興之半、雌雄之黒鶏飛而来庭際夕楼屋隅為己之塒、想夫鶏者陽鳥而祥瑞也、因画師常信之門弟使永井慶笠画雌雄黒鶏於客殿之杉戸、是乃依佳瑞也、

右寛政五丑四月書出シ、

千台（岌）山　真乗院　真言宗坊津一乗院末寺　大興寺

開山頼政僧都、永正五辰六月、忠治公御創建、

一足利将軍義教公之御舎弟嵯峨大学寺（覚）御門跡義昭大僧正御隠謀致露顕、日州福島江落下御忍居候段相聞得、義教公より忠国公江御下知有之、於福島永徳寺僧正御切腹、坊官別垂讃岐坊宥善殉死、其後為御菩提忠治公御建立ニ而、僧正之御牌并宥善位牌御安置、

一大覚寺殿御仏餉料　琉米拾五石

一右同為御法事料、三月十三日・七月十三日両度ニ米四石相渡、

右要用集しらへ、

大興寺文書之内

早為御方致忠節者可為御本意、於恩賞者可随望、双乗忠儀候間毎事致談合、無等閑者可為御本望之状如件、

永享拾壱年六月廿五日　御判

鬼塚備中守殿

7

讃岐坊

此ほとハよそとおもひし涙川
いまわか袖になかれへ哉「本のまゝ」

都城

己巳八月十九日　鬼塚常真

夫大覚寺ハ、仁王八拾九代亀山院第二之王子後宇多天皇御皇后発心し給、仁和寺御室法助法親王之御付弟真光院禅助僧正為師、於東寺灌頂（守堂）御入壇、彼寺之元祖、第二南池院宮、第三ハ道法親王伏見院之御孫、第四ハ龍花院殿、第五ハ普光院殿御舎弟号宇知院義昭大僧正、有兄弟不安儀、讃州坊・侍法師御供而日州櫛間院養（永）徳寺ニ有下向忍居給り、然普光院有命前奥州太守忠国公押悲涙奉失畢、

嘉吉元年三月十三日御年三拾七、同六月廿四日、普光院殿義教為赤松被殺給、三州太守忠治改慈父円室御芳跡壊旧室為義昭之御菩提所、命一乗院第六住持頼政建立大興寺、

永正五年戊辰六月上旬

8

私云右有倶養塔婆表白
同六年円室源鑑奉弔一周忌有表白
右大覚寺殿由来記之末ニ有供養塔婆表白、同六年円室源鑑奉弔一周忌有表白と記付有之候得共、何れ之代紛失仕候哉、今当寺什物之内ニ無之候、如何様当院回禄之砌焼失候哉と相考申候、
右寛政五年丑四月書出シ、

仙台山真乗院大興寺
世代譜

一開山頼政
一乗院六代之住ニ而候処、忠治公より為養子、永正五年六月当寺開基、住職隠居之年間不知、大永元辛巳二月廿二日寂、

一二代頼忠
一乗院八代之住ニ而候、何比当寺江入院之年間不知、永禄十丁卯十月廿九日寂、

一三代頼円
四月四日寂

一四代頼固　六月七日寂
一五代俊雅　四月廿五日寂
一六代盛弁
正保四年三月九日寂
一七代亮典
五月十七日寂
一八代成因
当寺境内松樹院へ隠居候由申伝候、年間不知、寛文五乙(巳)未十一月五日寂
一九代覚秀
後ニ一乗院住持と見得候、
一十代寛阿
寛文十二壬子八月八日寂
一十一代超然
当寺より隠居ニ而号容身軒、宝永四丁亥十月廿八日寂、
一十二代覚仙
宝永六己丑十月廿三日寂
一十三代覚運

元禄七壬(甲)戌三月曽於郡花林寺へ移転、

一十四代騰雲

勝軍院より入院、当寺より安養院へ移転、

一十五代盛存

宮之城清浄院より入院、

宝永六己丑十一月六日於江戸死、

一十六代尭周

宝永六己丑護国院より入院、正徳三癸巳十二月一乗院へ移転、

一十七代雲恵

正徳三癸巳十二月▽(寺)朔日△当所松本寺より入院、同四甲午九月十日寂、

一十八代覚翁

正徳四甲午当所文殊院より入院、享保三戊戌十月十七日寂、

一十九代亮寿

享保三戊十月当所宝持院より入院、同四亥十月廿日寂、

一廿代覚遠

享保四亥十一月当所宝持院より入院、同十一年午七月一乗院へ移転、

一廿一代覚音

享保十一午七月当宝持院より入院、同十三申四月花林寺へ移転、

一廿二代覚英

享保十三申四月国分金剛寺より入院、同廿年卯七月安養院へ移転、

一廿三代照阿

享保廿年卯七月宝珠院より入院、同廿一丙辰三月十七日寂、

一廿四代真盈

享保廿一辰四月廿七日善聚院より入院、元文二丁巳十月九日寂、

一廿五代周盈(看坊)

元文二丁巳十一月当所西寿院住ニ而当寺看坊、同四己未十一月廿日死、

一廿六代周意(看坊)

元文五庚申正月廿八日当所西寿院住職ニ而当寺看坊、

大興寺末
松樹院

高拾三石　開山盛因寄附
　但大興寺八世住持隠居所
同拾七石　覚仙寄附
　但大興寺十二世住持
合高三拾石

右者当分御借入高ニ罷成、高代銀利銀を以相続仕候、
右松樹院之儀者、盛因隠居所ニ当寺門前屋敷寺領高之
内ニ被致造立、盛因死去之後、住持二代相続候故、当
寺末寺▽(寺)往々寺建申度旨本寺△一乗院へ申出末寺帳ニ被
召載、従夫以来寺建申候、其節之証書左ニ写差上申候、
当分住職之僧ハ覚仙法印弟子鏡円房ニ申付置候、当寺
末寺之故、大興寺由緒改帳ニ書加差上申候、

9

一松樹院事盛因隠居所ニ而候、死去之後二代相続候、今
度本末之記相定候而各相談之上、以大興寺末寺致決定
候、一乗院御使福蔵院ニ而候、就夫従本寺至末寺非道
成儀申事、又従末寺至本寺不作法成儀、天下流法之御
定候間、互ニ熟談以永々無間断之様ニ相続候儀専要ニ
候、為後証如此候、已上、

寛文十三丑　　一乗院
六月八日　　金蔵院
　　大興寺
　　開聞山

松樹院

10

大興寺末寺
松樹院

右者当分大興寺寺高之内後迫江建立有之候処、極貧地
ニ而永々修甫不行届、別而及大破居在家中ニ而場所悪
敷候付、大乗院境内聖天堂東脇空地致借地、右松樹院
引直致造立候儀御免被仰付被下度旨、大興寺より願申
出趣有之、願之通引直方被成御免候条可被申渡旨、大
乗院江可申渡候、

天明四年辰六月　　寺社奉行

一毘沙門天木像　　一軀
　長二尺五寸立像
　本尊天座之裏ニ銘有之、

願主大工田中方へ秀「本のまゝ」

于時宝徳四年壬申十月三日敬白

作者　紹徳

一再興大檀那島津藤原朝臣義久

願主大興寺頼忻

永禄五壬戌年八月十八日

綵色者深賢

一奉再興毘沙門天尊像

宝永七庚寅歳六月三日

施主岩崎

平右衛門

仏師

鳥居如見孝重

開眼導師

大興寺十六世法印尭周

右寛政五丑四月書出シ、

大雄山　仏日寺

天台宗武州東叡山寛永寺円頓院直末法曼派山門玉照院兼帯着座門首

南泉院

一東照宮大権現御鎮座　御影束帯

家康公元和二年丙辰四月十七日薨御

一台徳院贈正一位大相国

秀忠公寛永九年壬申正月廿四日右同

一大猷院贈正一位大相国

家光公慶安四年辛卯四月廿日右同

一厳有院贈正一位大相国

家綱公延宝八年庚申五月八日右同

一常憲院贈正一位大相国

綱吉公宝永六己丑正月十日右同

一文昭院贈正一位大相国

家宣公正徳二壬辰十月十四日右同

一有章院贈正一位大相国

家継公正徳六丙申四月晦日右同

一有徳院贈正一位大相国

吉宗公寛延四辛未六月廿日右同

一惇信院贈正一位大相国

家重公宝暦十一辛巳六月十二日右同

一浚明院贈正一位大相国

家治公天明六(丙)壬午九月八日右同

一文恭院贈正一位大相国
家斉公天保十二丑閏正月晦日右同

一将軍家公文五通

一大願寺記録写一巻

右大願寺文書ニ候処、南泉院之儀廃跡御再興之故、右文書相納有之候、

一大雄山御宮并南泉院御位牌殿之儀、薩州鶴田紫尾山大願寺元来之天台宗ニ而、足利将軍義満公御自筆医王宝殿之額迄為遣置寺　光久公雖被引移置、地面も狭彼是不宜候ニ付、依吉貴公命、宝永七年庚寅四月御再興、寺山院号東叡山准后より被改候、和州吉野山学頭願王院権僧正智周住職ニ而常院室被仰付、且御領国天台宗触頭ニ而候、

一高五百五石九斗六升四合五勺八才
右要用集しらへ、

一鶴田黄龍山大願寺開山一関宗万和尚ハ、臨済宗五山派京都建仁寺開山千光国師四世之孫ニ而、文和元壬辰七月六日入滅と古記ニ有之、開基之年月不詳、足利将軍義満公御自筆医王宝殿之額迄為被遣置寺ニ而候、
右辰六月十五日しらへ、

大雄山　仏日寺(ブッジツ)　南泉院
天台宗武州東叡山末寺法曼派定院室僧正地山門玉照院兼帯三州触頭東照宮別当着座門首弐拾人御賄料

高五百石

右宝永七年庚寅吉貴公　御寄附

高五石八斗五升八合三勺三才

右享保十年乙巳吉貴公増高

一宝永五子年　太守様御参府之節、拙僧事江州蘆浦観音寺令在中候ニ付、草津駅御本亭江為御見舞罷出候処、年来御願望思召候ハ、御城下　東照宮御再興并別当寺御建立、　公義御代々之御霊牌御安置被成度候付、則地形御普請被仰付候、就夫其方事一往致下向遷宮所法(等カ)用執行、且又別当之寺江兼住仕候様被成度候、然共吉野山并観音寺を抱罷在候ニ付、当分も下向難成訳ニ候ハヽ、右法用万端上方より致差図、別当寺江兼帯候様被成度候、此段於領掌者御着府之上、東叡山江可被仰

11

立旨被仰聞候、然共存寄有之候ニ付再往及辞退、追而何分共御返答可申上旨、島津帯刀殿迄申入置候、其已後御尋之旨申来候故難黙止、於自分者畏入候、然上者東叡山之御下知次第可仕旨、同年十一月、帯刀殿迄書状を以御受申越候事、

一同年十二月七日従　太守様右之御願、東叡山准后宮様江被仰立候ニ付、御口上書帯刀殿を以、東叡山明王院迄申遣候、右御書付左之通、

口上覚

御執当衆中迄松平薩摩守申上候、国許江奉始　東照宮御代々様御位牌奉崇置候処、其節差支申儀有之候ニ付、別処江奉御遷宮御遷座度年来心懸候得共、地面等付而差支申儀有之延引仕候、此節御宮御位牌殿并別当寺を茂慥再興仕候、然共国許江ハ屹与為仕天台宗之僧無之候ニ付、御遷宮等之御規式執行、又ハ別当寺再興之住職を可申付僧無御座、依之吉野山願王院権僧正事、多年明王院へ被差置、別而心安御座候間、願王院事右別当寺江兼住被仰付、御差支も無御座候ハヽ、来年来々年之内三四ヶ月程薩州江被罷下　御遷宮御遷座被仕、左候而、暫ハ別当寺へ住職被仰付被下度奉願候、此段宜御取成頼存候、以上、

一四月十一日四ッ時、願王院御本坊へ参上可仕旨、昨日執当中より案内ニ而明王院同道ニ而罷出候様三執当列座ニ而、薩摩守殿於御国元東照宮御再興別当寺御造営ニ而、御願之通彼寺兼帯（ママ）被仰付候、来年致下向　遷宮等執行可仕旨被　仰出候旨、表向被申渡候、明王院江ハ右之通今日願王院へ被仰渡候由、薩摩守殿へ御使ニ参可申達由御口上被申渡、則御詰（寺請）仕直ニ御前江罷在御礼申上、執当中へ御礼ニ相廻り候、芝御屋敷へハ明日御届ニ可致伺公旨、帯刀殿迄被申達給候様ニと明王院へ頼置候、

一別当寺之儀、新地者御法度ニ付、薩摩国伊佐郡紫尾山大願寺ハ往古天台宗之旧跡故、彼寺を御引直可被成候、然共寺山号ハ此度御改被成度候間、相応之号従　准后様被成下候様ニと明王院ヲ以御願ニ付、大雄山仏日寺南泉院と称号被遣候由、

一御神体之儀、最初ハ准后様御筆御神号ニ被成度由候処、

於諸国前ニ東照宮建立之節、東叡山より大仏師江彫刻被仰付被遣候由御聞合有之、此度茂准后様より彫刻被仰付御開眼被遊来、右令旨之写、

12

今度於薩摩国南泉院東照宮造営神体彫刻之事、如家伝可致存知之旨、准三宮一品宮御気色之所也、仍執達如件、

宝永六年六月四日　　内蔵権頭保孝判

大仏師康伝

（本文書ハ「旧記雑録追録二」二八一七号文書ト同一文書ナルベシ）

一南泉院本尊之事、准后様へ相伺候処、御本地堂も無之候得者、寺之本尊者薬師如来安置可仕之旨被仰付候、然処旧跡大願寺へ将軍家鹿苑院義満公御筆医王宝殿と申額有之、大願寺破滅已後薩州高城郡真言宗泰平寺ニ被預置候由、帯刀殿物語ニ而、則及准后様高聞候処、幸成ル事ニ而、右之額を打候様ニと被仰聞、其段帯刀殿迄申談候、

13

大雄山仏日寺者薩摩太守源吉貴朝臣於其国府所創建也、然請余以勧請　東照宮大権現而属東叡山之末派故、応御請命権僧正智周開其寺法司其奥儀、且以南泉之院号永為当門之良家能可令顕密両(旧業弘)通其国者也、

▽(旧)宝永六年六月十七日△

輪王寺准三宮一品親王

御書判

（本文書ハ「旧記雑録追録二」二八二九号文書ト同一文書ナルベシ）

14

一筆令啓達候、兼而申入置候通、当国江御下向御遷宮之儀弥頼存候、依之迎之者差越申候、委細口上申含候、恐惶謹言、

二月廿七日　　松平薩摩守

願王院権僧正　　御判

御同宿中

15

右寛政五年丑四月書出シ、

薩摩国大願寺住持職事、任先例、可執務之状如件、

延徳参年二月廿二日　　（義植）（花押）

利珪首座

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七〇〇号文書ト同一文書ナルベシ）

16

聖福寺住持職事、任先例、可執務之状如件、

文亀弐年十一月廿日　　（義澄）参議左中将（花押）

利珪西堂

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七八二号文書ト同一文書ナルベシ）

17

建仁寺住持職之事、任先例、可執務之状如件、

文亀弐年十二月廿一日　　参議左中将（花押）

利珪西堂

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七八三号文書ト同一文書ナルベシ）

18

薩摩国大願寺住持職事、任先例、可執務之状如件、

天正六年八月十六日　　（義昭）権大納言（花押）

明讃首座

（本文書ハ「旧記雑録後編二」九九五号文書ト同一文書ナルベシ）

19

称興寺住持職事、任先例、可執務之状如件、

天正六年十月十七日　　権大納言

明讃西堂

（本文書ハ「旧記雑録後編二」一〇〇八号文書ト同一文書ナルベシ）

右国分宮内正興寺より取揚也、鶴田大願寺文書五通之写也、

南泉院世代

一開山智周僧正

右者御朱印地江州蘆浦観音寺住持兼吉野山学頭実城寺兼願王院権僧正候処、宝永六丑四月十一日、於東叡山従　准后宮御方南泉院兼住被仰出候、然処享保七寅正月廿七日、南泉院迄以御使者南泉院兼住願之通御免被仰出、

一二世亮厳僧正

右者南泉院代芳林院候処、享保七寅正月廿七日、於御
本丸南泉院住職被仰出候、享保十九寅三月四日遷、
一三世智蔵権僧正
右御朱印地野州田中瑞光寺住持候処、享保十九寅十月
四日、於東叡山従　准后宮御方南泉院住職被仰出薩州
江下向、享保廿一年辰正月三日遷化、

南泉院寺中
七人御賄料
高百石　実相院
『旧号実相坊』
同百石　観樹院
『旧号観喜院』
同百石　吉祥院
『旧号吉祥坊』
右宝永八年辛卯、野田山内寺脇寺廃号を以吉貴公御代
御再興、開山智周(寺ナシ)〔正〕僧正、
一末寺　七ヶ寺
右田舎諸在江有之候、
右寛政五年丑四月書出シ、

一剣壱振波平大和守安国作
一太刀一腰一文字則宗作　折紙添
一手鉾弐本
一弓矢并箙壱ッ
外之品々略ス、
右大雄山御宮内陣江格護、

弥勒院末
七人御賄料
慈雲山　安寧寺　龍洞院
高百六拾壱石余
銀三貫目御寄附
一当寺ハ高原神徳院末寺常教院廃寺号を以、享保十巳六
月吉貴公御建立、御下屋敷・御看経所・御位牌所当院
江御安置被遊候、中興開山弥勒院第一世憲英、
一磯御山内并御囲外御安置候堂社惣別当被仰付候、
右寛政五丑四月書出シ、

覚
御脇指一腰国吉　代金弐枚極札有　長八寸分半
一御二所物亀之色絵
一御鎚二重金
一御柄鮫白
一御目釘星金

一御鞘黒塗
一御鵐目金
一御下緒
一御小刀薩州住正盛
一御袋

一諏訪大明神々体鏡上下二社
右諏訪大明神ハ慈恩院殿御願ニ而大口之諏方大明神井上(寺右)大内ニ被仰付、享保十二年丁未二月御勧請御造営有之候、慈恩院殿御存生之内ハ諏方社人被召御祭御座候得共、竜洞院へ祭事被仰付、御祭ハ信州諏方之通、三月中之酉ニ被仰付、二酉之月ニ初之酉也、

20

覚
鐘高サ弐尺四寸本之口五尺一寸廻
奉捨入　金銭六万宇搥鐘一口
肥後国玉名庄遥拝
宮御宝前
右志者為天長地久、御願円満、天下泰平、国土安穏、伏願皇風、永扇帝道、遐昌仏日、増輝法輪、常転時、清道泰風調而、須国中無兵、万民楽栄、専祈保祐檀那、各々増福増寿心中所願皆令満足也、時康暦弐年庚申六月日大檀那源右衛門佐仲秋、大宮司大江越後守秀氏、
大工菅原氏国
右者吉松般若寺鐘を以、此度其寺鐘楼掛易ニ被仰付候、全可被格護候、以上、
享保十年乙巳十二月七日
寺社奉行

龍洞院

21

龍洞院江
磯御山内江被建置候龍洞院、先年　天台宗之寺ニ被仰付、弥勒院末寺ニ相成候処、此節磯蘇鉄山近辺江被引移、御下屋敷・御看経所・御位牌所龍洞院寺内へ御安置被成候、依之左之通被仰出候、
一今度龍洞院就御再興、寺格諏方別当安養院同格被仰付、色衣被成御免候、尤人柄之儀者弥勒院門中より相応之僧見合可申出候、現住無之節者弥勒院兼帯被仰付、年

頭御礼進上物等之儀も安養院同前ニ被仰付候、

一高百拾七斛七斗四升五合九勺三才龍洞院へ御寄附被成筈候、右之内拾七斛七斗四升五合九勺三才ハ、以前より代官所へ被差分置、磯奉行所務受取、時々龍洞院へ相渡候へ共、此節寺高ニ被仰付候、追而　御袖判頂戴可有之、其節御家老連名之副書并名寄帳可相渡候、残百斛之儀者御新田被仰付候間、御竿相究支配等相済候節名寄帳可相渡候、右ニ付而者委細寺社奉行より可申渡候間、左様可被承置候、

一磯御山内并御囲外へ、此以前より御安置之堂社迄も龍洞院へ惣別当被仰付候、右堂社之儀者別紙書附有之候、

一御看経所之儀、以前より御代々御安置之儀ニ候得共、末ニ成候而ハ及断絶儀も有之候、仍往々不致破壊様ニとの思召ニ而、此節龍洞院へ御安置被成候、左候而、今程ハ修甫等之儀も御隠居御方より可被仰付候、以後之儀者御看経所・御位牌所并龍洞院永々表方より無断絶修覆可被仰付候、

一磯山内外諸堂社廿四ヶ所之内、此以前より表方御物修甫、御隠居御方修甫并所修甫なとゝ有之、或小板葺・茅葺又ハ石之小倉も有之候、右堂社今程ハ有来通御隠居御方修甫、所之分ハ御隠居御方より修甫被仰付、所修甫仕来候、堂社ハ以後共其通いたし、当分表方御物修甫并今程御隠居御方より修甫有之候、堂社之儀ハ往々表方修甫被仰付、永々無断絶被仰付候間、寺社奉行所神社帳ニも記置、御記録所其外可承座々へ相記置、後年紛敷儀無之様被仰渡置候、右堂社花香・灯明・供物・掃除等之儀者、先達而御隠居御方より弥勒院へ被仰渡置候通可相心得候、

一磯天神之儀者、此以前より社人西郷伊予被仰付置、諸事神前之勤致来、参銭も伊予申受候而自分ニ香花・供物等差上儀も有之、尤御物よりも有之事候、此段ハ有来通以後共可有之候、然共龍洞院へ別当被仰付事候得者、其訳を以年々参銭之内少々宛龍洞院へ相渡候筋、寺社奉行より申渡可有之候、

右之通此節被仰出候条難有奉存、勤行等之儀弥無懈怠相勤候様可被相心得候、以上、

十一月　　（島津久豪）李

（本文書ハ「旧記雑録追録四」四三二号文書ト同一文書ナルベシ）

22

右之通享保十巳年磯御山内并御囲外御安置之堂社龍洞院へ惣別当被仰付、堂社付別紙被渡置候、其節ハ右条之内ニ記置候通、堂社弐拾四ヶ所ニ而候処、其以後御山内ニ諏方両社・〔等之〕(旧愛)染堂御安置、磯海辺通路脇江石体之観音・石之小倉山神御安置、比志島野牧神表方へ被進、御山内達磨弥勒院へ拝領、蘇鉄山観音月社(旧船)寺へ拝領付、当分堂社以上弐拾五ヶ所ニ相成候、依之此節別紙之通堂社付書改相渡候、以上、

享保十七子八月　(樺山久初)主計

（本文書ハ「旧記雑録追録四」四三三号文書ト同一文書ナルベシ）

23

御仏餉料

一銀弐貫目　龍洞院知事

右玉仙院殿・慈恩院殿御仏餉料として被(旧差)召下候間、無懈怠相勤、至後年紛敷無之様ニ帳面等可記置候、

享保十七子三月廿八日　(比志島範房)隼人

（本文書ハ「旧記雑録追録四」三九七号文書ト同一文書ナルベシ）

24

一古銀壱貫目　龍洞院

右者

(光久)寛陽院様
(綱貴)太玄院様(旧大)
(綱貴側室)真修院様
(吉貴室)霊龍院様
(綱久)泰清院様
(光久継室)陽和院様
(綱貴側室)蘭室院様

右御位牌龍洞院へ御安置、御仏餉ハ寺役差上、御菓子・御茶表方御書院并磯物奉行方より月々御忌日・正・五・九月・盆・彼岸龍洞院へ相渡来候得共、向後之儀者御物より不及相渡、右銀此節被相渡候間、永々右銀を以御茶・御菓子龍洞院方ニ而相調可差上候、霊龍院様御位牌へハ此間寺役御菓子・御茶差上来候へとも、此節より右之通被仰付候、右銀寺社奉行方へ差出置、借付利銀を以後年御菓子・御茶差上候筋可致候、

元文六年酉七月　(島津久道)権左衛門

（本文書ハ「旧記雑録追録四」一六八六号文書ト同一文書ナルベシ）

25

継豊公

御袖判

高百拾七石七斗四升五合九勺三才

右総州様(◎就其院)御再建、今度為寺領所寄附之也、全可
領知之状如件、
享保十一年正月廿六日
龍洞院

(本文書ハ「旧記雑録追録三」一八三三号文書ト同一文書ナルベシ)

26
一高百拾七斛七斗四升五合九勺三才
日州高崎前田村之内
同小林北西方村之内
隅州清水山之路村之内
同清水郡田村之内
薩州鹿児島吉野村之内
右前中将吉貴公就其院御再建、為寺領今度太守継豊公
被寄附之、御寄附状被成下畢、全令所務御祈祷無怠慢
可抽丹(旧悃)『、』者也、仍如件、
(種子島)弾正
久基判
享保十一〔旧丙午〕〔西〕
(伊集院)蔵人
久矩判
正月廿六日

(島津)李
久武判
(島津)内膳
久兵判
(島津)中務
久貫判
龍洞院

(本文書ハ「旧記雑録追録三」一八三四号文書ト同一文書ナルベシ)

27
知行目録
一高三拾弐石弐斗五升四合七才
志布志月野村之内
末吉南之郷村之内
志布志月野村之内
▽(旧)名寄帳在別冊△
右高雖為前住浄妙院憲英法印自分新仕明之地、依願相
加于先年之御寄附高、都合百五拾石被寄附于其寺之条、
到後年無違失可有取納者也、仍如件、
(平田)掃部

延享五年辰
四月廿五日

正輔判
（鎌田）典膳
政昌判
（樺山）主計
久初判
（島津）大蔵
久丘判
（島津）左衛門
久甫（旧）判

龍洞院

（本文書ハ「旧記雑録追録五」二四〇号文書ト同一文書ナルベシ）

28

一寺地八百五拾五坪

右高原神徳院脇坊常教院廃寺先年御再興、龍洞院と被相改、磯御屋敷内へ被建置候処、御隠居御方御看経所被仰付被引直候付、為寺地被下之者也、

享保十八年九月三日

弾正
久基判
蔵人

久矩判
主計
久初判
中務
久貫判

龍洞院

（本文書ハ「旧記雑録追録四」五五二号文書ト同一文書ナルベシ）

29

寺地目録

寺地八百五拾五坪　龍洞院

右寺地磯御屋敷付御蔵入并山野ニ而候処ニ、高原神徳院脇坊常教院廃寺先年御再興、龍洞院と被相改、磯御屋敷内被立置候処、御隠居御方御看経所被仰付被引直候付、為寺地被下之旨、享保十八年丑九月十五日、御家老衆任御引付令支配候、向後守法式勤行無緩疎可相勤者也、

享保十八年癸丑
九月十七日

宮之原甚太夫（通貫）印
平田新左衛門（宗房）印
肝付典膳（兼逵）印

30

覚

一高麗焼濃茶々碗　壱ツ
一利休黒焼茶碗　壱ツ

右者利休小田原陣ニ被相持候由、伊勢津藤堂仁右衛門と申仁、同国久居藤堂土佐守様内橋本弥右衛門と申仁ニ附属仕、弥右衛門より基楽庵江給、夫より弥勒院へ附属被申候、外ニ数行略ス、

右十二ヶ条之品弥勒院憲英より此節貴寺へ被致附属候条、向後至り紛敷無之様可被致格護候、以上、

享保十八酉（ママ）六月十二日　（寺島津）権左衛門印

相良源太夫印

龍洞院

芳野山　憲英寺　法輪院

右坂元村仏源寺廃壊地、享保十一年午吉貴公御再興ニ而、開山隅州弥勒院第一世憲英、

一御目見地

住職之節、中紙三束進上、寺社奉行所迄、

31

覚

弥勒院末寺仏源寺此節山号・寺号・院号左之通被相改候、

芳野山　憲英寺　法輪院

右者入院之御礼ハ不被仰付、都而年頭御目見（旧寺）等之格ニ被仰付候、住職之節者寺社奉行証文を以申渡、御礼寺社所迄中紙壱束致進上寺格ニ被仰付候間、此段如例可申渡旨被仰渡候間、可被得其意候、以上、

享保十一年八月廿六日

寺社奉行所印

弥勒院

（本文書ハ「旧記雑録追録三」一八九二号文書ト同一文書ナルベシ）

32

知行目録

高三拾石

門場所略ス

右高雖為前住浄妙院憲英法印自分新仕明之地、依願被寄附于其寺候条、到後年無違失可有取納者也、仍如件、

（平田）掃部

延享五年辰四月廿五日

正輔判

（鎌田）典膳

政昌判

（樺山）主計

久初判

（島津）大蔵

久丘判

（島津）左衛門

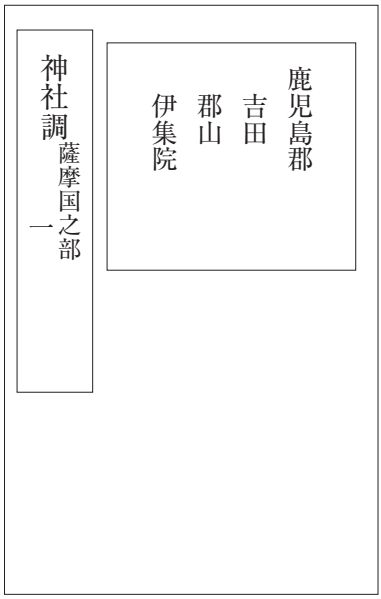
久甫判

憲英寺

（本文書ハ「旧記雑録追録五」二四一号文書ノ抄ナルベシ）

神社調　薩摩国之部　一

（表紙）



薩州鹿児島郡

吉田郷

惣高五千六百拾壱石余

狩夫百七拾五人

地頭職分高五拾石

日置郡

伊集院郷

惣高壱万四千八百六拾五石余

狩夫千七百九拾壱人

地頭職分高百石

郡山郷

惣高五千四百弐拾弐石余

狩夫弐百弐拾九人

市来郷

惣高壱万弐百九拾六石余

狩夫千九百弐拾三人

薩摩郡

百次　惣高千百六拾弐石余　狩夫百拾壱人

山田　惣高千三百七拾石余　狩夫七拾人

隈之城　惣高六千二百石余　狩夫五百拾五人　地頭職分高百石

高江　惣高三千四百拾六石余　狩夫弐百六拾人　地頭職分高百石

中郷　惣高千四百拾六石余　狩夫百九拾弐人

東郷　惣高六千三百三拾三石余　狩夫四百七拾壱人

樋脇　惣高八千七百石余　狩夫五百弐拾八人

伊佐郡

山崎　惣高三千八百四拾弐石余　狩夫三百弐拾七人
鶴田　惣高四千五百三拾三石余　狩夫三百拾弐人
大村　惣高五千四百五拾八石余　狩夫三百拾人
大口　惣高壱万千八百七拾石余　狩夫四百弐拾九人
羽月　惣高五千四百九拾五石余　狩夫弐百三拾人
山野　惣高千七百九拾三石余　狩夫九拾壱人

出水郡

出水　惣高壱万九千七百八拾七石余　狩夫千六百弐人　地頭職分高百石
高尾野　惣高五千五百七拾八石余　狩夫三百三人
野田　惣高五千八拾弐石余　狩夫三百六拾三人
阿久根　惣高八千七百三拾九石余　狩夫千六百六拾四人　地頭職分高百石
長島　惣高弐千八百四石余　狩夫五百四拾六人

高城郡

高城　惣高五千七百五拾七石余　狩夫七百五拾五人
水引　惣高六千八百石余　狩夫千弐拾三人　地頭職分高百石

甑島郡

甑島　惣高三千弐百四拾三石余　狩夫上千三百拾三人　下千九百七拾四人

一吉田城ハ吉田御供所検校長太夫吉清は忠久侯の時居城せしむ、其本ハ大蔵姓より出、上古三位大蔵行忠数代吉田の郡司為り、然して天仁三年正月十九日、執印行賢と云に吉田を治却（沽カ）せしむ、行賢買得て源為重に譲る、為重ハ鎮西八郎為朝の二男也、為重此地を知行して長太夫清道ニ譲る、為重は清道か為には母方之祖父也、抑清道か先祖ハ息長氏より出、日本尊御子息長の宿祢四十二代大隅の国正八幡宮神官公文執当権政所助清、其子長太夫清道此人吉田の元祖と為り、二代吉田院司御供所検校吉清、建久八年七月右大将家安堵之御下文有り、三代重清乃至十代若狭守清正法号月峰了心、太守元久侯の時忠臣軍功を抽つ、

1

鹿児島郡

吉田

宝勝院　真言大乗院末御免地
高壱石寺社方合力
御目見地
津友寺　曹洞福昌寺末御免地
高拾石寺社方検者付
帝釈寺　津友寺末石地
興化寺　臨済大慈寺末

鹿児島之郡吉田
正一位正八幡
右八幡者吉田美作守とて吉田院（ママ）之城（ママ）主也、然るに為子細乎兄弟不和ニ成、吉田於本城村舎兄より大勢を隠置、風呂に入られたるを執囲圍を揚られ候得ハ、風呂を破り被出大勢を打亡し、文和四年三月廿五日ニ死去有たると也、其後八幡と為崇と伝称也、
一祭日二月八日　九月廿九日　霜月八日
一祭米六斗五升五升従御倉出

宝物

一剣一ツ
一翁之面弐ツ
一歌人一通但卅六枚内左五枚者御自筆也
　右者島津左衛門督歳久公御寄進なり、
元亀四年癸酉三月吉日と裏書有之、

一八幡昇官之状一通

2
宗源
正一位正八幡　大隅国吉田郡
右者元由依為宗廟之
神被授位訖、今般奉
加神名帳者
神宣之啓状如件、
永禄九年三月八日　神部壱岐宿祢列（ママ）
神祇管領長卜部（上脱カ）朝臣（兼右）判

鹿児島之郡吉田
一御鎧冑一領但金物ニ十文字之有御紋
　右者　義久公御寄進也、

一銀幣　一流
　右者　義久公御息女御寄進也、銘左ニ記す、
護持信心大檀主
奉拝進吉田正一位八幡宮敬元和六庚申年
龍伯息女亀寿白菊月大吉日

3
覚
御寄進

吉田正一位八幡宮江　龍伯様御息女　亀寿様御施主也、
銀幣之銀子百伍十壱銭七分
幣串金物ニ六十目七分付
二口合
弐百十八銭七分也、
能被成御格護、永々御渡肝要候、

飯牟礼紀伊介　光家判
伊地知勝左衛門　重房判
町田助右衛門　忠親判

元和六年庚申十一月七日

座主并社衆中参

外ニ太刀一腰青江
右者承応元年十二月廿六日、従　公義被召上于今無之、仍証文之写左ニ記之、

4

証文

御太刀一腰備中次吉作長サ三尺弐寸
右者吉田御八幡より被召上候由、先役人より受取御蔵へ有之候条、証文如此ニ候、以上、

申三月廿日　吉田善兵衛印
種子島為兵衛
最上七郎右衛門
野津弥五左衛門印
別府式部左衛門

鎌田筑後殿

5

奉新造立〻〻〻大隅吉田院正一位正八幡社檀一宇〻〻〻、
爰以島津左衛門督歳久息災〻〻〻、

元亀三年壬申十二月三日

当座主　宝勝院快盛
当地頭　阿多若狭守久鎮
大工　柏木勘解由道房
鍛冶　書河壱岐允重次
佐藤飛騨允

右寺者従古有之候、慶長十五年　義久君被成御越御詠歌有之候、并御供衆詠歌左ニ記之、

6

松杉の立ならひたる古寺は
　分入てこそ心すミけれ　　龍伯
尋入おく山寺は岩木さへ
　心あるへきけしき成けり　　忠通
杉〔(田)むら木〕の木の間の紅葉冬かけて
　けふを待ける法の場かも　　久正
冬枯をよそなる松のみとりこそ
　妙なる寺のしるし成けり　　如有
凍るより岩根の水の音絶て
　「未キル、」

（本文書ハ「旧記雑録後編四」七六六号文書ノ抄ナルベシ）

（本文ハ大隅国小根占郷園林寺ノ記事ナラン）

7

右神社仏閣帳

一御刀一腰無銘波平安周長三尺三寸五部
　但御拵書相添、

右者鹿児島郡吉田八幡社江従　貴久公御鎧一領御寄進有之候処、此節御手本御格護ニ相成、為代右御刀一腰被遊御寄進候、

外ニ霧島山御宮之御鎧為代御刀一腰御寄進之一件、其場ニ載故爰に略ス、

右之通被仰付候条、取始抹行届候様可被申渡旨可申渡候、

十二月　　監物

薩州吉田本名村之内本吉田
正一位正八幡
地頭仮屋より未申ノ方壱里拾三町四拾九間

社司衆中
佐藤仁右衛門
右仁右衛門幼少故代
猪八重六弥太

右者吉田美作守と申吉田之城主（マヽ）ニ而候処ニ、兄弟不和ニ御成被成、吉田本城村江舎兄より大勢を隠置、風呂ニ被入候を大勢取巻揚時声候処、風呂を破り被出大勢を打亡、文和四年三月廿五日死去被成、戒名了潭居士と申伝候、

一其砌者若宮八幡之御位ニ而候処、　日新様御代ニ御弓矢之本尊と　御崇敬、御分国中輒御手ニ被召付候由、

就夫伊集院梅岳寺使僧ニ而　内裏江被仰上正一位正八幡吉田之惣廟と、永禄九年三月八日ニ　御綸旨被成下于今有之候、

一祭米壱石三斗

但祭日二月八日　十一月八日

右祭料として昔者高三町五段被仰付置候処ニ、京衆御下向之節右三町五段被召上、　龍伯様より高拾石被召付、其以後関ヶ原立之節　惟新様被遊御立御立願、為御礼進高三石・銀幣一振被遊御上、高拾三石ニ被召成候処ニ、　龍伯様御逝去被遊、　中納言様御妹様御した様御領分ニ本名村罷成、御祭米年中ニ米壱石九斗ツヽ、御上被成御祭調来り候処ニ、寛永竿之節神領被召上、　公義より祭米六斗五升被仰付、御祭相調候得共六斗五升ニ而不申、去ル延宝三年御訴申上重ミ(てカ)六斗五升被仰付、年中ニ壱石三斗被仰付御祭調来申候、然処ニ前代正一位八幡宮御太刀一腰次吉作と有之由候処ニ、前々辰十二月廿四日大山長左衛門殿御使ニ而御物江被召上、為御返礼銀子拾枚御拝進、其節之地頭島津清太夫殿御下知ニ而所嘆衆才覚ニ而所衆中高拾石買調有之候処、右高本高主方へ被召返、高代銀正徳四年所嘆所御預ヶニ被仰付、年々利銀御物へ上納方有之候内より、十一月八日御祭米として御定直成代銀ニ而六斗五升代被仰付候、

一御旗八流

但頭ノ金物銅(ママ広)ヒ七寸、長四尺五寸、地繻珍織物、表浅黄色、裏唐茶色、縁羽二重朽葉色、所々損シ申候、御祭之節ハ舞殿ニ奉掛候、

右御旗之銘　光久公　綱久公　綱貴公　裏に寛文拾三年癸丑二月八日

一歌人三拾六枚内壱枚紛失三枚欠物ニ相成候

右歌人　伯囿様被遊御寄進之由、

一御鎧甲

右御鎧甲　伯囿様御紋付被遊御寄進候、左候而、宿直腹巻迄ニ而外之物無御座候、

一銀幣一振

御銘　龍伯息女亀寿と御座候、

一剣弐本

壱本ハ台之横ニ切立御座候、切立台之下より長九寸

五部、

壱本ハ台無御座、長六寸、名剣共宝剣とも申候由候、
一剣壱本　長壱尺五寸、無銘、
右享保二戊(ママ)五月書出、

正一位正八幡

玉依姫　応神天皇　吉田美作守
神功皇后　仁徳天皇　島津金五

右神者古本吉田権現と申候、然処吉田城主吉田若狭守舎弟吉田美作守と不和にして、於本城村風呂入之節非道之事共有之、美作守より則時ニ多人数を被成殺害、文和四年三月廿五日自害為有之由、其怨稠敷候ニ付、其後美作守を右権現ニ被崇若宮八幡と申候を　龍伯様御代正一位正八幡と御崇之由、尤　宣旨慥ニ御座候、且　日新様・伯囿様・龍伯様・惟新様御寄進之諸品段々有之、由緒書等有之候、右社地境内ニ宝蔵御取立ニ而御寄進物等相納有之候、右宝蔵屋敷ハ畠五畦御免地ニ而候、且　惟新様　金五様御代御再興之棟札等御座候、右ニ付由緒書并御寄進物書付・棟折(ママ)写別紙差上申候、又　日新様御代神領として市来養母村之内より壱町五反御寄進ニ而、其後高拾三石御寄付候得共、元和六年右高被召上、其以来祭米六斗五升ツヽ御物より相渡候、

右文化十一戊十二月書出、

鹿児島郡吉田郷
正一位正八幡宮　薩城より(ママ)

祭神

玉依姫
応神天皇
神功皇后
仁徳天皇

相殿祭神吉田美作霊神
美作ハ吉田之城主也(ママ)

二月八日
霜月八日　祭

祭料壱石三斗

同六斗九升　大宮司より出、

一当社勧請之年暦不詳

一神位ハ永禄九年三月八日宗源　宣命奉納也、依　日新公御尊敬也、

祠官
中島伊予

右神社考

薩埵王子権現

右権現者古帝王太子此国ニ流され終たるを当所に王子権現と為崇由伝称す、

黒山大明神

古者所之中在黒山口、

都津宮大明神

古者所之中在轟、

右二社古者社宮各雖有之、其時分之城主・権現之神司同夜ニ同断之蒙霊夢、従夫三神崇に一社云々、

祭日二月初申　霜月初申

祭米三斗五升従公義出也、

8 「本書代宮司在中野壱岐」

薩州吉田佐多浦村之内

知行目録

王子領

町口
上田六畦十八歩　一石五升六合　米助八先　法介

同所
上田六畦　九斗六升　同人

同所
上田二畦十二歩　三斗八升四合　同人

合分米弐石四斗〳〵（ママ）、

慶長五

十一月廿九日　義弘公御印有

伊勢平左衛門

大宮司

右神社仏閣帳

鹿児島郡吉田郷
薩埵王子権現　薩城より子丑ニ去事四里

祭神　不詳　所之書付ニ薩埵彦根命

二月初申　祭

祭料三斗五升

当社勧請年暦不詳

祠官
中野駿河

右神社考

東佐多浦村之内
王子原
一王子権現地頭仮屋より子丑ノ方七町五拾弐間

正体木像三体衣冠
法師女体薩埵彦根尊
右御神上古帝王太子此国ニ流給候を当所ニ王子権現と為奉崇由申伝候、勧請年間等不相知、前々ハ神領高三拾三石御寄付之由、其後高弐石四斗有之候得共、天和六年より右高被召上、祭米として三斗五升年々被相渡候、

一黒山大明神
正体木像二体但位官二体
右上古者所中黒山と申所江社頭為有之由ニ御座候、

一都津宮大明神
正体木像二体但位官一体
女体一体
右御神上古者所中轟と申所江社頭為有之由ニ御座候、
右両社上代ニハ面々之所ニ社頭有之候得共、王子権現と一所ニ可奉崇旨、城主并神主同夜ニ夢相有之、王子権現社檀ニ一所ニ為奉崇由申伝候、且亦種々神宝有之候を　太閤御下向之時分、強人御戸を破り宝物等取散、只今ハ無之候、且永正十二丁（ママ）丑二月　忠隆公、天文廿三年六月三日　貴久公御再興之棟札為有之由候得共、是又当分ハ無御座候、

右文化十一戌十二月書出、

一伊勢天照大神宮
右御神元禄三午二月近郷中より勧請仕、王子権現社地へ奉崇候、

一後之権現東門
右者桜島郷士村山五兵衛先祖負下当所へ被崇候由ニ而、今以右村山家之子孫信仰ニ而候、勧請年間不知、

一稲荷大明神萩之段
右者伊作之住人関右京と申人崇為申由申伝候、勧請年間不知、

一白山権現本吉田
右宝徳二年庚午二月勧請之由、何某建立之訳不知、

一飯牟礼大明神

一大位神大明神
右両社正一位正八幡社地へ有之、勧請由緒等不知、

一花尾八社大明神本城村
右神体仏像并大法師行賢像二体、文明十二年庚子十月廿七日、大檀那息長氏泰清并孝清、大願主権律師

重万、作者権律師快教、左右脇二体ツヽ、衣爵之像
一体ツヽ、女体像一体ツヽ、年号月・願主・作者同
断、鏡一面奉施入花尾八社大明神正体、願主藤原氏
女、文明十三年丑霜月朔日と書付有之、

一若宮大明神
右位官一体・女壱体・外鏡一面、右鏡銘ニ奉施入主
若宮大明神正体、正長二年己酉十一月吉日、願主息
長之朝臣幸正敬白と在り、

一狩長大明神
右両社花尾八社大明神社地江崇有之、由緒等不知、
右文政五午三月書出、

鹿児島郡吉田郷

末社

本吉田
一飯牟礼大明神
本名之内
一稲荷大明神
右同
一鎮守大明神
右同
一鎮守大明神
右同
一鎮守大明神

右同
一大位神大明神
本名之内
一諏方大明神
右同
一白山大権現
右同
一山之神
右同
一鎮守大明神

右同
一山之神
右同
一諏方大明神

一山之神
一花尾八社大明神
一鎮守大明神
一月白毛大明神
一鎮守大明神
一鎮守大明神
一黒尾大明神
一大位大明神
一高瀬宮大明神
一金峰山権現
一後ノ権現
一八大龍王
一山之神
一牟礼大明神
一高権現
一池之大王

右同
一鎮守大明神
右同
一山之神

一山之神
一天神
一鎮守大明神
一八幡八幡(ママ)
一牟礼大明神
一牟(牛)頭天王
一都津宮大明神
一奈良田大明神
一天満天神
一天神
一稲荷大明神
一鎮守大明神
一山之神
一山之神
一稲荷大明神
一大将軍大明神

右神社考

吉田
仏知山　　福昌寺末　津友寺

右応永廿年癸巳福昌寺二世竹居正猷開山ニ而安寧山了心寺と号し開基、大檀那者息長性(ママ)吉田若狭守清正法名月峰了心大禅伯之菩提所ニ而候、右清正之後裔同氏若狭守位清背君命吉田城ニ楯籠、依之　忠治公直ニ族旗を起責給中半ニ、永正二年(十脱カ)乙亥八月廿五日御逝去、御法名蘭窓津友大禅定門と奉称、左候而、　忠隆公其跡を御連続、直ニ此地ニ御発向責給、依之位清輒降而此城奉献、其後了心寺之旧地を以て仏知山津友寺と改号あり、　蘭窓様御菩提所ニ罷成り、御塔も被成御座候、一寺領高四百八拾石被召付置候処、太閤下向之時被相減、当時者御仏餉高拾石ニ而候、是又帖佐新田溝筋高内を堀通し有之、右溝返地として門外へ田地弐反余無竿ニ而相渡有之候、右年間ハ不相知候、且寺内ニ田畠御免地も有之候、

忠治公永正十二乙亥八月廿五日御逝去、

一大檀越前三州太守蘭窓津友大禅定門

一御廟所寺中ニ而御座候、

一知行高拾石

要用集しらへ
高弐拾石内拾石文化十四丑十一月被召付候、

吉田
一慈眼山　　津友寺末　帝釈寺

開山津友寺二世足堂円給、開基年月等不知、

一永秀山　　津友寺末　長隆寺

開基等之年月不知、津友寺十二世南嶺塵舜中興也、

右文政五午三月書出、

吉田
清秀山　　興化寺

開山明谷大和尚

長禄二年戊寅四月廿四日遷化と見得候、俗姓近衛氏之由申伝、

右者吉田之領主吉田美作守文和元年壬辰三月二十五日本城村にて逝去、法名了潭居士為位牌了潭寺と云、然れとも美作守兄吉田若狭守位清依背君命　忠隆公当地へ御発向、峰高へ　御陣被遊、其地之地蔵尊ニ　御誓願有之御責候処、則時に下城和睦と成、其後　忠隆公当所にて永正十六年己卯四月四日　御逝去、於是了潭寺を改められ興化齢岳禅寺と改号せられ、興岳様御寺

と成り　御画像も御掛被　成候得とも、元和七八年頃より右　御画像龍盛院へ御掛被成候、

一御仏餉高無之以外に高三斗六升余拘地有之、寺内に者御免地之畠少々有之なり、

右文政五年午三月書出、

9

鹿児島郡

吉田

興化寺由緒帳

興岳様御影之儀前々之様子無御存知候、如何様之様子ニ而候哉と御尋候間、親川田彦兵衛吉田曖役為仕時分之儀ニ付、粗令承知候通覚書仕進上申候、

一元和七八年之時分、隆盛院より　御影之沙汰被申出、其時分之興化寺住持南叔座主鹿児島へ参上させられ候得共、如何様ニ共分り不被仰出被為帰候事、

一其後南叔鹿児島へ可有参上由候而可為参候得共、隆盛院より被申分として御老中より被仰聞候間御返事ニ申候者、隆盛院より被申通妄語至極之段申候得者、尤ニも被聞召上候哉、先々可罷帰由被仰出帰寺仕候由事、

一右之後　御影之儀双方共ニ不被成御座候、自今以後者福昌寺へ可被成御座候間、曖衆壱人相付首尾可仕通御老中より為被仰出由候事、

一御影ニ相付此方迄南叔御座候間親奉請取、福昌寺へ参候而首尾仕候、　御影此方御打立之刻御影之讃写置可申由親申候間書写、于今所持仕候事、

一寛永十一年之時分鹿児島へ罷越、縁類山田半介入道山竹所へ参候得者、山竹咄ニ被申候者、此比龍盛院へ参候得者住持咄ニ承候、　興岳様御影此中福昌寺へ被成御座候得共、龍盛院へ可奉置由全珠和尚被仰候而此方ニ御座候、拝ませ可申由候而拝見仕候由、山竹咄承候而罷帰候而南叔へ右之通申候得者、其時分より老病之様子ニ而何程之儀も無御座候つる事、

右　御影之儀任御尋粗存候通書記如斯候、以上、

延宝五年巳十二月七日　　川田城介印

興化寺

玄康蔵主

10

鹿児島郡吉田興化寺事ハ　御先祖十三代　興岳様御位

11

牌所ニ而候、其故ハ昔吉田者　忠隆様御時代迄ハ敵方ニ而候処、　御舎兄津友寺殿忠治公御逝去之刻　御遺言ニ、吉田を不被付御手御逝去之事残念ニ被　思召候間、被遂一戦ニ入御手候ハヽ、御供養別ニ有之間敷由被仰置候付、永正十三四年之比ニ候哉、　忠隆様被向御馬御粉骨を以吉田之城御手ニ帰服申候、左様ニ為被遊御苦労地ニ候故、一所ニ　御兄弟之　御位牌所として津友寺・興化寺有之由申伝候、殊ニ興化寺ニ者御出陣之御姿ニ而画像之御影為被成御座事無其隠候、以其由来　惟新様御時代ニハ再興被遊候事、于今所中ニ為存者有之候間、此等之趣を以此度御修理を被加候而可被下事偏ニ奉願候、以上、

吉田興化寺

明暦四年戊三月五日　　祖団

御物御奉行所

鹿児島郡吉田興化寺事ハ　御先祖十四代（ママ）　興岳様御位牌所ニ而候、其故ハ昔吉田者　興岳様御時代迄ハ敵方ニ而候処、　興岳様被向御馬御粉骨を以吉田之城御手ニ帰服申候、左様之御苦労為被遊地ニ而御座候故、一所ニ御兄弟之御位牌所として津友寺・興化寺有之候、前代ニ者御知行も過分ニ相付候得共、惣而棄破之刻被召上候、其後客殿等廃壊申ニ付、　惟新様御時代ニ者再興被存候事于今無其隠候、然処此節之御条書ニ、御知行不相付寺者解地ニ可被召上由候付、何とも迷惑ニ存候、右之趣を以先例寺地御免許候而可被下儀所仰候、

興化寺

万治二年亥二月廿七日　　祖円

12

覚

興岳様御寺興化寺御寺作之儀、　惟新様御時代迄者御公儀より御修甫被仰付候、其時分之吉田曖役大井石見、御普請見廻深見大膳・古木舎人、右之衆見廻を以御寺作被相調候、其時分ハ我々若輩之刻之儀、于今存候而罷居候、老年之儀ニ候間、前々之様子定而存候半通御尋ニ付、粗覚之通書記進上申候、以上、

延宝六年午　　税所仲右衛門印

八月十二日　　古木長左衛門印

税所早右衛門印

興化寺

玄康蔵主

13

覚

前々　太守公興岳様御影上代ニ者興化寺江御掛被遊御座候、我々若年之刻節々奉拝候儀別儀無御座候、然処我々若年之刻非道ニ以無実　御影之論被仰掛寺者隆盛院ニ而候、惟非道之筋、就夫折々鹿児島へ被召寄被為参上之由、興化寺住持南叔老之咄ニ承候、然処　御影福昌寺へ可被遊御座候条、所嘱御供ニ而　御影鹿児島へ御越可被遊之様ニと被仰付、無是非　御影嘱より奉請故福昌寺へ御供為被仕之由為承事ニ候、我々老体之故任御尋凡覚申通書付進上申候、以上、

延宝七年己未

七月廿日

柊木孫右衛門印

税所仲右衛門印

興化寺

14

覚

前々之　太守公島津又六郎忠隆様御出陣之御姿、御兜・御鎧・御太刀大小ニ而御馬上之御装束之御画像之御影様、我々若輩之時分興化寺へ被遊御座候、依夫住持南叔首取拝見可仕之由ニ而、或ハ年頭或者四月四日、其外大節之時分ハ御掛被遊候を節々奉拝候儀別儀無御座候、我等老年之間古之儀無御存知由ニ而御尋之条、前々之様子覚候而罷在通大略書認進上仕候、以上、

延宝六年午二月四日

古木長左衛門

興化寺

15

覚

忠隆様御影御模様之覚次書

一御顔色ハ御桜色かと覚申候事、

一御鎧ハ段々綴と申歟、いかにも花やかに賑やかなる御装束歟と覚申候事、

一御鋿之御竪物ハ羽車歟と覚申候事、

一御太刀ハ大小歟と覚候事、

一御馬者葦毛歟川原毛歟との様子ニ覚申候事、

一御影様西の床江御掛被遊候を御座下より東より奉拝ミ、

御面者南ニ御向キ被成たるかと覚候事、
一御影之讃一臨済派之出家為被成讃之由、住持咄共為承かと覚候事、
右七ヶ条之儀者拝見仕候趣、或者住持より為承趣、尤我等若輩之刻之儀、殊ニ以年来久敷儀ニ而御座候得者、大形ニ而慥成覚ハ有御座間敷候、ケ様之儀者相違之覚も可有之、或ハ御鎧之御名、御竪物之御名なと未存内之事ニ候、又者御馬之毛も慥ニ究而何色とハ難覚儀ニ御座候間、有増如此ニ御座候、尤別紙之書付進上仕候得共、此等之儀ハ次書ニ而進上仕候、以上、

延宝六年午二月四日　　古木長左衛門

興化寺

16

覚

興岳様御影御画像、古ハ興化寺江御掛被成御座候由被及聞召候而、我々老体之故必定其通ニも可有之候哉、存候ハん歟之通任御尋略存候通書記進上申候、我々若輩之砌拝見申候儀別儀無御座候、　御影之御様子具足甲・御太刀大小御馬上ニ而御出陣之御姿ニ而被遊御座候、少も別儀無御座候、脇ニも為被存衆可有之候間、御尋可被成候、以上、

延宝八年　　蒲生之住
庚申八月七日　　宅間千右衛門入道
　　如有印
　　同所
　　石崎弥右衛門入道
　　宗意印

吉田
興化寺様

17

覚

一興化寺古ハ本吉田ニ有之、吉田美作殿御寺ニ被相定候処ニ、吉田殿御生害之後吉田御城元ニ被召直候、右之通ニ候故年ニ両度之諷経興化寺より被相勤候事、
一興岳様吉田を御手ニ被付、其後　御逝去ニ而興化寺を御寺ニ被召成候由申伝候事、
　右両条佐藤筑後口柄如此ニ候、
明暦元年未七月廿二日

18

覚

興岳様御影之儀、隆盛院より先年被申出候刻、両度目ニ南叔座主鹿児島へ可有参上由候而御老中より被仰出候者、御影之儀隆盛院より被申候者、前々者隆盛院ニ被成御座候を祁答院可雲借用候而興化寺江被奉置たる由被申候通被仰聞候間、御返事として申候者、可雲之事ハ御家ニ弓を引たる人ニ而候、左様之人ハ御先祖之御影を尊敬可被存儀ニ候哉、是以妄語至極ニ候通申候由、親咄有之たる儀堅承候而罷居候、別紙ニ覚書壱通進上申候得共、ケ様之儀共者相残候、若ケ様之儀共後日入申事御座候ハヽ、是を可被指出候、以上、

延宝五年巳十二月七日　　川田城介印

興化寺

玄康蔵主

佐多之浦村峰高
地蔵菩薩

右上代ニ者吉田本城村ニ御座候得共、吉田殿持之時峰高ニ被相移候由申伝候、其後　蘭窓(忠治)様就御遺言興岳様吉田城御責之時、峰高ニ御陣取被遊、地蔵菩薩を被成御覧御悦喜被遊、今日爰元之城輒責落候様可有加護候、左候ハヽ、近辺知行可致寄進由御立願ニ而、其日吉田御手ニ相付、則如御立願知行被相付、興岳様御寺興化寺より被致格護候処、其後棄破ニ罷成候由、興化寺先住持龍泉首座被申置候、

19

前建仁雪岑叟津興孟夏如意殊日

天正歳舎玄黙敦牂、叩題一祇夜以讃之、謹応当府君明旨、興岳大禅定門遺像、前薩隅日三州太守、漢室三良輸一人若将武勇論千古

凜然意気有誰均汗馬功成討不臣

興岳様御影之事、別紙ニ書記進上申候様ニ、元和七八年之時分ニ至、興化寺隆盛院より相論ニ付御老中より被仰出候ハ、双方共ニ御付被成間敷候、福昌寺へ可被成御座候間、曖衆相付可致参上由被仰候き、然者其時分愚親曖役仕候故、南叔相付此方迄御座候刻、　御影之讃写置可申之由親申候間、我等若年之時分書写召置申候、以来此方へ入用ニ有之間敷候間、御寺へ被召置可然御座候半と存如此ニ候、以上、

延宝八年申卯月七日　　川田城介印

興化寺
御住持

20

山門鎮静画吉祥夜吉祥

龔再興清秀山興化禅寺客殿上棟、伏願檀家繁栄福円満、夫以薩州鹿児島郡吉田盛隆山興化禅刹者、島津十三代興岳隆盛大禅定門之牌所而可崇者也、此故近者島津忠「義か」弘公命佐多浦有司有再興、其後経歳月及廃壊故、光久公之時代就家老因訟之賜寺中用木、於是大檀那合力銀以建立客殿一宇者也、且又上葺者地頭島津又助公命吉田四ヶ名百姓調之畢、

住持小比丘祖円謹誌之

維時万治三年庚子仲春如意

大工　坂元源之丞

正一位正八幡宮
王子権現宮
別当祈願所
宝勝院

吉田
如意山　東光寺

右当所吉田家所領之時、開山林椿法印開基ニ而候得共年月不知、　忠隆公吉田家御誅伐後右寺致破壊候を、左衛門督歳久吉田城江在城之節、為守護忠誉法印を以中興開山として御再興、其後又及破壊候を伝誉法印再興、此法印は　義弘公御帰依僧ニ而候由、其時分仏餉料等も被召付置候由、然共其後何様之訳候哉被召上候、左候而、貧地之故又々及破壊居候を、又々盛応法印再三の中興にて寺家致造立候由、

右文政五午三月書出、

一郡山城　郡山弥三郎良平、是　忠久侯の時居城せしむ、其本ハ大蔵姓より出、実は藤原也、鎌足流藤宰相経平卿九代加治木新六実平か二男也、

一川田城　川田左衛門太郎資清は是島津五代道鑑侯の時居城せしむ、其本は源姓比志島元祖村山栄弁か三男右衛門尉盛祐か裔也、子孫城下にあり、

日置郡郡山郷小山田村　　名勝考

○小山田瀑布源郡山の山中より出ル、瀧の高サ八間三

尺許、横幅窄く水流急なり、

一満家院　満家四郎長平ハ是　忠久侯の時居城せしむ、
其本ハ大蔵姓より出、後漢の霊帝流阿智王の後胤也、
建久八年　内裏御廻文ニも満家郡司とハ此人なり、
比志島上総法橋栄弁ハ則　忠久侯の時比志島に居城す、
其本ハ源姓清和帝九代六条判官為義三男志田三郎義憲
之次男村上三郎左衛門尉頼重為信州守護、有故て浪牢
と成り、特佐忠久侯して薩摩国に遠流す、　忠久侯扶
助を加　満家長平か聟と成て満家院を領知す、頼重嫡
子栄弁是也、二男西俣、三男川田、(城辺)牟木、北村等子
孫代々当国に残し置候、頼重ハ赦免有て本国信州表に
帰国せしむ、

21

郡山厚地村　「寺地改」

法鐘寺　真言大乗院末御免地　無高　寺社方合力
御目見地
平等王院　真言大乗院兼帯　御物修甫并　寺社方検者付
右同　花尾山坊舎　御物并寺社方　検者付　高弐拾五石
本地院　右同
普賢院　右同
右同
曼荼羅寺　右同
右同
多聞院　右同
円照寺　曹洞市来龍雲寺末御免地　高壱石　寺社方合力
大川寺　川田村右同末石地　川田家菩提所

日置郡市来郷大里村　名勝考

○薩摩渡瀬あり

郡山
諏方大明神　宗廟

祭日七月廿六日

祭米三斗五升

22

諏訪大明神上宮社、、、、薩摩州満家院河田村諏訪上下
大明神宝殿、、、、当檀主源朝臣義秀・義照励修造大願、
今茲年永禄龍集癸亥自仲陽十有六日至暮春十八日造立
畢功矣、同七月念日丙申命匠工令発槌、廿一日丁酉於
陰陽不属時御遷宮、、、、、大檀那藤原義久・旧殿主君
貴久公、、、、大願主村上飛騨守・同掃部佐、、、、修造
檀越義秀・義照欽再拝、、、、

永禄癸亥七月廿一日

春笑叟苦欲道人敬白

大工　藤原秋昌

鍛冶　木場隠岐

右神社仏閣帳

神社考

一祭米三斗五升

一当社勧請年暦不詳

郡山末社

麓村

一霧島六所権現

同所

一天神

同所

一山之神

同所

一諏方上下大明神

東俣

一天神

同所

一諏方大明神

同所

一熊野権現

油須木村

一知迦宮大明神（ママ）

同所

一天神

同所

一稲荷大明神

同所

一今諏方大明神

西俣村

一聖権現

同所

一天子大明神

東俣

一熊野三所権現

同所

一霧島権現

同所

一山之神

同所

一天神

川田村

一諏方社

同所

一天神

東俣

一妙見

同所

一山王廿一社

同所

一山之神

右神社考

郡山

花尾権現

満家院

宗廟

右前代坊中数多為有之由候、本寺号　平等王院、

23

「有御袖判」

満家院東俣大平木場之事、如前々平等王院江令寄附者也、早任先例、可有沙汰之状如件、

享禄四年三月八日　　勝久

進上平等王院快瑜法印

侍司

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一七六号文書ト同一文書ナルベシ）

24

▽㊞（花押）△

満家院東俣大平木場之事、如前々急平等王院江令寄附畢、然者就快瑜法印成帰寺、於永々後代不可有聊爾相違、其外厚地四至方至之堺、曩祖忠久如寄進能々被合

首尾、悉以平等王院快瑜法印可有執務者也、仍為後日之状如件、

享禄四年三月八日　　勝久

進上平等王院快瑜法印　侍司

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二一七七号文書ト同一文書ナルベシ）

25

奉新造薩摩国満家院厚智山花尾権現上宮社一宇〻〻〻〻、大檀那藤原朝臣修理大夫貴久并義辰御息災〻〻〻〻、当地頭村田越前守経定〻〻〻〻、

天文廿二年癸丑五月十九日

権少僧都頼円

普賢院快由

当座主宥弁

26　郡山

奉造立厚智山下宮大権現宝殿上屋壱宇〻〻〻、大檀越藤原朝臣貴久并義辰〻〻〻〻、当地頭村田越前守経定〻〻〻〻、

天文二十四年乙卯極月吉日

一丹後局鏡壱面社内ニ相籠

27

社内ニ有之書物

比企判官能員妹丹後局幸於源頼朝卿、而生男子、即島津家元祖忠久也、後賜局於惟宗民部大輔広言、又生子、是則若狭島津忠季也、（後）至于老年未知何年間十二月十二日逝去、法号桃源妙悟大姉金鐘寺殿、其後）

忠久公相所於満家院厚智村、

建立新社、安座頼朝卿与丹後局之木像、且復鋳数多之御正体掛宝殿、成装厳百事至矣尽矣、称其号於花尾権現、即鎖宝殿未曽開発、使民戦栗者今既尚矣、茲歳我太守之分領神社・仏閣・寺院共以当選択録之時、開花尾宝殿而九拝、之則神威巍々不得平視、仍問当宮之所由来、則伸所伝称之由而不詳、爰大宮司有言曰、有局之所自愛之明鏡無社内、而所蔵置有鹿児島小院乎、因此言尋求之際、広言一族末裔国府但馬友平、寛永五年戊辰二月時正、謂難蔵宝器於俗家之故、託善寿院主・其弟子、移于勝軍院、件明鏡亦帯之蔵当院矣、問其所蔵置之故之際、国府仲兵衛友秀出証書曰、先是同姓甚兵衛友常、八月晦日所附与件鏡於予之祖父但馬之書也、熟読之詳味（修焉則）非友平累代重器明矣、所註置花尾社内

者可乎、所以掛宝殿也、神人等堅守之勿違矣、
明暦二年丙申四月十八日
鎌田筑後
藤原政昭

権現上下之宮祭日
一九月九日并十二ヶ月共ニ祭有之

28

花尾権現正体之書付
薩州満家院厚智山権現御正体七体内
右志者為聖朝外朝日本大将軍家源朝臣御願成就、殊者為当国守護所惟宗忠久悉地成就、
建保六年大歳戊寅九月　日
大勧進僧栄金
大中臣真文

社内ニ有之
厚智山堺（境カ）内日記、円融院常位薩摩国満家院厚智山大境之事、
一秋吉の西のはなよりはしめてほしかせ▽（花）かせ△たうの尾をかきり
一はしか山せとの口松尾の原道をかきり
一ゆの木の谷の道白薄のさこ（花き）をかきり
一なすひ田西の尾を猿おとしほきの上道をかきり
一ゆすの木の原めんをかきり
一水かうちはりこ谷夕かくら道をかきり
一土せとの口（花いか）〔け〕ちの尾まちはへうへの□（花合）内くぬ木つる（花か）
より中の木場ふミわたしてしりかくめの坂仏の尾をかきり
一楽の木場屋敷半分厚智領ふか（花へ）りきりのとゝろやたけのつしたまり水の尾をかきり
一あふき山の尾をかきり花尾嶽の社柱二本
「末きル、歟」

右神社仏閣帳

郡山
花尾三社権現
内頼朝公
永金阿闍梨
丹後局

花尾上宮熊野権現
本地弥陀　薬師　観音

一愛染明王本堂
花尾山　真言宗　平等王院

花尾権現本地堂
一弥陀薬師観音　花尾山坊舎　右同　本地院
高弐拾五石　開山怪快法印

一持仏堂　右同　真言宗　普賢院
本尊普賢
高弐拾五石　開山不知

一右同　右同　多聞院
本尊多聞天王
高弐拾五石　開山盛敞

一右同　右同　曼荼羅寺
本尊不動
高弐拾五石　開山不知

右四ヶ寺共享保三年戌十二月高目録被相渡候、

一右四ヶ寺共南泉院脇寺同格ニ被仰付候旨、享保三戌四月被仰渡候、

郡山村　大乗院末
一真木山　慈光院　法幢寺
右同　市来龍雲寺末
一西光山　円照寺
川田村　右同末
一洞源山　大川寺

右之外由緒等無之故略ス、

右元文二年　七月書出、

「旧典抜書」
一花尾山権現江御代参、元禄十五年比より初而相始候段、大乗院被申出候、
「同　綱貴公御譜元禄十一」
一花尾山建保三秋忠久建立、
「旧典抜書　(六)
同四十二同七八月九日」
一花尾権現御内陣三社ハ、為秘神開帳無之処、宝永七閏八月九日　吉貴公有命開帳、向後御家督御部屋栖御直参之節ハ開帳有之筈、
「同
同四十正徳元十二月」
一頼朝公御鬢髪三茎、御鬢毛二茎、平等王院江鎌倉相承院遣候状、
久仰拝シテ写之、但頼朝公御法会之節也、

嘉禄三年丁亥歳十二月十二日
丹後御局御茶毘所
文化元甲子歳十二月吉辰、大乗院三十七世法印覚宥代新有御造替而開眼供養畢、
一御宮より御局御墓所迄路法弐丁位、常夜灯迄弐丁半余、御腰掛石迄五丁七合位、二王門迄七丁、此所ニ下馬札あり、但吉田街道者御腰掛石之後ニ下馬札あり、
一頼朝卿御遺髪、鎌倉法華堂より別当相承院二世良深より正徳三年巳九月薩州花尾山江被分遣候也、
一頼朝公御鬢髪五筋但舎利塔ニ入
右花尾山平等王院江
右安永八亥八月大乗院より書出シ、

郡山厚地村
花尾権現　薩城より四里半
祭神
丹後局
頼朝卿
永金阿闍梨

抑当社ハ　頼朝公之霊社タリ、　島津之元祖豊後守忠久公君父之義を以建保六年ニ安置権現と崇、厚地村一円祭田とシテ御寄附、御尊敬異に他故ニ　太守在国ニハ必御直参有之者也、
一大権現号之儀、京都吉田家より寛政元年酉六月四日免許有之候段申来候旨、市田勘解由殿より同廿六日被仰渡候事、

右神社考

神主
井上駿河守

文政二年卯十二月
頼朝公御鬢毛
右従　斉興公花尾山江被遊御奉納候付、御側役橋口今彦添書有之、

日置郡　郡山郷
厚地村
花尾権現　薩城より乾之方四里
祭神三座　神像木像
丹後御局
右大将頼朝公

永金阿闍梨

花尾山ハ鹿児島之乾四里之程厚地と云所ニ御勧請在、別当寺を号満家院厚地山平等王院、神廟者島津之御元祖　豊後守忠久公君父之義を以、建保六年　右大将頼朝公木像を御安置、花尾権現と崇らる、且　忠久公之御母堂　丹後御局（比企能員之妹）の木像と永金阿闍梨と云て、御局在世之時尊敬せられし僧之木像とを左右ニ祔而、厚地村一円祭田として御寄附有、今大乗院をして当社之別当職を兼摂せしめ、節序之祭祀怠る事なし、

右神社撰集

山上素有一社号熊野権現、従是山上山下通シテ花尾山と云、

右異本神社考

真言宗厚地花尾権現別当寺大乗院兼帯着座門首
平等王院

花尾山

開山永金阿闍梨　建保六年開基

高弐拾石

一花尾山御建立之時三拾六坊を御建、本寺を平等王院と被号、本尊ハ従　頼朝公〔（愛ナシ）より〕忠久公江御附属谷渡五指量愛染明王（弘法大師作）御安置候処、勝久公御代致破壊、本尊之儀者鹿児島護摩所へ御安置、毎年〔（愛六）十一〕月朔日於御城開帳御祈祷有之候、

一丹後御局御牌御安置有之候得共、　勝久公之時寺院及破壊御牌茂紛失候哉、御法名不相知、御石塔・御茶毘所有之候、市来金鐘寺へ古代より　御局之御牌有之、御法名　桃源妙悟大姉、嘉禄三年丁亥十二月十二日御逝去と書記有之候由、金鐘寺由緒帳ニ相見得候、

一三拾六坊之内、円融院一ヶ寺之寺跡有之由候、

一御神廟之儀者　貴久公御代御修覆有之候得共、寺院御再興不相調候、弘治二年伊集院宝荘厳寺を鹿児島江御移被改大乗院と、厚地村被成御寄附、神廟（愛を擁護御させ）恒例之御祭于今御座候、　綱貴公花尾山江平等王院并脇坊円融院・多聞院・本地院・普賢院、此五院御再興可被遊旨、元禄十七甲申二月被　仰出置、宝永五年之春吉貴公平等王院一宇御再興被成、大乗院兼帯ニ而佐多豊前久達より被差上候　愛染明王（弘法大師、毎年六月朔日於平等王院御祈祷有之候（愛六））一軀平等王院へ御安置、同年六月本地院御再興、同年

二月曼荼羅寺（前号円融院）御再興、同年十一月普賢院御再興、
享保八年卯四月多聞院御再興、一ヶ寺ニ高弐拾五石ツ、御寄附被成候、
右要用集しらへ　天保十一子年也、

29
一宝塔　一基
右前中将吉貴公新被製之、所被納置花尾山権現社内之　頼朝公御髪鬚有奉納之御志、雖然御退休之故依仰自　太守継豊公被相納之畢、御髪鬚安置塔内、及後年宜宝護之者也、仍副状如件、
享保十一年丙午　　平岡内匠之品判
十二月十五日　　種子島弾正久基判
伊十院（集）蔵人久矩判
樺山主計久初判
島津　杢久武判
島津中務久貫判
平等王院

（本文書ハ「旧記雑録追録三」一九一二号文書ト同一文書ナルベシ）

30
安永二年癸巳八月十一日
一寺社方より知事御用ニ付罷出候処、　太守様重豪公来ル廿七日、花尾山（江）　御参詣被遊段被仰渡候事、
一おとせ殿花尾山へ参詣之由、御納戸より申来候、
八月廿七日
一寺社方より御用有之知事罷出候処、来月朔日・二日天気次第琉球国太子花尾山へ参詣被致筈候間、諸事道橋掃除、其外当寺より菓子・吸物・酒等差出可然様被仰渡候旨、口達ニ而取次衆より致承知候、尤霧島参詣も近々之内有之筈付、諸事花尾山同断ニ可致旨致承知候、日限之儀ハ追而可被仰渡候、
一太守様花尾山　御参詣首尾能相済候、
八月廿九日
一明朔日花尾山へ中城太子参詣ニ付、諸事差引として護（ママ）院へ申付候、
右之通大乗院日帳書抜也、

31
覚
勢至菩薩　一軀

但御厨子伽羅内箔磨　仏師康湛作

七条左京康敬極状相添、

右者

太守宰相斉興公多年御側江御安置、別而被遊御信仰、霊験新成御像ニ候処、今度　思召之御訳被為　在、華尾山御内陣江被遊御安置候条、謹而奉得其旨、至後年勤行無怠慢可令修行之旨、依　仰執達如件、

弘化四年丁未　　調所笑左衛門

九月廿八日　　広郷判

平等王院

（本文書ハ「旧記雑録追録八」一二六の一号文書ト同一文書ナルベシ）

32

極

従定朝法印十五代康湛法印作

一勢至菩薩　　壱体

坐像御長九部

右康湛法印之作紛無之者也、

正統三十四世

法橋七条左京　　康敬判

弘化四年未六月

厨子後ニ

康湛法印作

大仏師三十四世

法橋左京康敬判

33

副状

右大将頼朝卿

御笏　　一本

此御笏者平産并田地虫除之符与唱、鎌倉法華堂御別当相承院江伝来候処、昔年薩州之仏工鳥居如見より、院主良琛法印江内々遂所望守下り致等蔵来候、産符ニ用る時は流川之水を川下りニ汲取、水を器物ニ移し器中江御笏を浸し、其水を産婦ニ飲しめは、不致平産者無之、又田地之虫を除くに、此御笏を守りて其田間を歩行すれは、悉く虫除て稲苗繁茂す、霊験如此依著明、文化十二年亥十二月如見五代之孫鳥居長八献上之、

右者今度
太守宰相斉興公　思召之御訳被為　在、華尾山江被遊
御奉納候条、到後年宜宝護之者也、仍副状如件、
弘化四年丁未　　調所笑左衛門
九月廿八日　　広郷判
平等王院
（本文書ハ「旧記雑録追録八」一二六の二号文書ト同一文書ナルベシ）

福ヶ迫諏方神主
井上右京
花尾山
大宮司
井上駿河守
右右京亡曽祖父左膳并駿河守亡祖父駿河守事、天明七
年未八月神主職被仰付、家順者諏方大宮司者官有無之
無差別両家上ニ被仰付、福ヶ迫諏方神主・花尾山神主
右之通被仰付、座順者時々可為官順旨被仰渡候、
一井上駿河守親志摩守代大宮司職蒙　勅許候、尤惣大宮
司之儀京都吉田家より指許有之候、御礼席等何篇本田
出羽守同様被仰付候旨、文政十二丑年於江戸被仰付候、
家格代々寄合并着座門首格式、天保三辰年於江戸被仰

付候、
花尾山権大宮司
有屋田正親
右同
園田右京
右弐人天保三辰年代々御小姓与格被仰付候、
福ヶ迫諏方権神主
一往兼職
村山肥後
右天保八酉七月兼職被仰付候、
右要用集しらへ

口上覚
私養子井上播磨守事、此節御内用之儀有之上京被仰付
候処、於京都従五位下播磨守蒙　勅許、難有仕合奉存
候、依之官位之御礼奉願置候付、左之通相伺候、
一官位之御礼奉願置候付、弥御礼被仰付儀御座候ハヽ、
御礼席并扣席御門通り、且上り口・下乗所等之儀何様
可被仰付哉、
一右同断ニ付雨天之節、　御城内長柄傘相用候儀、何様
被仰付可被下哉、
右之通奉伺候間、何分被仰渡被下度奉願候、此旨御

申可被下候、以上、

未六月廿五日　　井上駿河守

寺社御奉行所

右之次書略ス

35

駿河守養子
井上播磨守

右者此節従五位下播磨守蒙　勅許、官位之御礼奉願置候付、御礼席等之儀駿河守得差図、左之通被仰付候、

一登　城之節者虎之間へ相扣、御書院三之間上敷居涯一畳目上江進上物相備、同下ニ而御礼被仰付候、

一御門不及開扉、虎之間脇雁木より罷上候様被仰付候、

一雨天ニ候ハヽ　御城内長柄傘相用候様被仰付候、

右之通被仰付候条可被申渡旨寺社奉行へ申渡、可承向へも可申渡候、

未十月十五日　　石見

郡山東侯
一ノ宮大明神　薩城より三里半

祭神

中尊　忠久公　　供奉之神

左脇　丹後局　　五十二体

右脇　八文字民部太夫

十一月三日　祭

祭料無之　　祭米三石

祭料青銅千三百疋

右天明五乙巳年より右之通被召付候、

一当社ハ勧請之年暦不詳、抑一之宮大明神ハ島津元祖忠久公為御鎮座之霊場、爾来雖歴年月之久粢盛血食伝而不絶、神廟舞殿無廃壊者蓋以神徳之有光輝而有敬神之篤実也、曰若享保十一年丙午夏新有国命而為御修甫所、十月十二日始運斧至於十二月十八日畢、故　太守御在国之時ハ必当社江社参有之者也、

祠官
前田河内

右神社考

郡山東侯村
一之宮大明神　　神体木像

祭神

忠久公

丹後御局

惟宗広言

供奉随身五拾二体脇取(座)

当社勧請之年暦不詳、抑一之宮大明神ハ島津之御元祖忠久公為御鎮座之霊場、爾来歴歳月之久粢盛血食伝而不絶、神廟舞殿無廃壊者、蓋以神徳之有光輝而有敬神之篤実也、曰若享保十一年丙午夏新有国命為御修甫所、十月十二日始運斧至於十二月十八日畢、故　太守御在国之時者必当社江御社参有之也、

社家屋敷目録

郡山村

下屋敷十三間十四間半一反拾九歩　大豆一表一斗七合

下屋敷五畦　諏方神主　前田川内

大豆二斗一升五合

合大豆二斗一升五合

高ニシテ二斗二升三合九勺六才

右同村

下々屋敷九間半十四間四畦拾三歩　諏訪権祝子　長尾主右衛門

大豆一斗七升七合

下々屋敷十三間十四間半一反拾九歩　大豆一表一斗七合

下々屋敷拾七歩　右同人

合五畦

合大豆二斗一合

高ニシテ二斗八合三勺八才

右社家屋敷今度就大御支配、享保八年卯七月郡奉行東郷吉右衛門竿相究差出候以帳面令支配候間、如先規勤行等無懈怠可相勤者也、

享保十一年丙午七月二日

大御支配所印

谷山角太夫印

鎌田六郎太夫印

右神社撰集

一伊集院城ハ　伊集院四郎時清入道迎西(清)、是　忠久侯の時郡司居城せしむ、其本ハ紀姓、　光孝帝の流武内宿

祢之苗裔紀貫之か孫伊集院本主(堂)太夫紀能成と▽(城)いへる人△上古より知行、此能成無世子、因て鎌足流閑院大臣冬副(嗣)公六世の裔従四位の上丹後守保昌息男昌成と云ヲ養子として譲伊集院郡司職、

一伊集院城　伊集院四郎時清入道迎清　忠久公御代伊十院の郡司也、其本紀姓より出る、孝(光孝)皇天皇の流紀能成と言る人上古より伊集院を知行ス、然るに此能成子なし、大職官鎌足公の流閑院大臣冬副(嗣)公より六代之苗裔四位上丹後守保昌の息男又太郎昌成と言る人を養子として伊集院郡司職を譲る、昌成二代薩摩守成恒、三代息男四郎入道迎清なり、是迄六代ニ当る、七代伊集院六郎清実豊後国於大宰府遂戦死、八代左衛門尉清枋(持)、九代又次郎清光、十代伊予大拯清忠、是より末系図ニ見えす、此伊集院か其跡を御当家二代の守護　忠時公末子　常陸介忠経公の孫に弥五郎久兼御相続有て子孫永々栄給ふ、御家伊集院是なり、守護　氏久公御代に伊集院家ニ賜御教書、其文筑前国金隈合戦(ママ)時、父伊十院彦五郎入道迎斎判と有り、是ハ御当家伊十院ニあらす、古伊集院六郎清有也、此一揆(城族)ニ中河・久留あり、

「御戦場記」
一伊集院　○貴久公鹿児島清水城御退去ニ而田布施ニ被成御座、　貴久公守護職ニ御成被遊候而、暫此城地ニ被成御座候、

○一宇治城　貞久公御退治被成候、右之後伊集院ハ伊集院家代々伝領仕候処、熙久陰謀及露顕、九代之　太守忠国公御退治、熙久他邦へ出奔、

○天文五年三州擾乱之節、城主町田久用与島津実久候而不随候故、　忠良公・貴久公此城を御襲取被遊候、

日置郡伊集院郷　　名勝考

苗代川(ナハシロ)　此地文禄中先君　松齢公征韓の時帰降の朝鮮人二十二姓、其男女八十余人を率ひ来り給ひしものゝ種落一邑を成せり、後蕃殖する故、宝永元年戸を折(ハカチ)て隅州鹿屋郷笠野原に荘居(サイタク)を給ふ、

伊集院
一諏方大明神　　宗廟

37

奉造立諏方宝殿一宇、、、、

永正元年甲子十二月廿六日当大檀那藤原朝臣忠治

造営奉行
鳥取伊勢守
大工　藤原政義
四郎左衛門
家安

祭日

一七月廿八日

一祭米五斗二升五合　従公義出

右諏方由来者古中島宮内少と申人信濃より背負当国へ(輔脱カ)罷下、伊集院迄罷通候時、忠国町田原江鷹野被成候処ニ参り合、右之段申上候得ハ、三日前ニ鷹それ(もカ)候、急度御手ニ参候様ニ御祈誓可仕候由承候、左候而、鷹御手へ参り伊集院宗廟と勧請之由申伝候、

神主
中島少右衛門

右神社仏閣帳

諏方大明神縁起

奥書

弘治三年丁巳五月吉日書写畢、

筆者
菱刈伊勢守堂政（花押）
桑幡七良道忠也

代官司衆中
中島源左衛門
社司官右同
小田原掃部

伊集院
崇(宗)廟籠
諏(宗)訪大明神

当所崇(宗)廟諏訪大明神、伊集院先祖当所御在城之刻、町田原ニ而鷹狩被成、鷹洩レ申候而機嫌悪敷候、其刻中島之先祖信濃国より諏方を負下松之下へ休息仕居候処ニ、何者ニ而候哉と御尋ニ付右之通御返答申上候得者、鷹御手ニ参候様祈祷可仕由被仰付候、依之祈祷申上刻鷹御手ニ参候故、当所城之向ニ社殿結構ニ造営ニ而崇(宗)廟と御取持神領等被召付、祭礼之刻両頭御居り当所并阿多・吉利・永吉・郡山・小山田頭掛り之書付一通于今代宮司方へ格護仕候、是又鹿児島諏訪茂(麦)元より勧請候由申伝候、

一石屋和尚被成遍参上方より御下向之折節、直ニ諏方へ被成社参拝礼之刻、開帳候而被成御出合問答有之候由、諏方是殺生神、和尚争礼拝、石屋返答、諏訪殺生勝菩薩万行と御答有之候由申伝、于今妙円寺住持年頭社参

有之規式相調申候、尤右社司両人年頭ニ妙円寺江参候而、前々より規式有之候、

一願書一通天正八年町田出羽介久倍判

一御寄進状一通永享九年八月廿二日大隅守熙久判

一薩摩国伊集院諏訪祭礼事書壱通

一忠兼公御判口ニ有之御家老七人名前書付壱通

伊集院
右四通丑五月肥後仁右衛門殿廻勤之節差上、于今御返不被下候、

一御寄進之御高六拾町被召上祭礼等調兼候付、古図書殿地頭之刻、中島源左衛門曽祖父中島少右衛門より由緒書等差上、御高前々之通被召返被下候様ニ訟(ママ)訴申上候処ニ、右由緒書得与御覧被届少右衛門へ御直ニ被仰聞候者、右由緒書成程慥成事ニ而候得者、右之高被召上筈ニ而無之候、如何様之儀ニ而被召上候哉と御尋被成候付申上候ハ、右被召上候刻由緒書等秘密ニ仕置、子孫も披見不仕様ニ申伝、訴訟を茂不仕其儘ニ而罷居申候由申上候処、追付社殿御再興被仰付、御祭米毎年五斗弐升五合宛被下之、神馬等鹿児島より参候而祭相調候、

一龍伯様当所諏訪別而御崇敬之由、右社司小田原掃部先祖小田原左馬助并伊作篠原先祖両人京都吉田家へ伝授被仰付、慶長四年十八神道無残相伝、于今右伝法之書物右掃部方へ所持仕居候、

右寛保二戌五月書出、

社司
小田原左内
別当
神護院

下谷村之内麓犬之馬場
一諏訪大明神

右者当所宗廟ニ而、御先祖　忠国公当所御在城之節町田原にて御鷹狩之刻、大宮司中島之先祖信州より諏方を守下、町田原街道の傍ニ休居候処、いか成者ニ而候哉と御尋ニ付、信州諏方神主中島家之二男中島宮内少輔と申者ニ而、諏方を奉守薩州を志し罷下候由申上候得ハ、折節御鷹翁候間、御手ニ参り候様祈願可仕旨被仰付祈願仕候処、則御手ニ参り候故御喜悦、即御城之向江御勧請社殿御造営、宮内少輔諏方之大宮司ニ被召成、紫衣之装束御免被仰付神領被召付、両頭殿被召居候由申伝候、

38

一依志、謹顕誠心炷不断香奉献諏訪上下大明神御宝前、永代不可有断絶、仍香資当所麦生田名之内▽町一ヶ所△葭原之屋鋪奉寄附者無疑、右所祈意趣者、御当家御武運長久、且者久倍息災安隠(旧穏)子孫繁昌、且者当境無事、衆人快楽者也、若於後日有疎略之趣(旧扱)ハ可其沙汰、仍証状如件、

町田出羽介

天正八年庚辰仲秋廿五日　久倍判

中島宮内少輔殿

（本文書ハ「旧記雑録後編一」一一六九号文書ト同一文書ナルベシ）

39

薩摩国伊集院諏方御祭礼年廻田数番帳之事

一番　直木名　日置院(庄)之内　放勒寺名(弥)　猪鹿倉名　満家院之内　郡山　平神之川名

二番　黒葛原名　桑畑名　谷口名　南郷

三番　福山名　有屋田名　土橋名　西俣名半分　満家院之内　中俣名　小山田名

四番　大田名　新御領名　今竹名　吉富名　山田名　飯牟礼名　日置庄之内　古坂名(伊垣)

五番　満家院之内　比志島　同院之内　東俣名　河田　西俣名半分

六番　下神殿名　日置庄之内　吉利名　春山名　入佐名

七番　野田名　小井原名　持ヶ丸名　寺脇名　上神殿名　松本名

八番　石谷名　中川名　清藤名　竹山名　麦生田名　徳重名　中山田名

九番　阿多郡　南方

右此祭礼之事雖多旧規其例、依有逼難致分別之条、前陸奥守立久御代集巧人令評談、一年分両頭之田数六十町所定置也、雖然猶以巨細無存知方間書記処也、

鳥取播磨守

永正十一年十二月十五日　藤原政茂判

大宮司中島殿

40

一御諏訪大明神御造営之事

当檀那藤原忠治十六歳

当奉行鳥取伊勢守藤原政茂三十五歳

大工　窪田四郎左衛門家安

小工　臼井半左衛門尉

鍛冶　久木田三郎左衛門尉政安

右棟札写と申伝候、

伊集院

一忠兼公御判并御家老衆七人連名之御書付写左之通、

忠兼判　　讃岐守景元判

越後守宗政判

藤原千新

備前守景豊

伴　兼演

伊豆守政綱判

因幡守兼親判

右之外慥成御書付由緒書数通有之候処、右御書付余り大切ニ存、御諏方御戸之内ニ入置候故、大宮司家督幼少之時分、右之御書付存不申破損仕候由申伝候、

一長刀　一振　豊後住藤原則行

右何方寄進共不知、

一刀　一本　薩州法城寺橘吉国

右正徳四年伊集院蔵人藤原久矩寄進、

一天文年中　貴久公伊集院御手ニ入御入城之刻、加世田居住小田原駿河御供仕、　貴久公諏方被遊御崇敬、右駿河社司ニ被仰付、伊集院中社家支配被仰付候由、

一龍伯公ニ茂諏方御崇敬、右駿河嫡子小田原左馬介を京都吉田殿方へ十八神道伝授として被召登候由、

一義弘公ニ茂諏方被遊御崇敬之由、尤右小田原左馬介ハ義弘公御帰依之者ニ而、　義弘公御煩ニ付而も御祈念等被仰付、度々　御前ニ茂被召出候由ニ而、其時之御家老衆川上四郎兵衛殿・本田源右衛門殿より之御書付于今小田原左内所持仕候、

一祭米五斗弐升五合

右七月朔日・同廿日・同廿八日、三度之神酒料として御物より被相渡候、

一御寄進高六拾町被召上候以後御祭調兼、社頭漸々破損仕候故、伊集院地頭古図書殿御代、前大宮司中島少左衛門より由緒書等差上御寄進高返被下候様、尤社頭御修甫被仰付被下度願申出候処、右図書殿御書付等被成御覧、右由緒書慥成事候処、神領被召上候時分、右御書付不差上候哉と御尋ニ付、右由緒之御書付先祖代々別而大切ニ仕諏方御戸内込置候処ニ、中島家家督幼少之時分其訳承置不申、右御書付有之段茂不存候故、其時差出不申段申伝候と答申上候得ハ、追付社殿御修甫

被仰付、祭米・神馬等参候由申伝、当時迄右之通御座候、

右文化十一戌十一月書出、

日置郡伊集院郷

諏方大明神　薩城より西ニ去事四里半　麓

祭神

建御名方命

事代主神

祭礼七月廿八日

祭米五斗弐升五合　御蔵米

神馬二疋毎年御厩より率来、祭之日ハ在郷より四人ツヽ、神馬役上下着勤之、

一伝称ス、当社者信濃国諏方大明神之神主中島家二男中島宮内少輔と云ル者、信州諏方を奉守薩摩へ下ル、于時伊集院之内町田原と云所之松之下に暫く休息しけるか、　忠国公御鷹野に出御ありたるが御鷹もれゆき御愁傷之所ニ、宮内少輔御目懸りに在しが、家名御尋故右之次第を言上す、　太守有命之御鷹相洩候間、返復之事祈願可申との　公命也、宮内少輔謹て畏り　神慮を深く希し所ニ、無程御鷹御拳に参り甚御喜色ありて、当所御城の向へ社殿御造営、件之諏方大明神を御安置、神領等御寄附あり、宮内少輔を以代宮司ニ被定、紫染之狩衣信州より為持下由ニ而是を着用して神勤に随ふ、夫より此方装束相損の時は時々御出来御引替有之と也、忠国公御以来　御代々様御尊敬異于他、益て当社之祭祀ニハ両頭役を被立、日置・吉利・永吉・郡山・比志島・小山田・阿多郡南方迄頭係り、田数六十町を被宛置候、年号永正十一年鳥取播磨守政茂之名判ニ而大宮司中島殿と相記され候寄附状并忠兼公御在判御家老衆七人連名之書付、且又永享九年大隅守熙久寄附状、天正八年町田出羽介久倍神領寄附状、代宮司格後云々、「護歟」

一疑クハ、町田久連丈之家譜と右中島之伝称勧請之次第不符合、中島家に云伝へし旨段ハ、　忠国公依命い十院之麓御城之向ニ社壇を建立して尊崇し給ふと伝へたり、是則宮内少輔負下処之御神を当分の地へ直ニ御勧請と見得たり、然るニ町田嫡家之譜中ニハ、い十院大隅守熙久石谷の諏方両社をい十院へ被引移、其跡へ両

諏方勧請奉造立、願主季貞朝臣、大檀那藤原勝久、天文三年甲午菊月廿九日と棟札ニ記セリ、諏方祭相済、中島氏石谷へ越て跡諏方へ御供一膳ツヽ、供進すると也、又石谷ノ内ニ諏方園門と云し所を中島家譜代々格護しけるが、神領トモニ棄破勘落の時ニ上地と成と見得たり、然者勧請の所両様何れを正とすへきか、今是を考るに、宮内少輔負下所の諏方は初石谷へ勧請して後、熙久之代ニ今の地ニ被為移事分明なるへきか、子細諏方園門と云けるも、又本諏方と云も皆石谷の内にあり、郡内郷中とても方角於里数今更伝称を押ニハあらね共、中島家諏方を当国へ負下の証文なし、町田家の於旧記ハ正敷聞へ侍る故、悉く此次ニ記ス、

抑信濃国本社諏訪大明神ハ、御当家御五代　貞久公薩摩国へ御下国、本社諏訪大明神を薩州山門院へ御請下総社ニ御崇被成、暦応之比、鹿児島之郡司矢上左衛門五郎高純御退治有て、鹿児島郡を第六陸奥守　氏久公へ御譲有、山門院より東福寺城脇へ御引移之時、山門ニ崇置るヽ諏方大明神を当分之地へ御遷座、宗廟ニ御尊崇有之、　御代々様擁護の御神霊重意至極の神籬(ヒモロキ)也、然る処に中島家負下所の諏方も又本社なるよし至て不審也、信州之本社ハ右ニ記通、　貞久公之御代請之下給ひ、九代　忠国公御代ニ至候てハ既ニ頭殿居頭と云事を祭祀ニ始られ、第十代　立久公の御代ニハ御佐山祭の法様をも定めさせ給ふ也、中島家本社之諏方と号し守下たるハ　貞久公より御五代後の事也、　貞久公本社の神体を請し下し給ふの上ハ別に神体不可有、証拠ニハ信州諏方の社壇は山を見当ニ空殿也、所之人之云しハ、諏訪の御神体は昔し戦場之時、薩摩の人為盗取と云川上嫡家頼久信州上之諏方を守出と云事あり、又此社ヲ二社ニ分ツハ一体也、秋宮・春宮とて春秋を以上下勧通之社例あり、当国にて諏方両社と崇事、信州諏方上下之分別ニあらす初ハ一社ニ而候を久豊公の御代両社ニ御崇被成候、勧請之神霊異り、又信州にて神主の号有事を不聞、上社ハ大祝、下の社ハ竹井祝也、外ニ神主可有事なし、然ハ中島信州諏方神主二男家と云事、是又不審之名目也、紫染之狩衣とハ藤色の側次也、下ニ大口を着し風折烏帽子を着る、則能之支度也、装束令ニハ曽て無之、於神祇ハ不法至極之支度也、

但当代宮司中島弥太郎依科妻子迄も衆中被召放家断

絶也、是則明和三年丙戌之事也、

伊集院諏方頭殿并頭係之事

天正十三年乙酉七月廿八日

一頭殿　左平田新左衛門子息

右同名豊前守子息

天正十四年丙戌七月廿八日

一頭殿　左野村兵部少輔子息

右同名右京進子息

天正十五年丁亥七月廿八日

一同　左有屋田加賀守子息

右比志島源左衛門子息

天正十六年戊子七月廿八日

一同　左　春成氏

右　木原氏

右之通名前相知ス、

外永禄年中・元亀年中、阿多・永吉・吉利・日置・小山田・比志島・郡山・川田名より頭係等相勤候書付有、一明和二年乙酉四月諏方大明神鳥居之額字、依願京都吉田本所へ執成申と上下之御額（従二位卜部朝臣兼雄卿）御染筆被差下候節、飾師高崎喜平次調進既ニ成而、乙酉十二月四日出羽守藤親盈氏子中より伊集院へ招請して奉納鳥居ニ奉懸者也、

42

伊集院諏方大明神之社司家譜

陰陽行儀者神道之初行也、三七日致加行後修法之、今度諏方祠司橘左馬助実直以薩州龍伯之儀別而令懇望之条、仰左兵衛督兼治令相授之訖、慎而莫怠之、

慶長四年季夏後八

神道管領長上卜部朝臣判

右小田原左馬助十八神道御相伝之奥書ニ被記、左馬之助事上京之時御物より諸事御取立を以罷登、御銀拝領旅中用度之日記等有于今、左馬助事　龍伯様　惟新様御前へ毎度被召出、厚く蒙　命慮候、

43

惟新様御煩付為御祈念貴所事可有参上之由候、御急用之儀候間、早々御打立不嫌夜白可有御参候、油断有間

敷候、恐々謹言、

本田源右衛門
十二月十四日　親高判
川上四郎兵衛
忠音判

小田原左馬助殿
御宿所

44

猶々最至于摂州雖可申入、当分其地へ　御入候儀を
も不存候間直ニ申渡候、是又為御心得候、
態令啓入候、仍従
惟新様貴所江御用所之儀在之由被仰出候条、中臣祓之
本并服忌令可持参之由　御意ニ而候、然間早々可有参
上事最候、恐々謹言、

本田源右衛門
三月廿七日　親高判

小田原左馬助殿
御宿所

45

態申候、仍小田原三郎太郎殿其許社人之儀候得共、此
中親社役被仕候ニ付高岡衆一分ニ候、則親もハや被相
果候、然者三郎太郎事其方江罷居候ハて不叶人之儀候
間、　総州様へ被申上被召移候而可然候、高岡へ公役
被仕候、高弐拾八石五斗六升四合分則曳下候間、御方
江高可被召加候、勿論七分出銀ハ高岡へ上納被申候、
為御存知候、恐々謹言、

比志島紀伊守
五月十日　国貞判

関豊前守殿
上原二右衛門殿
御宿所

46

平日記

一御老中様両三人御判被申請、十五年之内無相違様御証
文等被差下可致頂戴之事、
一御神領一町一反坪付并一反宛代付等事、又大水破脚之
儀以人足可相調事、
一御納俵物員数六拾二ヶ条せう田毎年作人等ニ可被仰付
事、并右俵物及八月九月渡可有届之在所、鹿児島又ハ
帖(帆)湊へ下させ可有事、
右条目於御分別例年無相違候ハ、御所領等可申請者也、

一町一反代物二百貫文之事、於坊津興善寺御中媒之条
可渡置之候、屹彼地之儀若ハ相替子細候ハヽ、興善寺ニ
可申入者也、仍状如件、
永禄九年丙寅正月廿三日

田中図書助
正信判

興善寺

小田原治部太夫殿
人々御中

一中屋敷五畦　諏方大明神頭取　小田原掃部
一中屋敷五畦　右同権主取　野崎左京
一中屋敷五畦　右神社　内侍
一中屋敷五畦　右同　内侍

右四行従前々被下置、

一下々屋敷七畦　右同太鞁（鼓）役　中馬休右衛門
一下々屋敷七畦　右同役　永尾十助
一下々屋敷七畦　右同笛役　竹之内堅助
一下々屋敷七畦　右同調拍子役　黒木新五郎
一下々屋敷七畦　右同役　永尾式部

右五行宝永六年丑切明屋敷御免地

右神社撰集

薩摩国阿（ママ）多郡伊集院郷
惣鎮守　諏方大明神　薩城より西江去事四里半

祭神前ニ同

七月廿八日　正祭

祭米五斗二升

一当社ハ同所石谷村より此所江遷座、年暦不詳、
社司　小田原左内

末社

一天満大自在天神
一柿本大明神
一権現
一熊鷹大明神
一鎮守
一若宮
一稲荷大明神
一山浦大明神
一鎮守社
一聖宮
一山神
一聖大明神

一大鳥大明神
一春日大明神
一森大明神
一鎮守社
一諏方大明神
一天満大自在天神
一熊野三所権現
一山王二拾一社
一諏方大明神
一諏方大明神
一若宮大明神
一諏方大明神
一諏方大明神
一軍神
一知迦尾六所権現
一熊野三所権現
一諏方大明神
一熊野大権現
一八幡宮

右神社考

伊集院
新宮三社権現
別当衆中
是枝延寿院
社司官右同
永尾右近

三社之熊野、三社新宮・本宮・那智也、

右者　忠久公御入国之砌、於御船中風雨荒御舟危見得候付、　忠久公熊野へ御祈誓候ハ、神明之御威光を以海中無恙候ハヽ、於我国社山可被遊御建立と被遊御祈誓候得者忽風雨和候故、無恙日置帆之湊浦江御着岸、則御誓願之通伊集院東江三社被遊御建立候由、

一神領百石　忠久公御寄進

右高有之節者大祭・中祭・小祭年中度々祭祠有之、正月三ヶ日備御供神楽有之、五節句ニハ小祭為有之由、其後当所衆中人数百人高岡江被召移砌、当社前別当是枝山城坊事も同前ニ被召移、其後神領無之故旧規之祭等も無之由、乍然正月三ヶ日并五節句ニハ捧御酒、六月十五日之放生会ニハ中祭右別当社司より勤来候、

一御紋幡三流　忠久公御寄進

但十文字

右幡依破損御公義江繕之訴訟有之節、当所於地頭三原左衛門殿宅俄出火有之焼失仕候由、

一棟札

右幡繕之訴訟為申上同前ニ差上焼失仕候由、

伊集院
右寛保二戌五月書出、

文化十一年戌十一月書出し
猪鹿倉村之内新宮
一熊野三所権現
別当寺
是枝三降院

木像

社家郷士
永尾右京

新宮　本宮　那智

右者御先祖　忠久公初而薩州江御入国之節、於洋中風波荒御船危相見得候節、御船無恙着岸候者於国元熊野三所権現可被遊御勧請旨御祈願候得者忽風波相静、無恙薩州伊集院之内日置浦江御着岸、御船帆卸候所を帆之湊、御陸下り之所を下口（ヲリ）と名付唱来申候、左候而、伊集院麓本城之東ニ御勧請候由ニ而、于今其辺を新宮と唱来申候、

一御幡三流　十文字御紋付

一神領高百石

一棟札

右　忠久公御寄付本坊并脇坊六ヶ寺社司屋敷御免地ニ而、本坊を新宮坊と唱来申候、脇坊六ヶ寺廃壊寺ニ罷成、本坊并社司当時迄勤来申候、神領高百石本坊代々支配仕、年中三度之祭執行仕候処、其後伊十院郷士多人数高岡江被召移候節、本坊是枝山城坊事も被召移、支配仕来候神領高百石高岡高ニ被召直候由申伝候、右御幡三流并棟札之儀、御取繕并為御見合地頭三原左衛門殿江差上候処出火有之、御寄進状并由緒書・御幡・棟札共焼失仕候由申伝候、

伊集院鎮守
熊野新宮三所権現

祭神

事解男神

伊弉冉尊

速玉男神

六月十五日　祭

神領・祭米無之

一当社ハ　御元社（祖）忠久公御勧請、年暦不詳、

祠官
永尾右京

末社

一神明宮

一山之神

一楠牟礼大明神

一青剣大明神

一久玉大明神

一山之神

一霧島権現

一若宮大明神

一正八幡宮

一稲留大明神

一諏方大明神　一山王社
一諏方大明神　一山王
一大明神宮　一権現
一春日大明神　一山之神
一鎮守大明神　一鎮守大明神
一山王　一小社崎大明神
一鎮守　一諏方大明神
一なしき大明神　一山之神
一山王

右神社考

伊集院
稲荷大明神一社　格護衆中　本田蔵右衛門

但御免坊地壱ヶ所

右者　忠良公并　貴久公御両殿様伊集院城被成御責候時分、大田村ニ而小峰之尾と申所ニ御陣被成御取、右蔵右衛門先祖石見坊へ陣中御祈祷被仰付候処、夜中ニ城之後椙木口迄稲荷火を為被成灯由、右火ノ手ニ付被成御責候処、御心易御責落御手ニ入候、依之其節之為御誓願右之所江天文五年丙申四月廿一日稲荷被遊御勧請候由ニ而、先祖代々蔵右衛門迄花香相勤来申候、且又稲荷火を被成灯候一筋田地弐町八反余為神領被成御寄付置、御祭毎度有之候処ニ、神社仏閣高被召上候時分同前ニ被召上、年中御祭蔵右衛門自分ニ仕候、

47

「神体ノ鏡表ノ銘書也」
御稲荷大明神御本地

大檀越島津藤原朝臣相州忠良并貴久
(旧主)願意(旧房)石見坊慶俊

天文五丙申肆月廿一日

権大僧都頼盛敬白

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二二九八号文書ト同一文書ナルベシ）

48

差出目録之事御稲荷御神領

大田名ノ内

楠木園門

(旧合)田畠居屋敷弐町八反四畦廿歩

彼知行稲荷江(旧付)御渡有之事、寅閏霜月十六日馬之剋ニ「朱ニ而伊集院ト片書ニ有リ」鹿児島於御仮屋一着仕候事、

武庫様為　御意御使者衆

本田半兵衛尉殿
本田源右衛門尉殿「彼以両使一着仕候」
本田豊前□（坊）　親信印

慶長二年丁酉七月二日

上井神五郎（里兼）殿
参

（本文書ハ「旧記雑録後編三」二四九号文書ノ抄ナルベシ）

49

坪付

薩摩国伊集院之内御稲荷江御寄進修理田

一段　上原嘉藤先　野田名
永禄五年壬戌三月吉日　大谷

忠倉（伊集院）
経定（村田）
兼盛（肝付）
久朗（河上）

（本文書ハ「旧記雑録後編一」二〇二号文書ト同一文書ナルベシ）

右寛保二戌五月書出、

一稲荷大明神　神鏡三面　下谷口村之内麓上之平

右由緒書等寛保之通故略ス、

右文化十一戌十一月書出也、

伊集院石谷村
熊野三所権現

祭神前ニ同

九月九日祭

一神領高五石

一当社ハ勧請之代暦不詳

祠官
山田左門

右神社考

伊集院石谷村
歳久八幡社　薩城より西江去事三里

祭神一座

島津左衛門尉歳久霊社

七月十八日
九月十八日　祭

一神領高三石
一祭料五斗六升
一当社ハ町田家先社(祖)孝左衛門久東延宝八年勧請、
祠官山田左門

右神社考

文書目録

例　言

一　本巻に収めた「神社調　府内及各郷上・中・下」「神社調　鹿児島部一～四」「神社調　薩摩国之部一」に収載の文書に、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。

一　本目録は、文書の他、棟札・金石文等を記載した。

一　掲載史料には、番号の他、年月日、名称を記載した。

一　掲載史料の年月日については、原史料記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は［　］で囲んだ。また疑義の示されているものは「　」で囲んで区別した。

一　年紀を欠くもののうち、推定しうるものは（　）で示した。

一　月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日等はそのまま残した。

一　原則として『鹿児島県史料　旧記雑録』及び『同　旧記雑録拾遺』にならい文書等の名称を付けた。

一　重複により本文を省略した文書等には※印を付した。

番号	年	月	日	文書名
府内及各郷上				
府内及各郷中				
始羅郡				
帖佐郷				
稲荷大明神				
一	慶長	三年	十二月廿八日	稲荷大明神棟札
桑原郡				
国分郷				
稲荷大明神（浜之市富隈御城）				
二				住吉由来記
三	建久	七年	十一月廿八日	島津稲荷大明神絵板裏書
四	慶長	四年	三月十八日	住吉大明神島津稲荷示現記
五	延享	三年	十一月十八日	一之宮大明神棟札
府内及各郷下				
桑原郡				
国分郷				
一	天正十六年	五月	六日	島津義弘願書
二	元和	四年	八月廿七日	喜入久正寄進状抄
三	寛文	二年	十一月廿七日	島津久通寄進状抄
曽於郡				
曽於郡郷				
止上権現（重久名鎮守）				
四	慶長十九年	八月	八日（五）	町田久幸外三名連署寄進状
清水郷				
日吉山王（山之路村）				
五	慶長	六年	三月	吉日 島津義久寺領支配状
肝付郡				
高山郷				
四十九所大明神				
六	（寛永	二年）	十二月廿七日	吉田左兵衛督書状
内之浦郷				
正一位高屋大明神（北方村惣鎮守）				
七				高屋大明神縁起
諸県郡庄内				
都城郷				
稲荷大明神（郡元村）				
八				都城西生寺本尊阿弥陀如来秘仏由来
鹿児島部一				
万徳山千眼寺（山州宇治黄檗山末寺）				
一	文化	十年	十月	伊集院兼当申渡書
二	慶応	二年	十二月（廿四日）	桂久武覚書
了性寺（千眼寺門中）				
三				了性寺来由
四	万治	二年	六月廿六日	寺地御免許証文并副書

日吉山西田寺浄妙院

五　寛延　元年　十二月廿五日　島津久甫外二名家老連署知行目録

六　延享　四年　十月廿三日　川田国富・小林政英連署寺地目録

七　十月廿五日　覚王院・信解院連署達書

八　九月　寺社奉行覚書

元持山寿国寺（山州宇治黄檗山万福寺末寺）

本長山正建寺（法花宗京都本能寺・摂州尼ケ崎本興寺末寺）

雲海山宝泉坊般若院（真言宗当山派）

九　（弘化　四年）　正月廿八日　調所広郷申渡書

一〇　（弘化　四年）　正月廿八日　調所広郷申渡書

一一　（弘化　四年）　正月廿八日　調所広郷申渡書

一二　二月　二日　調所広郷申渡書

一三　（弘化　四年）　正月廿八日　調所広郷申渡書

一四　弘化　四年　三月　四日　島津久徳申渡書

一五　某申渡書

一六　（弘化　四年）　四月　般若院院代慶連院口上覚

一七　（弘化　四年）　四月十一日　寺社奉行調書

一八　（弘化　四年）　八月廿八日　島津久浮申渡書

一九　（嘉永　元年）　八月十五日　調所広郷申渡書

二〇　嘉永　元年　八月　調所広郷申渡書

二一　（嘉永　二年）　三月　六日　般若院俊良書状

二二　宝暦十三年　四月　般若院真連院覚書

二三　宝暦十三年　四月　般若院真連院覚書

二四　宝暦十三年　四月廿三日　般若院支配下格護之堂社書上

愛宕社（般若院格護）

二五　1　寛保　二年　十一月　十日　真連院書上

2　（寛文十一年）　十月　七日　般若院連長院書上

3　（寛文十一年）　十月　五日　川村秀宣書状

4　十月　七日　宝城院重顕書状

5　寛文十一年　八月廿二日　善隆申状

二六　慶長　九年　九月　五日　善隆院覚書

六月十一日　伊集院久治・山田有信連署寄進状

二七　慶長　廿年　三月廿二日　日置吉兵衛外二名連署書状

二八　慶安　五年　九月大吉日　愛宕宮精舎棟札

飯綱権現（般若院格護）

二九　八月　西満寿院尭盤書上

三〇　九月　三日　光室内記外二名連署書上

三一　弘化　四年　九月　三日　聖護院宮令旨

三二　弘化　四年　九月　三日　聖護院坊官連署奉書

三三　弘化　四年　九月　七日　西満寿院届書

千地蔵堂

三四　八月　加藤宝満院口上覚

三五　文政十三年　九月　加藤真浄院覚書

三六　天保　二年　二月　三日　寺社奉行覚書

補陀洛山仏母寺普門院

三七　弘化　四年　七月　聖護院宮令旨

三八　弘化　四年　七月廿二日　聖護院宮令旨
三九　弘化　四年　七月廿二日　聖護院宮令旨
四〇　四月　三日　普門院篤昌申状
四一　八月廿七日　調所広郷申渡書
四二　七月廿一日　普門院口上覚
四三　十二月廿七日　寺社奉行覚書
神応山金胎寺抱真院（大乗院末寺・神明宮別当）
四四　寛延　元年　九月　七日　島津久甫外二名家老連署副状
四五　宝永　六年　十一月十四日　島津吉貴袖判寺領寄進状
四六　宝永　六年　十一月十四日　島津久輝外五名家老連署証状
四七　享保十五年　五月廿八日　島津久貫家老証状

鹿児島部二

松峰山無量寿院浄光明寺（時衆宗相州藤沢山清浄光寺末寺）
一　弘安　七年　閏四月　三日　浄光明寺鐘銘
二　1　[文政　三年]　十一月十六日　浄光明寺恵淳口上覚
　　2　(文政　三年)　十一月　寺社奉行請書
三　[文政　三年]　八月廿五日　浄光明寺覚書
四　[文政　三年]　八月　浄光明寺覚書
清水山五道院本立寺（浄光明寺末寺）
五　元禄　五年　五月　本立寺廟堂上梁文
瑞雲山大龍寺（臨済宗五山派・京都東福寺末寺）
六　五月　大龍寺由緒書
養泉山無量寺不断光院（浄土宗鎮西派・京都智恩院末寺）
七　九月　四日　清誉書状
　　閏三月廿五日　近衛信輔書状
八　八月　二日　近衛稙家書状
九　慶長十三年　四月　九日　島津家久寄進状
一〇　慶長十三年　二月　朔日　島津家久追悼詩
一一　島津家久外十一名追悼和歌
一二　寛永廿一年　十二月十六日　円誉申渡書
一三　宝永　八年　正月廿八日　進藤刑部大夫証状
一四　正月廿七日　進藤大蔵大輔書状
一五　進藤刑部大輔外二名連署達書
一六　正月廿七日　養泉山牌堂棟札
一七　正徳　二年　九月　安房申渡書
一八　[文化十四年]　九月　能学寺由来覚書
能学寺
一九　貞享　三年　閏二月　九日　経囲山宝成就寺大乗院（真言宗小野方　京都醍醐三宝院・嵯峨大覚寺両末寺）
護国山大楽寺安養院（大乗院末寺・諏訪社別当）
二〇　宝永　四年　七月廿六日　島津吉貴太刀寄進状
二一　嘉元　三年閏十二月廿九日　某宛行状
二二　文保　三年　二月　五日　島津忠宗禁制
二三　元亨　三年　十二月十一日　島津貞久禁制
二四　建武　元年　五月十七日　領家某寄進状
二五　観応　二年　六月十九日　某下文

二六　観応　二年　六月廿五日　貞家下文
二七　正平十一年　十二月十八日　島津氏久寄進状
二八　正平十三年　四月　四日　島津氏久立願文
二九　正平十三年　四月廿八日　島津氏久寄進状
三〇　正平十四年　八月　卅日　島津氏久安堵状
三一　延文　六年　八月廿四日　島津氏久寄進状
三二　応安　三年　正月十一日　島津氏久定書
三三　嘉慶　三年　正月十七日　明印譲状
三四　応永　二年　八月廿八日　島津元久寄進状
三五　応永十九年　六月廿六日　島津久豊寄進状
三六　応永　廿年　正月　島津久豊立願文
三七　応永　廿年　十一月　八日　島津久豊立願文
三八　永享十一年　六月　吉日　島津持久寄進状
三九　（長禄　四年　四月十六日）島津立久寄進状
四〇　天正十七年　九月十八日　島津義弘証状

鹿児島部三

護国山大楽寺安養院（大乗院末寺・諏訪社別当）

一　（寛正　六年）　鹿児島諏訪社祭次第
二　応永十八年　十月　七日　宗純公事注文
三　諏訪御精之日記
四　文禄　二年　八月　二日　諏訪大明神々事之入目
五　慶長　廿年　四月十九日　喜入忠政書状
六　十月　六日　伊地知重行・有川貞政連署状
七　元和　八年　八月　九日　有川助兵衛願文
八　三月十八日　堀四郎左衛門口上覚
九　十月十六日　島津久馮書状
一〇　嘉慶　三年　十月　諏訪領坪付
一一　正長　二年　九月廿九日　諏訪領坪付
一二　文安　六年　二月廿一日　諏訪領坪付
一三　文明十九年　二月　諏訪領もち田名坪付
一四　明応　五年　三月　二日　諏訪領坪付
一五　文亀　元年　十二月十六日　諏訪領川辺郡中宮門之内坪付
一六　永正　九年　十一月　七日　島津家老臣連署坪付
一七　永正十四年　三月十一日　島津家老臣連署坪付
一八　永正十八年　三月　吉日　島津家老臣連署坪付
一九　大永　二年　十二月廿三日　島津家老臣連署坪付
二〇　大永　二年　十二月廿三日　島津家老臣連署坪付
二一　大永　七年　正月廿四日　島津家老臣連署坪付
二二　大永　七年　二月　吉日　島津家老臣連署坪付
二三　弘治　四年　正月　吉日　島津家老臣連署坪付
二四　永禄十三年　二月　吉日　島津家老臣連署坪付
二五　天正　三年　二月　吉日　新納忠元坪付
二六　天正　五年　二月　吉日　島津家老臣連署坪付
二七　天正　七年　三月　吉日　島津家老臣連署坪付
二八　天正　八年　三月　吉日　島津家老臣連署坪付
二九　元和　元年　六月　朔日　諏訪大明神条書
三〇　慶安　元年　六月廿三日　大乗院某達書
三一　七月　五日　安養院盛真申状
三二　九月　三日　安養院盛住覚書

三三　（正保）　九月　五日　諏訪ニ付先法定之事
三四　九月　朔日　奈良原清左衛門・黒葛原周右衛門連署覚書
三五　寛文　十年　九月廿四日　善聚院・勝軍院門中連署証状并大乗院請書
三六　延宝　二年　十月廿八日　寺社奉行覚書
三七　五月廿八日　伊地知六郎兵衛書状
三八　応永卅三年　七月　熊野山本宮物忌量次第
三九　永享　十年　五月　七日　本田氏親置文
四〇　天和　三年　八月廿五日　雲海申状
楞伽山法輪寺潮音院（大乗院末寺）
四一　「享保十六年」　六月　大蔵申渡書
大岳山垂護寺善聚院（大乗院末寺・小城権現別当）
四二　明応　六年　十月廿七日　島津忠昌寄進状
四三　弘治　四年　二月　吉日　島津家老臣連署坪付
四四　五月十二日　伊勢貞昌書状
能満山所願院柿本寺
四五　「万治　六年」　七月　九日　喜入某外二名連署達書
善行院（大乗院末寺）
善光寺西寿院
四六　寛文　七年　十月　善光寺縁起
四七　善光寺供養石浮図銘写
四八　慶長　五年　十二月十三日　島津忠長外三名連署加増目録
四九　明暦　四年　二月吉良日　春日大明神棟札
五〇　元禄　五年　十二月廿八日　春日大明神棟札
五一　天明　七年　正月　吉日　春日大明神棟札
威光院
五二　寛文　七年　十月十一日　威光院盛長申状
千手院
五三　寛文　八年　五月　朔日　千手院来由記
文殊院（祇園社別当）
五四　明暦　二年　閏四月　文殊院棟札
五五　宝永　三年　十二月廿一日　文殊院棟札
医王山多楽寺宝珠院（大乗院末寺）
五六　万治　二年　六月十八日　喜入久則・平田宗則連署達書
五七　元禄　五年　六月初六日　宝珠院棟札

鹿児島部四

福蔵院（荒田八幡社別当）
一　寛文　七年　九月　福蔵院頼光申状
医王山薬師院
二　宝暦十二年　十二月　寺社奉行申渡書
三　正保　四年　十二月廿四日　市来五兵衛外二名連署達書
四　万治　二年　六月　八日　喜入久則外二名連署書
光明寺
五　明暦　四年　六月十八日　島津光久再興文
龍渓山神照寺智恵光院（一乗院末）
六　智恵光院開基再興記
千台山真乗院大興寺（真言宗坊津一乗院末寺）

七　永享十一年　六月廿五日　大覚寺義昭尊有感状
八　八月十九日　鬼束常真詠歌
松樹院（大興寺末）
九　寛文十三年　六月　八日　一乗院外連署証状
一〇　天明　四年　六月　寺社奉行申渡書
大雄山仏日寺南泉院（天台宗武州東叡山寛永寺円頓院直末）
一一　松平薩摩守口上覚
一二　宝永　六年　六月　四日　輪王寺宮公弁法親王令旨
一三　（宝永　六年　六月十七日）　輪王寺宮公弁法親王御書
一四　二月廿七日　松平薩摩守書状
一五　延徳　三年　二月廿二日　足利義稙補任御教書
一六　文亀　二年　十一月　廿日　足利義澄補任御教書
一七　文亀　二年　十二月廿一日　足利義澄補任御教書
一八　天正　六年　八月十六日　足利義昭公帖
一九　天正　六年　十月十七日　足利義昭公帖
慈雲山安寧寺龍洞院（弥勒院末）
二〇　享保　十年　十二月　七日　寺社奉行覚書
二一　十一月　島津久豪申渡書
二二　享保十七年　八月　樺山久初副状
二三　享保十七年　三月廿八日　比志島範房申渡書
二四　元文　六年　七月　島津久道達書
二五　享保十一年　正月廿六日　島津継豊袖判寺領寄進状
二六　享保十一年　正月廿六日　島津久貫外四名家老連署副状
二七　延享　五年　四月廿五日　島津久甫外四名家老連署証状
二八　享保十八年　九月　三日　島津久貫外三名家老連署証状
二九　享保十八年　九月十七日　肝付兼逵外二名連署証状
三〇　享保十八年　六月十二日　相良源太夫・島津権左衛門連署覚書
芳野山憲英寺法輪院
三一　享保十一年　八月廿六日　寺社奉行達書
三二　延享　五年　四月廿五日　島津久甫外四名家老連署証状抄

薩摩国之部一

鹿児島郡
吉田
一　吉田寺地改
正一位正八幡
二　永禄　九年　三月　八日　神祇管領長上吉田兼右宗源宣旨
三　元和　六年　十一月　七日　町田忠親外二名連署覚書
四　三月　廿日　別府式部左衛門外四名連署証文
五　元亀　三年　十二月　三日　吉田正一位正八幡棟札
六　（慶長十五年　十月廿二日）　島津義久并御供衆詠歌
七　十二月　監物申渡書
薩埵王子権現
八　慶長　五年　十一月廿九日　薩埵王子領知行目録

清秀山興化寺

九　延宝　五年　十二月　七日　川田城介申状
一〇　明暦　四年　三月　五日　興化寺祖団申状
一一　万治　二年　二月廿七日　興化寺祖円申状
一二　延宝　六年　八月十二日　税所早右衛門外二名連署覚書
一三　延宝　七年　七月　廿日　税所仲右衛門・柊木孫右衛門連署覚書
一四　延宝　六年　二月　四日　古木長左衛門覚書
一五　延宝　六年　二月　四日　古木長左衛門覚書
一六　延宝　八年　八月　七日　石崎宗意・宅間如有連署覚書
一七　明暦　元年　七月廿二日　某覚書
一八　延宝　五年　十二月　七日　川田城介覚書
一九　延宝　八年　四月　七日　川田城介申状
二〇　万治　三年　二月　興化寺棟札

郡山

二一　郡山厚地村寺地改
諏訪大明神
二二　永禄　六年　七月廿一日　郡山諏訪大明神棟札

花尾権現

二三　享禄　四年　三月　八日　島津勝久書下
二四　享禄　四年　三月　八日　島津勝久書下
二五　天文廿二年　五月十九日　花尾権現棟札
二六　天文廿四年　十二月　吉日　厚智山下宮大権現棟札
二七　明暦　二年　四月十八日　鎌田政昭置文
二八　建保　六年　九月　花尾権現正体書付

花尾山平等王院（真言宗・厚地花尾権現別当寺）

二九　享保十一年　十二月十五日　島津久貫外五名家老連署寄進副状
三〇　安永　二年　八月　大乗院日帳抄
三一　弘化　四年　九月廿八日　調所広郷証状
三二　弘化　四年　六月　法橋康敬極札
三三　弘化　四年　九月廿八日　調所広郷副状
三四　六月廿五日　井上駿河守口上覚
三五　十月十五日　石見申渡書

一ノ宮大明神（郡山東俣）

三六　享保十一年　七月　二日　社家屋敷目録

伊集院

諏訪大明神

三七　永正　元年　十二月廿六日　諏訪大明神棟札
三八　天正　八年　八月廿五日　町田久倍証状
三九　永正十一年　十二月十五日　鳥取政茂書付
四〇　諏訪大明神棟札写
四一　島津忠兼并家老衆連署書付写
四二　慶長　四年　六月　十八神道相伝奥書
四三　十二月十四日　川上忠音・本田親高連署状
四四　三月廿七日　本田親高書状
四五　五月　十日　比志島国貞書状
四六　永禄　九年　正月廿三日　田中正信書下

稲荷大明神
四七　天文　五年　四月廿一日　伊集院稲荷大明神神体
四八　慶長　二年　七月　二日　鏡銘文
四九　永禄　五年　三月　吉日　本田親信差出目録抄
島津家老臣連署坪付

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん顧問　東京大学史料編纂所所長　本郷恵子
東京大学史料編纂所教授　保谷徹
九州大学名誉教授　安藤保
志學館大学教授　原口泉
委員　三木靖　日隈正守　丹羽謙治　佐藤宏之　塩満郁夫　尾口義男　堂満幸子

鹿児島県歴史・美術センター黎明館
館長　鎮寺裕人
副館長　小村浩信
調査史料室長　栗林文夫
学芸専門員　市村哲二
資料調査編集員　藤崎光穂　橋口正樹　向原雅子　山元亜由美　原田紗代子

鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　神社調一

令和4年3月11日　発行　　非売品

編集　鹿児島県歴史・美術センター黎明館
発行　鹿児島県
印刷　株式会社　ぎょうせい